

イギリスにおける労働階級の状態  
The Condition of the Working Class in England

フリードリッヒ・エンゲルス<sup>\*1</sup>

訳：山形浩生<sup>\*2</sup>

2015年6月17日

<sup>\*1</sup> 原著 1844-45 年刊行、翻訳は 1887 年英語版（フローレンス・ケリー訳、エンゲルス監修）に基づく、日本語翻訳権消滅

<sup>\*2</sup> ©2014 山形浩生、クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 国際 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>)



# 献辞：グレートブリテンの労働階級へ (1845)

原文：<http://bit.ly/mXeT23>

労働者諸君！

きみたちに献呈するこの作品は、我がドイツ国民に対してきみたちの状況、その苦しみと苦闘、その希望と見通しに関する忠実な絵を提示しようとしたものだ。ぼくはきみたちの間でそれなりに長く暮らして、きみたちの状況について多少は知っている。その知識を得るために、きわめて真摯な関心を向け、手に入る限りの公式、非公式文書をあれこれ検討した。それでは満足できず、関心対象について単なる抽象的な知識以上のものがほしかったので、家の中のきみたちが見たかった。日常生活の中のきみたちが見たかった。きみたちの状況や不満についてきみたちと話がしたかった。抑圧者たちの社会政治的な力に対するきみたちの闘争を目にしたかった。そこでそうした。中流階級の仲間や晩餐会、ポートワインやシャンパンを犠牲にして、余暇時間をほとんどすべて、普通の労働者たちとのつきあいに充てた。そうしてよかったと思うし、それを誇らしくも思う。よかったというのは、それによってぼくが人生の現実に関する知識を得るのに多くの楽しい時間を費やすこととなったからだ。そうした何時間もの時間は、そうでなければ流行談義や退屈なエチケツトで無駄になっていただろう。誇らしく思うというのは、抑圧され罵られてきつつも、多くの欠陥や状況の不利にもかかわらず、イングランドの守銭奴ども以外の万人の敬意を集めている人々に対して公正な扱いをする機会が得られたからだ。そしてまた、それらを支配する中流階級のすさまじく身勝手な政策や一般的な振る舞いに対し、大陸諸国が必然的な結果として抱いてきた偏見からイギリスの人々を救い出す立場に自分が置かれたのも誇らしいことだ。

同時にきみたちの敵である中流階級を眺める機会もたっぷり得られたので、ぼくはすぐにきみたちが、連中から一切何ら支援を期待していないのは実に正しい、まったくもって正しいという結論に達した。連中の利害はきみたちの正反対なのだ。もっとも連中はいつもそうではないと主張したが、きみたちの運命に心底同情しているのだと思わせたがらう。連中の行動がウソを物語る。たぶんぼくは、連中が何と言おうとも、中流階級は実際には、きみたちの労働の産物を売れる間はその労働により私腹を肥やし、そしてこの間接的な人肉商売で利益が得られなくなったとたんに、きみたちを飢えるに任せて放り出すという証拠を十分以上に集められたことを願う。きみたちに対する善意と称するものを証明するために、連中がいったい何をしただろう？ きみたちの苦情に連中が本気で耳を貸したことがあるだろうか？ 連中が一握りほどの調査委員会の費用を出す以上のこ

とを何かしたことがあるだろうか？ その委員会の分厚い報告書は内務省の本棚で、古紙の山の中でいつまでもまどろみ続けるよう呪いをかけられているだけなのだ。そうした腐りかけの青い本から、「自由に生まれたイギリス人」たち大半の状況について、だれもが手軽に何か情報が得られるような、まともに読める本を一冊でもまとめようとしたらどうか？ 連中はそんなことはしない。連中はそういう話はしたがらないのだ。だからきみたちが暮らさざるを得ない悲惨な状況について文明世界に知らせる役割は、外人に任せたといいわけだ。

連中にとつては外人でも、きみたちには外人でないことを祈る。ぼくの英語は純粹ではないかもしれない。でも願わくばそれが平明な英語でありますように。イングランド  
ちなみにフランスでも の労働者はだれひとり、ぼくを外人扱いしたことはない。きみたちはあの有毒な呪いである国民的偏見や国民的なプライド。これは何のかの言っても、結局はまるっきりの身勝手ということだ。から自由だということを、ぼくは観察して実にうれしかった。ぼくが見るにきみたちは、人類の進歩に力を真面目に注ぐ人々にはだれにでも味方するようだ。それがイングランド人だろうとなかろうと。そして偉大でよきものすべてを賞賛する。それが自分の母国で育ったものだろうとなかろうと。ぼくの見なきみたちは、ただのイングランド人以上のもので、単一の孤立した国の国民にとどまらない。きみたちは人類、偉大で普遍的な人間という一家の一員であり、自分自身とあらゆる人類の利害は同じだということを知っている。そしてだから、この「一つにして不可分な」人類家族の一員として、ことばの最も共感的な意味合いにおける人として、そのようなぼくや大陸の多くの人々は、あらゆる方面へのきみたちの進歩に敬意を表し、すばやい成功を祈るものだ。

だからこれまでやってきたように続けてほしい。やるべきことはまだまだ残っている。揺らぐな、恐れるな。きみたちの成功は確実なのだし、きみたちが前進の中でとるべきどの一歩も、ぼくたち共通の目的、人類という目的のためには無駄にならないのだから！

バルメン（レナン、プロシア）

1845年3月15日

# 序文

原文：<http://bit.ly/n770ug>

以下のページが序文となる本で扱っている主題は、もともとぼくがイングランド社会史に関するもっと包括的な本の中の一章として扱うつもりだったものだ。でも、この主題の重要性のため、すぐにそれを別個に検討することが必要となった。

労働階級の状態は、現在のあらゆる社会運動の本当の基盤だし出発点となる。なぜならそれはぼくたちの時代に存在する社会的悲惨の最も露骨な頂点だからだ。フランスとドイツの労働階級共産主義はその直接の産物だし、フーリエ主義とイギリス社会主義や、ドイツの教養ブルジョワジーたちの共産主義は、その間接的な産物だ。プロレタリアの状況についての知識は、一方では社会主義理論の確固たる基盤提供に絶対必須だし、また一方ではその存在権に関する判断のためにも必須だ。そしてよくも悪しくも、あらゆる感傷的な夢や幻想を終わらせるためにも必要だ。でもプロレタリア条件が古典的な形で、完璧に存在しているのは大英帝国、特にイングランドだけだ。それに、必要な材料が公的な調査によりこれほど完璧に集められて記録されているところはないのだ。これはこの問題に関する最低限の包括的な提示のために不可欠なものだ。

二十一ヶ月にわたりぼくはイングランドのプロレタリア階級<sup>プロレタリアート</sup>となじむ機会を得た。その苦闘、その悲しみと喜び、彼らを間近にながめ、個人的な観察と個人的なつきあいを行ったし、同時に自分の観察を不可欠な公式情報源によって補った。ぼくが見聞きして読んだことはこの本にまとめた。ぼく自身の立場が多くの方で攻撃されるのは覚悟しているし、挙げた事実もまた批判に会うことも覚悟のうえだ。特にこの本がイングランド人たちの手に渡ったときにはそうなるだろう。自分があちこち、どうでもいい細部ではまちがえているかもしれないことも知っている。それはこの主題の包括的な性質とその広範な想定のために、イングランド人ですら避けられないかもしれないものだ。これは特に、イングランドですらぼくの本書のように、あらゆる労働者を探り上げた著作は今のところ一つたりともないことを考えればなおさらだ。でもぼくは、どんな意味合いであれ全体としてのぼくの見方の記述がいささかでも不正確だと証明できるところが一点でもあるか、そしてそれをぼくの使ったものに匹敵する公式のデータで証明できるかどうか、イングランドのブルジョワ階級に問いたただすのを一瞬たりともためらうつもりはない。

イングランドにおいて、プロレタリア階級<sup>プロレタリアート</sup>が暮らす状況となった古典的形態の記述は、今現在まさに特にドイツにとってはきわめて重要となる。ドイツの社会主義と共産主義は他のところよりも、理論的な想定から出てきている。ぼくたちドイツの理論家たちはこの「ひどい現実」の改革との真の関連で直接突き動かされるには、いまだ現実世界について知っていることがあまりに少ない。どのみち、そうした改革の旗手を自称する人々はほと

んどだれ一人として、ヘーゲル的な思索のフョイエルバッハ的な解決から共産主義に到達しただけだ。プロレタリア階級プロレタリアートの実際の生活状態はぼくたちにはあまりに知られておらず、ブルジョワ階級がこの社会問題を誤って扱う手段である善意の「労働階級向上協会」ですら、たえず労働者の条件について実に笑止でとんでもない判断から出発しているのだ。ぼくたちドイツ人は他のだれにもまして、この問題に関する事実の知識を必要としている。そしてドイツのプロレタリア階級プロレタリアートが置かれた条件は、イングランドでのような古典的な形を取ってはいないにしても、やはり底辺では同じ社会秩序が存在していて、それは遅かれ早かれ必然的に、北海の向こうで到達したような深刻さに到達することになる。それを防ぐには国民の知性が、社会システム全体の新基盤をもたらすような手法を間に合うように採用するしかない。イングランドではプロレタリア階級プロレタリアートの悲惨と抑圧につながった根本原因は、ドイツにも存在するし、長期的には同じ結果を宿しているはずだ。だがそれまでの間、イングランドにおける劣悪な状況という確立された事実は、ドイツの劣悪な状況の事実を明確にするものであり、その規模と危険 シレジアとボヘミアの騒乱で明らかになった の大きさを測る物差しを与えてくれる。それはその地区からドイツの平穏さを直接脅かすものなのだ。

最後に、二つ言いたいことが残っている。まず、ぼくはミッテルクラスという単語をずっと、英語の中産階級（ほとんど常に複数形で言われる）という意味で使っている。フランスのブルジョワという単語と同じく、これは所有する階級でありいわゆる貴族階級とは区別される この階級は、フランスとイギリスでは直接、そしてドイツでは間接的に「世論」という姿を取って間接的に、政治権力を所有しているのだ。同様に、ぼくはずっと労働者 (Arbeiter) とプロレタリア、また労働階級、無財産階級、プロレタリア階級プロレタリアートという表現を同じものとして使ってきた。第二に、ほとんどの引用でぼくはそれぞれの著者が所属する党を示した。というのもほとんどあらゆる場合に自由党たちは地方部における悲惨を強調し、工場地区に存在する悲惨については言い逃れようとするし、一方の保守派は逆に、工場地区の悲惨は認めつつ、農業地域における悲惨など一切知らないと言うからだ。同じ理由から、工業労働者の状況を記述する公的文書が見当たらないときには、常に自由党の情報源からの証拠を優先して提示するようにしてきた。自由党ブルジョワ自身のことばを投げ返すことで、かれらを打破したいからだ。トリー党やチャーチスト派を自分の議論支持のために採用するのは、自分自身の観察によってその正しさが確認できたときか、自分が参照した当局の個人的、表現的な評判によりそこに挙げられた事実の真実性が納得できた場合のみである。

バルメン、1845年3月15日

# 目次

献辞：グレートブリテンの労働階級へ (1845)	i
序文	iii
はじめに	1
第1章 工業プロレタリアート	13
第2章 大都市	15
第3章 競争	47
第4章 アイルランド人移民	57
第5章 結果	61
第6章 個別の産業分野：工員	85
第7章 その他の工業分野	119
第8章 労働運動	135
第9章 鉱山プロレタリアート	153
第10章 農業プロレタリアート	165
第11章 プロレタリアートに対するブルジョワジーの態度	175
後記：イングランドにおける結果	189
1886年アメリカ版への後記	199
1845年と1885年のイングランド	203



# はじめに

原文：<http://bit.ly/1ktXzSo>

イングランドの<sup>プロレタリアート</sup>階級の歴史は、前世紀（訳注：18世紀）後半に、蒸気機関と綿紡績用機械の発明で始まった。こうした発明は周知のごとく、産業革命を引き起こし、その革命は文明社会すべてを一変させた。その革命の歴史的重要性は、いまやっと認識され始めたばかりだ。イングランドはこの変革の古典的な土壌であり、その変革は静かに進むにつれて力も増した。だからイングランドは、その主要産物にとっても古典的な土地となる。その産物とは、<sup>プロレタリアート</sup>階級だ。あらゆる関係についてあらゆる側面から<sup>プロレタリアート</sup>階級を観察できる場所はイングランドだけだ。

いまここでは、その革命の歴史を扱う必要はないし、またそれが現在と未来にとって持つ重要性も扱う必要はない。そうした記述は将来のもっと包括的な著作に委ねなくてはならない。ここでは、以下に続く事実を理解し、イングランド<sup>プロレタリアート</sup>階級の現状を把握するために必要な、ごくわずかな記述にとどめねばならない。

機械の導入前は、原材料の紡績と紡織は労働者の家で行われた。妻と娘が糸を紡ぎ、父親がそれを織るか、父自身が織らない部分は糸として販売した。布織り世帯は町の近郊にある村に暮らし、その賃金でそこそよい暮らしができた。地元市場だけが唯一のものであり、後にやってきた競争の圧倒的な力や、それに伴う外国市場征服と貿易拡大は、まだ賃金を圧迫していなかったからだ。さらに地元市場では、人口と全労働者の雇用のゆっくりした増大に伴って、絶えず需要が増大した。そして郊外では家が分散していた結果として、労働者たちの激しい競争は不可能だった。だから布織り人は通常は何かしら蓄えもできたし、ちょっとした土地を借りて、それを暇なときに耕作した。そして彼はいつでも好きなだけ布織りができたから、暇は好きなだけ作れたのだった。確かに、かれはダメな農夫であり、土地を非効率に運営していて、収穫は貧弱なことも多かった。でもかれはプロレタリアではなく、国に利害を持っており、定住していて、今日のイングランド労働者よりも社会の中で一歩高い位置にあったのだった。

だから労働者たちは全般にそこそこ快適な暮らしで過ごしており、敬虔かつ正直な形で、正しくも穏やかな暮らしを送っていた。そしてその物質的な立場はその後継者たちよりずっとよかった。過剰労働は必要なかった。自分が好きな以上は仕事をせず、それでも必要なものを稼げた。庭や畑における健全な作業という余暇があり、その仕事はそれ自体が彼らにとっては娯楽で、それに加えてご近所の娯楽やゲームにも参加できたし、そうしたゲームはすべて　ボーリング、クリケット、サッカー等々　はそのその肉体的な健康と活力に貢献した。彼らはおおむね強い頑健な人々で、その身体はご近所の小作農に見られるものほとんど、あるいはまったくちがわない。その子供たちは新鮮ないなかの空

気の中で育ち、両親の仕事を手伝うにしても、それはごくたまのことでしかなかった。8時間から12時間労働はかれらにとって当然だった。

この階級の道徳的、知的な性質がどのようなものかは見当がつく。足を踏み入れたこともない町から切り離されている編み物職人たちは、賃金支払いのために自分の作ったの毛糸や編み物を旅の商人たちに賃金支払いのために供出する。あまりに切り離されているので、機械が導入されて生業を奪われ、仕事のために町へ行ってそれを探さざるをえなくなるまで、町のかなり近くに住んでいた高齢者でさえ出かけたことがなかったほどだ。そしてその編み物職にたちは、通常そのちょっとした財産を通じて直接つながりのある自作農たちと、道徳的にも知的にも同じ水準にあった。地域最大の地主である郷士が上位の存在だと自然に考えていた。だから郷士に助言を求め、紛争も郷士の前で述べ立てて仲裁を求め、こうした父権的な関係に伴うあらゆる荣誉を郷士に与えた。彼らは「立派」な人々であり、よき夫で父親であり、近くに安酒場や曖昧宿もなく不道徳になる誘惑がなかったために、道徳的な暮らしを送り、時々乾きを癒やすために時々通った酒場の主人も立派な人物であり、通常は大規模な小作農で、自分の身持ちの正しさやよいビール、早寝早起きを誇りに思っていた。子供は一日中家に置かれ、従順さと神への畏敬を教えこみつつ育てたのだった。子供たちが結婚するまで、父権的な関係は保たれた。若者たちはのんびりとした単純さの中で育ち、遊び仲間と親密に過ごして結婚した。そして性的な婚前交渉はまちがいがなく起こったものの、これは結婚するという道徳的な義務が双方に認識された場合にだけ起こったので、その後二人が結婚すれば、万事問題なかった。つまり、当時のイングランド労働者はドイツで今でもあちこちに見られるやり方で暮らし、考えていたのであり、隠遁して他から隔離され、精神活動もなく、生活における立場が激変することもなかった。字はほとんど読めず、書ける人はさらにはるかに少なかった。教会にきちんと通い、政治を語る事もなく、共謀することもなく、肉体運動に喜び、聖書が朗読されると先祖代々の敬虔さをもって耳を傾け、その何も疑問を抱くことのない慎みを持って、「上流」階級に対してはきわめて腰の低い態度を取った。だが知的には死んでも同然だった。自分たちのつまらぬ私的な利益／関心のためだけに生き、自分のつむぎ車と庭だけを考え、自分たちの地平の彼方で人類に吹き付けている強力な運動については何も知らなかった。この物言わぬ無為の生活に安穩としており、産業革命がなければそうした存在から抜け出すことはなかつただろう。そうした生活は、ぬくぬくとしてロマンチックではあるが、それでも人類にふさわしいものではなかつたのだ。本当のことを言えば、かれらは人間ではなかつた。その時代まで歴史を導いてきた少数の貴族たちに奉仕する、あくせく働くだけの単なる機械にすぎない。産業革命は単に、それを論理的に押し巣踏めて、労働者を純粹無垢の機械にしてしまい、かれらから自立した活動の最後の名残すら奪ってしまい。それにより頭を使って人間にふさわしい地位を要求するよう強制したのだフランス政治と同様に、イングランド製造業と市民社会運動全般は歴史の渦の中に、人類の普遍的な関心に無気力なまま無関心でとどまっていた最後の階級をひきずりこんだのだ。

イングランド労働者の状態に劇的な変化を生じさせた最初の発明はジェニー紡績機で、これは1764年に北部ランカシャーのブラックバーン近く、スタンヒル出身の布織り人ジェームズ・ハーグリーブスが発明したものだ。この機械は、後に発明されたミュール紡績機の粗雑な出発点であり、手動だった。通常をつむぎ車のようにつむぎ一本だけ動かすのではなく、労働者一人でつむぎを16本から18本も操作できた。この発明のおかげで、それまでより大量の糸を作れるようになった。それまでは、布織り所がつむぎ人を三人

雇ったとしても糸は決して十分には得られなかったので、織り師はしばしば糸ができるのを待たねばならなかった。それがいまや、手持ちの布織り職人全員を動員しても布織りが間に合わないほどの糸が得られた。布製品に対する需要はすでに増えつつあったが、こうした製品の安さのためにさらに高まった。その製品の安さは、こんどは糸を生産する費用が減った結果なのだった。布織り職人がもっと必要となり、布織り人の賃金は上がった。いまや布織り人は織機を前にもっと稼げるようになったため、だんだん畑を放棄して、布織りに専念するようになった。当時、大人四人と子供二人の一家（子供は糸つむぎに動員された）は一日8時間労働で、週に4ポンド稼げたし、もし商売が上々でもっと働くことになれば稼ぎはそれ以上だった。布織り人が一人で織機に向かい週に二ポンド稼ぐのも珍しいことではなかった。次第に、農家と布織りの兼業は完全に消え失せ、新しく台頭した、賃金のみで暮らす布織り人の階級に組み込まれた。この階級はまったく土地を持たず、小作地という架空の所有地すらなく、したがって労働者、プロレタリアとなったのだ。さらに糸つむぎ人と布織り人の古い関係が破壊された。それまでは、糸つむぎと布織りは、可能な場合には一つ屋根の下で行われていた。いまや織機だけでなくジェニー紡績機も強い手を必要とするようになったので、男たちが紡績を行い、紡績だけで生計を立てる一家も生じ、他の家族も古いつむぎ車を脇へ押しやった。そしてジェニー紡績機を購入できなければ、父親の賃金だけで暮らさざるを得なくなった。したがって、その後実に果てしなく完成された分業の発端となったのが、紡績と布織りの区分なのだ。

この当初はきわめて不完全な機械による工業プロレタリアートが生まれつつある一方で、同じ機械は農業プロレタリアートをも生み出した。それまでは、大量の小地主、自作農がいて、ご近所と同じ何も考えない沈黙の中で耕作を行っていた。これは農業をする布織り人たちだった。ご先祖の古くさい非効率なやり方ほぼそのままで自分の小さな土地を耕して、何世代にもわたってそこから動かずにいたために習慣の奴隷となっている人々に特徴的な頑固さで、あらゆる変化に反対した。その中には数多くの小さな自作農もいて、今のような意味での小作人ではなく、土地を賃借権相続より父親から受け継いだり、あるいは古代の習慣により受け継ぎ、それまでそれがまるで自分の土地であるかのように、しっかりとしがみついていたのだ。工業労働者たちが農業をやめると、大量の小さな土地が休閑地となり、そこに新しい種類の大規模小作人が大量にやってきた。任意不動産権権利者という五十、百、二百エーカーもの土地を使い、年の終わりには追い出される可能性もあったが、耕作方法の改善と大規模農業により土地の収量を上げることができた農民たちだ。自作農たちよりも安く作物を売れたので、自作農たちはその土地で喰っていけなくなると農地を売り、ジェニー紡績機か織機を買ったり、大規模農民に雇用された農業労働者として奉仕したりするしかなくなったのだ。先祖から受け継いだ動作の遅さと先祖伝来の非効率な耕作手法から脱出できなかったので、自分の所有地をもっとしっかりした原理で運用し、大規模農法と土壌改良のための資本投資による利点をすべて活用した人々と競合させられると、他にできることはなくなってしまった。

一方、産業運動はそこで停まったりはしなかった。個々の資本家たちはジェニー紡績機を大きな建物の中にたくさん設置して、水力でそれを動かし、労働者を減らせるようにして、機械を手で動かす個別の糸紡ぎ人よりも毛糸を安く売れる立場になった。ジェニー紡績機は絶えず改善されたので機械は絶えず旧弊化し、改修したり放棄したりする必要があった。そして資本家たちは古い機械であっても水力を使うことで苦境をしのげたが、個別の糸紡ぎ人ではそれは不可能だった。そしてこのようにして始まった工場システムは、

1767年に北ランカシャー地方のプレストン出身の床屋リチャード・アークライトが発明した回転紡績機により、またもや発展することとなる。これは18世紀の機械発明としては、蒸気機関に次ぐ重要なものだ。当初から機械動力用に計算され、まったく新しい原理にもとづいていたのだ。ジェニーと紡績機との特徴を組み合わせることで、ランカシャー地方フィアウッドのサミュエル・クロプトンは、ミュール紡績機を1785年に考案し、そしてアークライトが同時期にカード機と準備用（「よりをかけて垂らす」）糸枠を発明することで、綿糸紡績では工場システムが主流となった。ちょっとした改造でこれらの機械はだんだん亜麻糸紡績にも応用されるようになり、そしてその分野でも手作業を置き換えるようになった。だがそれですら終わりではなかった。前世紀（18世紀）最後の数年で、田舎司祭のカートライト医師が動力織機を発明し、1804年にはそれが実にかかなりのところまで完成を見たため、手織り職人と十分に競争できるようになった。そしてこうした機械の重要性は、ジェイムズ・ワットによる蒸気機関の発明で増した。蒸気機関は1764年に発明されて、1785年から紡績用の動力供給に使われ始めたのだ。

こうした発明により、毎年改善が行われて、イングランド産業においては手作業に対する機械作業の勝利が獲得されたのだった。そしてそれ以降の手作業の歴史は、単に手作業労働者たちが機械によってあっちこちへと追い回されたかという話になってしまう。この結果は、一方ではあらゆる工業産品価格の急落と、商業や製造業の繁栄、保護されない外国市場ほとんどすべての制圧、資本と国富の突然の爆発的増大だった。そして他方では、それ以上にプロレタリアートがもっと激増し、あらゆる財産保有と労働者階級にとっての雇用の安全の破壊、道徳の劣化、政治的興奮、その他安楽な状況のイングランド人にとってはきわめて嫌な各種の事実が生じた。これらについては本書でこれから検討することになる。すでにジェニー紡績機のような粗雑な機械が一つあるだけでも、下層階級の社会状況がどれほど変わったかを見た以上、精妙に調整された機械の完全で相互依存的なシステム、原材料を入れると繊維製品が出てくる機械が何をもたらしたかについては、驚くまでもない。

一方で、イングランド製造業者の発展をもう少し細かく追って見よう\*<sup>1</sup>。まずは綿産業から始める。1771-1775年に、イングランドへの綿花輸入量は、年間500万ポンドを下回る程度でしかなかった。1841年には、輸入量は5.28億ポンドになっており、1844年の輸入量は少なくとも6億ポンドになる。1854年にイングランドは綿生地製品を5.56億ヤード輸出し、綿糸7650万ポンド、綿衣料品を120万ポンド（金額）輸出した。この年には800万台以上のミュール紡績つむぎが稼動し、力織機11万台、手動織機25万台（旧式つむぎ車は含んでいない）が綿産業で使われていた。そしてマカロックの試算によれば、この産業では150万人近い人間が養われており、うち22万人は紡織工場で働いていた。こうした紡織工場の動力は、蒸気が53000馬力、推力が11000馬力に相当していた。現在ではこれらの数字はまったく不適切なもので、1845年にはこうした動力と機械数と労働者数は、1834年の優に5割増しにはなっていると見ても少ないくらいだ。この産業の中心は発明が生じたランカシャーだ。それはこの地方を全面的に一変させ、僻地であり耕作もされていない沼地だったのが、せわしない活発な地域となり、人口は80年で十

\*<sup>1</sup> 『ポーターズ我が国の進歩』（ロンドン、1856, Vol. I; 1858, Vol. II; 1843, Vol. III (公式データ)) などの情報源、主に公式情報源。(エンゲルスによる注、1892)。上に述べた産業革命の歴史的概略は一部の細部で厳密ではない。でも1843-44年ではこれ以上の情報源が手に入らなかった(1892年ドイツ語版でエンゲルスが追加した注)。

倍増し、リバプールやマンチェスターといった大都市を生み出して、その住民はあわせて70万人となり、その近隣都市ポルトンは人口六万、ロシュデールは75000人、オールダム5万人、プレストン六万二、アシュトンとスタリーブリッジ4万人、その他大量の工業都市が、魔法の指で触れられたかのように出現しているのだ。南ランカシャーの歴史は現代最大の驚異をいくつか含んでいるが、それをだれも指摘しようとしなない。こうした奇跡はすべて、綿産業の産物なのだ。グラスゴーは、やはりスコットランドのラナークシャーとレンフリーシャーにおける綿産業の中心だが、この産業が導入されてから人口は3万だったのが30万人に増えた。ノッティンガムとダービーの綿衣料製造業もまた、綿糸価格の低下から目新しい刺激の一つを受け、さらにストッキング編み機の改良からも新しい刺激を受けた。新しい編み機では、ストッキングが二本同時に編めるのだ。レース製造業もまた、1777年にレース編み機が発明されてから、この業界の重要な一部となった。その直後に、リンドレーがポイントネット機を発明し、1809年にはヒースコートがボビンネット機を発明したので、結果としてレース製造がきわめて容易となり、値段が下がった結果それに比例して需要も増えたので、いまやこの産業では少なくとも20万人が雇われている。その主な中心値はノッティンガム、レスター、そしてイングランド西部のウィルトシャー、デヴォンシャーなどだ。これに対応する拡大が、綿産業に依存する他の産業でも起こった。染色、漂白、プリントなどだ。漂白は、大気の酸素にかわり塩素を適用し、染色とプリントは化学の急激な発達により、そしてプリントは一連のきわめて見事な機械発明のおかげで、さらに大きな進歩をとげて、おかげで綿産業の発達によりこれらの関連業種に生じた拡大と相まって、空前の繁栄がもたらされたのだ。

同じ活動が、羊毛生産でも見られた。これは以前はイングランド産業の筆頭ではあったが、以前の生産量など、現在の生産量に比べればないも同然だ。1782年には、それまでの3年分の羊毛生産がすべて、労働者不足のために使われずに倉庫に死蔵され、新しく発明された機械が手助けにやってきて紡いでいなければ、当分そのままお蔵入りだっただろう。この機械の羊毛紡績への利用は実に見事に実現された。そこから羊毛方面でも、綿方面でこれまで見てきたのと同じ爆発的な発達が見られた。1738年にはヨークシャーの西ライディングで生産された羊毛衣料は75,000点だった。1817年にはそれが490,000点で、しかもこの産業の拡大は実に急速であり1854年には1825年よりも450,000点も多い衣料が製造された。1801年には羊毛101,000,000ポンド(重量、うち700万ポンドが輸入)が加工された。1855年には180,000,000ポンドが加工され、そのうち42,000,000ポンドは輸入だ。この産業の主な中心はヨークシャーの西ライディングだ。特にブラッドフォードでは、長繊維のイングランド羊毛が梳毛糸(ウーステッド)などにされており、リーズやハリファックス、ハダースフィールドなど他の都市では、短繊維羊毛がもっと固い糸や布にされていた。するとランカシャーの隣接地域であるロックデールがやってきた。ここは綿産業に加え、大量のフランネルが生産されている。また最高の布を供給するイングランド西部も発達を見せた。こうした地域でもまた、人口の増大ぶりは一見に値する。

そして人口は1831年から、少なくともさらに20から25パーセントは増えたはずだ。1935年に羊毛紡績は大英帝国で1313工場が稼動して工員71,300人だが、これは羊毛の製造で直接間接に雇われていた無数の人々のごく一部でしかないし、さらに布織り人はほとんどすべて除外されている。

リネン工業の進歩が遅れたのは、原材料の性質のため、紡績機械の適用がとても困難

		1801 年に		1831 年に	
ブラッドフォード	の人口は	29,000	人が	77,000	人に
ハリファックス	の人口は	63,000	人が	110,000	人に
ハダースフィールド	の人口は	15,000	人が	34,000	人に
リーズ	の人口は	53,000	人が	123,000	人に
そして西ライディング全体	の人口は	564,000	人が	980,000	人に

だったからだ。前世紀（18世紀）最後の数年で、開発の試みがスコットランドで行われたが、実用性のある成功を初めて収めたのは1810年に亜麻紡績を導入したフランス人ジラルールで、そしてジラルールの機械でさえイングランドの地で本来の正当な重要性を実現するためには、イングランドで行われた各種の改良が必要で、さらにはそれがリーズ、ダンディー、ベルファストで大規模に採用されねばならなかった。その時点から、イングランドのリネン産業は急激に拡大した。1814年には、亜麻の輸入量は3000トンだった。1833年には亜麻19000トンとヘンプ（大麻）3400トンが輸入された。アイルランドのリネンのイングランドへの輸出は、1800年には5200万ヤードだったのが、1825年には5500万ヤードになり、その大半は再輸出された。イングランドとスコットランドで編まれたリネン製品の輸出は、1820年には2400万ヤードだったのが、1833年には5100万ヤードになった。亜麻紡績事業所は、1835年には347軒で工員33000人を雇っていたが、このうち半分はスコットランド南部、そして60以上が西ライディングのヨークシャー、リーズとその周辺、25軒がアイルランドのベルファスト、残りはドーセットとランカシャーにあった。布織りはスコットランドの南部や、イングランドのあちこちでも行われていたが、中心はアイルランドだった。

イングランドは絹の生産にも注目して似たような成功を実現した。原材料はすでに絹糸となってヨーロッパ南部やアジアから輸入され、主要な労働は、細い糸をより合わせる部分だった。1824年まで、原材料1ポンドあたり4シリングという重い輸入関税が、イングランドの絹産業の発達の足を大きく引っ張った。絹産業の市場として保護されているのはイングランドの市場と植民地の市場だけだったのだ。その年、関税は1ペニーに引き下げられると、絹工場の数は一気に激増した。たった一年でthrowing spindlesの数は78万から118万に増えた。そして1825年の商業効きがこの産業部門を一瞬挫折させたものの、1827年になると以前をはるかに上回る水準になっていた。イングランドの機械技能や経験により、競合他国の低水準機械に比べて糸つむぎ機械の優位性が確保されたからだ。1835年に大英帝国は263の紡績工場を保有し、労働者3万人を雇った。それは主にチェシャー、マクレスフィールド、コングルトンなどの周辺地区と、マンチェスターにサマセットシャーに立地していた。これらに加え、そのゴミを加工する無数のゴミがあって、そこからspun silkという特殊な産物が製造される。これをイギリスはパリやリヨンの布織り士たちにさえ供給している。このようによじて紡績した絹を布にするのは、ペイズリーなどのスコットランド各地や、ロンドンのスピタルフィールズで行われているが、マンチェスターなど他地域でも行われている。

また1760年以外イングランド製造業が実現した巨大な進歩は、衣服材料の生産に限られるものではない。この原動力はいったん発明されたら、工業活動のあらゆる部門に伝えられ、ここにあげたものとはまったく関係ない無数の発明が、この普遍的な運動の最中に

行われたという事実から二重の意義を与えられることになった。だが機械の力が持つ発火しれない重要性が実用的に実証されると、あらゆるエネルギーはこの力をあらゆる方向に活用するべく集中され、それを個別発明家や製造業者の利益になるように活用しようとした。そして機械や燃料、材料の需要は、大量の労働者と無数の事業者をさらに倍も働かせることになった。蒸気機関は最初、イングランドの巨大な炭田で重要になった。機械の製造がいまや始めて開始され、それとともに、その原材料を供給する鉄鉱山への関心も改めて高まった。羊毛の消費増大でイングランドの牧羊も刺激を受け、羊毛や亜麻や絹の輸入増大により、イングランドの海運業も拡大することになった。最大の影響は、鉄の生産増大だった。イングランドの丘の豊かな鉄鉱山は、これまでほとんど開発されていなかった。鉄は常に木炭で精錬されていたが、木炭は農業が改善して森林が伐採されるとだんだん高価になった。鉄の精錬でコークスの使用が始まったのは前世紀のことで、1780年にはコークス精錬の鉄を錬鉄に変換する技術が発明された。それまでは、鉄鉱石は鑄鉄に変えられるだけだったのだ。このプロセスは「攪錬法」と呼ばれ、精錬プロセスで鉄に混じった炭素を除去するもので、イングランドの鉄生産にとってまったく新しい分野を切りひらいたのだった。以前の50倍も大きい精錬用の炉が建設され、熱風炉の導入で精錬プロセスは単純化され、したがってきわめて安く製造できるようになったので、それまで石や木で作られていた各種の製品がいまや鉄で作れるようになった。

1788年に、有名な民主党員トマス・ペインはヨークシャーに初の鉄橋を作った。それがその後あちこちで増え、いまやほとんどすべての橋、特に鉄道橋は鑄鉄で作られている。そしてロンドン自体でも、テムズ川にかかるサウスワーク橋はこの材料できている。鉄柱、機械の支持柱などはいたるところで使われているし、ガス灯と鉄道の導入以来、イングランドの鉄製品には新しい利用先が開けた。釘やねじはだんだん機械製となった。シェーフィールド出身のハンツマンは、1740年に大量の労働を節約できる鑄鉄技法を発見し、まったく新しい財を鉄で作るのが現実的になった。そして、材料の純度が上がり、もっと完璧な道具が使えるようになり、新しい機械や細かい分業が進んだことで、イングランドの金属貿易がはじめて重要性を獲得した。バーミンガムの人口は1801年に7.3万人だったのが1844年に20万人になった。シェーフィールドは1801年の4.6万人が1844年には11万人、そしてそのシェーフィールドでの石炭消費だけで、1836年には515,000トンとなった。1805年には、鉄製品4,300トンが輸出され、鑄物用銑鉄も4,600トンが輸出されていた。それが1834年には鉄製品16,200トンで、銑鉄輸出は107,000トンだ。そして鉄製品生産量全体は、1740年にはやっと17000トンだったのが、1834年には70万トン近くにまで増えた。銑鉄の精錬だけで、毎年500万トン以上の石炭を消費し、石炭採掘が過去60年で獲得した重要性は、ほとんど想像を絶するほどだ。イングランドとスコットランドのあらゆる炭鉱がいまや採掘されており、ノーザンバーランドとダラムの炭鉱だけでも、年間に500万トン以上を採掘出荷していて、4万から5万人を雇っている。『ダラムクロニクル』によれば、この二つの郡で働いているのは以下の通り：

1755年には14炭鉱、1800年には40炭鉱、1836年には76炭鉱、1843年には130炭鉱。

さらに、あらゆる炭鉱は以前よりずっと活発だ。同じような活発化が、スズ、銅、鉛の生産に向けられ、ガラス生産の延長として、陶器の生産が新しい産業分野となった。これは1765年あたりにジョサイア・ウェッジウッドの努力で重要となったものだ。この発明

家は、陶器製造すべてを科学的な基盤にもとづいて行い、もっとよい趣味を導入し、八英マイル四方の地区であるノーススタッフオードの陶芸を創業したのだ。この地区はそれまで無人の後背地だったが、いまや労働と住宅に満ち、6万人以上の暮らしを支えている。

この普遍的な活動の渦巻きの中にあらゆるものが吸い込まれた。農業もこれに対応する進歩を見せた。すでに見たように、土地不動産は新しい所有者や耕作者の手に渡ったが、それにとどまらず農業は別の形でも影響を受けた。大地主は土壤改良に資本を投入し、無用の柵を取り払い、排水し、堆肥を与え、もっとよい道具を採用し、輪作を導入した。科学の進歩もそれを支援した。ハンフリー・デイヴィー卿は化学を農業に応用して成功し、機械科学の発達は大農民に無数の利点をもたらした。さらに、人口増の結果として、農産物への需要は実に増大したので、1760年から1834年にかけて、荒地6,840,540エーカー(2,770,418ha)が耕作地になった。そしてこれにもかかわらず、イングランドは穀物輸出国から輸入国になったのだった。

同じ活動が交通の確立にも発展した。1818年から1829年にかけて、イングランドとウェールズには法定幅員60フィート(20メートル)の道路が1000英マイル(約1,600km)も敷かれ、旧道のほとんどは、新しいマカダム舗装で再建された。スコットランドでは、公共事業局が1805年以外900マイル(約1,500km)近い道路を敷き1000本以上の橋をかけたので、高地の住民たちはいきなり文明に手が届くようになった。高地住民たちはそれまで主に密猟者と密輸入だった。それがいまや農民と手工業者となった。そしてゲール語学校は、ゲール語維持のために作られたものだったが、それでもゲール/ケルトの習俗や言語はイングランド文明の到来で急激に消滅しつつある。アイルランドでも同様だ。コーク、リメリック、ケリーの三郡には、それまで通行可能な道路がまったくない荒野が広がり、だれにもたどり着けないために、各種の犯罪者の避難場所となっており、またケルトアイルランド民族性をアイルランド南部で主に保護する地域となっていた。そこに今や公共道路が縦横に走り、そして文明はこの野蛮な地域にさえも入り込んだ。大英帝国、特にイングランドは60年前は、当時のドイツやフランスと同程度のひどい道路しかなかったが、いまや最高の道路網で覆われている。そしてこれらも、イングランドの他のすべてのものと同様に、個人事業の成果であり、国はこの方面でほとんど何もしていない。

1755年以前にイングランドにはほとんど運河がなかった。だがその年にランカシャーに、サンキー・ブルックからセントヘレンズまで運河が開通した。そして1759年にはジェームズ・ブリンドリーが初の重要な運河、マンチェスターと地域の炭鉱からマージー川河口に続く、ブリッジウォーター公爵運河を作った。これはバートン近くを高架水道でアーウェル川の上を横切っている。この成果からイングランドの運河建設が始まり、その先鞭をつけたのがブリンドリーだった。今や運河が作られ、川もあらゆる方向に航行可能となった。イングランドだけで、運河2200マイル(約3,500km)と通行可能な川1800マイル(約2,900km)がある。スコットランドでは、カレドニアン運河が国をまっすぐよこぎり、アイルランドでも運河がいくつか建設された。こうした改善もまた、鉄道や道路と同じく、ほとんどが民間の個人や企業によるものだった。

鉄道はごく最近まで建設されなかった。大規模な初の鉄道は、1830年にリバプールからマンチェスターまで開通した。それ以来、すべての大都市が鉄道で結ばれた。ロンドンとサザンプトン、ブライトン、ドーヴァー、コルチェスター、エクセター、バーミンガム。バーミンガムはグローチェスター、リバプール、ランカスター(ニュートンとウィガン経由のもの、マンチェスターにボルトン経由のもの)。またリーズともつながっている

(マンチェスターとハリファックス経由、およびレスター、ダービー、シェフィールド経由)。リーズはハルとニューキャッスル(ヨーク経由)建設中または計画中の小さな線もたくさんあり、間もなくエジンバラからロンドンまで一日で行けるようになる。

陸上交通がこうして一変したように、蒸気の導入は海運も一変させた。初の蒸気船は1807年に北米のハドソン川で進水した。大英帝国初のもは、1811年にクライド川で進水した。その後、イングランドでは600隻以上が建造され、1836年には500隻以上がイングランドの港湾を行ったり来たりしている。

過去60年におけるイングランドの産業発展の歴史は、ざっとこのようなものだ。これは人類の年代記において、他に並ぶものがない歴史となる。60年前、80年前には、イングランドはほかのどの国とも似たり寄ったりで、小さな町と、わずかで単純な産業、やせてはいるがその分数の多い農業人口を擁していた。今日のイングランドは並ぶものがない国で、人口250万の首都を持つ。大量の工業都市もある。世界中に供給する産業を持ち、ほとんどあらゆるものをきわめて複雑な機械で生産する。生産的で知的で高密度な人口を持ち、その三分の二は貿易商業で雇用され、いまやまったくちがった階級で構成されているので、他の習俗やニーズとあわせて見ると、当時のイングランドとはまったくちがった国になっている。産業革命はイングランドにとって、フランスの政治革命や、ドイツの哲学革命と同じくらい重要だ。そして1760年イングランドと1844年イングランドとのちがいは、少なくともアンシャンレジーム下のフランスと、七月革命中のフランスくらいのちがいがあ。だが産業一変の結果として最大のものは、イングランドのプロレタリアートだ。

すでに機械の導入によってプロレタリアートが生み出された様子は見た。製造業の急激な拡大は、人手を必要とし、賃金があがり、大量の労働者が農業地区から町へと移住した。人口がすさまじく増加し、その増分のほとんどはプロレタリアートで見られた。さらにアイルランドが秩序だった発達に突入したのは18世紀初めになってからだ。そこでも人口は、イングランドの残虐行為に伴う初期の騒乱でかなりの打撃を被ったのに、いまや急激に増大した。これは工業の進展で大量のアイルランド人がイングランドに吸い寄せられはじめて拍車がかかっている。こうして大英帝国の巨大な工業都市や商業都市が生まれ、そこでは少なくとも四分の三の人々が労働者階級で、下位中産階級は、小店舗主ときわめて少数の職人だけとなっている。というのも、台頭した工業は当初、道具を機械に変えて工房を工場にすることで重要性を獲得し、結果として下位中産階級は重労働を強いられるプロレタリアートとなり、かつての大商人は製造業者になり、下位中産階級はこうにしてかなり初期に押し潰されてしまった。そして人口は対立する二極である労働者と資本家に分裂した。これは製造業だけではなく、それ以外の手工芸や小売り業でも生じた。かつての親方と弟子の代わりに、大資本家と、自分の階級から脱出する見通しのまったくない労働者が生まれた。手工業は工場労働のやり方で行われ、分業が厳密に適用されて、大事業所と競合できない小規模雇用主はプロレタリアートへと押しやられるのだった。同時に、かつての手工業構造の破壊と、下位中産階級の消滅により、そうした人々が自ら中産階級に対等する可能性はすべて奪われてしまった。それまでは、どこかで親方職人として独り立ちし、場合によっては職人や見習いを雇ったりする見こみは常にあった。だがいまや、親方職人が製造業者に押しだされてしまい、独立して仕事を行うには大量の資本が必要となると、労働者階級は初めて不可分で永続的な人口階級となったのだった。それまでの労働者階級は、単にブルジョワジーへと向かう移行段階に過ぎなかったのだ。いまや重

労働をすべく生まれてきた人々は、終生そのまま重労働を続ける存在にとどまる以外の見通しが無い。したがって初めて、プロレタリアートは独立運動を実行する立場におかれたのだ。

このようにして、いまや大英帝国全体を満たす大量の労働者の群衆がまとめあわされたのだ。かれらの社会状態は、日々ますます文明世界の関心を惹かずにはいられなくなっている。

労働者階級の状態はイングランド人大半の状態でもある。そして問題はこうだ：こうした貧窮した何百万人、その日稼いだものをその日消費する人々はこれからどうなるのだろうか。発明と重労働を通じてイングランドの偉大さを作り上げた人々はどうなるのだろうか。自分たちの力を日々ますます意識するようになり、日々ますます切実さを持って、社会の利益に対する自分たちの取り分を要求するようになっている人々はどうなるのだろうか。これは(1832年の)選挙法改正法案以来、国民的な問題となってきた。議会でのあらゆる議論は、少しでも重要なものはこの問題に還元できる。そしてイングランドの中産階級はまだこれを認めておらず、この大問題をはぐらかそうとして、自分たちだけの利害を真に国民的なものだと主張し続けようとはするが、その活動はまったくもって役立たずだ。国会の討議ごとに労働階級は勢力を増し、中産階級の利害の重要性は減る。そして中産階級が議会における主要な、いや実は唯一の力だという事実にもかかわらず、1844年の最後の審議は労働者階級に影響する問題に関する議論の連続で、救貧法案、工場法、主人「と従僕」法が扱われていた。そして下院における労働者代表であるトマス・ダンコンブこそが審議の主役だった。リベラル中産階級は穀物法(訳注：穀物への重課税を定めた法律)廃止を掲げ、急進中産階級は税拒否の議案を掲げたが、これらはあわれなほど貧相な役割しか果たさなかった。アイルランドについての議論ですら、根本的にはアイルランドのプロレタリアートに関する議論であり、それをどうやって支援するかという話だ。イングランドの中産階級としても、労働者たちにいい加減何らかの譲歩をしてもいい頃だ。労働者たちはもはや懇願するのではなく脅すようになっており、間もなく手遅れになってしまうかもしれないのだから。

これらすべてにも関わらず、イングランドの中産階級、特に製造業の中産階級は、労働者の貧困により直接豊かになっているため、この貧困をしつこく無視し続ける。この階級は、自分が国を代表する強大な階級だと思っているので、イングランドの汚点を世界の眼前にあらわにするのを恥じているのだ。そして、自国の労働者が苦しんでいることを自分にすら認めようとしなない。というのも財産を保有する製造業階級は、その苦しみの道徳的責任を負わなくてはならないからだ。だからこそ知的なイングランド人(大陸で知られているのは、この中産階級だけだ)は、だれかが労働者階級の状況について話始めると、あのあざけるような微笑を浮かべるのだ。だからこそ、中産階級の全員は労働者に関わるあらゆることをまったく知らないのだ。だからこそ、この階級の人々は議会の中でも外でも、プロレタリアートの立場が問題になったときに、とんでもないヘマをしでかすのだ。だからこそ、中産階級はいまや穴だらけの土壌の上に暮らしており、いつそれが崩壊してもおかしくなく、その急速な崩壊は数学的機械的に実証できるほど確実だというのに、その人々はばかばかしいほどまったく不安を抱いていないのだ。だからこそ、イングランドがもうだれもわからないほどはるか昔から古い状態を検討して修理し続けてきたにもかかわらず、この国には労働者の状態についての本が未だに一冊たりともないのだ。だからこそ、グラスゴーからロンドンまで、労働階級全体が金持ちに対して深い怒りを抱いている

---

のだ。金持ちたちにより、労働階級は系統的に収奪され無慈悲に放置されている。労働階級の怒りは、さほど時間の経たないうちに、人が予想できる範囲内の時間で、フランス革命にも比肩する革命へと噴出するしかない。そしてそれに比べたら 1794 年は兎戯に思えることだろう。



## 第1章

# 工業プロレタリアート

原文：<http://bit.ly/1lBvRQY>

プロレタリアートの各種部分の検討順序は、それが台頭してくるこれまでの歴史から自然に生じるものだ。初のプロレタリアたちは製造業と結びつき、製造業に生み出された。したがって製造業に雇われて原材料の加工に携わる人々が、まずはぼくたちの関心を占めることになる。製造業に使われる原材料生産と燃料生産は、工業変化の結果としてようやく重要性を獲得し、新しいプロレタリアートである石炭と金属の鉱夫たちを生み出した。それから3番目に、製造業は農業に影響し、第四にアイルランドの状態に影響した。そしてそれぞれに属するプロレタリアートの区分も、それに応じて扱われることになる。またアイルランド人は例外かもしれないが、それぞれの労働者における知性の度合いは、製造業との関係に正比例することを示そう。工員たちは最も自分の利害についてはっきり理解しており、鉱夫たちはその度合いが少し劣り、農業労働者たちはほとんど理解していない。工業労働者の中でも同じ序列が見られ、産業革命の長子である工員たちが、当初から今日まで労働運動の中核を形成してきたし、他の労働者たちは、自分たちの身につけた職がどれだけ機械進歩に浸食されたかという比率に応じて労働運動に参加してきたこともわかるだろう。このように、イングランドが与えてくれる例から、つまり労働運動が工業発展の動きと歩みを一つにしてきたことから、製造業がいかに歴史的に重要かを学べるはずだ。

だが現状では、工業プロレタリアートのほぼすべてが労働運動に参加しており、その中の各種区分の状態は、みんな工業なのできわめて共通部分が多い。だからまず、工業プロレタリアート全体の状態を検討しなければならないだろう。そうすれば、後から個別区分についてそれぞれの特徴をもっとはっきりと認識できるようになる。

すでに製造業は財産を少数の手に集中させると示唆した通り。製造業は、小規模交易ブルジョワを破滅させて、自然の力を活用するためのすさまじい仕組みを構築するために巨額の資本を必要とする。それにより、手工業者や独立職人を市場から駆逐するのだ。分業と、水力や特に蒸気力の活用と機械の利用は、製造業が前世紀半ばから、世界のたがを忙しくはずすために使ってきた、三つの大きなレバーだ。製造業は、小規模だと中産階級を生み出した。大規模だと労働階級を創り出し、中産階級から選出された人々を玉座に上げたが、それも時が満ちたらその連中をもっと確実に打倒するためでしかなかった。一方、「古き良き時代」の無数の小中産階級は製造業により殲滅させられ、一方では金持ち資本

家に、一方では貧困労働者に吸収されたのだった\*<sup>1</sup>

だが製造業が集中化する傾向は、そこで停まるものではない。人口も資本と同じく集中化する。そしてごく自然なこととして、人間である労働者も製造業においては資本の一種となり、それを使うために製造業者は賃金という名目で金利を支払うわけだ。製造業事業所は、単一の建物内で多くの労働者をまとめて雇用しなくてはならない。その労働者たちは密集して暮らし、それなりの大きさの向上だと、村のようになる。彼らの持っているニーズの一部は、他の人がいなければ満たされない。手工業人、靴職人、仕立て屋、パン屋、大工、石職人が近くに住むようになる。村の住民、特に若い世代は自分を工場労働になじませ、その技能を高め、そして最初の紡績機で全員が雇い切れなくなると、賃金は下がり、そして新たな製造業者が流入してくるという結果となる。町が大きければ、それだけ利点も高まる。大きな町は道路や鉄道、運河を提供する。技能労働者の選択肢もどんどん増える。新しい事業所を作るのも、近郊の建築業者や機械メーカーの競争があるので安上がりとなる。これに比べて僻地の田舎地域だと、材木や機械、建設者、作業員などをそこまで輸送しなければならない。買い手がひしめく市場も提供してくれるし、原材料を供給したり、製品を受容したりする市場とも直接の輸送路がある。だからこそ、大工業都市がずさまじく急成長するわけだ。これに対して田舎は、賃金が町よりも一般に低いという長所があり、だから町と田舎は絶え間ない競争関係にある。そして今日は町の方に優位があるとしても、明日にはいなかの賃金があまりに低下して、新しい投資はそっちで行ったほうが利潤が高いことになる。だが製造業の集中化傾向は全力で進んでおり、田舎で建設されるあらゆる工場には、工業都市の萌芽が宿っているのだ。もしこうした工業の狂ったような猛攻があと一世紀もこの勢いで続くなら、イングランドのあらゆる製造業地区は大工業都市になり、マンチェスターとリバプールはワーリントンかニュートンあたりでくっつくことになる。というのも商業においても、この人口集中はまったく同じ形で作用するのだ。だからこそ、大英帝国の海運商業のほとんどを独占するのは、ハルとリバプール、プリストルとロンドンといった、大港湾一つか二つになる。

商業と製造業がほぼ完全な発達を見せるのはこうした大都市においてなので、それがプロレタリアートに与える影響が最も明瞭にうかがえるのも、こうした大都市となる。大都市では財産の集中が最高点に達している。大都市でこそ古き良き時代の道徳や習俗は最も完璧に破壊されている。大都市でこそ、「愉快的昔ながらのイングランド」という名前が無意味になっているのだ。というのも昔ながらのイングランドというものの自体が、ぼくたちの祖父の記憶やお話にすら知られていない代物だからだ。そしてだからこそ、大都市では金持ち階級と貧困階級しか存在せず、下位中産階級は日々ますます完璧に消え失せる。このようにかつては最も安定していた階級が、いまや最も不安定なものとなる。この階級を構成するのはいまや、過去のわずかな名残と、そして一財産築こうとする多くの人々、産業夢想家たちや投機家たちで、そのうち一人は大儲けするかもしれないが、残り99人は破産して、その99人の半分以上は永遠に繰り返される失敗の中で暮らすことになるのだ。

だがこうした町でプロレタリアたちは圧倒的な多数派なので、かれらがどう成功するか、大都市がかれらにどんな影響を与えるかを、ぼくたちはこれから調べねばならない。

\*<sup>1</sup> この論点を *Deutsch-Französische Jahrbücher* 所収の拙稿「政治経済学批判の概論」と比べて欲しい。こちらの論文だと「自由競争」が出发点だ。だが産業は自由競争の実践にすぎず、自由競争は産業の基盤となる原理でしかない。 エングルスによる注

## 第2章

# 大都市

原文：<http://bit.ly/PvHwGV>

ロンドンなどの町は、何時間さまよっても終わりにさしかかることさえなく、間近に開けた田舎があるという推測をもたらすようなごくわずかな兆候にさえお目にかかることはない。町というのは不思議なものだ。このすさまじい集中化、この一ヶ所に250万人もが山積みになっている状態は、その250万人の力を百倍にも高めた。そしてそれはロンドンを世界の商業首都にして、巨大なドックをたくさん作り、テムズ川を絶えず覆い尽くす何千もの船を集めた。海からロンドン橋まで遡るときにテムズ川が見せてくれる光景ほど壮絶なものをぼくは知らない。大量の建物、両側の埠頭（特にウールウィッチから上流）、両岸に無数の船舶がますますせりだしてきて、やがて最後に川の中に細い水路が残るだけとなるが、そこを何百もの蒸気船が高速ですれちがう。これらすべてはあまりに広大で、あまりに感動的なので、人はイングランドの陸地に足を下ろす前から、イングランドの偉大さに我を忘れて呆然とするしかない<sup>\*1</sup>。

でもこうしたすべてに要した犠牲は、やがて明らかになる。首都の街路を一日二日ほどうろつき、人間の喧噪と果てしない車両の列の中を何とか進んでから、大都市のスラムを訪ねてから、こうしたロンドンっ子たちは都市に充満するすばらしい文明の驚異を実現させるため、自分たちが持つ人間性の最良の部分を犠牲にさせられているのが初めてわかるのだ。かれらの内部に眠る百の力がまったく活用されず、抑圧されて、ごく少数のものだけがもっと十全に発達し、他の人々の能力と連合することで増殖するようになっている。街路の人混みそのものに何か嫌悪すべきものがあり、何か人間性が抵抗したがるようなものがある。お互いにゴった返す中をすれちがう、あらゆる階級や階層の何十万人もの人々は、みんなが同じ特徴や力を持つ人物ではないのだろうか、そしてみんな幸せになりたいという同じ関心を抱いているのではないだろうか？ そして最終的には、同じような形で、同じような手段で幸せを求めてきたのではないか？ それなのにみんな、混雑の最中でお互いの横を、何ら共通点を持たず、相手と何一つ関係がなく、唯一の合意は暗黙のもんで、それぞれの人が歩道の決まった側を歩いて、反対に向かう群衆の流れを遅らせない

<sup>\*1</sup> これは帆船時代の話だ。いまのテムズ川は、醜い蒸気船の陰気な集まりでしかない。- F. E. (1887年アメリカ版へのエンゲルス注)

(1892) これが書かれたのは50年近く前の、華やかな帆船時代のことだ。そうした帆船がいまなおロンドンを出入りするにしても、それが見かけられるのはドックの中だけで、川自体は醜い煤だらけの蒸気船で覆い尽くされている。-1892年ドイツ版へのエンゲルス注。

ようにするだけで、しかもその間にだれ一人として、お互いに一瞥すらくれず他人を認知しようとさえしない。この残酷な無関心、各人が自分個人の関心の中に孤立しているという冷酷な孤立は、ますます多くの個人が限られた空間で密集するようになると、ますます嫌悪を催す嫌なものとなる。そして、この個人の孤立、偏狭な利己性がどこでもぼくたちの社会における根本原理だというのをどれほど知ってはいても、それが恥知らずなまでに露骨で自覚を持って最大限に行われているのは、まさにこの大都市における人混みにおいてなのだ。人類のモナドへの解体、それぞれ別個の関心を持つ人々への分離、原子の世界は、ここではその最も極端な形にまで推し進められている。

だからこそまた、社会戦争、万人の万人に対する戦争が、ここでは公然と宣戦布告されている。ちょうどマックス・シュティルナーの近著（訳注『唯一者とその所有』）でのように、人々はお互いを役にたつ物体としてしか見ない。それぞれは他人を収奪し、最終的には強い者が弱い者を踏みにじるだけとなってしまう。そして少数の強者、資本家たちは、あらゆるものを自分のために掌握し、弱き多数派である貧困者には、ほとんどギリギリ生き延びられるものしか残らない。

ロンドンについて言えることはマンチェスター、バーミンガム、リーズ、にもあてはまり、あらゆる大都市にあてはまる。あらゆるところに野蛮な無関心と、強固な自分本位が片方にあり、無名の悲慘が他方にあり、どこでも社会戦争があり、万人の家が絶えず占拠状態にあり、あらゆるところで法の庇護のもと相互収奪が行われ、そのすべてが実に恥知らずで、実に公然と認められているので、ここで何のごまかしもなく表現されている社会対応の結果を前にすると誰しも縮み上がり、この狂った網の目がいまでも維持されているのだろうかと思議に思うしかない。

生存と生産の手段を直接または間接的にコントロールする資本こそは、この社会戦争実施のための武器なので、こうした状態の不利な点はすべて、明らかに貧困者にふりかかる。貧困者を少しでも気にかけてくれる人はいない。大きな渦に投げ込まれた貧困者は、できる限りの力で苦闘して切り抜けねばならない。仕事が見つかるほど幸せなら、つまりもしブルジョワがこの貧困者を手段として自分を豊かにするという恩恵を与えてくれるなら、賃金が与えられるが、それは体と魂を何とか一つにしておくのがやっとの水準だ。もし仕事を得られなければ、警察を恐れない者は盗むか、飢えるしかない。飢える場合には、警察がそれを静かで見苦しくない形で実施するよう面倒を見てくれる。ぼくがイングランドに住んでいたとき、少なくとも20人から30人が、実に嫌悪を催す状況であっさり餓死したが、陪審でこれについて単純明快な真実を語る勇気を持った者はほとんどいない。目撃者の証言が決して明白で疑問の余地がないものにならないように、陪審が選出されるブルジョワジーは常に、恐ろしい判決である餓死という結論を逃れるための裏口を何かしら見つけるのだ。ブルジョワジーはこうした場合決して真実を語らない。というのもそれをやったら自分自身の糾弾を口にすることになるからだ。だが直接の死者よりはるかに多くの人々が、間接的に餓死している。長きにわたり適切な栄養が得られない状態が続いたために致死性の病を引き寄せたり、飢えであまりに身動きできなくなって、本来なら潜伏していたはずの病因が、重病と死をもたらしたりする場合だ。イングランドの労働者たちはこれを「社会殺人」と呼び、ぼくたちの社会全体が永続的にこの犯罪を実行していると糾弾する。彼らはまちがっているだろうか？

確かに、飢えるのは個人でしかないが、明日は我が身ではないという保証を労働者は持っているだろうか？ だれがその雇用を確保し、何らかの理由で（または何の理由もな

く)ご主人の雇い主に明日クビにされた場合、だれか別の「パンをくれる」人が見つかるまでその労働者が扶養家族とともに何とかしのげると保証してくれるのだろうか？ 働く意志があれば仕事が見つかる保証し、ブルジョワジーが推奨する身持ちの正しさ、生産性、儉約などの美德こそが、その労働者の幸せへの道なのだ保証してくれる人はいるだろうか？ だれもない。今日の自分は何か持っているが、明日の自分が何か持っているかは、自分には依存しないのだと知っている。ちょっとしたそよ風で、雇い主の気まぐれで、商売のちょっとした落ち込みで、自分が一時的に救い出された強烈な渦に投げ戻され、そこでは頭を水面上に出しておくだけでも大変どころか不可能だったりするのも知っている。今日の自分は生計の手段を持っていても、明日の自分にそれがあるかどうかはきわめて不確定だと知っているのだ。

一方、社会戦争が非所有階級をどんな立場に置いたかについて、もっと詳細な検討に進もう。社会が労働者に対し、衣食住の形でどんな報酬を与えるのか、社会の維持に最も貢献している人々に対してどんな生きざまを与えているのかを検討しよう。そしてまずは、住から考えて見よう。

あらゆる大都市には一つ以上のスラムがあり、労働階級はそこに密集している。確かに、貧困は金持ちの宮殿近くに隠された路地にも暮らしている。だが一般には、貧困者には別の領土が割り当てられており、そこはもっと幸福な階級の視線から切り離されていて、自力でできる範囲で苦闘を続けている。こうしたスラムはイングランドの大都市すべてに、ほぼ等しく配置されており、町の最悪の区画にある、最悪の住宅となっている。通常は一階か二階建ての小屋が長く連なっていて、地下室が住居として使われているところもあり、ほとんど常に不規則な建てられ方になっている。こうした家は居室が3-4室ほどに厨房があるもので、ロンドンの一部を除いてイングランド全域で労働階級の一般的な住居となっている。街路は一般に未舗装で、でこぼこで、きたなく、野菜くずや動物の排泄物だらけで、下水道もどぶもなく、臭いよんだ水たまりがかわりにある。さらに喚起は、その地区全体のひどい混乱した建築手法によって阻害されており、多くの人間がこの小さな空間に密集して暮らしているのだ、こうした労働者地区に広まっている雰囲気は容易に想像がつく。さらに、天気によれば街路は物干し場となる。家から家へと物干し網が渡されて、そこに湿った衣服がぶら下がるのだ。

いくつかのスラムを順番に検討しよう。まずはロンドンで\*2、そのロンドンでも有名な貧民窟であるセントジャイルズだ。ここはついに、いくつか広幅員道路が貫通する予定になっている。セントジャイルズは町の最も人口の多い部分の真ん中にあり、幅広いすばらしい通りに囲まれて、そこをロンドンの陽気な世界がぶらぶらと散策している。オックスフォード街、リージェント街、トラファルガー広場、ストランドのすぐ近所にあるのだ。そこは背の高い、三、四階建ての家屋の無秩序な集まりで、狭くくねった汚らしい街路が通り、そこに町の大街路と同じくらいの活気があるのだが、ちがいはといえば、ここで目につくのは労働者階級の人々だけだということだ。通りでは野菜市場が開かれ、野菜や果物のバスケット(それも当然すべて腐っていてほとんど使い物になりそうもない)が歩道をさらにふさぎ、そしてそこから、さらには魚屋の屋台からも、すさまじい臭気がた

\*2 以下の記述はすでに、『イルミネイテッドマガジン』(1844年10月)でロンドンの労働階級地区を扱った記事をぼくが見かけたときに書かれていた。この記事は 多くの場所ではほぼ文字通り、そしてあらゆる場所での一般的な雰囲気から見ても ぼくが述べたことと一致している。その記事は「貧困者の住居、M.D.のノートより」と題されていた。 エンゲルス注

ちのぼっている。住居は地下室から狭苦しい屋根裏まで人に占拠されており、中も外も汚らしく、その外見を見ると、そんなところに住みたがる人物などいるわけがないように見える。だがこのすべては、街路のあいまにある狭い中庭や路地にある住居に比べればおとなしいものだ。そこに入るには家屋の間の屋根付き通路を通るのだが、そこでの汚物と倒壊しそうな交配ぶりは筆舌に尽くしがたい。窓一枚丸ごとあるのはきわめて珍しく、壁はぼろぼろで、ドアの枠や窓枠はガタガタで壊れており、扉は古い板きを釘で打ち合わせたものだったり、この泥棒だらけの地区でそもそもドアがなかったり、盗むものなどないからドアなど必要なかったりするのだ。ゴミと灰の山があらゆる方向に散らばり、ドアの前にぶちまけられる醜悪な液体が、臭い水たまりとなっている。ここに住むのは貧困者中の貧困者で、最低賃金の労働者たちが、泥棒と買春の犠牲者とともに分け隔てなく寄り集まり、その大半がアイルランド人かアイルランド系で、自分を取り巻く道徳的交配の渦にまだ沈没しきっていない者たちも、日々深く沈み、一日ごとに欠乏と汚物と邪悪な環境がもたらす道徳低下の影響から逃れる力をますます失ってゆくのだ。

またセントジャイルズがロンドン唯一のスラムではない。無数の街路が絡み合う中、何百何千もの路地や中庭に沿って、人間にふさわしい住居のために少しでもお金が出せる人ならだれ一人として住まないほど劣悪な家屋が並んでいる。金持ちのすばらしい家の近くに、こんな最悪の貧困が潜む場所がしばしば見つかる。だからしばらく前に、ある検視(死因調査)に際して非常に立派な広場であるポートマン広場に近い地区が、「貧困と汚物で道徳を失ったアイルランド系の群衆」の寓居と述べられることになった。また華やかではないにせよ「立派」ではあるロングエイカーなどの街路にも、独房のような住居が大量にあって、そこからやせ細った子どもたちや、飢えかけてボロをまとった女性が白昼に飛び出してくる。ロンドン第二の劇場であるドルリー・レーン劇場のすぐ隣にある近隣では、この大都市圏で最悪の街路がいくつかある。チャールズ通り、キング通り、パーク通りなどで、地下室から屋根裏まで貧困世帯しか済んでいない。『統計学会ジャーナル』によると、セントジョン教区とセントマーガレット教区には5,294「住戸」(そう呼ぶのもはばかれるものだが!)に5,566世帯が済んでいた。年齢性別を問わず老若男女が詰め込まれており、全部で26,850人がいる。そしてこうした世帯のうち、四分の三はたった一部屋だけしか持っていない。ハノーヴァー広場の貴族的なセントジョージ教区には、同じ出典によると、労働者1,465世帯、6千人近くが似たような状況に暮らしており、その総数のうち三分の二以上が、一世帯一室の率で密集しているのだ。そしてこうした不幸な人々の貧困ぶりは、泥棒ですら盗むものを何も見つけられないほどだが、それが財産保有階級にいかにか合法的に搾取されていることか! いま述べたドルリー・レーンの恐るべき住居は、以下のような家賃となっている。地下室二室の住居は週に3シリング、一階の一室住居は週4シリング、二階は週4シリング6ペニー、三階は週4シリング、屋根裏は週3シリング。だからチャールズ街の飢えた入居者たちだけでも家主に年二千ポンド支払っていることになり、上述のウェストminsterに住む5,566世帯は年に四万ポンドの家賃を支払っている。

最も広大な労働者地区は、ロンドン塔の東のホワイトチャペルとベスナルグリーンにあり、そこがロンドンの労働者の最大集積地となっている。ベスナルグリーンにあるセントフィリップス教区の牧師G・アルストン氏による自分の教区の状態についての説明を聞こう。かれはこう述べる。

「ここには 1400 軒があり、そこに 2,795 世帯が住み、総人口は 12000 人です。この大量の人々が 400 平方ヤード (1,200 フィート) (訳注: 平方フィートのことらしい。300 平米ほど) という広さに暮らしており、男と妻が子供四、五人と、さらに時には祖父母も、1 辺 12 フィート (訳注: 4 メートル四方、9 畳弱) の部屋に暮らしていることも珍しくはなく、そこで一家は食事も仕事もすませるのです。ベスナルグリーンの状態についてロンドン司教が世間の注目を喚起するまでは、ロンドンの西端<sup>ウェストエンド</sup>にあるこの最貧の教区については、オーストラリアの荒野や南海の島々ほども知られていなかったと私は思います。本当に最も貧窮して何かを与えられるべき人々を本当に見つけたいのであれば、この人々のドアの留め金をはずして、かれらのみすぼらしい食事を見てみるとよいでしょう。かれらが病気や失業に苦しんでいるところを見るべきです。そしてこれをベスナルグリーンのような近隣で毎日行っていると、イングランドほどの国が容認するなど恥ずべき窮乏と悲惨の大群を始終見ることとなります。私はあの大規模な工業不景気の三年間に、ハダースフィールド近くの教区で副牧師を務めておりました。でもベスナルグリーンに来てから見たものほど徹底した貧困による詐行くは見たこともありませんでした。この地区全体で、自分の仕事着以外に少しでも服を持っている父親は十人に一人もおりません。そしてその仕事着すら、通常は最悪のボロボロ状態です。そして多くの者にとってこの仕事着が夜に唯一の掛け布団となっており、横たわるのは藁やおがくずの袋しかないのです」

いまの描写は、労働者たちの住居の屋内の寸法については感じを伝えてくれる。だがこんどは、たまにそれを越えて踏みだし、こうした労働者の住まいにいくつか足を踏み入れるイングランドの役人の後を追ってみよう。

1843 年 11 月 16 日に、45 歳のアン・ギャルウェイの死体をめぐって検視を行ったスリーの検死官カーター氏の調査に際し、新聞はこの死者について以下のような記述を伝えた。住所はロンドンのパーモンジー通りホワイトライオンコート 5 番、夫と十九歳の息子といっしょに小さな部屋に暮らしており、そこにはベッドもなければその他どんな家具もない。ほとんど裸の体の上に散らされた羽の山の上に、息子の隣で死亡しているのが発見されたが、シーツも掛け布団もない。羽は全身にあまりに固着していて、この医師は死体を洗わないと検屍できなかった。そして調べてみると、死者は飢えており害虫の噛み傷が全身に見られた。部屋の床の一部が壊されており、その穴が一家の用足しに使用されていたのだった。

1844 年 1 月 15 日月曜日少年二人が警察裁判所判事の面前につれられてきた。飢餓状態にあった二人は店舗から生焼けの仔牛の脚を盗み、その場でむさぼり食ったというのが罪状だ。判事はこの事件をさらに調査すべきだと感じ、警官から以下の詳細を伝えられた。この少年二人の母親は元兵士で後に警官となった人物の未亡人だが、夫の死後に子供 9 人を喰わせるのに多大な苦勞を強いられていた。住所はスピタルフィールズのクェーカーコート、プールズブレース二番で、極貧状態だった。警官が彼女を訪ねると、六人の子供といっしょに小さな裏部屋で文字通りうずくまっており、そこには座部がイグサの椅子 (座部はなくなっていた) 脚が二本壊れている小さなテーブル、割れたコップ、小さな皿が一枚あるだけだった。炉にはまったく火が見られず、片隅には女性のエプロン程度にしかないボロの山があり、それが一家全員のベッド代わりだった。衣服といえば、みんな

ないも同然の普段着があった。あわれな女性は、ベッドは前年に食べ物と引き替えに酒屋に質入れした。つまり、あらゆるものが食うために犠牲になっていた。判事はこの女性に救貧箱からかなりの金額を与えるよう命じた。

1844年2月、60歳の寡婦テレサ・ビショップは、年齢26歳の病気の娘と共に、マルボ口街の警察裁判所判事の同情を受けることになった。彼女はグロブスナー広場ブラウン街5番にある、洋服だんすほどの大きさしかない小さな裏部屋に暮らしており、そこには家具が一つたりともなく、片隅に少しぼろきれがあって、そこで二人とも寝るのだった。物入れがテーブルと椅子をかねていた。母親のほうが、臨時や島夷の雑用係として少し稼いでいた。家主によれば、二人は1843年5月以来このような暮らしをしており、持ち物すべてを次第に売ったり質入れしたりしていたが、それでも一度足りとも家賃を払っていないという。判事はこの二人に、救貧箱から1ポンドを割り当てた。

ロンドンのあらゆる労働者たちが、いま述べた三家族ほどの窮乏状態に暮らしていると主張しているのではまったくない。これほど社会に踏みにじられている一世帯に対し、十世帯くらいはもう少しマシな暮らしをしているのは十分に承知している。だが何千もの生産的で立派な人々　ロンドンの金持ちどもよりはるかに立派で敬意を受けるべき人々

が、人間にふさわしからぬ状況に置かれているとは主張しよう。そして、あらゆるプロレタリア、万人が例外なしに、何の落ち度もなく全力を尽くしても、こうした運命にさらされかねないのだとも主張したい。

だがこれにも関わらず、何らかの住処がある者はまだ幸運だ。完全なホームレスに比べたら幸運なのだ。ロンドンでは、毎朝目を覚まして、自分がその晩にどこに頭を休めるかわからない人が5万人いる。この群衆のうち最も運がいい者、晩まで一ペニーかそこら懐に残せる者は、どんな大都市にも大量にある木賃宿に入り、ベッドにありつく。だがそのベッドときたら！　そういう家屋は地下室から屋根裏までベッドだらけで、一室に4、5、6つもベッドがあり、押し込めるだけのベッドが置かれている。そのベッドそれぞれに、人間が四人、五人、六人山積みで、健常者も病人も、老いも若きも、酔っ払いもしらふも、男も女も、来た順に無差別に詰め込まれる。そして争い、殴り合い、怪我が生じたり、その同衾者が意気投合するとなおさら悪いことになる。泥棒の相談をしたり、すでに人々の行為よりも人道的になったばかりの言語が記録を拒絶するようなことまで行われたりする。そしてそんな逃げ場のお金がない者は？　どこでも場所を見つけて眠るのだ。通路、アーケード、警察や所有者が放っておいてくれる片隅などに。数人は、あちこちで民間慈善団体が運営する避難所に入り込める。その他の人は、ヴィクトリア女王の窓にも近い公園のベンチで眠る。『ロンドンタイムズ』の記事を読もう：

「本紙昨日のコラムにおけるマルボ口街警察法廷の公判報道によれば、どうやら公園に毎晩より集まって、木々や堤防のいくつかの穴以外には雨露をしのぐものもないままで過ごす人々が平均で50人いるとのことである。このうち、大半は兵士たちにより田舎からかどわかされて来た若い娘たちであり、それが寄る辺なき貧困の窮状と、若い頃からの悪徳が持つ無謀さを全開にしたまま世の中に放り出されるのだ。」

「これは実に恐ろしいことだ！　貧困者は到るところにいるようだ。偉大で豪華な年の中心にも、貧窮は入り込んでその忌まわしい状態を作り出す。人の多い何千もの狭い小道や脇道には、常に多くの苦しみがある　目をそむけたくなるものが

いろいろ 目に入らないものもたくさん存在しているのではないだろうか。」

「だが富と陽気さとファッションの管区内に、セントジェームズの 堂々たる華々しさの隣に、ベイズウォーターの 壮麗な豪奢の間近に、新旧の上流階級地区のさなかに、現代デザインの慎重なる洗練ぶりが、貧困者向け住宅など一軒たりとも作ろうとしなかった地区に、一見しただけでは富の享受だけに奉仕しているかのような場所、そこに欠乏と飢餓と病気と悪徳が、その親類たる恐怖のあらゆる形とともに潜んでおり、身体を一つずつ、魂を一つつ蝕んでいるのだ！」

「なんとも恐るべき事態ではないか！ 身体的な安楽、知的興奮など五感が人の渴望に対して与えてくれるもっと無邪気な喜びが提供してくれる最も絶対的な楽しみが、この最も容赦なく悲惨さの近くで隣あっているとは！ 富は、そのまばゆい酒場から、知られざる窮乏の傷口を笑う それは傲慢で不遜なる笑いだ！ 快楽が、残酷だが知らず知らずのうちに、下でうめく苦痛をあざ笑う！ あらゆる対極にあるものが相互にバカにしあう あらゆる対極といっても、誘惑する悪徳と誘惑される悪徳とだけは同じだ！」

「だが万人が忘れてはならないこと 神の作りたもうた地上で最も豊かな年の、最も立派な地区のさなかに、夜ごと、冬ごと、女性 うら若き女性 だが罪と苦悶の時間は長い 社会から追放されている それが飢餓、汚物、病気で腐ってゆくのが見つかるということだ。万人がこれを忘れるなかれ、そして理屈をこねるのではなく行動しなくてはならない。最近では行動の余地がいくらでもあることは天もよくご存じだ」\*3

ホームレス向けの避難所についてはすでに述べた。そうしたところがいかに過密になっているかは、以下の二つの例でわかるだろう。アッパーオグル街に親切された家無し者のための避難所は、一夜に三百人を収容できるが、開所以来 1844 年 1 月 27 日から 3 月 17 日までに、複数の晩で 2,740 人を受け入れている。そして天候が温暖になってきているのに、この場所や、ホワイトクロス街とワッピングにある収容所での滞在希望者数は激増するばかりで、毎晩大量のホームレスが、空きがないために追い返されている。別の避難所であるプレイハウスヤードのセントラル収容所では、毎晩 460 人分のベッドが提供されているが、1844 年最初の三ヶ月で 6,681 人が利用し、パンが 96,141 切れ配給されている。だがこの場所の理事たちは、この制度が助けを必要としている人々の圧力になんとか対応できるようになってきたのは、イースタン収容所がさらに開設されてからのことだったと宣言している。

ロンドンを離れて、三王国（イングランド、スコットランド、アイルランド）の他の大都市を検討してみよう。まずはダブリンから行こう。この都市への海からのアプローチは、ロンドンへのアプローチが見せる荘厳さに比肩するほど魅力的だ。ダブリン湾は、ブリテン島王国全体の中で最も美しいものだし、アイルランド人はそれがナポリ湾と並ぶとまで主張する。都市自体も大きな魅力を擁しており、その上流階級地区は、他のどんなイングランド都市よりももうまく上品にレイアウトされている。だがそれと釣り合いをとるかのように、ダブリンの貧困地区は世界で最も忌まわしく嫌悪すべきものとなっている。確かに、状況次第では土にまみれていないと落ち着かないというアイルランド人の国民性も

\*3 『タイムズ』1843 年 10 月 12 日 エンゲルス注

そこに少しは貢献しているだろう。だが何千人ものアイルランド人たちが、イングランドとスコットランドのますます多くの都市で見られるようになり、あらゆる貧困者人口が次第に同じような不潔さに陥らざるを得ない異常、ダブリンの劣悪さはまったく特別なものではなく、ダブリン特有のものでもなく、あらゆる大都市に共通したものなのだ。ダブリンの貧困地区はくわめて広大で、その汚物や家屋の居住不適格ぶりや街路の放置ぶりは、あらゆる筆舌に尽くしがたいものだ。貧困者がここでどんな具合に密集しているかについて感覚をつかんでもらうには、1817年に労働住宅査察官報告によると<sup>\*4</sup>バラック通りには52家屋の390室に1,318人が暮らしており、チャーチ通りとその付近の71家屋には393室に1,997人が暮らしていたことを見てもらおう。そして：

「臭い小道、中庭、裏庭がこれと隣接する街路の間にある（中略）戸口からのもの以外に採光のない地下室がたくさんある。（中略）こうした地下室の一部では、住民は土間の床に寝ているが、一般には寝台がある。（中略）ニコルソンコートには（中略）28の小さなアパートに151人が暮らしていて（中略）それは悲惨な状態にあり、この中庭全体で寝台が二つと毛布が二枚しかないのだ」

ダブリンの貧困はあまりに大きく、慈善団体メンディシティ協会一つだけで、毎日2,500人または全人口の1パーセントに救援を与えており。彼らを日中は受け入れて食事を与え、夜にはおいだすのだ。

アリソン医師は、エジンバラについて似たような状況を描いている。エジンバラは見事な都市として現代のアテナイという異名を取るがし、その新市街の見事な上流階級地区は、旧市街の貧困地区が見せる醜悪な悲惨ぶりと強力なコントラストを示している。アリソンは、この広大な貧困地区はダブリン最悪の地区と同じくらい汚く悲惨だと主張しており、メンディシティ協会だけでもアイルランドの首都と同じくらいエジンバラで支援対象者を見つけるだろうとのことだ。それどころか、スコットランドの貧困者、中でもエジンバラとグラスゴーの人々は、三王国のどの地域よりもひどい状態であり、最貧者はアイルランド人ではなくスコットランドジンなのだとアリソンは主張する。エジンバラのオールドチャーチ牧師リー医師は1836年に、宗教教育委員会の前で以下のように証言している：

「この教区ほど悲惨が集中しているのは見たことがない」、人々が家具もなく、何も持たないところは、「同じ部屋に夫婦二組に住んでいるのもよく見かける。一日のうちにベッドのない、ときには敷き藁さえない家を七軒回ったこともある。八十歳の人が板の上に寝ているのを見た。多くの人は日中に着ているのと同じ服で寝ている。ほんの数ヶ月前に田舎から出てきた、地下室に暮らすスコットランド一家二組の話をしよう。（中略）都市にでてきてから子供が二人死亡し、もう一人もどうやら死にかけている。片隅に汚い藁の小さな山があり、家族ごとにそれが一つずつある。その住まいでは真昼でも、人工照明なしには人の顔立ちも見分けられない。

このような国にこれほどの悲惨の集積を見るとは、最も意志の強い人物の心ですら血を流すことだろう」

『エジンバラ医学外科ジャーナル』で、ヘネン医師も似たような状況を報告している。

<sup>\*4</sup> W. P. アリソン FRSE、王立医科大学フェローと前学長等々「スコットランドにおける貧困者の管理とそれが大都市の健康に与える影響に関する見解」（エジンバラ、1840）での引用。著者は熱心なトーリー党であり、歴史家アーチボルド・アリソンの兄弟である。 エンゲルスによる注。

議会報告を見ると\*5、エジンバラの貧困者住居は衛生状態欠如が主流だが、それはこうした状況では当然予測されることだ。ベッドの柱の上では夜にニワトリが休み、犬や馬が人間の住居と同居し、その自然な結果として衝撃的なほどの臭気が発生し、汚物と病害虫の大群がやってくる。エジンバラで主流となっている建設手法は、こうした劣悪な状況を最大限に支援している。旧市街は丘の両斜面に建設されており、そのてっぺんに沿ってハイストリートが通っている。ハイストリートからは無数の狭くくねった路地（くねくねしているのでワインドと呼ばれている）が下っており、そのワインドがこの町のプロレタリア地区となっている。スコットランド都市の住宅は一般に、パリで見られるような五、六階建てで、イングランドのようにできるだけ各世帯が戸建てを持っているのとは対照的だ。これにより限られた場所への人間の密集がさらに強化される。

あるイングランド雑誌は都市の労働者の衛生状態に関する記事でこう述べている。「こうした街路はしばしばあまりに狭いので、人々はある家の窓から出てそのまま対面する家の窓に入れてしまう　その家もきわめて高層で何階にも積み上がっており、光はその下にある中庭にほとんど差し込まないほどだ。町のこの部分では、こうした住宅には下水道もなければ他の私的な設備などまったくない。したがって少なくとも5万人の排泄物その他の廃棄物は、夜間にドブに投げ込まれ、おかげで見るのも嗅ぐのも忌まわしく、健康にとってもきわめて劣悪な固形汚物や悪臭みれの排気が大量に（ゴミあさり人の日々の労働にもかかわらず）生じている。このような地区で、健康も道徳も一般的な憤りもすべて無視されるのは、まったく当然のことではないか？ 当然だ。ここの住民の私的な状況を知っている者ならすべて、かれらの病気や悲惨や道徳劣化のすさまじさについて証言することだろう。こうした地区の社会は、筆舌に尽くせぬほど忌まわしく悲惨な状況に陥っている。（中略）こうした貧困階級の住居は一般にとっても汚く、明らかにいかなる清掃も受けたことがなく、ほとんどの場合には一室だけで、換気も悪いのに、割れてガタガタの窓のおかげで寒く、ときには湿気ていて半地下で、常にほとんど家具もなくまったく快適さに欠け、ベッド代わりに藁の山が使われることも多く、そこに家族全員　老若男女が忌まわしく入り交じった状態で身を寄せ合っている。給水は公共の給水ポンプのみで、水くみの手間はもちろん、各種の恐るべき代物の蓄積をもたらす」

他の大海港都市でも状況は少しもマシにならない。リバプールは大量の商業、富、荘厳さを持ちながら、労働者をまったく同じ野蛮さで扱っている。その住民の丸五分の一、四万五千人以上が、狭く、湿った、換気の悪い地下室住居に暮らしており、それが都市内に7,862戸もある。地下室住戸以外に広場が2,270カ所あるが、これは小さな開けた場所で四方に建物が迫り、入り口は一カ所の狭い屋根付き通路で、そのすべてが通常はとても汚く、プロレタリアたちだけがそこに暮らしている。こうした中庭についてはマンチェスターの話をするときにもっと話そう。ブリストルではあるとき、2800世帯に訪問調査が行われたが、そのうち46パーセントは一世帯一室のみで暮らしていた。

まったく同じ状況が工場都市でも見られる。ノッティンガムには全部で11000戸ある

\*5 「救貧法コミッショナーから内務大臣への報告、イングランドにおける勤労階級の衛生状態についての調査に関して、補遺つき」 上下院双方に1842年7月に提出、全三巻、フォリオ版。救貧法コミッショナー書記官エドウィン・チャドウィックが医学報告から編集編集したもの。　エンゲルス注

が、そのうち7,000から8,000は家の背面の壁が後ろの家とくっついているのでしっかりした換気が不可能であり、便所一つを数軒が共同利用している。しばらく前に行われた調査では、多くの家は浅い排水路の上に立てられており、水面とは床板一枚で隔てられているだけなのだ。レスター、ダービー、シェフィールドでも状況は少しもマシにならない。バーミンガムについては、前出の『アルチザン』記事がその状態についてこう述べる：

「町の古い部分には、多くの小さな街路や中庭があり、どこも汚く放置されたままで、よどんだ水とゴミの山だらけだ。バーミンガムの中庭はあらゆる方向に無数にあって、2千カ所以上はあり、労働者階級の相当部分が住むところとなっている。こうした場所はほとんどが狭く、汚く、換気が悪く、排水もひどく、それぞれ8戸から20戸くらいが面し、その家屋は他の貧困住宅につながって建てられ、中庭の末端はしばしば常時ゴミ捨て場となっているため、その汚れぶりは筆舌に尽くしがたい。だが比較的最近の中庭はもう少し合理的な作りになっており、何とか我慢できる程度の状態に保たれていることは、公正を期すために述べておこう。そして小屋は、マンチェスターやリバプールにくらべればはるかに人が少ないので、住民たちは疫病の時期にも、ほんの数マイルほど離れたウォルヴァーハンプトン、ダドリー、ビルストンの住民たちよりも死に見舞われることがはるかに少ない。またバーミンガムでは地下室の住民は見られないが、地下室のごく一部は、きわめて不適切なことに、工房として使われている。低級な木賃宿はかなり大量にあり（400を越えるくらい）、主に都心近くの中庭にある。ほとんどが嫌悪を催すほどに汚く密集しており、どこも乞食や物乞いや泥棒や娼婦の居場所で、そうした連中はすべてまっとうさや快適さなど一顧だにせず、尊厳を失い泥酔した住民でもなければ耐えがたい環境の中で、飲み食い喫煙し眠るのだ」

グラスゴーは多くの点でエジンバラと似ており、似たようなウィンド、似たような高層家屋を持つ。この都市について『アルチザン』にはこうある：

ここでは労働階級が総人口（30万人ほど）のおよそ78パーセントを占め、都市の中でも暮らしている地区は「絶対的な劣悪さという点では、セントジャイルズやホワイトチャペル最低の場末をものぞき、ダブリンの特別行政区よりも、エジンバラのウィンド区域よりもひどい。こうした地区が最も豊富なのは都心だ アイロンゲートの南部、ソルトマーケットの西、さらにハイストリートはずれのカルトンなど 狭い路地やウィンドが続く果てしない迷路で、そこにほとんど一歩ごとに、古い換気の悪いそびえたつ腐って崩れそうな建物で構成される閉ざされた中庭や路地があり、その建物はどれも水もなく住民であふれ、それぞれの住戸に三、四世帯（全部で二十人ほど）がいて、ときにはそれぞれの住戸が貸部屋として貸し出されており、その一室に15人から20人が収監 とても収容とはいえない されているのだ。こうした地区は都市の住民の中で最貧で最も恵まれない最も無価値な人々が暮らしており、グラスゴー全域に広がって破壊的な被害を出すしつこい熱病の豊かな源であると考えてよい」

都市のこうした部分について、手織り労働者の状況査察の政府コミッショナーである

J・C・サイモンズが何と述べているかを聞こう\*6

「イングランドでも外国でも、人間として最悪の頽廃を見てきたが、グラスゴーのワインド地区を訪問するまでは、これほど大量の汚物、犯罪、悲惨、病気がどんな文明国にであれ存在しうるとは信じられなかった。低級な木賃宿では性別年齢を問わず 10 人、20 人もの連中が乱雑に床の上で、様々な水準で肌をむきだしにして寝ているのだ。こうした場所は一般に、汚れと湿気と腐敗の点からみて、普通の人なら自分の馬でも置かないような場所となっている」

そして別の箇所にはこうある：

「グラスゴーのワインズ地区の人口は増減を繰り返し、15000 人から 3 万人を往き来する。この地区は多くの細街路や中庭や広場で公正され、それぞれの中庭の真ん中には糞の山がある。こうした場所の外見だけでも嫌悪を催すものだが、それでも屋内で見られる汚物と悲惨はまったく予想外のものだった。我々 [警察警視長官ミラーとサイモンズ] が夜に訪れたこれらの寝室の一部では、人間の大量が床に横たわっていた。しばしば男女 15 人から 20 人が身を寄せ合い、一部は服を着て他は裸だ。その寝床は薄汚れた糞とぼろきれの山だった。家具などほとんどなく、こうしたドヤに多少なりとも住居らしい様子を与えているのは、炉で燃える炎だけだった。こうした人々の主要な収入源は泥棒と売春だ。だれもこうした不潔きわまる家畜小屋、この煉獄、この犯罪の巣窟、大英帝国第二の都市にはびこる汚物と悪疫を掃除する手間をかけようなどとは思わなかったようだ。他の町での最悪のスラム観察でも、このような道徳的劣情、物理的頽廃と異様な過密の集中としてこの半分ほどもひどいものは見つかっていない。(中略) グラスゴーのこの部分では、ほとんどの家屋はギルド判定により劣化しており居住不能とされている だがほとんどあふれんばかりに人で満ちているのはこうした住戸なのだ。というのも法律により、この建物で家賃をとることができないからだ」

ブリテン島の中心にある大製造業地区、西ヨークシャーと南ランカシャーに広がる人口密度の高い地帯には無数の工場都市があって、他の大製造業センターに比べて一步もひけをとらない。ヨークシャーの西ライディングにある羊毛地区は魅力的な地域で、美しい緑の丘が連なる地方であり西に向かうにつれて斜面がきつくなって、ブラックストーンエッジの大地に達する。この山地はアイリッシュ海とドイツ海との分水嶺で、そのエア峡谷(リーズがここに沿って存在する)とカルダー峡谷(これに沿ってマンチェスター＝リーズ鉄道が走る)は、イングランドで最も魅力的なものの一つだし、四方八方に工場、村、町が散在している。粗い灰色の石造家屋は、ランカシャーの黒ずんだ煉瓦建築と比べて実にきれいで清潔に見え、目に心地よい。だがそうした都市自体に入ると、喜ぶべきものはほとんど見当たらなくなる。リーズは『アルチザン』が述べ、ぼくが自分でも検討して確認した通り、

「エア川に向かって下る斜面に広がる都市で、この川はリーズ市内の一マイル半

\*6 『故国と外国における工芸と工芸職人』 J. C. サイモンズ、エジンバラ、1839 年。著者自身がどうやらスコットランド人のリベラル派で、結果として労働者の自発的な運動すべてに猛然と反対している。ここに引用した下りは p. 116 以降に見られる。 エンゲルス注。

(2.5 キロ) ほどくねって走り、雪解け期や豪雨の後では氾濫しがちだ。市の高台つまり西側の地区は、これほど大きな町にしてはきれいだが、川やその支流や小川沿いの低地は汚く、狭苦しく、それだけで寿命が縮むもので、特に幼児の寿命は縮んでいる。これに加えてカークゲート、マーチレーン、クロス街やリッチモンド通り周辺の低地市街の醜悪な状態も加えよう。そこは一般に舗装も排水もなく、建物も不整形で、中庭や行き止まりの路地だらけで、さらには清潔さを保つための最も一般的な手法ですらまったくないことから、こうした汚物と悲惨の不幸な地域における突出した死亡率は十分説明がつかない。(中略) エア川氾濫の結果として「(ちなみにこれは、工業都市に流入するあらゆる川と同じく、一方の端から都市に流れ込むときには清流で透明なのに、出てくるときにはどろりとして黒く、醜悪で、ありとあらゆるゴミや排泄物のおいがする)」「住戸家屋や地下室はあまりに浸水しているの、手動ポンプで水を路面に汲み出さなくてはならないことも珍しくないほどだ。そしてそういうときには、下水道がある場所ですら、水がそれを逆流して地下室に入ってきて\*7 硫黄混じりの水素をたっぷり含む瘴気じみた排気を作り出して、人の健康にきわめて劣悪な忌まわしい残滓を残す。実際、1859年春の洪水シーズンには、こうした下水道逆流の影響があまりにひどく、北部地区の登録官が作成した報告によればその三ヶ月にその近隣で出生二人に対して死者三人だったが、他の地区ではすべて出生三人に対して死者二人の比率だったという。他の人口の多い地区はまったく下水道がないか、あるいはそれがあまりに不十分で、下水道があっても無意味なほどだ」「一部の住宅の並びでは、地下室はほとんど乾かない」「一部の地区では、いくつかの街路は深さ1フィート(30センチ)もの軟泥に覆われている。住民たちはときどき、こうした街路にシャベルで灰を撒いて改善しようとしたがまったく無駄だ。そして土や下水があらゆる穴にたまり、風や日差しに吸収されるまでそこに残っている\*8(中略) リーズの普通の小屋は、一辺5ヤード(約5メートル)以上には広がらない。通常は地下室、居間、寝室で構成される。この小規模な家屋が昼も夜も人で密集しているの、これまた住民たちの道徳と健康にとって危険な場所となっている」

そしてこうした小屋がどれほど過密だったかについては、上で引用した『労働階級の健康に関する報告』が証言している。

「リーズでは、兄弟姉妹と男女問わず下宿人たちが、両親たちと同じ寝室に寝起きしており、そのため人間として考えるだに身震いするような結果が生じる」

またリーズからたった7マイル(12キロ)ほどのいくつかの峡谷が交わるブラッドフォードも、小さくて炭のように真っ黒な悪臭を放つ流れの岸边にある。平日には、この町は灰色の石炭煙に包まれているが、晴れた日曜日にまわりの高地から見るとすばらしい眺めを提供してくれる。だがその市内にはリーズと同じ汚物と不快がまかり通っている。町の古い部分は急な斜面に建てられ、狭く不整形だ。街路、路地、中庭には、汚物とゴミが山積みだ。家屋はぼろぼろで惨めで、川と谷底のすぐ近くでは、多くの家で斜面に半ば

\*7 こうした地下室は単なるゴミの保管場所ではなく人間の住居なのだということはお忘れなく。 エンゲルス注。

\*8 『統計ジャーナル』vol. 2, p. 404の「市評議会報告」と比べて見よう。

埋まった一階部分が完全に遺棄された建物をぼくはたくさん目にした。一般に、労働者の小屋が背の高い工場の中に密集している谷底部分が、建物もひどい作りで町全体の最も汚い地区になっている。そのもっと新しい部分では、他のあらゆる工場町と同じく、小屋ももっと規則的できちんと並んでいるが、ここでも労働者住居を提供するときの標準手法につきものの邪悪が盛られる。この邪悪については、マンチェスターについて語るときにもっと具体的に述べる機会があるだろう。同じことが、西ライディングの他の町についても言える。特にバーズリー、ハリファックス、ハダースフィールドではそれが顕著だ。最後に挙がったハダースフィールドは、その魅力的な立地と現代的な建築のおかげでヨークシャーとランカシャーの工場町の中でも圧倒的にすてきな場所だが、それでもひどい地区を持っている。これについては、町を調査する市民会合が1844年8月5日に次のように報告している。

「ハダースフィールドの町で悪名高いこととして、通りまるごと、そして多くの中庭や路地が、石畳もなければ舗装も下水道も排水路もない。ゴミやありとあらゆる汚物が路面に放置されて腐り腐敗している。よどんだ水たまりがそこらじゅうにいつもあり、それに接する住戸は必然的に劣悪で不潔きわまる状態となっている。したがってそこでは病気が生まれ、そして町全体の健康が脅かされるのだ」

ブラックストーンエッジを越えるか、そこを鉄道で貫通すると、イングランドの製造業がその最高潮に達し、またあらゆる労働運動の発祥の地でもある古典的な土地、すなわち南ランカシャーと、その中心都市マンチェスターに入る。ここでも美しい丘陵地の田舎があり、それが分水嶺から西のアイリッシュ海に続く。そこにはリビー川、アーウェル川、マーシー川やその支流の魅力的な緑の谷があり、百年前はここは主に沼地で、ほとんど人が住んでいなかったのが、いまや町や村が点在し、イングランドにおけるもっとも人口高密度な地区となっている。ランカシャー地方、特にマンチェスターは、イングランドの製造業の出発点でもありその中心地でもある。マンチェスター取引所は、あらゆる交易の変動を図る温度計だ。現代製造業はマンチェスターで完成を見た。南ランカシャーの綿産業では、自然の力の活用、手作業の機械（特に動力紡績機と自動ミュール）による超克、分業が絶頂に達している。そしてこれが現代製造業の特徴たる三要素だと認識するなら、綿産業こそが発端からずっと今日に到るまで、他のあらゆる産業分野の最先端を走っていると認めねばならない。現代製造業が労働階級に与える影響は、必然的にこの地でこそ最も奔放かつ完璧に発達することになり、工業プロレタリアートはここで全面的な古典的完成を見ることになる。蒸気力、機械、分業が労働者を貶め、そしてプロレタリアートがこの屈辱を克服しようとする試みは、やはりこの地でこそ最高潮に達し最も意識的に行われることになる。したがってマンチェスターが古典的な現代製造業都市であるから、そしてぼくがここを出身都市と同じくらい親密に知っているから、その住民たちのほとんどよりも詳しく知っているから、この地の記述についてはかなり時間をかけることにしよう。

労働者地区に関する限り、マンチェスター周辺都市の状況はその中心都市とほとんど変わらない。唯一あるとすれば、それらの人口に占める労働者の比率が高いということだけだ。こうした町は純粋な工業都市であり、あらゆる点でマンチェスターに依存していて商売もすべてマンチェスター経由で行っており、したがって住んでいるのも労働者とちょっとした商人だけだが、マンチェスターのほうはかなり大規模な商業人口、それも特に問屋や「立派な」小売商人がいる。だからボルトン、プレストン、ウィガン、バリー、ロック

デール、ミドルトン、ハイウッド、オールダム、アシュトン、スタリーブリッジ、ストックポートなどは、ほとんどどれも人口三万、五万、七万、果ては9万人もの都市だが、そのほぼほとんどが労働者地区で、そこに工場が点在し、少数の大通りに商店が並び、そしていくつか小道に沿って、製造業者たちの庭園や家が邸宅のように散在している。こうした都市自体は、劣悪で不規則な建て方で、醜悪な中庭と小道、中庭だらけで、石炭の煙まみれで、特にもともと明るい赤煉瓦が、次第に黒くなったために場末感をことさら強調している。煉瓦がここでの主要な建設材料なのだ。ここでは地下室住まいが通例だ。あらゆる場所で少しでも可能ならばそういう地下の住まいが建設され、そして人口の相当部分がそこに住んでいる。

こうした都市の中で、プレストンとオールダムに次いでひどいのが、マンチェスターから北西11マイル(18キロ)にあるポルトンだ。ここは、少なくともぼくが何度も訪れて見た限りでは、大通りが一つしかなく、それが非常に汚いディーンズゲート通りだ。これは市場も兼ねていて、両側に並んでいるのが工場以外では一階建てと二階建ての家しかないにも関わらず、きわめて晴れた日でも薄暗い魅力のない穴蔵めいた場所になっている。ここでも、ほかのあらゆる町同様、旧市街が特に荒れ果てて悲惨だ。町の中を黒い水が流れており、それが小川なのか淀んだ水たまりがつながっているだけなのか見分けがつかないほどで、それが空気の汚れ具合に貢献はしているものの、それがなくても空気は十分にひどい。

またストックポートも、マーシー川のチェシャー側にあるが、それでもマンチェスターの製造業地区に属している。マーシー川沿いの狭い谷間に広がっているので、街路は片側で急斜面を下ってきて、反対側で同じくらい急斜面を上る。そしてマンチェスターからパーミンガムへの鉄道が、この都市と峡谷全体の頭上にある高い高架を通過する。ストックポートはこの地区全体でも屈指の薄暗く煙まみれのどん底として知られ、確かに、特にその高架から見下ろすと、異様に嫌悪を催すものだ。だがそれよりはるかに嫌悪を催すのは、労働階級の小屋や地下室住居で、それが谷底から丘のてっぺんまで町中のあらゆる部分に、狭い列をなして広がっている。この地区の他の町で、これほど多くの地下室が住居として使われているのは、ぼくも他に見たことがない。

ストックポートから数マイル北東にあるのが、アシュトン・アンダー・ラインで、この地区最新の工場都市の一つだ。丘の斜面に建っていて、そのふもとには運河とテム川が流れ、全体としてはもっと新しくもっと規則的な計画に沿って建てられている。丘に沿って通りが五、六本並行して走り、それが谷底へと向かう他の街路と直角に交差している。この手法によって工場は都心からは排除されている。川と運河への近接性のため、工場はもともと谷底に密集して建っており、煙突から黒煙を吐き出し続けているが、それ以外の工場が町中にあふれてくるようなこともない。この配置のため、アシュトンは工場都市の多くよりもずっと魅力的な外見となっている。街路は広くてきれいだし、小屋は新しくて明るい赤で快適だ。だが労働者向けの小屋を作る現代的な方式にも、独特の欠点がある。どの通りにも隠れた裏道があって、そこに狭い舗装された小道がつながっており、その裏道がぐっと汚いのだ。そして入り口付近の数軒を除けば築五十年以上らしき建物は見当たらなかったが、アシュトンの街路ですら劣化しつつある小屋が見られる。もう角の煉瓦がしっかりしておらず、ぐらぐらしていて、壁にひびが入って内側の白いしっくい塗りでも隠せず、街路が汚く煙で汚れた様子がこの地区の他の都市と何ら変わらなくなっている部分があるのだ。ただしアシュトンでは、これは例外的であり、他の都市のようにそれが通

例ではない。

東に一マイル(1.6キロ)行くとスタリーブリッジで、これもテム川沿いにある。アシュトンから丘を一つ越えてやってきた旅人は、丘のてっぺんで左右両側に大きく立派な庭園と、見事な邸宅めいた家屋が、通常はエリザベス朝様式で建てられているのを目にする。エリザベス朝様式はゴシック様式から見て、まさにローマ使徒教会から見た英国国教会に相当するものとなる。さらに数百歩進むと、スタリーブリッジ市が谷間に見えてくるが、それは美しいなかの立地ときわめて対照的で、アシュトンの慎ましい小屋とすら激しい対照ぶりだ！スタリーブリッジは狭いくなった峡谷にあり、ストックポートの峡谷と比べてもずっと狭く、この峡谷の両側は不規則な小屋、家屋、工場の固まりで占められている。町に入って初っぱなの小屋は狭く煙で黒ずみ、古くてオンボロだ。そして町の全体も、この初っぱなの家屋と同じ。峡谷の谷底に数本の街路があって、そのほとんどがあちこちで交差し、行き当たりばったりで、斜面を登ったり下ったりしており、ほとんどすべての家屋は、この斜面状態のおかげで、一階が半分地中に埋まっている。そして中庭や裏道や外れの行き止まりがどんなに大量にあるかは、丘に上がれば見られる。そこからなら、あちこちから町全体がほとんど足下に鳥瞰図のように広がっているのだ。ここに衝撃的な汚物を加えると、周辺はきれいなのに実に忌まわしいスタリーブリッジの状態もすぐに想像がつくだろう。

だがこうした小都市についてはもう十分。それぞれが独自の特徴を持つけれど、全般的に、労働者たちはどの町でもマンチェスターとまったく同じ暮らしをしている。だからぼくは、それぞれの固有の建物についてだけ特出して描き、マンチェスターの労働人口についてのもっと全般的な記述が、その周辺都市にもすべてあてはまるものだと述べるにとどめる。

マンチェスターは、いくつかの丘の南斜面ふもとにある。その丘は最後の頂であるオールダムから、カーサルムアに広がる。そこは競馬場があり、マンチェスターの聖峰モンテ・サクロとも言うべき場所だ。正式なマンチェスター市街はアーウェル川の左岸にある。その川と、もっと小さい川二本、アーク川とメドロック川に挟まれているのだ。この二本の川はその後アーウェル川に合流する。アーウェル川の右岸には、川の急な曲がり縁取られたサルフォードがあり、さらに西にはペンドルトンがある。アーウェル川の着たにはアップブロートンとロウアブロートンがある。アーク川北にはチータムヒル、メドロック川南にはハルム、さらに東にはメドロック川沿いにチョールトンがあり、さらに進んでマンチェスターのずっと東に行くとアードウィックになる。この建物の集まり全体が通常はマンチェスターと呼ばれ、そこには四千人ほどの住民、いやおそらくそれより多い人々が暮らしている。町自体が奇妙な作りになっており、そこに何年も暮らして毎日のようにそこを出入りしても、一度も労働者階級区域や労働者自身とも接触せずすむ。ただしそれは、人が自分の仕事だけにかまけたり、楽しみのために散歩するだけにとどめていればの話だが。これが生じるのは主に、意識的で明示的な意図に限らず、無意識的で暗黙の合意から生じている、労働者階級の地区が実にはっきりと、中流階級専用の地区と区分されているという状況のために生じている。あるいは、それがうまくいかなければ、慈善という外套で隠されている。マンチェスターの確信には、かなり広い商業地区があって、幅も奥行きもだいたい半マイル(800メートル)ほど続いているだろうか。そのほぼすべてが事務所か倉庫になっている。その地区のほぼ全体が居住者に放棄され、夜には人気がなく寂しい。その狭い路地を暗いランタンを持って行き来するのは、警備員と警官だ

けた。この地区は、大量の交通が集まる主要大通りがいくつか貫通していて、その一階部分はきらびやかな商店が並んでいる。そうした通りでは上階はあちこちで人が住んでおり、夜遅くまでかなりの生活が見られる。この商業地区を除くと、マンチェスター市内全域、サルフォードとハルム全域、ペンドルトンとチョールトンの相当部分、アードウィックの三分の二、チータムヒルとプロートンのある一部は、ほぼ混じりっけなしの労働者地区であり、商業地区を取り巻いてガードルのように平均で幅 1.5 マイル (2.5 キロ) ほど広がっている。このガードルを越えた外には、中流ブルジョワが暮らしており、中流ブルジョワは労働者地区の近くに規則的に配置された街路沿いに暮らしており、特にチョールトンやチータムヒルの低地部分などが主になる。上流ブルジョワは、もっと遠くの邸宅に住み、チョールトンやアードウィックに庭園を持っていたりする。あるいはチータムヒル、プロートン、ペンドルトンの風通しのいい高みに暮らしており、自由で十全ないなかの空気の中、快適な家に暮らし、都心行きの乗合馬車<sup>オムニバス</sup>が 30 分ごとにそこを通る。そしてこの仕組みで最も見事な部分は次のようなものだ。金銭貴族階級の人々は、都心にある職場に最短経路で向かうが、その道路は多数の労働者階級区域のどまんなかを通過しているのに、道路の両側すぐのところには広がっている極度に劣悪な悲惨さに自分がいかに身近か、金持ちはまったく認識せずにすむ。これは交易所から四方八方にのびる主要街路の両側が、ほぼ切れ目なく商店に占められており、そこが中流階級や中の下くらいの階級の人々で占められているからだ。そうした人々は、自分の利益のために、まっとうできれない外見を気に掛けており、それを気に掛けられるだけの余裕もあるのだ。確かに、こうした商店は、その背後にある地区と多少の関連を見せていて、背後に薄汚れた労働者住宅を隠しているときよりは、商業地区や住宅地区にある商店のほうがエレガントだ。でも、薄汚れた地区を持つ商店ですら、強い胃腸と繊細な神経を持つ金持ち男女たちの目から、その富の相補物たる悲惨と汚物を隠すのには十分なのだ。だからたとえば、オールドチャーチから真南に延びるディーンズゲートは、最初は紡績所や倉庫が並び、続いて二流商店やエール酒場が続く。さらに南になって商業地区を離れると、あまり食指の動かない店が並び、それがますます汚くなって、間にビール酒場やジン酒場が増えてきて、最南端にくと、外見を見ただけでその客が労働者で労働者だけだというのはまったく疑問の余地がなくなる。取引所から南東に走るマーケット街もそうだ。まずは最高級のきらびやかな店で、上階には会計事務所や倉庫が入っている。それに続いてピカデリーでは、巨大なホテルや倉庫がある。さらに続いてロンドン通りになると、メドロック近隣で、工場やビール酒場やもっと慎ましいブルジョワや労働者向けの店舗がある。そしてその先は、金持ち商人や製造業者の巨大庭園や邸宅が広がる。このようにして、マンチェスターを知る者ならだれでも、大通りの外見から隣接する地区について憶測ができるが、街路からは真の勤労者地区の様子をかいま見る機会すらほとんどないのだ。この欺瞞的な建築形態が、多かれ少なかれあらゆる大都市に共通するものだというのは十分に承知している。同じように、商店主たちは商売の性質上、主要街路沿いに店を出さなくてはならないことも知っている。そうした街路には、悪い家よりもいい家のほうが多く、そしてそのすぐ周辺の土地は、そこから遠い近隣に比べて地価が高いことも知っている。だが同時に、ぼくはマンチェスターほど労働者階級が主要街路から体系的に分離されている場所を訪れたことがない。他のどこでも、中流階級の目や心に快からぬものを、ここまで細心に隠している例はほかのどこでもお目にかかったことがない。だが一方で、まさにマンチェスターこそはほかのどんな町よりも、計画などに沿わず、公式な規制の制限を受けずに それどころかむしろ偶然

に任せて 建設されてきたところなのだ。そしてこれを、労働階級は立派にやっているんだという中流階級の熱心な断言とのつながりで考えたとき、ぼくはどうしても、リベラルな産業家たち、マンチェスターの「大立て者たち」がこの恥ずべき建設手法について、やはりそれほど無罪とはいえないと感じずにはいられないのだ。

すぐに労働地区の記述に進む前に、ここで工場はほぼすべて市内を貫通する川や各種の運河に面していることは述べておこう。まず、マンチェスターの旧市街がある。これは商業地区の北端とアーク川との間にある部分だ。ここの街路は、ましなものですら、狭くてくねっている。トッド街、ロングミルゲート、ウィティグロープ、シュードヒル通りなどがそうで、家屋は汚く、古く、おんぼろで、脇道の建築状態はとにかくひどい代物だ。オールドチャーチからロングミルゲートに進むと、歩行者はすぐに右手の旧式な家屋の列に出くわすが、そのうちどれ一つとして普通りの高さを保っていない。これは古い製造業以前のマンチェスターの名残だ。かつてここに住んでいた人々は、その子孫たちとともにもっとマシな造りの地区に引っ越してしまい、これらの家屋はもうかれらにとっては住める代物ではないので、アイリッシュ系の血が強く混じった人々に残された。ここにくると、もうむきだしの労働者地区になっており、商店やビール酒場ですら、多少なりとも清潔さを占めそうなどという手間すらほとんどかけないのだ。だがこうしたすべては、その背後にある中庭やに比べればものの数ではない。そこに入るには、屋根付きの通路を通るしかなく、その通路は人がすれちがうことさえできないほどの狭さだ。正気の計画であれば絶対にあり得ないような形でひしめきあう不整形住居や、それが文字通り積み重なって密集している要素を見ると、何かまともな考えで造られているとは思えない。そしてこれは古い時代のマンチェスターから残っている建物のせいではない。この混乱が絶頂に達したのはごく最近で、古い建て方で残されたあらゆる場所が埋め尽くされ穴埋めされて、やがてこれ以上は一部分の土地すら占有できないようになったせいなのだ。

ぼくのいまの主張を裏付けるため、マンチェスターの平面配置のごく一部を描き出してみた これは最悪の場所ではないし、旧市街全体の十分の一にも満たない範囲についてのものだ。

以下の描写だけで、この地区、特にアーク川近くの部分での異様な建築方式を示すには十分だろう。

アーク川の南岸は、ここではとても急で高さ 15-30 フィート(5-10メートル)に達する。この急勾配の斜面に、家屋が三列植わっており、そのうち最も低い列は川面から直接立ち上がっていて、最も高い列の正面の壁はロングミルゲート通り沿いの丘の頂上近くに建っている。その中には川沿いの工場もあり、つまりここでの建設手法は、ロングミルゲートの低い部分と同じくらい混み合い無秩序ということだ。右も左も大量の屋根付き通路が無数の中庭につながり、そしてそこに足を踏み入れる者たちは、汚物と忌まわしい汚れに突入することになるが、これに比肩するものはどこにもない 特にアーク川へと下る中庭はそうで、ここにある住宅はぼくがこれまで見た中でも、文句なしに最悪の住居だ。こうした中庭の一つでは、屋根付き通路を出たすぐの路地入り口のところにドアなしの公衆便所があって、それがあまりに汚いので、この中庭に出入りする住民たちは、そこにたまったままの古い糞尿の臭い淀みを通るしかない。これはデュシー橋からアーク川を上った最初の中庭だ これをわざわざ探し出そうという人がいるかは知らないが、そこから川を下ったところにはいくつか革なめし工場があって、近隣全体が動物の腐敗臭で満たされている。デュシー橋から下では、ほとんどの家屋へは狭い汚い階段を使って、ゴミと汚物

の山をまたいで入るしかない。デュシー橋下で最初の中庭はアレンズコートと呼ばれていて、あまりにひどい状態だったのでコレラ流行時には衛生警察がその人々を立ち退かせ、掃除させ、さらし粉で消毒するよう命じたほどだ。ケイ医師は、当時のこの中庭の状態について恐ろしい記述を残している\*<sup>9</sup>。その後、この中庭は部分的に取り壊されて再建されたい。少なくともデュシー橋から見下ろすと、通行人はいくつかの壊れた壁や瓦礫の山と、いくつか新しい建物を目にするようになる。この橋からの眺めは、ありがたいことに身の丈の小さな人々からは人の背丈ほどもあるパラペットで隠されているが、この地域全体の特徴を示すものとなっている。底の部分には、アーク川が流れている、というより淀んでおり、これは狭く、炭のように真っ黒で悪臭を放つ水流で、ゴミと排泄物が大量に流れており、それが浅い右岸に打ち上げられる。天気が乾燥していると、きわめて醜悪で黒っぽい緑のねばねばした水たまりがこの岸辺には残され、その深みからは瘴気が絶えずあぶくとなって立ち上り、水面から高さ 40-50 フィート（12-15 メートル）の橋の上からでも耐えがたい臭気を放っている。だがそれ以外にも、流れそのものが数歩ごとに高い金網で遮られて、その背後に粘液とゴミが貯まって大きな固まりごと腐っている。橋の上には革なめし工場、骨粉工場、ガス配管があり、そのすべてから排水やゴミがアーク川に垂れ流され、さらにその川にはあらゆる近隣の下水や便所の中身がぶちまけられる。だからこの流れから打ち上げられるゴミがどんなものかは容易に想像がつかだろう。橋の下を見ると山のような廃棄物、ゴミ、汚物、排泄物が、急峻な左岸の裏小路から排出されているのを見ることになる。ここではあらゆる家のご近所の家裏に密着していて、その家も一部だけ外にのぞいているが、すべて真っ黒で煙まみれで崩れそうで、壊れた窓や窓枠ばかりだ。その背景には、古いバラックのような工場建築が並ぶ。右岸の低い部分には長い家や工場の列が連なる。二件目の家は屋根がない廃墟で、ゴミが詰め込まれている。第三の家はあまりに低いので一番下の階は人が住めず、したがって窓も扉もない。この背景には乞食の墓場とリバプール＝リーズ鉄道の駅があって、その背後にマンチェスターの「救貧法のバスチーユ」と呼ばれる作業場が、丘のてっぺんで要塞のように、高い壁とパラペットの背後から眼下の労働者地区を脅すように見下ろしているのだ。

デュシー橋上流では、左岸はもっと平らになり右岸はもっと急峻になるが、どちらの住宅の状況も、ましになるどころか悪化する。ここで中心通りであるロングミルゲートから左折したら、だれでも迷子になる。そして次から次へと裏小路を彷徨い、無数の角を曲がり、通りすぎるのは狭く汚らしいどん詰まりや裏小路ばかりで、数分もすれば右も左もわからなくなり、どこで曲がっていいか見当もつかなくなる。どこにいても、荒れ果てかけた、または荒れ果てきた家屋ばかりで、その一部はまったく居住不可能だ　　というのはここらではよほどすさまじい物件ということだ。家屋の中には板間も医師の床もほとんどなく、ほぼすべての窓や戸口は壊れ、立て付けがガタガタで、その汚さの状態ときたら！　いたるところ、ゴミ、廃棄物、排泄物の山だ。ドブのかわりに淀んだ水たまりで、その臭気だけでも、多少なりとも文明化された人物であればこんな地区に住むのは不可能にしてしまえるほど。リーズ鉄道の新規延伸部分はここでアーク川を横切るが、それがこうした裏小路や小道の一部を潰し去り、そして他の一部はこれにより完全に外から見えるようになった。鉄道橋のすぐ下にある裏小路は、その汚れと恐ろしさは他の追従を許さぬ

\*<sup>9</sup> 『マンチェスターにおける綿製造業で雇用されている労働階級の道徳と物理的な状態』ジェームズ・Ph・ケイ医学博士著、第2版、1852年。ケイ医師は労働階級と工場労働者を混同しているが、それ以外は優れたパンフレットだ。　　エンゲルス注

ほどで、それというもそこがこれまではあまりに閉ざされ、あまりに隔離されていたためにかなりの手間をかけねば決して見つからないような場所で、この地域全体をくまなく知っていると思っていたこのぼくでさえ、鉄道によりできた切り通しがなくては自力で発見できなかっただろう。急造の土手沿いに歩き、杭や物干しロープをくぐって歩くと、この一階だての一室しかない小屋の混沌に入り込むことになる。そのほとんどにはちゃんと造った床がない。台所も居間も寝室もすべて同じ。こんな穴蔵の一つを見ると、縦が5フィートで幅6フィート(1.5×2メートル)あるかないかで、そこにベッドが二つしかもこの寝台やベッドときたら！　があり、階段室や暖炉とあわせて部屋は完全に埋まっている。他のいくつかの家を見ると、まったく何もなく、戸口は開けっ放しで、住民がそこに寄りかかっている。戸口の前はどこもすべて、ゴミと排泄物。その下に多少なりとも舗装があるのかどうかは、目には見えず脚の感触であちこち確かめるしかない。この人間用牛小屋の集まり全体が、家屋と工場、そして川で三方を囲まれ、そして川岸を上がる狭い階段の横に、狭い戸口がたった一つ、別の同じくひどい造りで手入れ皆無の住居迷路に続いている。

もうたくさん！　アーク川の岸辺はすべてこんな形で作られており、無計画にもつれあう家屋の混沌で、その家も大なり小なり居住不可能となる寸前で、不潔な区内は見事なまでに、その不潔な外部環境と対応している。そして、最も自然かつ通常の用足しの機会すらない場所で、人々が清潔に保てるはずがあるだろうか？　公衆便所はここではあまりに少ないので、毎日満杯になってしまっているか、あるいはほとんどの住民には使えないくらい遠くにある。使えるのは汚れたアーク川の水だけで、井戸や水道管は都市のまともな部分しかないのだから、洗えるわけもない。実際、この現代社会の奴隷たちの住居が、地区のあちこちに見られる豚小屋ほどの清潔さもないという事実は、この住民たちのせいであるなどとは言えないのだ。スコットランド橋のすぐ下にある岸壁にあるような地下室六、七室は、床がそこから2メートルも離れていないところを流れているアーク川の低水位より少なくとも60センチは低いところにあるような代物だし、その反対側で橋のすぐ上にある角の家の上階は、一階が完全に居住不可能で、窓や戸口の枠が一切ついておらず(この地域では決して珍しいことではない)他に設備がまったくないために、このむきだしの一階部分をご近所全体の便所として使われている！　家主たちはそんな物件を恥じる様子もなく貸し出すのだ。

アーク川を離れて、再び向かいの川岸をロングミルゲイトから労働者居住地の真ん中に入り込むと、少しばかり新しい地区にやってくる。ここはセントマイケル教会からウィティグローブとシュードヒル通りにつながる部分だ。ここには、多少はまじな秩序がある。建物の混沌のかわりに、少なくともまっすぐな長い道や路地や裏小路が見られ、それも計画的に造られ通常は四角くなっている。だがさっきの地区ではあらゆる家が気まぐれに沿って造られていたのに対し、こちらではあらゆる路地や裏小路が気まぐれに造られ、隣の道の状態などまったく無視して造られている。小道はこっちの方向に走ったかと思えば、こんどはあっちの方向で、そこをさまよう人は、二分ごとに行き止まりに出くわしたり、角を曲がってみると元の場所に舞い戻っている。この迷路でかなりの時間を過ごした人でなければ、道がわかるはずもない。

この地区について「換気」などという用語を使うのもためらわれるところだが、こうした街路や裏小路の換気は、こうした混乱の結果として、アーク川周辺と同じくらい不完全なものだ。そしてこの地区がアーク川周辺よりそれでも多少なりとも優れたところがある

なら、それは家屋が新しく街路にもたまにはドブがあるからだが、その一方でアーク川周辺地区では（建物が古く建築がいい加減であるおかげで）滅多に見られない地下室居住が、ここではどの住宅でも見られるのだ。残りの部分はといえば、汚物、瓦礫、排泄物の山、街路の水たまりはどちらの地区でも当たり前で、そしていま論じているこの地区は、住民たちの清潔さにとってきわめて打撃の大きい別の特徴があるのだが、それはあらゆる路地に大量のブタがうろついており、排泄物の山をほじくったり、小さな囲いに閉じ込められたりしているということだ。ここでは、マンチェスターの労働者地区のほとんどと同様、養豚業者たちが裏小路を借りてそこにブタ用の囲いを造るのだ。ほとんどの裏小路にも、そうしたブタの囲いが一つや時には複数見られ、そこに住民たちがありとあらゆるゴミや排泄物を投げ込み、それによりブタは太る。そして四方を囲われたその大気は、腐りゆく動物と植物の発する臭気のために実にすさまじいものとなっている。この地区には、広く明らかにましな通りであるミラー通りが貫通しており、背景はかなりうまく隠されている。だが好奇心からこうした裏小路に続く無数の通路に足を踏み入れようものなら、こうしたブタ囲いに二〇歩ごとに出くわすことになるだろう。

これがマンチェスター旧市街であり、いま自分の記述を読み返してみると、それが誇張どころか、少なくとも2万から3万人の住民を擁するこのたった一つの地区の造りの特徴づける、汚物、荒廃、居住不可能ぶり、清潔さや換気や健康の完膚なきまでの無視といった特徴について、真の印象を伝えるにははるかにドス黒さが足りないことを認めざるを得ないのだ。そしてこうした地区は、イングランド第二の都市、世界の製造業首都のどまんなかに存在している。人類が生きるにあたっていかに小さな空間で動き、いかに少ない空気、それもすさまじい空気！ を呼吸し、いかに少ない文明を共有するだけですむかを見なければ、ここにやってくるだけでいい。確かにこれは古い市街で、マンチェスターの人々はこの世の地獄のひどい状況にだれかが言及するたびに、その事実を強調してみせる。でもそれで何が証明されるというのだろうか？ 恐怖と義憤を引き起こすものはすべて、最近生じたもので、工業時代に属している。古いマンチェスターに属する数百軒の家屋は、はるか昔に元の住民たちには遺棄されている。いまや暮らしている無数の労働者たちを詰め込んだのは、ひたすら工業時代だ。そうした古い家屋の隙間に小屋を建て、農業地域やアイルランドからここへだましてつれてきた、大量の人々のために屋根を作り出したのは、ひたすら工業時代だ。こうした牛小屋の所有者たちが人間に対してそれを高値で貸し、労働者の貧困を収奪し、何千人もの健康を犠牲にし、それにより自分たち地主たちだけが懐を肥やせるようになったのは、ひたすら工業時代のことだ。封建的な農奴状態から解放されたばかりの労働者が単なる材料、単なる動産として使えるようになったのは、ひたすら工業時代でのことだ。そして労働者が、他のどんな人々にとってもひどすぎる住居に詰め込まれるのを容認し、その労働者が苦勞して稼いだ賃金により、自らが完全な破滅へと向かう権利を買えるようにするのだ。この製造業が実現したものなしでは、これらの労働者、この貧困、この奴隷制は生き延びられなかった確かに、この地区のもともとの作りはひどかったし、それがよいものを生み出すこともなかっただろう。だが地主たち、自治体は、それを再建するときに何か改善しようとしたらどうか？ それどころか、どこか路地や片隅が空いたら、そこに家が建てられた。余った通路が残っていたら、そこにも建物が建った。工業の開花とともに地価はあがり、それが上がるにつれて、建築作業はさらに気狂いじみた様相となり、居住者の健康や快適さなど何も考慮されず、どんな穴蔵ですらそれよりましなものに金が出せないために借りざるを得ないあわれな生き物が存在し

ないほどひどいはずがないという原理にもとづき、最大限の利潤を得ようという配慮だけで建築が行われるのだ。だが、確かに旧市街ではあるので、そう考えることでブルジョワジーは安心するのだ。したがって、新市街がどの程度ましなのか拝見しようではないか。

新市街、またの名をアイリッシュタウンは、旧市街の向こうにある粘土の丘の斜面に、アーク川とセントジョージ街道にはさまれて広がっている。ここでは、都市としてのあらゆる特徴が失われている。家屋や屋台の群れが一列にあちこちに並んで、むき出しの草すら生えていない粘土の土壌上に広がる小さな村のようだ。その家屋というか小屋はひどい状態で、決して修繕されず、汚く、湿って不潔な地下室住居を持ち、道は舗装もされず下水道もない、小さな豚小屋や裏庭に囲いを作って飼われていたり、そこらを気ままにうろついたりしているブタの無数の群れを宿しているのだ。通りの泥はあまりに深くて、一歩ごとに足首まで泥に沈み込まずに歩ける可能性は、きわめて乾燥した季節でもなければまったくない。セントジョージ街道近辺では、バラバラの建物群はどんどん接近して、それがやがて一つながりの小道、裏小路、行き止まりの路地へと化し、それが都心に近づくにつれて、ますます混雑して不規則になってくるのだ。確かに、このあたりでは舗装されていることも多いし、舗装付きの歩道やドブがある場合も多い。だが汚れや家屋の悪臭、そして特に地下室の状態はまったく同じだ。

ここでマンチェスターにおける労働者地区の一般的な造りについて、全般的な観察を述べておくのも場違いではないだろう。旧市街では、家屋のまとまりは一般にまったくの偶然で形成されることを見た。あらゆる家屋は他の家屋などまったく考慮せずに建てられ、それらの間にあるすき間の土地のかけらが、他に呼びようがないというだけで中庭と呼ばれているのだ。同じ地区の少し新しめの部分や、工業活動の初期から存在する他の労働者地区では、少しばかり秩序だった配置が見られる。二つの街路の間にある空間は、もっと規則性ある、通常は四角い中庭に分割されているのだ。

こうした中庭は当初からこういう形で造られており、街路とは屋根付きの通路でつながっている。もしまったく無計画な建築が、換気を阻害するために労働者の健康に有害であるなら、このようにしてかれらを四方共にふさがれた中庭に封じ込める手法はなおさらはるかに有害だろう。空気はどこにも行き場がない。こうした中庭に捕らわれた空気の排気は住宅の煙突だけだし、それが換気に役立つのは暖炉で火が燃えているときだけだ<sup>\*10</sup>。さらに、こうした中庭を取り巻く家屋は通常背中合わせに建てられていて、背後の壁は共有されている。そしてこれだけでも、十分に貫通する換気を阻害するのに十分だ。そして街路の面倒を見ることになっている警察は、こうした中庭の状態については面倒を見ず、あらゆるものが放り出された場所でいつまでもじっとしているので、そこで見つかる汚物と灰の山と排泄物については、まったく不思議でも何でもない。ぼくはミラー通りの中庭に行ったことがあるが、そこは通りの高さから少なくとも半フィート(15センチ)は低くなっていて、しかも雨が降ったあとにそこに貯まる水については、排水手段がまったくないので!

もっと最近では、別の建築手法が採用され、いまやそれが主流となってきた。労働者の

<sup>\*10</sup> それなのにイングランドのリベラル派の賢人気取りは、『児童雇用委員会報告』で、こうした裏小路が地域建築の傑作だという。というのも大量の小さな空地を提供することで、換気と空気の循環を改善しているから! 確かに、それぞれの裏小路に大きな開口部が向き合う形で二つか四つあれば、空気が流れたりもするだろうが、二つも入り口があることはないし、一つですらないも同然で、しかも通常は狭い屋根付きの通路だけなのだ。 エンゲルス注

小屋はもうほとんど個別には建てられなくなり、常に1ダースとか20戸とかまとめて建てられるのが常となった。単一の建設業者が、街路を一つ二つまとめて建てるのだ。これは以下のように配置されている。一つの前面が、最高級的小屋だけで形成され、ここは裏口と小さな中庭を持ち、最大の賃料を得る。その小屋の背後に狭い路地、裏道が通り、その両端にも建物が建って、そこへ狭い通路か屋根付きの通路が片側からつながっている。この裏道に面した小屋は賃料が最低で、最も放置されている。これらの小屋は三列目の小屋と奥の壁を共有しており、この三列目は二本目の街路に面しているため、一列目よりは賃料が低い、二列目よりは高い。

この建設手法により、一列目の家はかなりよい換気が得られ、三列目は以前のやり方に比べて特にひどいわけではない。だが真ん中の列は、少なくとも中庭の家に匹敵するくらい換気が悪く、裏通りは常に、中庭と同じくらい汚く醜悪な状態にある。建設業者がこの手法を好むのは、場所の節約になるからで、さらに一列目と三列目の高い賃料を通じて、高賃金労働者からお金をむしり取る手段を提供してくれるからだ。

こうした三つのちがった小屋作り形式がマンチェスター全域と、ランカシャー地方やヨークシャー地方のすべてで見られ、それらが入り交じっていることも多いが、通常はそこそこ分離しているため、そうした町の部分が相対的にどんな時代に建ったのかがわかる。第三の方式、裏小路の方式は、セントジョージ街道とアンコーツ通りの東にある巨大な労働者地区で主に見られ、マンチェスター市とその郊外にある他の労働者地区でもしばしば見られる。

いま名前があがった、アンコーツと称される広域地区には、運河沿いにマンチェスター最大級の工場が並び、これは巨大な六階、七階建ての建物で、細い煙突と共に、労働者の低層小屋のはるか頭上にそびえている。したがってこの地区の人口は、主に工場作業員で構成されており、最悪の街路には手織り職人たちがいる。都心近くの街路が最も古く、したがって最悪だ。だがその街路は舗装され、排水溝がある。その中にぼくとしては、オールダム通りとグレートアンコーツ通りに最も近くて並行している通りを含めたい。さらに北東に行くと、もっと親切の通りがたくさんある。ここ的小屋はきちんとして清潔で、窓は新しくペンキ塗りたてで、屋根は新たに白塗りされている。街路自体も換気がよく、敷地の建物間にある空地も広いし数も多い。でもこれはごく少数の家についてしか言えないことで、一方どの小屋の地下でも地下室居住が見られる。多くの街路は未舗装で下水道もない。そして最悪なこと、このきれいな外見はすべて見かけだけであり、その見かけは最初の十年で消え失せるのだ。というのも個別の小屋の建築も、街路の配置計画と同じくらい非難されるべきものだからだ。こうした小屋はすべて、当初はきれいでしたっきりしているように見える。その巨大な煉瓦造の壁は目をごまかし、作りたての労働者向け街路を通りがかって、裏の路地を思い出さず、その家の施工自体を忘れていれば、リベラル派の製造業者たちの主張する、労働人口がイングランドほどしっかりした住宅に住んでいるところはないという説を信じたくなる。だがよく見れば、こうした小屋の壁はできる限り薄く造られているのが明らかとなる。外壁、特に一階と屋根の重みを受ける地下室の外壁は、厚みが最大で煉瓦一つ分あり、その煉瓦も長手方向が接している。だが同じ高さの小屋でも、一部建設中のもを見ると、外壁が煉瓦半分の厚みしかなく、接するのも長手方向ではなく短い辺となっているのだ。その狙いは建材をケチることだが、もう一つ別の理由がある。つまり、施工業者たちは決してその土地を所有しておらず、イングランドの習慣にしたがって、二十年、三十年、四十年、五十年、あるいは九十九年の借地契約を結

び、それが切れれば土地は上物すべて共々、すべて元の地主の懐に入るのだ。その地主は、土地の上物建設に対して何の対価も支払わない。したがって上物は、借り手側としてはこの借地権の期限が切れるときになるべく価値が小さくなるように計算されている。そしてこうした小屋はしばしば、借地権の期限よりたった二十年か三十年前に建てられているので、施工業者たちはそれに対して余計な費用はかけないことがすぐに想像つくだろう。さらにこうした建設業者は、通常は大工や建築屋や製造業者なので、通常は修繕にほとんどまったくお金を使わない。これは賃料からの収入額が減るのを防ぐ狙いもあるし、一部は地主に上物を提供する時期が近づいているからでもある。一方で商業の危機やそれに伴う失業のため、通り丸ごと空き家のままとなり、その小屋は急速に荒れ果てて居住不可能になることもある。一般に、労働者の小屋は平均でたった四十年しか保たないと計算されている。新築の美しく立派な壁を見ると、数世紀は保ちそうに見えるので、これでも不思議と十分に聞こえるのだが、もともとの建築費のケチ臭さと、修繕の完全な無視、頻繁に見られる長い空き家期間、絶え間ない住人の入れ替わり、最後の十年間に居住者（通常はアイルランド人家族）が加える破壊（かれらは家の木造部分を平気で薪にする） これらすべてがあわさって、四十年間の終わりにはこうした小屋は完全に荒廃してしまう。だからアナコーツは、主に製造業の突然の成長以後に建てられていて、もっと言うなら今世紀（訳注：19世紀）が中心なので、大量の荒廃した家があり、そのほとんどはもうぎりぎり居住できなくなる寸まできている。こうして無駄になった資本の量の莫大さ、当初の建設に対していかに少額な追加投資をするだけで、この地区全体をこの先何年にもわたり、きれいでまっとうにして住みやすくてきたか、といった点については、ここでは詮索しない。ここでは家屋とその住民の状態を扱わねばならず、まさにこれに勝るほどの有害で道徳を劣化させるような建築手法は未だ見つからないことは認めざるを得ない。労働者がこうしたひどい住宅に入らざるを得ないのは、それ以上のものに出せるお金がないからであり、この工場周辺にはそれ以外の物件がないからだ。そしてさらに、物件がかれらの雇い主の持ち主であり、こういう小屋に住むという条件つきで雇っているせいもあるかもしれない。この小屋の耐用年数40年という計算はもちろん、常に完全に厳密ではない。というのももし住戸が町中で建物の密度が高い地区にあって、安定した住民を見つける見込みが高く、地代が高ければ、建設業者たちは40年の期限が切れた後も小屋を住めるようにしておくため、ちょっと追加で手をかけるからだ。だが、最低限の修繕以上のものは絶対にしないので、こうした修繕を受けた住戸は中でも最悪となる。ときどき疫病に脅かされると、通常はうたた寝している衛生警察の良心がちょっとは目覚めて、労働者地区にがさ入れが入り、地下室や小屋の列が丸ごと閉鎖される。これはオールダム通り近くの小道いくつかで起きたことだ。だがこれも長続きはしない。告発された小屋はすぐまた住民が見つかり、所有者はそれを貸してずっと得をするし、衛生警察もしばらくはやってこない。ブルジョワジーが建てていないのは、マンチェスターのこうした東部と北東部だけだ。なぜなら年の十ヶ月か11ヶ月は、西風や南西風があらゆる工場の煙をそちらに流すからで、それを呼吸できるのは労働者だけなのだ。

大アンコーツ通りから南には、巨大で茫漠と広がる労働者地区がある。給料がちでむき出しの土地であり、戸建ての不規則に並んだ家屋や広場が続く、その間にはまだ建築されていない敷地が、まだ整地もされず粘土質のまま芝生もなく、雨が降ればほとんど通行不能になる状態で並ぶ。建っている小屋はすべて汚くて古く、新市街を思い起こさせる。パーミンガム鉄道が貫通した部分が、最も高密度に家が並び最悪の場所となっている。ここ

にメドロック川が流れ、激しくくねりながら谷間を通るのだが、それは場所によってはアーク川の峡谷にも比肩する。流れは墨のように真っ黒で、淀んで臭いが、その両側には工場と労働者住居の広い帯が連なっており、その住居はすべて最悪の状態だ。河岸はおもに斜面となっており、アーク川沿いで見たように、水面までぎっしり家が建っている。こうした家屋は、マンチェスター側に建っていようと、アードウィック、チョールトン、ハルムに建っていようと、似たり寄ったりのひどさだ。だが最もすさまじい地点（それぞれの地点を詳細に記述していったらきりが無い）はマンチェスター側の、オックスフォード通りのすぐ南西にある部分で、小アイルランドと呼ばれている。メドロック川の屈曲部におさまる形で、四方を背の高い工場と高い堤防に囲まれており、一面に建物で覆われていて、小屋が二百ほどの集まりが二つあり、それが主に背中合わせに建っていて、そこにおよそ四千人の人間が住んでいて、そのほとんどがアイルランド人だ。小屋は古く汚くきわめて小さく、街路はでこぼこで、轍が深く、一部は排水も舗装もない。大量のゴミ、排泄物や胸の悪くなる汚物が、淀んだ水たまりの合間にあらゆる方向に山積みになっている。空気はこうしたものからの排気により毒を持ち、一ダースもの背の高い工場煙突から出る煙にあふれて暗くなっている。ボロをまとった女子供の大群がそこら中に群れをなし、ゴミの山や水たまりを漁って肥え太るブタのように汚い。要するに、この貧民窟全体が、アーク川沿いの最悪の中庭ですら及ばないほどのきわめて忌まわしく嫌悪を催す光景を示しているのだ。こうしたボロボロの小屋に住み、割れた窓をオイルスキンで修理し、ドアは開けっ放しで、ドアの枠は腐れ落ちた状態で暮らしたり、暗く湿った地下室の中で、計りようもない汚物と臭気にまみれて、なにやら無理強いされてでもいるかのようにこの大気の中で困り込まれたりしている人種、この人種はまさに人類最低の段階に到達したにちがいない。地区の外観だけで、見る者はこうした印象を受け、こうした考えを抱かずにはいられない。だがこうした困いのそれぞれが、最大でも二室、加えてひょっとすると屋根裏と地下室しかないのに、平均で二十人が暮らしていると聞いたらどう思うだろうか。そしてこの地域全体で、公衆便所は百二十人に一つしかなく、それもほとんど到達不能だと聞いたらどうだろう。そして医師たちがいかに懇願しようと、コレラ大流行のため衛生警察がリトルアイルランドの状況について大興奮に陥ったにしても、何があろうとも、この1844年という神の御代になっても、1831年の状態とほとんど何ら変わっていないのだ！

ケイ医師は、この地区では地下室だけでなく二階のすべて湿っていると主張する。かつては土で埋められた地下室の多くが、いまや土をどかせてまたもやアイルランド人たちの住処となっていると。そしてある地下室では穴から水が絶えず吹き上がってくるので、それが粘土で封をされており、そしてその地下室が川の水面以下にあるため、その十人である手動紡績人は毎朝住宅から水をかい出して通りに捨てねばならないという！

さらに川を下ってメドロック川の左岸にはハルムがある。ここははっきりいって、一大労働者地区で、その状態はほとんどアンコーツと同じだ。建物が密集しているところは主にひどくて荒廃に近づいており、人口が少なめな地区は建物も新しい作りだが、すべて汚物に埋もれている。メドロック川の対岸のマンチェスター市街には、第二の巨大労働者地区があって、ディーンズゲート通りの両側に、ビジネス地区寸前まで広がっていて、場所によっては旧市街にも匹敵する。特にビジネス地区のすぐ隣、ブリッジ通りやクエイ通りとピーター通りの間では、混雑した建物は、場所によっては旧市街の最も狭い中庭すら越えるものとなっている。ここでは、長く細い小道が続いていて、その間を狭苦しい歪んだ中庭や通路がつかないでいて、そこへの入り口はあまりに不規則なので、探検者はあらゆる

る中庭や裏道を個別に詳細に知っているのではない限り、数歩ごとに行き詰まりの路地につかまってしまったり、まったく予想外のところに出てしまったりする。ケイ医師によると、マンチェスターで最も道徳の乱れた階級が住んでいるのは、この荒れ果てて不潔な地区であり、そうした人々の職業は泥棒と売春であるとのことだが、どう見てもかれの主張は今現在でもなお正しい。1831年に衛生警察がここに足を踏み入れたとき、その不衛生ぶりはリトルアイルランドやアーケ川沿いにも匹敵するものだった（いまでもさほどマシになっていないことはぼくが証言しよう）。そして指摘したい点はいろいろあるが、パラメント通りでは公衆便所が380人に一つ、そしてパラメント通路では高密度に人々が暮らす30軒につきたった一つしか公衆便所がなかったのだ。

アーウェル川を渡ってサルフォードに入ると、川が作った半島に、住民八万人の都市が見つかる。ここははっきり言って、一大労働者地区で、そこにたった一本の広い大通りが貫通している。サルフォードはかつてマンチェスターより重要な都市で、周辺地域の主要都市であり、だからその地域はサルフォードハンドレッドという名前で未だに呼ばれている。したがって、古いが故にきわめて不健全で汚れて荒れ果てた地区がここにも見られる。そこはマンチェスターのオールドチャーチの向かいにあり、アーウェル川の対岸にある旧市街と同じくらいひどい状態だ。川からさらに離れると、新しい部分にやってくるが、そこはすでに小屋の寿命たる40年の限界を超えていて、したがってなかなか荒れ果てている。サルフォードはすべて、中庭や狭い小道でできているが、それがあまりに狭いので、これまでぼくが見た中でも最も細い、ジェノヴァの小さな小道を思わせるほどだ。サルフォードの平均的な建物は、この点でマンチェスターよりずっとひどく、したがって清潔さの面でも同様だ。マンチェスターでは警察が、ときどき、六年から十年に一度くらい、労働者地区にがさ入れをして、最悪の住宅を潰し、こうした不潔きわまる馬小屋の最も汚い場所をきれいにさせるのだが、サルフォードではそれがまったく何も行われていないようだ。チャペル通り、グリーンゲート、グラヴェル小路の狭い脇道や中庭は、まちがいなく建設以来一度も清掃されていない。最近では、リバプール鉄道が高架線路によりこの真ん中を貫通したので、最も汚い行き止まりの多くを潰した。でもそれが何の役に立つだろう？ この高架を通して見下ろせばだれでも、十分なだけの悲惨と汚物を見ることになる。そしてこうした小道にわざわざ足を運び、開いたドアや窓越しに家や地下室をのぞき込む手間をかければ、一步ごとにサルフォードの住民たちが、清潔さや快適さなど不可能な住宅に住んでいることが納得できるだろう。まったく同じ物事の状態が、サルフォードのもっと遠くの地域、リーゼント通りに沿ったイズリントンやボルトン鉄道の裏などにも見られる。オールドフィールド街道とクロスレーンの間の労働者住居は、大量の中庭が路地が考え得る最悪の状況で存在するあたりだが、汚さと過密の面で旧市街の住居といい勝負だ。この地区で私は、どうやら60歳くらいの弾性が、牛小屋に住んでいるのを見かけた。四角い囲いに一種の煙突を作ったもので、窓も床も天井もないが、寝台を手に入れてそこに住んでいるのだが、腐った屋根からは雨がしたたり落ちてくるのだ。この人物は通常の仕事には高齢で虚弱すぎたので、手押し車で糞を取り除く仕事で喰っている。その糞の山はこの人物の宮殿の隣に山積みになっているのだ！

20ヶ月にわたり、ぼくが観察できたマンチェスターの各種の労働者地区はこんな具合だ。こうした彷徨の結果を手短かにまとめるなら、マンチェスターとその周辺地域の労働者35万人が、ほとんど全員、悲惨で湿った汚い小屋に住んでおり、それを取り巻く街路は通常は、これ以上はないほど悲惨で汚い状態であり、換気など一切考慮せずに配置されてお

り、建設業者の利潤だけを考慮して作られていると認めざるを得ない。一言で、マンチェスターの労働者住戸は、清潔さも利便性もなく、したがって快適な家族生活など一切不可能だと告白せざるを得ない。そしてそんな住宅では、物理的に劣化した人種、あらゆる人間性を奪われ、貶められ、道徳的にも物理的にも獣の状態に退行した者でなければ、快適で家にいると感じられたりはしないと告白するしかない。そして、こうした主張をするのはぼく一人ではないのだ。ケイ医師がまさに同じ記述をしているのはすでに見た。そして、屋上屋を架すようなものだが、製造業者たちに権威として高く評価され、労働者の独立運動にすべて熾烈に反対するリベラル派のことばを引用しよう<sup>\*11</sup>：

「だが余がアイリッシュタウン、アンコート、リトルアイルランドの彼ら [つまりマンチェスターの職工たち] の住居を検討すると、余が唯一不思議に思ったのは、斯様な家の居住者たちがそこそこの健康を保てるのだろうかということであった。斯様な町、というのもその広がり人口からして町としか言えないのだが、それは小規模投機家により、目先の利潤以外何も考えずに建てられている。大工と煉瓦職にが結託して一片の土地を買い [つまり何年か借地し]、そこに家と称するものを建てる。ある場所では、余らは街路が丸ごと溝に沿って走っているのを見たが、それは掘削の費用をかけずに地下室を深くするため (しかも人間のための地下室であり材木置き場ではない) であった。この通りでは一軒たりともコレラを逃れた場所はない。そして一般的に、こうした郊外ではどこも街路は未舗装で、真ん中に糞の山や池がある。家は背中合わせに建てられ、換気も排水もない。そして家族が丸ごと、地下室か屋根裏の片隅で暮らしているのである」

すでに、コレラ流行のときに衛生警察が示した例外的な活動については述べた。疫病が大流行しているとき、都市のブルジョワは一樣に恐怖に襲われた。人々は貧困者の劣悪な住宅を思い出し、こうしたスラムがどれも残らず確実に疫病の中心となり、そこから絶望が四方の所有階級の家屋にも広がるとして身震いしたのだった。即座に健康委員会が指名されてこうした地区の調査が実施され、その状態について市の評議会に報告することとなった。ケイ医師もこの委員会の委員だが、一つ (第11管区) を除いてあらゆる警察管区を自ら訪れ、そしてかれらの報告からの抜粋を引用している：検査されたのは全部で6,951家屋。もちろんマンチェスター市域だけで、サルフォードなど郊外部は除外されている。このうち2,565軒は即座に屋内の白塗りが必要。960軒は手の施しようがない。959軒は排水不十分。1,455軒は湿気ている。452軒は換気劣悪。2,221軒は便所がない。検査された街路687本のうち、248本は未舗装、53本は部分的にだけ舗装、112本は換気不足、352本には常時水たまりやゴミの山、汚物の山などがあつた。これほど腐りきつた家畜小屋をコレラ到来前にきれいにするのは、もちろん問題外だった。したがって最悪のどん詰まりがいくつかがきれいにされ、それ以外はすべてほったらかしだ。きれいにされた地点では、リトルアイルランドが証明するように、昔の汚い状態が当然ながら数ヶ月で回復された。こうした家屋の屋内状態となると、同委員会はすでにロンドンやエジンバラなど他の都市でお目にかかったのと同じ状態を報告している。

「アイルランド人一家が丸ごとベッド一つに寝ていることも多く。ときには汚い

<sup>\*11</sup> ナッソー・W・シニア、『工場法に関する商業委員会会長閣下 (チャールズ・ポーレット・トムソン閣下) への手紙』ロンドン、1837、p. 24.- エンゲルスによる注

わらの山や、古いずた袋の掛け布団が、一家を見分けの付かない大きな山にしており、貧窮、経済の欠如と忌まわしい習慣のために等しく人間らしさを失っている。査察官はしばしば小さな家一軒に二世帯が押し込まれているのを発見した。その家には部屋が二つしかなく、片方で一家が寝て、もう片方で一家が食事をする。そしてしばしば、複数世帯が湿った地下室に暮らしており、そこには一部屋しかなく、その悪疫の源たる空気の中に、12人から16人が詰め込まれている。こうした病気の肥沃な源に加え、さらには家の中にブタなどの獣も飼われていることがあり、おかげで他にも、きわめて嫌悪を催すような状態が生じている」

多くの家族は、自分たちも一室だけで住んでいるのに、さらに下宿人や一時滞在者を受け入れることも付け加えておこう。こうした男女とわず下宿人たちが、夫婦といっしょのベッドで眠ることも決してまれではない。そしてある事例では、男とその妻と、その成人したぎりの姉が同衾している例が「労働人口の衛生状態に関する報告」によればマンチェスターでは六回繰り返されていたという。普通の下宿屋もまたきわめて大量にある。ケイ医師は1831年にその数をマンチェスター市内だけで267軒としているし、その後大量に増えたのはまちがいない。こうした下宿屋のそれぞれは客を二十人から三十人受け入れるので、それら全部で、毎晩合計五千から七千人を宿泊させていることになる。こうした下宿屋とその客の特徴は、他の都市と同じだ。部屋ごとに、床に寝床が5つから7つある寝台はなく、その上にまったく何の分け隔てもなく、入れるだけの人数がごちゃごちゃに寝る。こうした穴蔵に、どんな身体的、道徳的な雰囲気か漂っているかはぼくが述べるまでもない。こうした下宿屋はどれも犯罪の巣窟であり、人間の本性が嫌悪を催すような行為の現場であり、そうしたものはこういう悪徳の集中化が強制されなければ、決して起こらなかったかもしれないのだ。ガスケルは<sup>\*12</sup> マンチェスター市部で地下室に住む人口を2万人としている。『ウィークリーディスパッチ』は「公式の報告に基づき」その数字を労働者階級の12パーセントとしており、これはガスケルの数字とも一致している。労働者の総数は175,000人と推計されているので、その12パーセントは21,000人となるからだ。郊外部での地下室居住も、少なくとも同じくらい多かったはずだ。だからマンチェスター 広域都市圏をこの名で呼ぼう で地下室に住む人々の数は、4万から5万人以上のはずだ。最大級の都市や町に住む労働者の住宅についてはこのくらいにしよう。屋根の必要性が満たされているやり方は、他のあらゆる必需品が供給されるやりかたの基準となるものだ。こうした汚らしい穴蔵に住めるのは、ボロをまとった食事もろくに執れない人々だけだというのは順当な結論であり、また事実まさにその通りとなっている。労働者の衣服は、大半の場合には、きわめてひどい状態にある。使われている材質は、最もその役割にふさわしいものではない。羊毛とリネンは男女ともに衣服からほとんど消え、いまやほとんど綿のみとなっている。シャツは漂白または染色の綿製品でできている。女性のドレスは主に綿のプリント製品だ。そして羊毛のペチコートは滅多に物干し

\*12 P. ガスケル『イングランドの製造業人口：その道徳、社会、物理状況と、蒸気機械の使用から生じた変化、児童労働に関する検討を附す』Fiat Justitia, 1855。主にランカシャー地方の老僧階級の状態を描いている。著者はリベラルだが、労働者の幸福を主張するのがリベラル派の特徴ではなかった時代にこれを書いている。したがって偏見がなく、現状の状態、特に工場システムの邪悪について注目できた。その一方で、著者は工場調査委員会以前に執筆しており、その後同委員会の報告で否定された多くの主張を、信頼できない出所から引用している。したがってこの著作は、全体としては価値あるものだが、使用には注意が必要だ。特に著者はケイと同様に、労働者全体と工場作業員とを混同している。本書の序文に含まれたプロレタリアートの発達史は、主にガスケルのこの著作から採ったものだ。-エンゲルス注

綱にかかっていない。男性はファスチアン（訳注：コールテン/コーデュロイとほぼ同じのこと）などの厚手の綿生地ですでできたズボンに、同じ材料の上着を主に着ている。ファスチアンは労働者の一般的な装束となり、おかげで労働者は「ファスチアン上衣」たちと呼ばれるようになり、彼ら自身も上質ラシャ製品（ブロードクロス）を着る紳士たちと自分を対照づけるためそう名乗り、中産階級を特徴づけるのに「ブロードクロス」という言い方が使われる。チャーチスト主義の指導者ファーガス・オコナーが1842年の蜂起の最中にマンチェスターにやってきたとき、かれは労働者の耳が聞こえなくなりそうな喝采の中、ファスチアン製の衣服で登場した。イングランドでは労働者ですら、普遍的に帽子で頭を覆っている。丸い帽子、高い帽子、ツバの広い帽子、狭い帽子、つばのな帽子、キャップをかぶるのは、工場街の若者だけだ。帽子を持たない者はみんな低い四角い紙のキャップを折ってかぶるのだ。

労働階級の服装はすべて、それが良い状態にある場合ですら、気候にほとんど合っていない。イングランドの湿った空気と気温の急変は、他のどの国よりも風邪をひかせるよう計算されたものなので、中産階級全体は肌に全身フランネルを着るのが必須で、フランネルのスカートやシャツがほとんど普遍的に使われている。労働者階級はこうした予防措置を奪われているばかりか、羊毛の衣服を糸一本たりとも使えない立場のことが多い。そして重たい綿製品は、羊毛よりも厚く、固く、重たいのに、冷気と湿気に対する保護はかなり劣っているし、分厚いのと材質のせいでなかなか乾かず、縮充した羊毛衣服のコンパクトな密度はまったく持っていない。そしてもし労働者が日曜のために羊毛コートを買ったとしても、それは「安手の店」で買うしかない。そこにあるのは「悪魔の粉」と呼ばれる悪質な衣服で、販売はできるが使用には耐えない代物となっており、一晩で破けたり糸がほつれたりするものとなっている。あるいは古着屋で買うしかなく、それはもう旬をとくに過ぎた代物で、ほんの数週間しか保たない。さらに、労働者の衣服はほとんどの場合はひどい状態で、しばしば最高のものは質入れしなくてはならないという必要性が繰り返して生じる。だがきわめて多数の労働者、特にアイルランド人労働者においては、主流の衣服はまったくのボロで、しばしば修理しようがないほどか、あまりに継ぎが当たりすぎて、もとの色がなんだったのかもはやわからないような代物となっている。それでもイングランド人やアングロ＝アイリッシュたちは継ぎを当て続け、この技芸をすさまじい水準にまで高めて、羊毛や麻袋をファスチアンにあてたり、その逆にあてたりする。かれらにとっては何のちがひもないのだ。そして確かに、移住してきたアイルランド人たちは、よほど極端に必要になって、それをしないと服全体がばらばらになるとでもいうのでない限り、その継ぎさえあてようとしなかった。通常、シャツと称するボロが、コートやズボンの裂け目からつきだしている。トマス・カーライルによればかれらが着ていたのは<sup>\*13</sup>

「ボロのスーツで、それを脱ぐのは難しい作業であり、お祭りの際や満潮時にしか行われない」

またアイルランド人は、それまでイングランドでは前代未聞だった裸足でうろつくという風習も導入した。あらゆる工業都市で、現在では無数の人々、特に女子供が裸足でうろついており、そのお手本はだんだんイングランド人の貧困層にも採用されつつある。

<sup>\*13</sup> トマス・カーライル『チャーチスト主義』ロンドン、1840年、p.28。トマス・カーライルについては後出。－エンゲルス注

食べ物も服装と同じだ。労働者たちは、財産保有階級にはひどすぎるものしか手に入らない。イングランドの大都市では、最高のものが手に入るのだが、それにはお金がかかる。そして労働者は、ほんの数ペンスで家族を養わねばならないので、あまり支出できない。さらに、通常の賃金は土曜の晩に受け取ることになる。というのも賃金を金曜日に支払うというやり方も始まってはいるが、この立派な方式は決して普遍的ではないからだ。だから労働者は市場に五時か、果ては七時にやってくるが、これは中産階級の買い物客が、朝の最高のものがたくさんある時間帯にやってきて、いちばんいいところを選んでしまった後の時間だ。だが労働者たちがやってくると、最高のものはすでに消え失せているし、それが残っていたとしても労働者にはたぶん手が届かない。労働者が買うジャガイモは通常は劣悪で、野菜はしなびており、チーズは古く品質も悪く、ベーコンは腐りかけ、肉は脂肪がなく、老いたしばしば病気の牛から取ったものか、自然死した牛からのもので、それですら新鮮ではなく、半分腐っていることも多い。売り手は通常、小規模行商人で、品質の悪いものを買って、粗悪品だから安く売れるのだ。最貧の労働者は、さらに別の食材を使って、必需品を数ペンスでまとめあげるしかない。日曜日には何も販売できないし、あらゆる商店は土曜の夜 12 時には閉店しなくてはならないので、月曜まで日持ちしないものは、夜十時から深夜までの間は投げ売り状態となる。だが夜十時に販売されているものの九割は、日曜朝にはもう使い物にならない。でもこうしたものこそ、まさに最貧階級の日曜の夕食材料となるものなのだ。労働者の買う肉は、かなりの場合に賞味期限を過ぎていて、だが買った以上は食わねばならぬ。1844 年 1 月 6 日（大きくはちがわないうはず）、マンチェスターで刑事裁判が開かれた。肉屋 11 人が、腐った肉を売ったことで罰金刑を受けたのだ。そのそれぞれが、牛やブタを丸ごと一頭、あるいは羊数匹、あるいは 50-60 ポンドの肉を保っていて、それが押収されたときにはすべて腐った状態であった。ある例では、クリスマス用の詰め物をしたガチョウ 54 羽が押収され、リバプールでは販売不能をされたので、マンチェスターに送られて、それが腐った状態で市場に持ってこられた。詳細はすべて、名前も罰金も『マンチェスターガーディアン』に当時掲載されていた。[1844 年の] 7 月 1 日から 8 月 14 日までの 6 週間で、同じ新聞に類似の事件が 3 件報じられた。7 月 3 日『ガーディアン』によると、重量 200 ポンド (90kg) のブタが、死んで腐敗していたところを、ハイウツドの肉屋に切り刻まれて売りに出され、それが押収された。7 月 31 日号によれば、ウィガンの肉屋二人、うち以前は同じ罪で起訴されたことがある人物だったが、それぞれ 2 ポンドと 4 ポンドの罰金を受けた。腐った肉を売りに出した罪だ。そして 8 月 10 日号によると、ボルトンの焦点で押収された腐ったハム 26 個が公開焼却処分となり、商人は 20 シリングの罰金を受けた。だがこれらで全部などということはありません。この 6 週間分についてすら公正な平均とは言えないし、そこから年平均を算出することもできない。しばしば、隔週刊の『ガーディアン』が毎号のようにマンチェスターや近郊での類似事件を報じている季節もある。そしてあらゆる主要街道沿いに広がる広範な市場で、市場査察官のいい加減な監視に見つからずにすんでいる数多くの例を考えるなら、そして動物が丸ごと売りに出されているという大胆さは他に説明がつかないだろう、これまで挙げた事例で登場した雀の涙ほどの少額罰金を考えたとき、(劣悪な肉を売る) 誘惑がどれほど大きいかを考えるなら、査察官が押収されるためにはその肉がどれほどひどい状態になっていたかを考えると、労働者たちが通常は良質の滋養の高い肉を得ていたとは信じがたい。だがかれらは、中産階級の金銭への貪欲さにより、また別の形で被害を被っているのだ。商人や製造業者は各種の食材にすさまじくひどいや

り方で混ぜ物を入れ、消費者の健康など一顧だにしない。この話については『マンチェスターガーディアン』を採りあげたので、中産階級の別の媒体を見てみよう。ぼくは自分の反対者たちの証言には大喜びなのだ。『リバプールマーキュリー』をご覧ください。

「塩バター（訳注：原文 Salt butter。調べてもどんなものかわからないが、記述を見るとバターに大量の塩を混ぜ込んだものらしい）が新鮮なバターの固まりの形にされて、表面だけ新鮮なバターをかぶせられる。他の例では、新鮮なバターがこれ見よがしに味見用に出されている。でも販売されるのはそれではない。そして他の例では、塩バターを洗ったものが固められ、新鮮なバターとして販売される。（中略）砂糖には米の粉や他の安い材料が混ぜ込まれ、完全な独占砂糖価格で販売される。化学物質 石けん製造の廃棄物 も他の物質と混ぜられて砂糖として販売される。（中略）よいコーヒーにはチコリが混ぜられる。チコリなど安い物質が、見事にコーヒー豆の形に型取りされ、たっぷりとコーヒーに混ぜられる。（中略）ココアは細かい茶色い土を羊の脂で練ったものをたっぷり混ぜてあり、本物のココアとうまくくっつくようにされる。（中略）紅茶の葉は林木の葉など他の異様な代物と混ぜてある。出がらしの葉もまた乾かし直し、熱した銅板で再着色して紅茶として販売される。コショウは外皮の粉などが混ぜてある。ポートワインはまるごと偽物で（ジンや着色料などで造る） イングランドではポルトガルでの生産量よりはるかに多いポートワインが飲まれているというのは悪名高い。ありとあらゆるひどい代物が、タバコのあらゆる形態で葉たばこに混ぜてある」

さらに追加しておく、マンチェスターで最も尊重されているタバコ業者数名が昨夏に公式に発表したところでは、タバコへの混ぜ物があまりに横行しているので、混ぜ物なしで商売を続けられる会社は存在せず、そして三ペンス以下の葉巻の中でタバコだけで出来ているものはない、とのこと。1 こうした詐欺は、もちろん食品だけに限った話ではなく、何十も挙げられるが、石膏やチョコレートに小麦粉を混ぜるといった悪行もその一つだとは行っておこう。あらゆる品物の販売で詐欺が行われている：フランネル、ストッキング等々は引き延ばされており、1 回洗うと縮む。細い布が、実際の幅よりも 1.5-3 インチ（4-8 センチ弱）広いと称して売られている。陶磁器の釉薬はあまりに薄く、何の訳にもたたずですぐひびが入る。その他無数の悪行が横行しており、tout comme chez nous（故郷とまったく変わらない）。だがこうした詐欺の邪悪な結果の大半は、労働者にふりかかる。金持ちはあまりだまされない。評判を気にして、低質で混ぜり物入りの商品を買った客より自分に被害が及ぶような大規模商店で買い物をし、高い代金を払えるからだ。金持ちは常により食事をしているせいもあり混ぜ物を繊細な舌でもっと見分けられる。だが貧困者、労働者は数ファースング（訳注：1/4 ペニー）が重要であり、わずかなお金でいろいろなものを買わねばならず、買ったものの品質をあまり詮索するわけにもいかないし、味覚を養う機会もなかったため品質などわからない。だからかれらに、混ぜ物をした有毒な食材がすべてふりかかるのだ。小規模小売り業者と取引し、ツケで買い物をしなければならず、さらにこうした小規模小売り業者は小同じ品質のものを大規模小売り業者ほど安くは売れない。資本と商売の経費比率が高いことから、知ってか知らずか混ぜ物入りの商品を買って求められる低価格に対応せねばならず、他の競合商人と張り合わねばならないのだ。さらに、商売に大量の資本投資をした大規模小売商人は、詐欺行為をしていたのがバレたら、信用が台無しで商売も台無しだ。でも顧客がある通りに限られている小雑

貨屋は、詐欺が見つかったところでどんな害が及ぶというのか？ アンコーツでだれも信用してくれなければ、顔を知られていないチョールトンかハルムに場所を変えて、前と同じように詐欺を続ければいい。法的な罰則は、脱税でもしない限り、きわめて少数のごまかしにしかかからないのだ。品質だけでなく、商品の量の点でもイングランドの労働者はごまかされている。小規模商人は、錘や秤がインチキで、警察の報告を読むと、こうした犯罪に対してすさまじく多数の有罪判決がおりている。この種の詐欺がどれほど普遍的かを知るには『マンチェスターガーディアン』の記事をいくつか抽出するだけでいい。ごく短期を見ただけだし、そこですらあらゆる数字が手元にあるわけではない。

- 『ガーディアン』1844年6月15日、ロックデール法廷：商人四人が軽い錘を使ったことで5-10シリングの罰金。ストックポート法廷：商人二人が1シリングの罰金、一人が軽い錘と不正な秤を使い、どちらも警告を受けていた。
- 『ガーディアン』6月19日、ロックデール法廷：商人一人罰金5シリング、農民二人10シリング。
- 『ガーディアン』6月22日、マンチェスター平和司法法廷：商人19人が2シリング6ペンスから2ポンドまでの罰金。
- 『ガーディアン』6月26日、アシュトン法廷：商人と農民たち十四人が2シリング6ペンスから1ポンドの罰金。ハイドベディ法廷：農民と商人9人が費用賠償と5シリングの罰金。
- 『ガーディアン』7月6日マンチェスター：商人16人が費用賠償と10シリングを越えない罰金。
- 『ガーディアン』7月13日マンチェスター：商人9人が2シリング6ペンスから20シリングまでの罰金。
- 『ガーディアン』7月24日ロックデール：商人4人が10から20シリングの罰金。
- 『ガーディアン』7月27日ボルトン：商人と宿主12人が損害賠償を命じられる。
- 『ガーディアン』8月3日ボルトン：商人3人が2シリング6ペンスと5シリングの罰金。
- 『ガーディアン』8月10日ボルトン：商人一人が罰金5シリング。

そして、労働階級を財の品質詐欺の主な被害者としているのと同じ原因が、量の問題でもかれらを通常の被害者にしてしまう。

個々の労働者の一般的な食事は、賃金に応じてもちろん変わる。高賃金の労働者、特に一家の全員が何かしら稼げる一家は、その状態が続く限りよい食事ができる。毎日肉が出て、夕食はベーコンとチーズだ。賃金が少ないと、肉は週に二、三回しか使われず、パンとジャガイモの比率が高まる。だんだん賃金下がると、動物の肉はジャガイモと刻んだ小さなベーコン片しかなくなる。もっと下がれば、それすら消え失せ、パンとチーズ、オートミール、ジャガイモしか残らず、そして最下位のアイルランド人となると、ジャガイモしか食べられない。つけあわせとしては、薄い紅茶に、ちょっとだけ砂糖やミルク、アルコールを入れたものがどこでも飲まれている。紅茶はイングランド、そしてアイルランドですら、ドイツにおけるコーヒーと同じくらい手放せないものとされており、紅茶すらないのは最悪の貧困が支配しているところだ。だがこのすべては、労働者に仕事があるのが前提だ。失業したら、偶然にすぎるしかなくなり、与えられたもの、乞食や泥棒で手に入れたものは何であれ食べる。そして何も得られなければ、これまで見たようにあっさ

り飢える。もちろん食べ物の量も、品質と同じく賃金に応じて変わるので、低賃金労働者は、大家族がなくても、常勤の定期職についている場合ですら、飢えが目立つ。そして低賃金者の数は非常に多い。特にロンドンでは、人口の大きさにあわせて労働者の競争が高まるため、この階級が無数に見られる。でもそれは他の都市にもいるのだ。こうした場合だと、ありとあらゆる食材が使われる。ジャガイモの皮、野菜くず、腐った野菜<sup>\*14</sup> が他に食べ物がないので食われており、滋養が原子一つほどでもありそうなものは、貪欲にかき集められている。そしてその週の賃金が週末までに使い果たされると、週の最後の日々には一家は、ギリギリ飢餓を逃れられる程度の食べ物しか得られない、いやそれすら得られないこともしょっちゅう起こる。もちろんこんな暮らしはどうしても無数の病気を発生させるし、それが発生したら、一家の大黒柱たる父親、その肉体的な疲労が最も滋養を要求する存在、したがって真っ先に病気になる人物　その父親が完全に身動き取れなくなると、悲惨は頂点に達し、そして社会がその成員を、まさにかれらが最も救いを必要としているときに見捨てる残酷さが、白日のもとに全面的に曝されることになるのだ。

これまで挙げてきた事実をざっとまとめよう。大都市は主に労働者が暮らしている。というも最高の場合でもブルジョワ一人に対して労働者が二人、通常はそれが三人で、四人のところもあちこちにある。こうした労働者たちは自分の財産を何一つ持っておらず、賃金だけで暮らし、それをすべて食ってしまうのが通例だ。社会はすべて原子で構成されているため、こうした人々など気にかけない。当人と家族の自己責任で放置し、それでもそれを効率的で持続的に行える手段をまったく与えない。あらゆる労働者は、最高の者ですら、したがって絶えず失業と食い上げに曝されており、つまり餓死の危険があり、実際それで死亡する者も多い。労働者の住居はどこでもひどい無計画ぶりで、施工もひどく、最悪の状態で維持され、換気も悪く、湿気っていて、不健全だ。住民たちは可能な限り小さな空間に押し込められ、通常は少なくとも一室一世帯以上が眠る。住居の室内は程度こそちがえ極貧で、きわめて必要性の高い家具すらまったくない。労働者の衣服もまたきわめて薄く、その大半はボロを着ている。食物は一般にひどい。しばしばほとんど使用に耐えず、多くの場合はときに量も不足で、極端な場合には餓死が生じる。だから大都市の労働階級は生活状態の様々な段階を示しており、最高の場合には厳しい労働とよい賃金のために一時的なら我慢できる存在（よいとか我慢できるというのは労働者の観点からのもの）となる。そして最悪の場合には、ひどい欠乏で家もなく餓死すら起こりかねない。平均は、最高の事例よりはずっと最悪の事例に近いのだ。そしてこの一連の状態が、階級ごとに固定されているわけではないので、労働階級のこの部分はよい生活で、昔も今後もそれが続くとは言えない。もしそれがあちこちの状態であるなら、もしある方面の仕事が一般に他より有利で、それでも各分野の労働者の状態はきわめて大きく変動するので、ある一人の労働者は比較的快適な状態からきわめて欠乏した状態まで、果ては餓死まであらゆる状態を体験する立場にあるなら、ほとんどどんなイングランド労働者も運の大幅な変動の物語を語れることになる。その原因についてもっと詳しく検討しよう。

<sup>\*14</sup> 『ウィークリーディスパッチ』1844年4月か5月、ロンドン貧困層の状態に関するサウスウッド・スミス医師の報告による。　エンゲルス注

## 第3章

# 競争

原文：<http://bit.ly/1nVwPN4>

「はじめに」で、産業運動のしょっぱなに競争がプロレタリアートを作り出した様子を見た。紡織製品への需要が増えたので、布織り職人の賃金が増え、それにより織物を兼業していた農民が畑を捨てて、織機に専念することで稼ぎを増やすようになったのだ。競争が、大農場方式により小農民を押し出し、かれらをプロレタリアの地位に貶めて、その一部を都市にひきつけたことも見た。さらにそれが小ブルジョワを大量に破滅させ、その人々もプロレタリアの地位に貶めたことも見た。資本を少数の手に集中させた様子や、大都市での人々の様子も見た。競争はこのように各種の手段や方法を通じて、現代工業において全貌をあらゆる自由に発達させられると、プロレタリアートを創り出し拡大していったのだ。こんどは、その競争が既存の労働階級にどう影響するかを観察する必要がある。そしてそれにはまず、単独の労働者がお互いに競争する結果をたどるところから始めねばならない。

競争は、万人の万人に対する戦いという現代市民社会を支配する原理の最も完璧な表現だ。この戦いは、生存をかけた戦い、存在をかけた戦い、すべてをかけた戦い、必要なら生死を賭けた戦いであり、社会のちがう階級同士が戦うだけのものではなく、そうした階級内でも個々の成員同士が戦うものなのだ。だれもが他人の邪魔であり、だれもが邪魔な相手をすべて押し出し、自分がその場所に入ろうとする。労働者たちは絶えずお互いに競争しており、ブルジョワの成員たちもまたお互いに競争している。力織機を使う布織り人は、手動織機の布織り人と競争しており、失業や低賃金の手動織機人は、高賃金の職人と競争しており、それぞれが相手に取って代わろうとする。だがこの労働者同士の競争こそは、労働者への影響という点で現状の最悪の側面であり、ブルジョワジーが手にしている対プロレタリアート兵器として最も鋭利なものなのだ。だから労働者は団結によりこの競争を無化しようとするのであり、だからブルジョワジーはこうした団結を憎悪するのであり、団結が敗退するたびにブルジョワジーは勝利するのだ。<sup>\*1</sup>

プロレタリアは無力だ。自力だけでは一日たりとも生きていけない。ブルジョワジーは、最も広い意味における生存のあらゆる手段を獲得した。プロレタリアが必要としているものは、このブルジョワジーから手に入れるしかない。そしてブルジョワジーはその独

---

<sup>\*1</sup> 訳注：この最後の部分、ブルジョワジーが敗退するたびに団結は勝利する、という解釈もできて、英語では判別不能だが、どっちでも趣旨はまったく同じ。文脈的にはこの段階ではまだ「団結は勝利！」ではなく「ブルジョワジー邪魔！ 悔しいぜ！」の段階なので、ここではこの解釈を採りました。

占を国の力により守られている。したがってプロレタリアは、法的にも事実上も、ブルジョワジーの奴隷であり、ブルジョワジーはプロレタリアの生殺与奪の力を持つ。ブルジョワジーは生活手段を与えてはくれるが、それもプロレタリアの労働の「等価物」だけだ。そして自由な選択に基づいて行動しているかのような見かけさえ与えてくれるし、自由で制約なしの同意に基づき契約を、青年に達した責任ある主体として交わしたかのように見せかけてくれる。

なんとも大した自由だ。プロレタリアは、ブルジョワジーが提示する条件をのむか、さもなければ上、凍死し、森の獣たちと裸で眠るかという選択しかないというのに！ブルジョワジーの好き勝手に評価できる「等価物」とは何とも大したものだ！そしてあるプロレタリアがブルジョワジー、つまりかれの「自然な上司」\*2の提供する「公正な」条件に同意するより飢えを選ぶほど愚かであっても、替わりはいくらでも見つかる。世界にはプロレタリアが十分にいて、その全員が生きるより死ぬ方がましなどと考えるほど狂ってはいない。

ここにあるのは、労働者同士の競争だ。もしあらゆるプロレタリアたちが、ブルジョワジーのために働くより飢えた方がましだという決意表明をすれば、ブルジョワジーはその独占を諦めざるをえない。だがそんなことは起きない。そして実現はかなり不可能だろう。だからブルジョワジーは未だに繁栄する。この労働者の競争に関する制限はたった一つしかない。どんな労働者も自分が生き延びるのに必要な金額以下では働かないということだ。もし餓死するなら、つらい仕事の中で餓死をするよりも、何もせずに餓死するほうを選ぶだろう。確かに、この制限は相対的なものだ。人によっては生存に必要な量が大きいし、他より快適さに慣れている者もいる。まだ多少は文明化されているイングランド人は、ポロ姿でうろつき、ジャガイモを食い、豚小屋で眠るアイルランド人よりは多くが必要だ。だがそれでもアイルランド人がイングランド人と競争しなくなるわけではなく、したがってだんだんアイルランド人の賃金が強制され、それと共にイングランド人の文明水準も、アイルランド人の水準までに下がる。仕事によってはある水準の文明が必要だし、ここにはあらゆる工業職業の形がほとんど含まれる。したがってこの場合のブルジョワジーの利益は、労働者が必要とされる水準に自分を維持できるだけの賃金を払うべしということになる。

新規に移民してきたアイルランド人は、提示された最初の豚小屋に収容されたり、一週間後に賃金をすべて飲んでしまい賃料を払えないために通りに追い出されたりした状態で、工場作業員としては不適切となる。したがって工場労働者は、子供を通常の仕事に就かせるまで育て上げられる賃金を必要とする。だがそれ以上ではない。そうでないと、子供の賃金なしでもやっていけるようになってしまい、すると子供たちを単なる労働者以外のものに育てあげることになりかねない。ここでも、限界となる最低賃金は相対的なものだ。家族全員が働いていれば、その労働者自身はその分だけ少ない賃金でやっていけるし、ブルジョワジーは機械作業により女子供を雇いそれを儲かる形で使えるようになった。もちろん、あらゆる家族で全員が働けるわけではなく、そうではない世帯の場合には、全員が雇われている家族でやっていけるだけの最低賃金で働くことになるとまずい。だから通常の賃金は、全員が雇われている世帯はそこそこ豊かに暮らせ、たった数人しか働けない世帯はかなり苦勞するような、平均値となるのが通例だ。だが最悪の場合、あら

\*2 イングランド製造業者がお気に入りの表現。 エンゲルス注

ゆる労働者が、まったく生活できないよりは、自分の慣れ親しんだごくわずかなぜいたくすらあきらめようとする道を選ぶことになる。屋根がないよりは豚小屋でもいいし、裸よりはボロを着るほうがましで、餓死するよりはジャガイモばかり食うほうがいいということになる。路上に追い出されて世界の目の前で死ぬよりは（まったく仕事の得られない人が実にたくさん、まさにそういう目にあってきた）半分の給料で我慢して状況が改善するのを待とうと考える。したがって、この雀の涙、何も無いより少し多いだけの代物が、最低賃金となる。そしてブルジョワジーが雇っていいと思える以上に作業員がいれば競争の戦いの果てに、それでも何もすることがない労働者が残っていれば、その者たちはあっさり餓死するしかない。というのもブルジョワは、労働の産物を利潤つきで販売できない場合には、決してかれらに仕事を与えないからだ。

ここから、最低賃金とは何かが明らかになる。その最高額は、ブルジョワジーたち同士の競争で決まってくる。というのも、彼らもお互いに競争しなくてはならないのはこれまで見た通りだからだ。ブルジョワジーは、資本を商業と製造業で増やすことしかできず、いずれの場合にも労働者が必要だ。資本を利息がつくように投資しても、間接的には労働者が要る。というのも商業と製造業がなければ、だれも資本に対する金利など支払わず、だれもその資本に使い道がないからだ。だからブルジョワジーはまちがいなく労働者を必要としている。これは自分の即座の生活に必要ということではなく、ぼくたちが取引商品や使役家畜を必要とするような形つまり利潤を得る手段として必要とするのだ。プロレタリアが生産する財を、ブルジョワジーは利潤上乘せで売る。したがって、こうした財の需要が高まり、競争する労働者が全員雇われ、さらに追加で何人か雇ってもいい状態になると、労働者の競争も消え去り、ブルジョワジーたち同士の競争が始まる。労働者を採る資本家たちは、自分の財に対する需要が挙がった結果として価格が上昇し、利潤が上がるのを熟知しているので、その利潤すべてを取り逃がすよりは、ちょっとだけ高い賃金を払うようになる。チーズを得るためにバターを送り出し、チーズを得たら嬉々としてバターを労働者に残すのだ。だから資本家たちは次々と労働者を求めるようになり、賃金は上がる。だがそれは、需要増加が許容するまでしか挙がらない。自分の超過利潤を喜んで犠牲にした資本家が、通常の平均的利潤をも犠牲にする危険に直面したら、平均賃金以上は支払わないようしっかり配慮するのだ。

ここから、平均賃金が決まってくる。平均的な状況だと、労働者も資本家も競争する理由がなく、特に労働者同士、資本家同士で競争する必要がなく、まさに需要されているだけの財を作るために雇用できる労働者がいる場合、賃金は最低より少し上になっている。最低からどれだけ高い水準になっているかは、労働者の平均的なニーズと文明性の水準による。もし労働者たちが週に何回か肉を食べるのになれていたら、資本家たちもその食事を変えるだけの賃金を我慢して支払わねばならない。それ以下ではない。というのも労働者たちは相互に競争していないから、それ以下の水準で満足などしようとしなないからだ。それ以上でもない。というのも資本家たちは、自分たち同士でも競争はしていないので、大きく賃金を上げて労働者を惹きつける必要がないからだ。

この労働者の平均的なニーズと平均的な文明度の基準は、イングランドの産業時代のややよこしさのせいで、とてもややこしいものとなっている。そしてすでに指摘されているように、労働者の種類がちがえばこの基準も変わるのだ。ほとんどの工業職業は、ある程度の技能と規則性を要求し、こうした性質は、ある程度の文明度を必要とするので、賃金水準は、労働者がそうした技能を獲得し、そうした規則性にしがうだけの水準でなければ

ならない。だから工業労働者の平均賃金は単なる荷担ぎ人や日雇い労働者などよりは高い。そして農業労働者よりはことさら高い。この事実には、都市での生活必需品の費用が高めだというのも多少は貢献する。つまり労働者は、法的にも事実上も、財産保有階級の奴隷であり、実に見事に奴隷なので、財のかけらのように売り飛ばされ、商品のように価値が上下動する。労働者の需要が増えれば、労働者の価格は上がる。減れば、価格も下がる。あまりに下がって多数が売り物にならず、在庫として余れば、単に失業状態のままとなる。そしてそれでは暮らしていけないので、その労働者たちは餓死する。というのも経済学者たちの用語を使うなら、かれらを維持するためにかかる費用は再生産されず、無駄金となり、そんな目的のためには誰も資本を提供しないからだ。そして今のところ、マルサスの人口理論は完全に正しかった。古い露骨な奴隷制と比べて唯一のちがいは、今日の労働者は一回で売り切られることはなく、一日ごと、週ごと、年ごとに切り売りされることと、一人の所有者が別の所有者に労働者を売り渡すのではなく、当の労働者自身が自分をこうして売るよう強制され、ある特定の人物の奴隷になるのではなく、財産保有階級全体の奴隷になっていることのために、一見すると自由であるかのように見えるという点にある。この人物にとっては、根底の状態はまったく変わらず、この見せかけの自由が必然的にある程度は自由を与えてくれても、その一方ではだれもこの労働者の生存を保証してくれないという欠点がある。この労働者は主人であるブルジョワジーに、いつ何時追放され、ブルジョワジーがその雇用、その存在に興味を示さなくなったら、飢え死にするに任されてしまうという危険を被ることになる。これに対してブルジョワジーは、古い奴隷制を復活させるよりも、現状のほうがはるかに都合がいいことになる。投資資本を犠牲にすることなく、従業員に好きなときに暇を出せるし、奴隷労働の場合よりはるかに安く仕事をこなせるのだ。これはアダム・スミスが安堵させるように指摘した通りとなる<sup>\*3</sup>。

したがってまた、以下の主張でもアダム・スミスは完全に正しかったことになる。

「人間に対する需要は、他のどんな商品に対する需要とも同じく、人間の生産を必然的に調整し、それがあまりに遅すぎればそれを加速し、速すぎればそれを停める」

他のどんな商品の場合とも同じ！ 使える労働者が少なければ、価格、つまり賃金が上がり、労働者はもっと豊かになり、結婚が増え、子供もたくさん生まれ、生き延びて成人になる子も増え、やがて十分な数の労働者が確保される。使える労働者が多すぎたら、価格は下がり、貧困と飢餓とその結果である病気が生じ、「余剰人口」が排除される。そしていま挙げたスミスの提案をさらに進めたマルサスもまた、常に「余剰人口」があると主張した点で正しかった。つまりこの世には常に人が多すぎるというわけだ。唯一まちがっていたのは、多すぎるというのが、食料供給手段により維持できる数に比べて多すぎると主張した点だけだ。余剰人口はむしろ、労働者同士の競争から生み出されるもので、それによりそれぞれの個別労働者は毎日、体力がギリギリ許容する最大限まで働くよう強制さ

<sup>\*3</sup> アダム・スミス『国富論』第一巻、マカロック版を一巻にまとめたもの、第八部 p.36 「奴隷の摩耗損傷は、その主人の経費だが、自由な召使いの摩耗損傷はその当人の経費、と言われてきた。だが後者の摩耗損傷は、現実には、前者と同じくらいその主人の経費にもなる。あらゆる雇われ職人や召使いに対する賃金は、社会からの時に応じた需要の増減停滞にしがたい、雇われ職人や召使い相互の当人たちによる競争を可能にできるものでなければならない。だが自由な召使いの摩耗損傷はやはり主人の経費になるとはいえ、その支出は奴隷の場合よりはずっと少ないのが通例だ。奴隷の摩耗損傷を交換または修繕、と言っただけだが、その資金は通常は監督不行届な主人や不注意な監督官が負担する」 エンゲルス注

れるのだ。ある製造業者が十人を一日九時間雇えるなら、もし各労働者が一日十時間働けば雇うのは九人ですみ、十人目は飢える。そして、工員需要があまり大きくないときにクビにするぞと脅すことで、工員九人を同じ賃金で毎日一時間余計に働かせられるなら、十人目をクビにしてその分の賃金を節約できる。これが小規模に見たプロセスであり、国レベルではそれが大規模に起こる。労働者同士の競争による生産性の最大化、分業、機械導入、自然の力の従属で、大量の労働者はパンを奪われる。こうした飢える労働者たちは、すると市場から取り除かれ、何も変えず、そうした人々がこれまで消費していた量の物は、もはや生産される必要がなくなる。それを生産するためにこれまで雇われていた労働者たちは、したがって職を失い、これまた市場から除去され、これがどんどん続き、いつも同じ手順を繰り返す、というかもし状況がそこに介入しなければそれが続く。生産増加のために導入される工業力としてすでに述べたものを導入すると、やがて生産された品物の価格は下がり、結果としてその消費は増えるので、排除された労働者の相当部分は、長いこと苦悶したあげくやっと、再び職を見つける。もしこれに加え、外国市場の征服が絶えず急速に工業製品の需要を増やすなら（これはイングランドの場合過去六十年にわたり成立していた）工員の需要は高まり、それに応じて人口も増える。したがって、大英帝国の人口は減るどころか、激増を見せし、今だに増加が続いている。だが産業の拡大にもかかわらず、全体としての労働者に対する需要の増加にもかかわらず、あらゆる公式政党（トーリー党、ホイッグ党、前衛党）の告白によれば、持続的な余剰、余った人口が存在するのだ。労働者同士の競争のほうに常に、労働者を確保しようという競争よりも強いのだ。

なぜこのような不一致が起こるのか？ それは産業競争と、そこから生じる商業危機の性質によるものだ。現在のような生存手段の規制なき生産と分配手段は、必要品を供給するという直接の目的のためではなく利潤のために実施され、万人が自分自身を豊かにするべく自分だけのために働くという仕組みに基づいて行われるので、あらゆる瞬間にどうしても騒乱が生じてしまうのだ。たとえば、イングランドはきわめて多種多様な品物を多くの国に供給する。さて、製造業者はそれぞれの国で毎年それぞれの品物がどれだけ消費されているか知っているかもしれないが、ある時点でどれだけ在庫があるかは知り得ないし、まして競合他社がその国にどれだけ輸出しているかなど知りようがない。在庫量とその瞬間の必要量について、永続的な価格の変動から不確実な憶測を引き出せるだけだ。商品の輸出にはツキに頼らねばならない。すべてが盲目的に、当てずっぽうで、おおむね偶然に任せて行われている。ちょっとでも好意的な報告が入ると、みんな全力で輸出するようになり、やがてそうした市場はあふれてしまい、売り上げが停滞し、資本が遊休化して、価格が下がり、イングランド製造業者はもはや工員たちに雇用を提供できなくなる。製造業発展の当初には、こうした制限は個別の産業分野や個別市場に限られていた。だが競争の集中化傾向により、ある産業分野でクビになった労働力は手近な他の産業分野に流れ込み、ある市場で処分できない商品は別の市場に輸送できるようになったので、単一の小さな危機が以前より集中し、それらがまとめて起こることで、定期的に発生する危機となってきたのだ。こうした危機は通常、五年に一度くらいで繰り返され、短期の活動と全般的な繁栄の後で起こる。自国市場は、あらゆる外国市場と同様、イングランド製品であふれているが、市場はそれをゆっくりとしか吸収できず、工業活動はほとんどあらゆる部門で停止状態となり、投資資本が長いこと遊んでいては生き延びられない小製造業者や小商人は破綻し、大規模業者は最悪の時期には休業し、工場を閉鎖したり一日半分だけの操短な

どにより切り抜ける。賃金は失業者の競争と、労働時間の減少や利益の上がる売り上げ欠如のために下落する。労働者の中の欠乏が普遍的になり、個人が行ったわずかな貯蓄はすぐに消費され、慈善施設の負担は課題になり、貧困給付金は倍増、三倍増してもまだ不足で、餓死者の数は増え、「余剰」人口が実に大量に、目にも露わとなって登場する。これがしばらくは続く。「余剰」はできる限りのことをして生き延びるか、消え失せる。慈善と救貧法は多くの者を助けるが、その存在を痛々しいほど引き延ばすことになる。他の者は生存のわずかな手段をあちこちで見つけ、そしてその時に使われるのは、競争に最も開かれていないような仕事、製造業から最も遠い種類の仕事なのだ。そして、しばらくであれば人間というのは、実にわずかな物で心身を保てるものだ！ 次第に状況は改善する。財の蓄積は消費され、商業と製造業の人々の間の、全般的な不景気のおかげで市場があまり急速に補充されることはなく、ついにあらゆる方向から価格上昇と好況の報告が入ってきて、活動が復活する。ほとんどの市場は遠く離れている。最初の輸出品が到着している間は、需要も増え、価格も上がり続ける。人々は最初の商品を求めて争い、最初の販売が商売をさらに活気づけ、入荷見込み品はさらに高い値をつける。そしてもっと値上がりすると思っただ承認は、投機でその商品を買いはじめようになり、そうした商品が最も必要とされている時期に、それを消費から引き上げてしまう。投機は他の人にも購入をうながすことで、価格をさらに押し上げ、そしてすぐさま新しい輸入の確保が行われる。これらすべてがイングランドに伝えられ、製造業者は張り切って生産を始め、新しい工場が建てられ、この有利な瞬間を最大限に活用するためあらゆる手段が活用される。ここでも投機が生じ、外国市場と同じ影響をもたらし、価格はあがり、消費から財が引き上げられ、製造業があらゆる形で最大限に動くよう拍車をかける。それから、ありもしない資本を使う怖い物知らずの投機家たちがやってくる。この人々は借金で暮らしており、さっさと売りさばけなければ破産する。こうした人々が、この利潤を求める普遍的で無秩序な競争に身を投じ、そのまじりつけなしの情熱により、無秩序ぶりと慌てぶりを倍増させ、それが価格と生産をきちがいじみた水準に押し上げる。これは熱狂じみた闘争で、きわめて経験豊かで冷静沈着な人々でさえ浮き足立つ。商品が紡がれ、織られ、叩かれて、まるで全人類が新しく商品を買ひ、月面で二億人の新しい消費者が見つかったかのようにそれが続く。即座に外国の危うい投機家たちが、お金を手にしなければならないので売りをかける。しかもその必要性が緊急なので、市場価格以下で売り始めるのだ。売りが売りを呼び、物価は変動し、投機家たちは怯えて手持ちの商品を市場に流し、市場は無秩序になり、信用が揺らぎ、商店が次々と支払いを止め、倒産が連鎖し、ふたを開けてみると、消費できるより三倍も多い商品がすでにあるか、送られつつある。このニュースが、その間ずっと全力で生産を続けていたイングランドに到着すると、全員がパニックに襲われ、外国での破綻がイングランドでも破綻を呼び、パニックが多くの企業を潰し、あらゆる在庫が不安のあまりここでも市場で投げ売りされ、警鐘がさらに拡大することとなる。これが危機の始まりで、それは以前のものとまったく同じ道筋をたどり、その後また繁栄の季節に道を譲る。そしてこれが永遠に続く 繁栄、危機、繁栄、危機、そしてイングランドの産業が従うこの永遠の循環は、さっき見たように、通常は五年か六年で一巡する。

ここから、イングランドの製造業が最も好況時に市場の必要とする大量の商品を生産できるようになるためには、ごく短い繁栄の頂点を除いて、失業した労働者の予備軍を大量に確保しておく必要があるのは明らかだ。この予備軍は、市場の状態により労働者の中で雇う割合が大きい小さいかで、大きくも小さくもなる。そして市場の活動が最大の瞬間

に、農業地区や全般的な繁栄にほとんど影響されない産業分野が、一時的に工業に大量の数の労働者を供給するとしても、それは少数派でしかないし、そうした人々もまた予備軍に属する存在で、唯一のちがいはその関係性を明らかにするために、その瞬間の繁栄が必要だったということだけだ。彼らがもっと活発な仕事の分野に加わると、その旧雇用者たちは損失を減らすべく、失業者を多少は吸収し、労働時間を増やし、女性や若者労働者を雇う。だから危機の始まりで放浪労働者たちがクビになって戻ってくると、かつての職場はすでに他の人が働いていて、自分たちは不要だということになる。少なくとも大半の場合にはそうなる。この予備軍は、危機の際にはすさまじい大群となるし、繁栄の頂点と危機の間で平均とみられる時期でもかなり多数になるが、イングランドにおける「余剰人口」であり、乞食や泥棒、街路清掃、糞集め、荷車押し、ロバ御者、行商、臨時のちょっとした仕事などで心身を維持している。どんな大都市にも、こうした人々が大量に見つかる。この「余剰人口」が糊口をしのぐための活動は驚異的だ。ロンドン交差点の清掃人は、世界中で知られている。だがこれまで大都市の主要街路は、主要交差点と同じく、他の仕事につけない人々が清掃しており、この目的のために救貧法の監督官たちや自治体当局が雇っていた人々が行っていたのだ。だがいまや、毎日街路をガタガタと走る機械が発明されたので、失業者にとってのこうした収入源は奪われてしまった。都市へと続く大街道で、大量の馬車が通る道には、小さな荷車を持った人々がたくさん見られる。かれらは通り過ぎる馬車や乗合馬車の間で命をかけて新鮮な馬糞を集めており、しばしばその権利のため当局に週あたり数シリングずつ払っている。だがこの職業は多くの場所で禁止されている。というのもこれをやられると通常の通常の街路清掃の産物が乏しくなり、もはや糞として売れなくなるからだ。手押し車を手に入れて、こうした職につける「余剰」はなんと幸せなことか。荷車に加えてロバを与えられている人々はなおさら幸せだ。ロバは自分で食べ物を得たり、集めたゴミの一部を与えたりすればいいし、それでもちょっとした収入をもたらす。

ほとんどの「余剰」は行商に手を染める。特に土曜の午後、労働人口すべてが通りに繰り出しているとき、行商や露天商として生計を立てる群衆が見られる。靴やコルセットのレース、ズボンつり、ひも、ケーキ、オレンジ、ありとあらゆる小物が、男、女、子供により販売されている。そして他のときでも、こうした行商人はいつも街角に立っていたり、ケーキやショウガビールやイラクサビール<sup>\*4</sup>を持ってうろついているのが見られる。マッチなどの小物、封蝋、特許調合の着火剤などがこうした行商人のさらなる販売品だ。他に仕事屋とよばれる人々は通りをうろついでちょっとした仕事を探す。多くはその日の仕事にあるつけるが、それほど幸運でない者も多い。

イーストエンドの牧師、W. チャンプニース師によれば「[ロンドンの] 波止場の門それぞれのところには、何百人もの貧しい男たちが夜明け前に集まって、門が開くのを待っています。その日の仕事を得られないかと期待しているのです。そして最も若く、最も体力のある、最も有名な者たちが雇われたあとも、何百人もが残されて、絶望しきった家族の元に戻ろうとしています。潰された希望からくる、胸の悪さを抱えつつ」

<sup>\*4</sup> どちらも清涼発泡飲料で、前者は水と砂糖、ショウガでできており、後者は水、砂糖、イラクサで作る。労働者たちはこれが大好きで、特に絶対禁酒主義者はこれがお気に入りだ。 エンゲルス注

こうした人々が何の仕事も見つけれず社会に反逆もしないなら、乞食になる以外に何が残されているだろう？ そして当然ながら、警察と果てしない戦いを繰り広げる、頑強な体を持つ物がほとんどの乞食の大群をだれが不思議に思えるだろうか。でもこうした人々の乞食活動には特異な性格がある。こうした人々は通常自分の家族とともに、通行人の博愛精神に訴えるような懇願の歌を歌ったり、演説の形でそれに訴えかけたりしているのだ。そして、こうした乞食がほとんど労働者地区にしか見られず、彼らが生き延びるのはほとんどが貧困者からの贈り物のおかげだというのも衝撃的な事実だ。あるいは一家は人通りの多い通りに陣取り、何も言わずに、その無力な様子だけが懇願の仕事を行うようにする。この場合にも、一同は他の労働者の同情だけをあてにする。他の労働者も、腹を空かすのがどんな気分かを体験から知っており、いつ何時自分も同じ立場になりかねないのを知っているのだ。というのも、この物言わぬが最も心動かす訴えは、労働者が頻繁に行き交う通りにしか見られず、しかも労働者が行き交う時間にだけ見られるのだ。だが特に夏の晩、労働者地区の「秘密」が一般にもわかるようになり（訳注：悪臭が最高潮になるということ）、中産階級がこうした汚染地区からできるだけ離れる時期にこれが顕著だ。そして「余剰」の中でも公然と社会に抵抗するだけの勇気と情熱を持つ者、ブルジョワジーが仕掛ける偽装戦争に対して、公然と戦争で返答できる者たちは、さらに泥棒、強盗、殺人、放火に向かう！

この余剰人口のうち、救貧法委員会の各種報告によると、平均でイングランドとウェールズには150万人がいる。スコットランドでは、救貧法規制がないために、その数がはっきりせず、アイルランドについては別に扱おう。さらにこの150万人は、教区に救済を求めて実際に応募してきた人だけだ。この毛嫌いされている手法の助けを求めずに苦闘している大多数の人々は含まれていない。一方、この数字の相当部分は農業地区のもので、ここでの議論には関係しない。危機の最中にはもちろんこの数字は激増するし、欠乏ぶりも最高潮に達する。たとえば、1842年の危機を見てみよう。これは直近のものだったので、最も激しいものでもあった。というのも危機の強度は一巡するごとに高まるからで、次の危機は、1847年までには起こると予想されるが、おそらくさらにもっと激しく長続きすると思われる。この危機の間、あらゆる町の貧困補助金は空前の規模に達した。ストックポートでは、他の町の中でも、家賃として支払われる1ポンドにつき、貧困補助金が8シリング（0.4ポンド）が支払われねばならず、その率だけでも家賃の40パーセントになったわけだ。さらに通りがまるごと空き家になっていることもあり、したがって住民数も通常より少なくとも二万人は少なかったため、空き家の戸口にかけた看板には「ストックポート町全体が空き家」と書いてあってもいいくらいだ。ボルトンでは、例年であれば救貧補助金の原資となる家賃収入は86000ポンドあるが、このときには36000ポンドまで下がった。これに対し、救済されるべき貧困者の数は14000人に増えたが、これは総住民の20パーセント以上を占める。リーズでは、救貧法監督官たちは予備基金として1万ポンドを用意していた。これは、追加歳入の7千ポンドとあわせて、危機が絶頂に達する前に完全に使い果たされてしまった。つまりどこでもそんな具合だったのだ。1842年の工業地区の状態について、反穀物法連盟の委員会が1845年1月に書き上げた報告は、製造業者の詳細な証言に基づくものだが、貧困手当は平均で見ても、1839年の倍にはなっていたという。そして救済を必要とした人数はその間に三倍、いや四倍になったという。そして申請者の多くは、それまで決して救済金を申請したことなどない階級に属していた。労働階級は1834-1836年の生存に必要な金額に比べ、三分の二も少ない金額でやりくりし

ている。肉の消費は目に見えて減り、ときには20パーセントも減ったり、場所によっては60パーセントも減ったりしている。そして手工芸職人、鍛冶屋、煉瓦職人など、通常は不況のどん底でも完全雇用の者たちが、いまや仕事不足と賃金低下で大いに苦しんでいた。そして1845年1月現在ですら、賃金はまだ下がる一方だったという。そしてこれが製造業者の報告書なのだ！

飢えた労働者は、工場が稼働せず、雇い主も仕事を与えることができないので、ありとあらゆる通りにたつて、一人ずつあるいは群れをなして物乞いをし、大群で歩道を占領して、通行人に助けを求めて訴えかける。物乞いをしたが、通常の乞食のようにおずおずとはなく、数をたのみに身振りと言葉で脅しをかけるのだ。レスターからリーズ、マンチェスターからパーミンガムまで、工業地域のすべてではこうした状態だった。あちこちで騒動が起た。たとえば7月に起きたスタフォードシャーの陶器工場の騒動などのように。きわめて恐ろしい興奮状態が労働者を捕らえていたが、八月には工業地域全域で全般的な蜂起が生じた。ぼくが1842年にマンチェスターにやってきたときには、あらゆる街角に失業労働者の群衆が見られた。そしてあらゆる工場は相変わらず稼働していなかった。その後数ヶ月で、こうした意図せざる街角の浮浪者たちはだんだん消え、工場は再び稼働を開始した。

危機の間にこうした失業者の間でどれくらい欠乏と苦しみが広がっているのかは、ぼくが記述するまでもない。貧困補助金は不十分、すさまじく不十分だ。金持ちの慈善はど大海の一滴でしかなく、一瞬のうちに消え失せる。乞食は群衆の中でほんの数人しか支えられない。こうした時期に、小規模商店が労働者に対してツケでできる限り長い間販売しなければ、その後でかなり好き勝手に懐に入れておいておかねばならないが、そして労働者たちが助けあわなければ、危機ごとに大量の余剰たちが餓死で消え去ることだろう。だが、不景気のどん底は短期で、最悪でも一年、二年、二年半しか続かないので、ほとんどの労働者はかなりの貧窮はしても生きてそれを切り抜ける。だが病気などを通じて間接的に、あらゆる危機は大量の被害者を生み出す。それはこれから見よう。だがまずは、イングランドの労働者が直面している窮乏の別の原因を見ることにしよう。この原因は、全労働者階級を引きずり下ろすのに絶えず作用し続けている原因なのだ。



## 第4章

# アイルランド人移民

原文：<http://bit.ly/N0kw4e>

すでに行きがけの駄賃で、イングランドに移住してきたアイルランド人には何度か触れている。そしてここでは、その移民の原因と結果についてもっと詳しく見よう。

イングランド産業の急拡大は、イングランドがすぐに使える予備軍として、無数の貧窮したアイルランドの人々を擁していなければ不可能だったであろう。アイルランド人は、故郷では何一つ失うものはなく、イングランドでは大いに得るものがある。そしてアイルランドで、セントジョージ海峡の東側では強い腕に対して安定した職とよい賃金を提供することが知られるようになってから、毎年のようにアイルランド人の大群がこちらにやってくる。計算によれば、すでに百万人以上が移民してきており、毎年いまだに五万人近くがやってくるという。そのほとんどすべてが工業地区、特に大都市に入り、そしてそこで最底辺の人口を形成する。したがってロンドンには12万人、マンチェスターには4万人、リバプールには3万4千人、ブリストルは2万4千、グラスゴー4万、エジンバラ2万9千人の貧しいアイルランド人がいる<sup>\*1</sup>。こうした人々はほとんど文明を知らずに育ち、若い頃からありとあらゆる貧困になれており、粗野で短気で軽率であり、その野蛮な習慣をすべて携えてくるのだが、それがやってくる先のイングランド人口というのも実は教育や道徳性を涵養するような指導はほとんど受けていない。この問題についてトマス・カーライルの話を聞こう<sup>\*2</sup>：

「荒々しいミレー族<sup>\*3</sup>の顔つきが、偽の誠実さ、落ち着きのなさ、理性の欠如、悲惨、嘲笑をこめて、あらゆる道路や側道で迎える。イングランド人の御者は疾走する際にミレー族を鞭打ち、舌で罵倒する。ミレー族は帽子を差し出して物乞いをする。この連中は、この国が苦闘しなければならない最も悪質な邪悪なのである。連中はボロをまといゲラゲラ笑う野蛮さをもって、単なる手と背中が強さだけでできる仕事をすべて行うためにそこにいる。賃金はジャガイモが買えるだけでいい。味付けには塩だけでよく、住処はどんな豚小屋でも犬小屋でも構わず、外便所で眠り、まとうはボロのスーツで、それを脱ぐのは難しい作業であり、お祭りの際や満潮時にしか行われぬ。サクソン人は、こうした条件で働けないのであればまった

\*1 アーチバルド・アリソン 『人口の原理と人間幸福との関係』全二巻、1840年。このアリソンはフランス革命史の研究者で、兄のW・P・アリソンと同様に、熱狂的なトーリー党員だ。 エンゲルス注

\*2 カーライル 『チャーチスト主義』pp.28, 31, 他 エンゲルス注

\*3 ミレー族：アイルランドのケルト族王の古い一族の名前 エンゲルス注

く仕事にありつけない。文明化されていないアイルランド人は、強さによるのではなく、強さの正反対のものにより、土着サクソン人を追い出して、その場所を占領する。アイルランド人は、そのむさ苦しさとは非理性の中、その虚偽性と飲んだくれの暴力の中、退行と無秩序の出来合の核として安住しているのである。苦闘しつつ、浮き世を泳ぎ続けるのに苦勞している人はだれしも、人間というものが泳ぎ続けずとも、沈没して存在することもできるという見本をここに見いだすだろう。(中略) イングランド労働者の下層大衆がますますアイルランド人の状態と似てきて、あらゆる市場で彼らと競争しているということ、ほとんど技能なしに単なるバカ力で済むような仕事は、イングランド価格で実施されることはまったくなく、アイルランド価格に近づくということ、いまはアイルランド人の価格より高い、つまり年に三十週にわたりジャガイモの希少性よりは高い価格になっているが、高いとはいえ、一時間ごとに新しい蒸気船が到着すると、ますますアイルランド人の賃金水準近くに沈んで行くのだ」

アイルランド人国民性の誇張された一方的な糾弾を度外視するなら、カーライルはまったくもって正しい。4ペンス硬貨一枚でイングランドに移住してくるこうしたアイルランド人は、家畜のように詰め込まれた蒸気船の甲板に乗ってやってきて、いたるところに侵入する。かれらには最悪の住宅でも十分だ。服は糸一本でつなぎあわされている限り、かれらにはどうでもいい。靴など知らない。食事はジャガイモで、ジャガイモのみ。こうした必需品以上に稼いだら、すべて飲んでしまう。こんな人種が、高賃金などほしがるものだろうか？ 大都市の最悪の地区はアイルランド人が住んでいる。ある地区が、ことさら汚く異様に荒廃していると思えるなら、探索者はまちがいなくそこでケルト系の顔に出くわす。それは土着のサクソン人相とは一見して異なるものだ。そして顔だけでなく、真のアイルランド人が決して失わない、歌うような破裂音のアイルランド訛りも聞こえるはずだ。ぼくはときどき、アイルランド＝ケルト語がマンチェスターの最も高密居住地区で語られるのを聞いた。地下室で済む家族の大半は、ほとんどどこでもアイルランド出身だ。要するに、アイルランド人は、ケイ医師が言うように、人生の必需品の最低線を発見したのであり、いまやイングランドの労働者をそれになじませているのだ。汚物と泥酔もまたアイルランド人が持ち込んだ。清潔さの欠如は、人口が希薄な田舎では大した被害をもたらさないのがアイルランド人の第二の天性になっているが、ここでの大都市集中により、恐るべききわめて危険なものとなっている。ミレー族はイングランドで、故郷で慣れ親しんだやり方通りに、あらゆるゴミや汚物を玄関の前に捨てるので、水たまりや汚物の山がたまって労働者地区を醜悪化し、空気を有毒にしている。故郷でやったのと同様に家の壁沿いにブタ囲いを作り、それを禁止されると、ブタを部屋の中でいっしょに眠らせるのだ。この目新しく不自然な都市部における家畜飼育手法は、完全にアイルランド起源だ。アイルランド人がブタを愛するのは、アラブ人が馬を愛するのと同じで、ちがいはブタのほうは、屠殺に十分なほど肥えたら売り飛ばされるということだ。それまでは、アイルランド人はブタと寝食を共にし、子供もブタと遊び、ブタに乗り、一緒に泥にまみれるのは、イングランドのあらゆる大都市で何度も見られる通りだ。その家屋自体の中に満ちた汚物と不快さは筆舌に尽くしがたい。アイルランド人は家具の存在に慣れていない。わらの山、衣服になどまったく使えないわずかなボロが、夜の寝床としては十分だ。木ぎれ、壊れた椅子、テーブル代わりの古い物入れ以上のものは必要ない。やかん、鍋や皿がいく

つかで台所はすべてであり、そこが寝室でもあり居間でもある。燃料が欲しければ、手当たり次第に燃えるものすべて、椅子も戸口も釘打ちのさんも床板も使われて、煙突から煙となって消える。さらに、どうせ空間など大して要るまい？ 故郷の泥小屋ではあらゆる家族用途に一室ですんだ。イングランドでも、世帯一室以上は要るまい。だから一部屋に大人数を押し込むという、いまや実に普遍的になった習慣は、主にアイルランド移民により持ち込まれたのだ。そしてあわれな連中どもといえど一つくらいは楽しみが必要だし、社会は他のあらゆる娯楽を拒絶しているので、アイルランド人は酒飲みへと向かう。アイルランド人の人生は、酒なしでは無価値であり、酒と何も気にしない気性があればいい。そこでアイルランド人はひたすら飲んで、すさまじく獣めいた飲んだくれぶりを示す。アイルランド人の南方的な軽薄さ、その野蛮人とほとんど変わらない粗野さ、あらゆる人間の楽しみに対する軽視（まさに粗野であるために、そうした楽しみに参加できないのだ）汚さと貧困は、すべて泥酔に向かわせるものだ。誘惑は大きいし、アイルランド人はそれに抵抗できず、したがってお金があれば、それを喉に流し込んでしまう。他にどうしようもあるまい？ 社会はアイルランド人を、飲んだくれにならずにはいられない状況に置いているのだから、飲んだくれるアイルランド人を責めるわけには行かないまい？ アイルランド人を放置して、その野蛮ぶりに任せているのだから。

イングランドの労働者はこのような競争相手に対して苦闘を迫られている。その競争相手は、文明国において最低どん底の水準にあり、まさにその理由から、他のだれよりも低い賃金しか要求しないのだ。したがって、イングランドの労働者の賃金は、アイルランド人が競合するあらゆる産業分野で、ますます低く低くならざるを得ない。そして、そうした産業はきわめて多数ある。技能をまったく、ほとんど必要としない産業はすべてアイルランド人に開かれている。長い訓練や、規則的で辛抱強い作業が必要な仕事には、自堕落で不安定で飲んだくれたアイルランド人は低い水準にありすぎる。機械工や工員になるためには、イングランド文明やイングランドの習慣を採用し、基本的にイングランド人になるしかない。だが単純でそれほど厳密でない仕事だと、技能よりも力が必要な場面だと、アイルランド人もイングランド人も変わらない。したがってこうした職業は特にアイルランド人であふれているのだ。手織り人、煉瓦職人、荷担ぎ、臨時雇いなどの労働者には、無数のアイルランド人がいて、この人種からの圧力は賃金を引き下げて労働階級を貶めるのに大きく貢献した。そして他の職業にも入り込んだアイルランド人がもっと文明的になったとしても、古い習慣はかなり残るので、重労働するイングランド人労働者仲間に対しては強い劣化するような影響が及ぼされる。特にアイルランド人に囲まれている場合にはそうなるだろう。というのもほとんどあらゆる大都市で、労働者の五分の一から四分の一がアイルランド系なら、あるいはまわりがアイルランド人の親を持つ子供で、アイルランドの汚物の中で育ってきたら、人生も習慣も知性も道徳状態も 　つまりは労働階級の性質すべてが、かなりアイルランドの特徴を持つようになるのは必定だからだ。それどころか、現代史とその直接の影響が生み出した労働者階級の地位劣化が、アイルランド人の競合の存在によりさらに劣化していることは容易に理解できる。



## 第5章

# 結果

原文：<http://bit.ly/1mtU4v0>

いまや、かなり詳細にイングランドの労働階級がどんな条件で暮らしているかを検討してきたので、提示された事実をもとに、さらなる洞察を行って、その洞察を実際の物事の状態と比べてみる頃合いとなった。そうした状況において労働者自身がどうなったかを見てみよう。かれらはどんな人々で、その物理的、精神的、道徳的な状態がどんなものだろうか。

ある個人が別の個人に身体的な怪我を負わせて死亡が生じたら、その行為は故殺（訳注：事故やカッとなった計画性のない殺人）と呼ばれる。下手人が事前にその怪我が致命的になると知っていたら、これは謀殺（訳注：殺す意図を持った殺人）と呼ばれる。だが社会が<sup>\*1</sup>何百人ものプロレタリアを、必然的に早すぎる不自然な死に直面するような立場に置き、その死が剣や銃弾によるものに負けず劣らず暴力によるものであるなら、何千人もの人々から生活必需品を奪い、暮らせないような条件下に置いたら、法の強い腕を通じて、必然的な結果として死が生じるような状況にとどまるよう強制するなら、そうした何千もの被害者が死滅するのを確実に知っており、それでもそうした条件が続くのを容認するのであれば、ある個人の死と同じくらい、その行為もまた殺人なのである。それも偽装された悪意ある殺人で、だれも身を守れない殺人であり、殺人には見えない殺人だ。だれも殺人者を見ることはなく、被害者の死は自然のものに思え、罪状は何かをしたことではなく、何もしなかったことなのだ。だがそれでも殺人にはちがいない。ここでぼくは、イングランドの社会が日々、毎時間ごとに、労働者の器官に対して完璧な精度をもって、行っているのが社会殺人であるということ、それが労働者を、健康維持も長寿も不可

<sup>\*1</sup> ここでも他の部分でも、ぼくが社会について責任力のある全体として語り、権利や義務を持つと言うとき、それはもちろん社会の支配力、現在社会政治的なコントロール力を持っている階級を指している。したがってそういう階級は、そういうコントロール力をまったく与えられていない人々の状態に対して責任を負うのだ。イングランドにおけるこの支配階級は、他のあらゆる文明国と同じく、ブルジョワジーだ。だがこの社会、特にブルジョワジーが、あらゆる社会の成員を保護し、少なくとも自分の存命中はだれも餓死しないといった義務を負っているということは、いまぼくが我がドイツ人の読者に証明する必要のないことだ。もしぼくがイングランドのブルジョワジー向けに書いているなら、話はちがってくる。 エンゲルス注、1845年ドイツ語版。

そしていまやドイツでもそうだった。ぼくたちドイツの資本家たちも、1886年という御代において、少なくともこの点ではイングランドの水準に完全に追いついた。1887年アメリカ版にエンゲルス加筆。(1892) 過去50年で事態は何と変わったことだろう！ いまや社会が個々の市民に対して義務を負うと認識するイングランドの中産階級がいるようになった。だがドイツの中産階級ときたら！？ 1892年ドイツ語版にエンゲルスが加筆。

能な状態に置いているということ、そしてそれがこうした動労社の生気をだんだん、少しずつ低下させて、やがてあまりに早く、寿命以前に墓場へと急がせるのだということを示そう。さらに、社会はそうした状態が労働者の健康と生命にとっていかに有害かを知っており、それなのにその改善のために何もしないということを証明しよう。社会がその行いの結果を知っているのだと示そう。したがってその社会の行動は、単なる故殺ではなく殺人だということを証明するのだ。公式の文書や、議会や政府の公式文書を糾弾の裏付けとして示すことで、ぼくはそれが証明できるのだ。

すでに述べたような条件下で暮らす階級は、生存にギリギリ必要な手段ですら十分に得られて織らず、したがって健康になれず、高齢に達することなどできないというのは自明だ。その状況を今一度振り返り、特に労働者の健康に注意しよう。大都市への人口集中は、それ自体が不利な影響をもたらす。ロンドンの大気は田舎の空気ほど純粋で酸素が豊かなものには決してなれない。250万対の肺、250万の炎が、3-4マイル四方(23-40平方キロほど)の面積に密集していれば、すさまじい酸素を消費するし、それを更新するのも、都市建築手法自体が換気を阻害するので困難となる。吐気と炎が生み出す炭素酸ガスは、それが固有の重さを持つために通りにとどまって、主要な気流は都市の屋根の上を通り過ぎてしまう。住民たちの肺は、必要な酸素供給を受けられず、結果として精神的肉体的倦怠感と低活力が生じる。この理由から都市住民たちは、通常の自由な空気に住む地方部住民に比べ、はるかに急性の特に炎症性の疾患にはかかりにくい。でも慢性の疾患は都市住民のほうが多いのだ。そして大都市の生活が、それ自体として健康に有害であるなら、労働者地区の異常な大気の影響はいかに大きいことだろう。そこではこれまで見たように、すべてが組み合わさって大気を有毒にしているのだから。田舎でなら、住処の隣に糞の山があっても比較的無害かもしれない。というのも空気は四方八方から自由に往き来できるからだ。でも大都市のさなかでは、大気のあらゆる動きを閉ざしてしまう、建物の密集した小道や中庭だと、話はちがう。腐敗する野菜や動物の肉はすべて、明らかに健康に有害な気体を発するし、その気体が自由に逃れる道がなければ、必然的にそれが大気を汚染することになる。したがって、大都市の労働者地区にある汚物や淀んだ水たまりは、まさに病気を宿すような気体を生み出すので、公衆保健に最悪の影響を及ぼす。汚染された流れからの気体もそうだ。だがどう見ても、これだけでは済まない。貧困者の大群が今日社会に扱われているやり方は嫌悪を催すものだ。労働者は大都市に引き込まれ、そこで田舎より劣った大気を呼吸する。建設手法のおかげで、他のどこよりも換気の悪い地区に追いやられる。あらゆる清潔さの手段を奪われ、水そのものもない。水道管は支払いをしないと敷設されないし、川はあまりに汚染されていて洗濯掃除には使えないからだ。かれらはあらゆる排泄物をゴミに放り込み、あらゆる汚水、しばしばあらゆる醜悪な下水や排泄物を通りに捨てる。他にそれを処分する方法がないからだ。このように彼らは、自分自身が住む地域を感染させるしかなくなる。それだけでは済まない。貧困者の頭には考えられるあらゆる邪悪が積み上げられる。大都市の人口が全般に高密過ぎるなら、特に最小の空間に詰め込まれるのは貧困者なのだ。まるで街路の劣悪な大気だけでは不十分だとでも言うように、貧困者は1ダース単位で一室に詰め込まれ、おかげでかれらが夜に呼吸する空気だけでも窒息させるに十分なほどだ。湿った居室を与えられ、地下からの防水もない地下室や、雨漏りする屋根裏に入れられる。家の作りのため、じめじめした空気は逃げられない。ひどい、ボロボロの、腐った衣服を与えられ、混ぜ物入りの消化不能な食物しか得られない。きわめて極度の精神状態変化に直面し、希望と恐怖の間で最も激しい変動を

味わう。獲物のように狩り立てられ、心の平温や人生の静かな享受も許されない。性的な耽溺と泥酔以外のあらゆる楽しみを奪われていて、毎日完全に精神と身体の活力がなくなるまで働かされ、したがって自分が左右できるたった二つの娯楽を、狂ったような過剰にまで推し進めるよう強いられている。そしてこれらすべてを切り抜けても、危機時には失業の犠牲となり、それまで与えられてきたわずかなものも奪われてしまうのだ。

こんな状況で、下層階級が健康長寿になれるはずがあるだろうか？ 過剰な死亡率、絶え間ない疫病の連続、身体の漸進的な劣化以外に、労働人口に何が期待できるだろうか？

事実がどうなっているかを検討してみよう。

都市の最悪部分にいる労働者の住まいは、この階級の他の生活条件と相まって、無数の病気を生み出す。これはあらゆる方面から裏付けられている。『アルチザン』からすでに引用した記事は完全な真実性を持って、肺病がそうした条件の不可避な結果なのだと主張している。そして、この種の症例がこの階級においては異様に多いということも述べている。さらにロンドンのひどい空気、特に労働者地区におけるひどい空気は、肺結核の発達にきわめて有利なものであり、その患者が大量にひっきりなしに生じているという事実が十分にそれを示している。早朝に、大群が仕事に向かうときに街路をうろつけば、完全にまたは半ば肺病病みのように見える人がいかに多いか驚くことだろう。マンチェスターですら、人々はこんな様子はしていない。青白く、ひよろひよろして、胸板の薄い、うつろな目をした幽霊たちが、一步ごとに脇を通り過ぎる。この物憂げな、たるんだ顔、活力ある表情などまったく不可能な人々がこのように驚愕するほど大量にいるのを見たのは、このぼくですらロンドンだけだ。とはいっても、肺結核は北部の工場都市からも毎年大量の被害者を奪い去ってはいるのだが。肺結核と張り合っているのがチフスであり、さらに猩紅熱という労働階級の人々にきわめて恐ろしい惨事をもたらす病気は言うに及ばず。チフスは到るところに広がった病気で、労働者階級の衛生状態に関する公式報告では、住宅の換気、排水、清潔さの状態がひどい点が直接の原因とされている。この報告は、医師たちの証言をもとに、イングランド最先端の医師たちがまとめたものでだが、それは換気の悪い中庭一つ、排水のない行き止まりの路地一つだけでも熱病を生み出すには十分であり、そして通常は特にもし住民たちがきわめて混み合っているなら、確実に熱病が生み出されると主張していることをお忘れなく。この熱はほとんどどこでも同じ性質を持ち、ほとんどあらゆる症例で他ならぬチフスへと発展する。これは、あらゆる大きな町は都市の労働者地区で見つかるものであり、また小さな都市でも建て方の悪い管理のできていない独立の通りでも見られるが、もちろんもっとよい地区でも個別の被害者が出ることはある。ロンドンではすでに、これがずいぶん長いこと広がっている。1837年にそれが大流行したときに、すでに言及した報告が発表された。ロンドン熱病医院のサウスウッド・スミス医師の年次報告によると、1843年の患者数は1,462人、前年に比べて418人増えたという。ロンドンの北部、南部、東部地区の湿った汚い地域では、この病気は突出して猛威をふるった。多くの患者は田舎からの労働者で、移住にあたり最も厳しい欠乏に耐え、到着後は腹をすかし半裸のまま街路で眠り、そして熱病の被害にあったのだ。こうした人々は病院にかつぎこまれたときにはあまりに衰弱しており、その治療のためにはきわめて多量のワイン、コニャック、アンモニア溶液などの刺激剤が必要となった。患者のうち16½パーセントは死んだ。この悪性の熱病はマンチェスターでも見つかる。旧市街、アンコート、リトルアイルランドなどの最悪の地区に見られるのだ。そして根絶されることは滅多にない。とはいえ、このマンチェスターでは、他のイングランドの都市全般と同様

に、予想ほどは流行していない。一方、スコットランドとアイルランドではあらゆる予想を上回るほどの猛威で流行する。エジンバラとグラスゴーでは1817年の飢餓後に勃発し、その後商業危機の後の1826年と1837年にことさら猛烈に流行し、三年ほど続いたから多少落ち着いた。エジンバラでは1817年の流行で六千人ほどが倒れ、1837年には一万人ほどだし、繰り返すごとに病気の激しさも高まっている\*2。

だがそれまでの時期すべてにおけるこの疫病の勢いなど、1842年危機以後の猛攻に比べたら兎戯に等しい。スコットランドの土着人口の六分の一がこの熱病にかかり、その感染は放浪乞食により恐るべき勢いで、地方から地方へと広がった。人口のうち中上流階級には到達しなかったが、二ヶ月のうちにそれまでの十二年をあわせた以上の患者が発生した。グラスゴーでは1843年に人口の12パーセントが罹患した。五万二千人で、そのうち32パーセントが死亡したが、マンチェスターとリバプールではこの致死率は通常は8パーセントを超えない。病気は7日目と15日目に危機を迎える。15日目に患者は通常黄色くなり、当局はこれを、この熱病の原因が精神的な興奮と不安だという証拠だと考えた\*3。アイルランドでも、この熱病は根付いた。1817-1818年の21ヶ月にわたり、ダブリン病院には39000人の患者が運びこまれた。そしてもっと最近では、アリソン州シェリフによると、六万人が運び込まれたという\*4。ヨークでは熱病病院は1817-1818年に人口の七分の一を、リメリックは同時期に四分の一を、そしてウォーターフォードのひどい地区では、全人口の20分の19が、いつかの時点でこの熱病にかかった\*5。

労働者がどんな条件下で暮らしているかを思い出せば、その住居が以下に混み合っているか、あらゆる隅やすき間が人間であふれているかを考えれば、健康な者も病人も同じ部屋や同じベッドで寝ることを考えれば、この熱病のような伝染病がもっと広がらないほうが不思議だ。そして病人がいかに医療支援をほとんど得られないかを考えると、まったく医学的な助言など得られない人がいかに多いかを考えると、そしてみんなきわめて通常の予防手段すらまったく無知なことを考えると、いまの致死率は少ないくらいに思える。この病気の慎重な調査をしたアリソン医師は、すでに引用した報告の中で、この病気の直接の原因が貧困者の欠乏とひどい状態だと述べている。必需ニーズの欠乏と満足度の不足が、感染の下地を作り、疫病の範囲も広げるし強度も高めてしまうのだという。欠乏期や商業危機や不作が起こるたびに、アイルランドでもスコットランドでもチフス流行が生じ、その疫病の被害はほぼすべて労働階級にふりかかったことを証明しているのだ。アリソン医師の証言によると、チフスで死亡する人の大半は世帯の父親で、まさに扶養している家族からすれば最も失ってはならない存在だ。そして引用されているアイルランドの医師数名も同じ証言をしている。

別の種類に属する病気群は、労働者の住居ではなく食事から直接生じている。労働者の食事は、それ自体としてかなり消化不可能な代物だが、幼い子どもにはまったく向かないものであり、労働者は子供たちにもっと適切な食事を用意するだけの資金も時間もないのだ。さらに子供たちに酒や、アヘンすら飲ませたりする習慣がきわめて広まっている。そしてこの二つの影響は、身体発達を阻害する生活の他の条件と相まって、消化器官にきわ

\*2 アリソン医師『スコットランドにおける貧困者の管理』 エンゲルス注

\*3 アリソン医師、イングランド科学進歩協会の前で読んだ論文、1844年10月、ヨークにて エンゲルス注

\*4 アリソン『人口の原理』vol. ii. 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

\*5 アリソン医師『スコットランドにおける貧困者の管理』 エンゲルス注

めて広範な影響を与え、生涯にわたる痕跡を残してしまう。労働者はほとんど全員がかなり弱い胃腸をしており、それなのに諸悪の根源たる食事しかとれないよう強制されている。それが誰のせいなのか、労働者たちに知りようがあるだろうか？ そして知っていたとしても、他の生活方法を採用できず、もっとよい教育を受けない限り、もっとふさわしい食生活など採用できようか？ だが消化不良のため、子どもの頃に新しい病気が生じる。労働階級はほぼ全員が瘰癧を持っているし、瘰癧持ちの親は瘰癧持ちの子どもを持つ。これは子供たちの遺伝性向に対して当初の影響が全力で及ぶ場合にはなおさらだ。この不十分な身体的滋養が成長発達期に与える第二の結果はクル病だ。これは労働階級の子供たちできわめてよく見られる。骨の硬化が遅れ、骨格の発達が全体に制約されるし、通常のクル病の症状に加えて、脚や脊椎の奇形が頻発する。商業変動、失業、危機時の低賃金の結果として労働者がさらされる変化が、こうした邪悪をどこまで増大させたか、などということを考える必要はない。ほとんどの労働者が、生涯に少なくとも一度は曝される十分な食事の欠如は、通常の食事が量的には十分でも栄養的には悪いという効果に拍車をかけるだけだ。まさにたっぴりと影響の高い食事を必要とする時期に、飢えかけている子どもは、そしてあらゆる危機時や、商売が最高潮のときですら、そうした子どもはどれほど多いことか、必然的に虚弱になり、瘰癧やクル病にかかることになる。そして実際にそうなっているのは、その外見を見ればわかる。労働者の子供たちの大半が遭っているネグレクトは、抜きがたい痕跡を残して、労働者の人種丸ごとの虚弱化をもたらす。そこにこの階級の不適切な衣服や、寒さ防止の不可能生、健康が許す限りの重労働の必要性、病気になるとなおさら高まる欠乏、そしてあまりに多い医療支援の欠如を加えてみよう。するとイングランドの労働階級の衛生状態について、だいたい感じがつかめる。個別の職業に特有の傷害をもたらす影響については、ここでは扱わない。

これらに加えて、多くの労働者の健康を弱らせる他の影響もあり、その最たるものが暴飲だ。考えられるあらゆる誘惑、あらゆる蠱惑が、組み合わせさせて労働者を泥酔へと導く。酒はかれらのほとんど唯一の楽しみであり、あらゆるものが結託してそれを労働者に提供しやすくする。労働者は仕事から疲れてくたくたで帰ってくるが、家はまったく快適ではなく、湿気て、汚く、嫌悪を催す。娯楽がどうしても必要であり、仕事をした見返りが必要であり、翌日の見通しが我慢できるものになるための何かが必要なのだ。不健康な状態、特に消化不良からくる、その無気力で不快で、心配ばかりの心身状態は、堪え忍ばねばならない生活の一般条件、自分の存在の不確実性、各種事故や偶然への依存、確実な立場を確保するために何もできないことなどにより、耐えがたい水準にまで拍車がかかっている。ひどい空気とひどい食事で弱まった虚弱な存在は、外部刺激を極度に必要としている。その社会性ニーズを満たすには酒場に向かうしかない。友人たちと出会える場所は他に一切ないからだ。これでどうして誘惑に抵抗できるなどと期待できるだろうか？ こうした状況においては、労働者のきわめて多数が暴飲に陥るというのは、道徳的にも身体的にも不可避なことだ。そして労働者を泥酔へと向かわせる主に身体的な影響とは別に、大多数がお手本を示していること、教育の無視、若者を誘惑から守るのは不可能であること、多くの場合には自分の子どもに酒を飲ませる泥酔良心の直接の影響、数時間は生活の悲惨さと重荷を忘れられるという確実性、さらに何百もの他の条件がきわめて強力に作用するため、労働者は正直言って、これほど圧倒的な圧力に負けたからといってとても責められるものではない。ここで泥酔は、悪者が有責なのだと言えるような悪徳ではなくなっている。それは現象であり必然であり、そうした条件に対して何ら自発的意志を持たない

物体に対してある種の条件がおよぼす不可避免的な影響なのだ。労働者を単なる物体に貶めた者たちこそ責任を負うべきだ。だが大量の労働者が飲酒の犠牲になるのと同じくらい確実に、それは被害者の心身に破壊的な影響を与える。労働者の生活条件から生じるあらゆる病気傾向は、肺と消化器系の問題をきわめて多大に発生させるよう刺激し、チフス流行の台頭と広がりをもたらす。

もう一つ労働階級に身体的な不調をもたらす原因は、病気になったときに優れた医師を雇えないということがある。数々の慈善団体がこの穴を埋めようと苦闘しているのは事実だ。たとえばマンチェスターの診療所は、年間 22000 患者を受け入れたり、助言して薬を与えたりしている。だがそんなものが、ガスケルの計算だと<sup>\*6</sup>毎年人口の四分の三が医療支援を必要とする都市においては、何の薬にたつだろうか？ イングランドの医師の診察料は高いので、労働者はそんなものを払えない。したがって何もできないか、安手のヤブ医師を呼ばざるを得ず、インチキ療法を使うことになり、これは有害無益だ。こうしたヤブ医者はあらゆるイングランドの町で栄えており、広告やポスターなどの仕掛けを使って貧困者の顧客を確保しているのだ。これに加え、大量の特許薬が、ありとあらゆる症状別に売られている。モリソン錠剤、パーの生命錠剤、メインワーリング医師の錠剤など何千もの錠剤や溶液や軟膏が、身体にふりかかるあらゆる病を治せるといふ。こうした薬品で、本当に有害な物質が含まれていることはあまりないが、大量にしょっちゅう摂取すると、身体に悪い影響を与える。そして知らない買い手は常に、なるべく大量に摂取するように言われるので、好き嫌いを問わずみんな丸ごと飲み込んでしまうのも不思議はない。

パーの生命錠剤の製造者は、こうした有益な錠剤を毎週二万箱から二万五千箱も販売することも珍しくはないし、ある人はそれを便秘のためにのみ、ある人は下痢のためにのみ、こちらの人は発熱、こちらは活力減退と、思いつく限りの病気に使われる。ぼくたちドイツの農民たちが、一部の季節に吸い玉式放血や瀉血を行うのと同様に、イングランドの労働者はいまや特許薬を消費して、自分に害をなして製造業者に利潤をたっぷりもたらすのだ。こうした特許薬の中で最も有害なのはアヘン剤、主にロードナムを使って作るもので、ゴッドフライ強壯剤という名前で売られている。家で働く女性は、自分や他人の子どもの世話をしなければならないので、この飲料を子どもに与えて静かにさせ、多くの人はそれで子どもが頑強になると信じている。しばしばこの薬を新生児にも与え、そしてこの「心臓の安楽剤」の効果を知らないまま与え続けて子どもは死んでしまう。子どもの体がアヘンの作用を受けにくければ、投与量がそれだけ増やされる。強壯剤が効かなくなると、ロードナムがそのまま投与され、しばしば一回 15 滴から 20 滴も投与される。ノッティンガム検死官は議会委員会の前で<sup>\*7</sup>、ある薬剤師はゴッドフライ強壯剤の調合のため、13 ハンドレッドウェイト (660kg) のロードナムシロップを一年で使ったと自ら証言している。このような治療を受けた子どもへの影響は容易に想像がつく。かれらは青白く、虚弱で、しおれ、二歳になる前に死ぬのが通例だ。この強壯剤の使用は、王国中のあらゆる大都市や工業地区できわめて盛んなのだ。

こうした影響すべての結果は、労働階級の身体の全般的な虚弱化となる。労働者の中

<sup>\*6</sup> 『イングランドの製造業人口』第8章 エンゲルス注

<sup>\*7</sup> 『工場規制法の規制対象になっていないため児童と若年者がいっしょに働いている鉱山、炭鉱、商業、製造業における児童と若年者雇用に関する検討委員会報告』第一、第二報告、グレンジャーの報告。第二報告は通常、『児童雇用委員会報告』と呼ばれていて、この種のものとして最高の報告の一つであり、価値が高いと同時に身の毛もよだつ証拠が大量に含まれている。第一報告 1841 年；第二報告 1843 年 エンゲルス注

で、活気ある、頑健で健康な人はほとんどいない。ここでの労働者とは、工員たちで閉ざされた部屋の中で働く人たちで、ここでの議論はこの人々だけについてのものだ。ほぼ全員が虚弱で、やせこけているが頑健ではなく、肉付きが悪く、青白く、肌にも張りがなく、仕事でよく使う筋肉だけが発達している。ほとんど全員が消化不良に苦しみ、したがっておおむね無気力で、憂鬱で、短期で、神経質な状態となっている。その虚弱な体では病気に抵抗できず、したがってしょっちゅう病気になる。したがって急速に老け込み、早死にする。この点については死亡統計が文句なしの証言を提供している。

グレアム戸籍本署長官報告によると、イングランドとウェールズの年間死亡率は  $2\frac{1}{2}$  パーセントをちょっと下回るくらいだという。つまり毎年 45 人に一人が毎年死ぬということだ\*8。これが 1839-40 年の平均だった。1840-41 年に死亡数はちょっと下がり、死亡率は 46 人に一人の低い水準となった。だが大都市では、この比率はまったくちがう。いまぼくは目の前に死亡数の公式表を広げているが（『マンチェスターガーディアン』1844 年 7 月 31 日）、これによれば、いくつかの大都市の死亡率は以下の通り：マンチェスター（チョールトンとサルフォードを含む）では 32.72 人に一人、チョールトンとサルフォードを除けば 50.75 人に一人。リバプールでは、ウェストダービー（郊外部）を入れると 31.90 人に一人、ウェストダービーを外すと 29.90 人に一人。チェシャー、ランカシャー、ヨークシャー全地域の平均は、全体または一部が郊外の地区や多くの小さな町も含めると、総人口 2,172,506 人で、39.80 人に一人の死亡率だ。大都市の労働者がいかに不利な立場に置かれているかは、ランカシャーのプレスコットの死亡が示す通り。個々は鉱夫の住む町で、鉱山掘りは決して健康的な職業ではないため、農業地区よりも衛生状態が低い。だがこうした鉱夫は田舎に住んでおり、その中での死亡率は、47.54 人に一人にすぎない。つまりイングランド全体よりも 2.5 パーセント近く優れているのだ。これらの主張はすべて、1843 年の死亡表に基づいている。さらに高いのはスコットランド都市の死亡率だ。1838-39 年のエジンバラでは 29 人に一人。1831 年には旧市街だけで 22 人に一人。グラスゴーでは、コーワン医師によると\*9、1830 年からの平均は 90 人に一人だった。それがここ数年では 22-24 人に一人。このすさまじい寿命短縮が主に労働階級にふりかかっていること、全体としての平均は、中上流階級の死亡が減っていることで改善されていることは、あらゆる方面から裏付けられている。最も最近の報告の一つは、マンチェスターの医師 P・H・ホランドによるもので、公式の依頼を受けてマンチェスター郊外のチョールトンオンメドロックを調べた結果だ。かれは家屋や街路を三つの水準に分類し、死亡率の差を以下のように見極めた：

第一級街路	I 級家屋の死亡率は	51 人	に一人
	II 級家屋の死亡率は	45 人	に一人
	III 級家屋の死亡率は	36 人	に一人
第二級街路	I 級家屋の死亡率は	55 人	に一人
	II 級家屋の死亡率は	38 人	に一人
	III 級家屋の死亡率は	35 人	に一人
第三級街路	I 級家屋	なし	
	II 級家屋の死亡率は	35 人	に一人
	III 級家屋の死亡率は	25 人	に一人

\*8 『第五回年次生死結婚に関する戸籍本署報告』 エンゲルス注

\*9 コーワン医師『グラスゴー基本統計』 1887 年アメリカ版へのエンゲルス注

ホランドが示した別の表から、第一級街路に比べると第二級街路における死亡は18パーセント多く、第三級は68パーセント多いことがわかる。そして第一級住宅に比べると第二級住宅の死亡率は31パーセント、第三級住宅では78パーセント高いのがわかる。そしてひどい街路でも改善されると死亡率は25パーセント下がっている。かれは、イングランドのブルジョワにしてはすいぶん率直な発言で報告を終えている：<sup>\*10</sup>

「ある街路の死亡率が、他に比べて四倍も高いのを見て、ある等級の街路での死亡率が、他の等級街路の二倍も高いのを見て、さらにそれが高いのがまちがいなくひどい状態の街路で、状態のよいところでは必ず低いを見ると、我々の仲間の生き物、直接のご近所何百人もが、最もすぐのできる予防策のために毎年死亡しているという結論は避けられない」

『労働階級の衛生状態に関する報告』は、同じ事実を裏付ける。リバプールでは1840年に、上流階級、郷土、専門職などは、平均寿命が35年だった。ビジネスマンや地位の高い職人は22年。そして工員や日雇いやサービス階級は一般に、たった15年だった。この議会報告書には大量の事実が書かれている。

死亡率がかくも高いのは、主に労働者階級の児童の高い死亡率によるものだ。子供のきゃしゃな体は、生活における劣悪なものよからぬ影響に最も弱い。そして両親が働いたり片親が死んだりした場合にその子たちがさらされるネグレクトは、すぐに影響をあらわすので、すでに引用した報告でマンチェスターにおいては、労働階級の子供の57パーセント強が5歳前に死亡するが、もっと上の階級の子供では、それはたった20パーセントにも満たないし、全国でも五歳以下で死ぬ子供は32パーセント弱だということも無理はない。<sup>\*11</sup>すでに何度か言及した『アルチザン』記事は、この点についてもっと厳密な情報を提供し、ある一つの病気について年ごとの死亡率を全国死亡率と比較している。これにより全般的に、マンチェスターとリバプールの疫病は、いなかの地区よりも三倍も致死率が高いことを実証しているのだ。そして神経系への影響は四倍、胃腸の問題は三倍、都市部での肺への疾患は、いなかのものに対して2½対1だということがわかる。子供の天然痘、はしか、猩紅熱、百日咳は、四倍も起こりやすい。水頭症は三倍で、てんかんは十倍も起こっている。もう一つ公認の権威を引用するため、以下の表を掲載しよう。1万人中の死亡数は以下の通りだ <sup>\*12</sup>

年齢	5歳未満	5-19	20-39	40-59	60-69	70-79	80-89	90-99	100歳超
ルスランドシャー (健全な農業地区)	2,865	891	1,275	1,299	1,189	1,428	938	112	3
エセックス (湿地気味の農業地区)	3,159	1,110	1,526	1,413	963	1,019	630	77	3
カーライル町、工場導入前	4,408	911	1,006	1,201	940	826	533	153	22
カーライル町、工場導入後	4,738	930	1,261	1,134	677	727	452	80	1
プレストン、工場町	4,947	1,136	1,379	1,114	553	532	298	38	3
リーズ、工場町	5,286	927	1,228	1,198	593	512	225	29	2

現在の貧しい階級に対するネグレクトと弾圧の必然的な結果として、児童の死亡率を増

<sup>\*10</sup> 『大都市と人口集中地区の状態に関する調査委員会報告』第一報告、1844年。補遺 エンゲルス注

<sup>\*11</sup> 『工場調査委員会報告』第三巻、ランカシャーに関するホーキンス医師の報告で、ロバートソン医師が「マンチェスターの統計に関する最高権威」と呼ばれている エンゲルス注

<sup>\*12</sup> ウェード医師の著書『中流と労働階級の歴史』ロンドン、1835年で『議会工場委員会報告』から引用されている 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

やすのに貢献する他の影響も出てくる。多くの世帯では妻も夫と同じく家から離れて働かねばならず、結果として子供たちの完全なネグレクトが生じ、ずっと閉じ込められたり、外に預けて面倒を見られたりすることになる。したがって、何百人もの児童がありとあらゆる事故で死亡するのも不思議はない。これほど多くの子供が馬車にひかれたりするところや、多くが落下、溺死、火傷などで死んだりする場所は、イングランドの大都市や町以外にない。火や熱湯による火傷は特に頻繁で、マンチェスターの冬期には毎週のように起こり、ロンドンでもかなり頻繁なのだが、新聞ではほとんど採り上げられない。手元には『ウィークリーディスパッチ』1844年12月15日号があるが、それによると12月1日から7日までに累計でそうした事故が六件あったとのこと。こうした不幸な子どもたちは、こんなひどい形で死亡してしまったが、それはぼくたちの社会的無秩序の犠牲者であり、この無秩序を維持継続させている財産保有階級の犠牲者なのだ。だが、こんなおそろしい拷問のような死ですら、子どもたちを重労働と悲惨まみれの、苦悶ばかりで楽しみのない長い生活から救ったという意味では、むしろその子たちにとってはありがたいことだったのでは、とつい思いたくもなる。イングランドではそこまでひどいのだ。そしてブルジョワジーはこうしたものを毎日新聞で読むが、それ以上はこれについて何もしようとはしない。だが、ブルジョワジーはここでぼくが引用した、公式・非公式の証言は知っているはずだから、それを見てぼくがブルジョワジーを社会性殺人の罪で告発したとしても文句は言えまい。支配階級は、こうした恐ろしい状況が緩和されるよう手を打つか、それとも共通利害の管理を労働階級に引き渡すかをしなければならない。後者の手段はどう考えても採りたくないだろう。前者の作業は、ブルジョワジーがブルジョワ的な偏見で歪んだままでは、必要とする力はない。というのも、やっと何十万人もの被害者が死んでから、ブルジョワジーは将来のためにちょっとだけ懸念を見せたが、そこでやったのは「大都市圏建築法」を可決して、最もひどい過密住居を、少なくともある程度は規制するようにしたことだったのだ。もしブルジョワジーが、こんな問題の根幹に切り込むどころか、最も普通の衛生警察の要求すらどう見ても満たせない手立てを講じるだけのこんな対策を示して胸を張っているようであれば、社会性殺人の糾弾から逃れることはできない。イングランドのブルジョワジーには一つしか選択がない。殺人の糾弾を受けつつ、それに対応することもなく支配を続けるか、それとも労働階級のために退位するかだ。これまでは、前者の道が選ばれてきた。

労働者の物理的状态から精神的状態へと目を向けよう。ブルジョワジーは労働者に、絶対に必要最低限な生活しか認めないので、労働者にブルジョワジーが与える教育も、自分たちの利益になるだけのものでしかないのも不思議でもなんでもない。そしてその水準は、正直言って、大したものではない。イングランドの教育手段は、人口に比べるとあらゆる面で不釣り合いに制約されている。労働階級が使えるごく少数の昼間学校は、きわめて少数の人々にしか提供されていない。そしてそれもかなりひどいものだ。教師たちは、疲れ切った労働者など単に生活費を稼ぐためだけに教師になったような不適切な人物ばかりで、通常は不可欠なごく基本的知識すらなく、教師にきわめて必要とされる道徳的な規律もないし、公的な監督を一切受けていない。ここでも自由競争が支配し、結果として金持ちはそこから利益を得て、貧困者（かれらにとって競争は自由などではない）は正しい判断を形成するのに必要となる知識を持っていないので、ひどい結果に耐えるしかない。義務教育は存在しない。工場においては、これから見る通り、純粋に名目上だけのものだ。そして1843年に省がこの名目だけの義務教育を実効化しようとしたとき、労働階級

は圧倒的に義務教育に賛成していたのに、製造業ブルジョワジーはこの手段に全力で反対した。さらに、大量の児童が工場や自宅で1週間ずっと働いているので、学校になど行けない。夜学は、昼間働いている子どもたちが通うことになってはいるが、ほとんど放棄されているか、通う生徒がいても役に立たない。若い労働者が、日中は12時間も酷使されて、さらに八時から十時まで学校に行けというのは、あまりに要求が厳しすぎる。そしてそれをやろうとする子は通常は眠ってしまう。これは『児童雇用委員会報告』の証人たち何百人もが証言している通りだ。確かに日曜学校は造られているが、これまたほとんど教師がいないし、昼間学校で何かをすでに習った人にしか役に立たない。日曜日から次の日曜日までという間隔はあまりに長すぎて、無知な子供は一週間前の授業で教わったことを、次の授業までとても覚えていられない。『児童雇用委員会報告』は何百もの証明を出しており、委員会そのものが、昼間学校も日曜学校も、国としてのニーズにこれっぽっちも応えていないときわめて強く主張している。この報告は、イングランドにおける労働階級の無知の証拠を与えてくれる。スペインやイタリアではほとんど考えられないほどの無知だ。だがこれ以外の結果になるはずもない。ブルジョワジーは、労働階級の教育から得るものはほとんどなく、恐れるべき理由はたっぷりある。省は、5500万ポンドという巨額の予算の中で、公共教育にはわずか一費目の4万ポンドを割いているだけで、宗教的な宗派の狂信主義（これは善と同じくらい害ももたらす）がなければ、教育手段はさらに減ったはずだ。現状では、英国国教会が国民学校を維持し、各種宗派は自分の宗派学校を維持しているが、これはその信仰の信徒の子どもたちを信徒にとどめておくというだけだ。結果は、宗教、しかもまさに宗教の最も無益な部分、論争を招く議論が、主な指導内容になっていて、子供の記憶力はわけのわからない教義や神学的な主張で過負荷になってしまうのだ。宗派的な憎悪と頑迷な信仰がきわめて早い時期に呼び覚まされ、あらゆる合理的な心理的・道徳的訓練は恥ずかしいことに無視されている。労働階級は何度も議会に対して、全面的に非宗教的な公共教育システムを要求し、宗教は宗派の司祭たちに任せよう求めてきた。だがいまのところ、それを実現しようとする省はない。大臣はブルジョワの忠実な僕であり、ブルジョワは無数の宗派に別れている。だがそのどれも、個別に問題となっている宗派固有の教義を解毒剤として受け入れるという唯一の条件つきで、通常なら危険な教育を喜んで労働者に与えてしまう。そしてこうした宗派はいまだに覇権を求めて口論を続けており、労働者たちはいまのところ教育なしのままだ。確かに製造業者は労働者の大半に字が読めるようにしたと胸を張るのだが、その読む行為の品質は『児童雇用委員会報告』が証明するように、その指導の源にふさわしい程度のものでしかない。この報告によると、文字がわかれば、それだけで製造業者の良心は満足する程度に読めることになるのだという。そして英語というのは正書法が混乱しているので、文を読むというのは職人芸となっていて、長い指導があって初めて可能なものとなっている。それを考えると、この無知ぶりは容易に理解できる。労働者ですらすら文を書ける人はほとんどいない。そして正しい正書法にしたがって書くのは、多くの「学のある」人物ですら力の及ばないこととなっている。英国国教会の日曜学校、クェーカー教徒の日曜学校など各種宗派の日曜学校は書き方は教えない。なぜなら「それは日曜日にやるにはあまりに現世的な活動だから」だそうだ。他の分野で労働者に提供される教育の質は、『児童雇用委員会報告』からとってきた見本をいくつか見れば判断がつく。ただし残念ながら工場労働自体は含まれていない。

グレンジャーコミッショナーによると、「バーミンガムで余が検討した子どもたちは全体として、もっともわずかな意味ですら使い物になる教育と呼べるあらゆる点において、まったく不足状態に置かれているといえる。ほとんどあらゆる学校では宗教教育だけが行われているが、その問題についてすら、最悪の無知がはびこっていた。』ホーンコミッショナーによると、いろいろある中で以下のような例が見られた。11歳の少女は昼間学校と日曜学校の両方に通っていたが『別の世界についても、天国についても、死後の世界についてもまったく学んでいなかった。』17歳の少年は『二と二を加えるといくつになるか知らなかったし、2ペンスが何ファージングか知らず、お金を実際に渡してもそれがわからなかった。』少年数名はロンドンもウィレンホールも知らなかったが、後者はかれらの家から歩いてたった数時間だしウォルヴァーハンプトンともきわめて密接なのだ。数名は女王陛下の名前も、ネルソン提督、ウェリントン伯爵、ボナバルトといった名前も聞いたことがなかった。だが、聖パウロ、モーゼ、ソロモン王すら効いたことのない者たちが、ディック・ターピン（訳注：街道追いはぎで、死刑になってから人気が出た）そして特にジャック・シェパード（訳注：有名な大泥棒）の人生や行為や人柄については実に詳しいかったのは特筆に値するだろう。16歳の少年は、「2かける2はいくつか」とか、「四ファージング（訳注：四分の一ペニー）はいくらになるか」を知らなかった。17歳の若者は、「10ファージングは半ペニー十個分だ」と主張した。第三の17歳の若者は、きわめて簡単な質問いくつかに対して一言『おいら判事でもなんでもねえよ』と答えた<sup>\*13</sup>。こうした児童は、宗教教義を四年か五年にわたり一気に詰め込まれるが、始めも終わりもわかっていない。ある子供は『日曜学校に毎週五年間通ったが、イエス・キリストがだれだか知らず、でも名前は聞いたことがある。十二使徒など聞いたこともない。サムソンもモーゼもアロンなども知らない』<sup>\*14</sup>。別の児童は『6年にわたり日曜学校に通った。イエス・キリストがだれか知っており、十字架に懸かったのは血を流して、救世主を救うためだったと言う。聖ペテロや聖パウロなど聞いたこともない』<sup>\*15</sup>。第三の児童は『7年にわたり各種の日曜学校に通った。読めるが、薄い本の、1音節だけの易しい単語だけ。使徒は聞いたことがあるが、聖ペテロがその一員かは知らず、<sup>セント・ジョン</sup>聖ヨハネが一員かも知らないが、セント・ジョン・ウェスリー（訳注：地元政治家）なら知っている<sup>\*16</sup>』。キリストとはだれかという質問に対してホルンが聞いた答は、たとえば以下のようなものだ。『ええ、アダムのことです』『使徒の一人』『救世主の主の息子です』、そして16歳のある若者からは『イエス・キリストはずっと昔にロンドンの王さまだったんだ。』シェフィールドで、サイモンズコミッショナーは日曜学校の子どもたちに朗読をさせた。子どもたちは自分が読んだものがわからなかったし、いま読んだところに書いてあった使徒がどんな人々かもわからなかった。一人ずつ使徒たちについて尋ねていき、一つも正解が出てこなかったところで、ある狡猾そうな小僧が実に得意げに叫んだ。「頼みますよ、連中は癩病病みどもだったんだ！」<sup>\*17</sup>陶器地

\*13 『児童雇用委員会報告』補遺第二部 Q. 18, Nos. 216, 217, 226, 235, etc. ホルン 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

\*14 同上、証拠 pp. 9, 59; 155. 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

\*15 同上、pp. 9, 56; 146. 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

\*16 同上、pp. 54; 158. 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

\*17 サイモンズの報告、補遺第一部、pp. E, 22, et seq. 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

区やランカシャーからの報告も似たようなものだ。

ブルジョワジーと国家が労働階級の教育と改善のためにやっているのはこういうことだ。ありがたいことに、この階級の生活条件は、実践教育を与えてくれるので、それは学校での詰め込みに変わるだけでなく、それと結びついた混乱した宗教概念を無害にし、イングランドの国民運動において労働者を前衛に置くようなものにさえなっているのだ。必要は発明の母であり、もっと重要なこととして、思考と行動の母でもある。ほとんど読めず、ましてまるで書けないイングランドの労働者は、それでも自分の利益と国民の利益がどこにあるかを熟知している。またブルジョワジーの特別な利益を知っており、ブルジョワジーに何が期待できるのかも知っている。もし書けなくても語れるし、公開の場で語れるのだ。算数ができなくても、それでも穀物重税法を批判するブルジョワの魂胆がわかるくらいには政治経済学者の主張が理解できて、議論にも勝てるのだ。伝道師どもがあれほど努力しても天界の話がきわめて混乱していても、地上の政治的、社会的問題についてはずっとはっきり見通せる。この点についてはまた触れることになる。こんどは労働者の道徳的な性格に話を移そう。

道徳面の指導は宗教教育（イングランドの学校はすべてこれが入り込んでしまっている）と同じくらい効果がないのは十分に明らかだ。普通の人間にとって、人同士の関係を規定する単純な原理は、社会状態の混乱、万人の万人に対する戦争でひどい混乱に陥っているのだ、それが得体の知れない教義とごたまぜになって、恣意的で高圧的な命令という宗教的な形で説かれると、労働者にとってはわけがわからず縁遠いものにとどまるのも当然のことだ。あらゆる当局、特に児童雇用委員会の告白によれば、学校は動労階級の道徳性にはほとんど何も貢献していない。イングランドのブルジョワジーは、エゴイズムの面であまりに近視眼的で、あまりに愚かなほど偏狭なので、労働者に現在の道徳をたたき込む手間さえかけない。その現在に道徳とは、ブルジョワがつぎはぎでこしらえた、自衛のためと自分の利益のための代物だというのに！ こんな予防手段ですら、弱体化して鈍重なブルジョワジーには手間がかかりすぎるのだ。いずれ、この怠慢ぶりを公開するときがくるだろうが、すでに手遅れだ。だが労働者たちが自分たちの道徳体系について何も知らず、それにしがたって行動もしないと文句をいう権利は、ブルジョワジーにはないのだ。

このように労働者たちは権力を持つ階級により、肉体、精神面だけでなく道徳の面でも、無視され放り出されている。彼らのために造られた唯一の規定は法律であり、それは労働者がブルジョワジーにとってあまりに凶々しい存在となると、労働者を縛り上げる。畜生の中で最も愚かな存在のように、労働者はたった一つの教育形態である鞭にさらされ、暴力という形で、説得されるのではなく脅されるのだ。したがって、畜生として扱われた労働者たちが、実際にそのような存在になったとしても驚くことではない。また、人間としての意識を維持するのに、権力を持つブルジョワジーに対する最も強い憎悪、最も破れることのない内面での反逆精神だけを頼りにするのも当然だろう。かれらが人間なのは、支配階級に対しての怒りに燃えている限りでしかないのだ。くびきの下で屈従して身をかがめた瞬間に畜生になってしまうのであり、くびきを破ろうとする努力を捨てて、生活を耐えられるものにしようとする努力するだけになってしまうのだ。

つまり、ブルジョワジーがプロレタリアートの教育のためにやったのはこれがすべてなのだ。そしてこの階級が暮らす状況すべてを考慮したとき、それが支配階級に対して反発を抱いているからといって、労働階級を悪く思うわけにはいかないだろう。労働者に学

校で与えられていない道徳訓練は、生活の他の状況が与えてくれるものでもない。道徳教育は、ブルジョワジーの目から見て、少なくとも唯一価値あるものなのだ。労働者の地位と環境は、不道徳性への最強の誘惑を含んでいる。貧しいし、人生には何の魅力もないし、ほとんどあらゆる楽しみが否定されており、法の罰則がことさら怖いわけでもない。ならばなぜ欲望を抑えねばならないのか、なぜ金持ちが生まれつきの権利を享受するに任せておくのか、なぜその一部を自分のためにもぎ取らないのか？ プロレタリアが盗まないようにうながしてくれるものがあるのか？ 「財産の神聖性」の主張を聞くのはブルジョワの耳にとってはとても美しく賛同できるものだ。だが何も財産のない者にとっては、財産の神聖性などそれ自体死んでいる。お金がこの世の神だ。ブルジョワはプロレタリアのお金を奪い取り、したがって実務的無神論者にしてしまう。だったらプロレタリアがその無神論を確保して、もはや地上の神の力について神聖性を尊重しないのも当然だ。そしてプロレタリアの貧困が強化して、生活の最低の必需品すら欠如するところにまで来たら、欠乏と飢餓に達したら、社会秩序を無視しようという誘惑は力を増すばかりだ。これはブルジョワジーもおおむね理解している。サイモンズ<sup>\*18</sup> は貧困というのが、泥酔が身体に及ぼすのと同じ破壊的な影響を心に与えると述べている。そしてアリソン医師は、財産保有読者に対してきわめて厳密に、労働階級にとって社会抑圧の結果がどんなものになるかを説明している<sup>\*19</sup>。欠乏は労働者に対し、ゆっくりと餓死するか、すばやく自殺するか、必要なものを見つかったら奪い取るか 普通の英語だと泥棒 という選択を残すだけだ。そしてほとんどの者が、餓死や自殺よりは泥棒を選ぶのも驚くことではない。

確かに、労働階級の中にも、きわめて極端な状態に追い込まれても道徳が強すぎて泥棒ができない人々はたくさんいるし、こうした人々は餓死したり自殺したりする。自殺はかつて、上流階級のうらやましい特権だったが、いまやイングランド労働者の間でもファッションナブルになっており、大量の貧困者が、他に逃れる道のない悲惨から己自身を救うために自殺するのだ。

だがイングランドの労働者への影響として貧困よりはるかに不道徳性をもたらすのは、地位の不安定さ、必然的に賃金を得てそれを右から左に食べるしかないということ、つまり労働者をプロレタリアたらしめているものだ。ドイツの小農は通常貧しいし、欠乏に苦しむことも多いが、事故の犠牲にはなりにくいし、少なくとも何か確実なものを持っている。プロレタリアは自分の二本の手しかなく、昨日の稼ぎは今日食うしかなく、あらゆる偶然にふりまわされ、生活のギリギリ最低限の必需品すら稼げるという保証も一切なく、あらゆる危機ごと、雇用主のあらゆる気まぐれごとにパンが奪われかねないというこのプロレタリアは、人間として考えられる最も嫌悪を催す非人道的な立場に置かれているのだ。奴隷は主人の利己性により最低限の生命は保証されているし、農奴も少なくとも暮らすための土地のかけらは持っている。どちらも、最悪でも生命ぎりぎりの保証はある。だがプロレタリアは自分一人に頼るしかなく、それでも自分の能力を、それに頼れる形で適用するのを阻止されているのだ。プロレタリアが自分の立場改善のためにできることはすべて、さらされている各種の偶然の洪水に比べれば大海の一滴であり、そうした偶然に対してプロレタリアはまったくコントロールが効かない。あらゆる状況の可能な組み合わせについて、受動的な対象でしかなく、短期間ですら生活が救われたら運が良かったと思う

\*18 『技芸と工芸職人』 エンゲルス注

\*19 『人口の原理』 vol. ii, pp. 196, 197 エンゲルス注

しかない。そしてその性格と生き様は自然にこうした条件により形成される。この渦巻きの中で、頭を水から出すよう努力して人間らしさを救おうとするのが一つの手だ。そしてこれはとにかく自分をこれほど無慈悲に収奪しておきながら運に任せて自分を放棄する階級、人間にとって道徳さえ失わせるような立場に自分を押しつけようと努力する階級に対する反逆の中でのみ実現できる<sup>\*20</sup>。そうでなければ、自分の運命に対する抵抗など絶望だからあきらめてしまい、もっとも有利な瞬間によりできるだけ利益を得ようとするしかない。貯金などできはしない。というのも最高の場合ですら、自分の生活をごく短期間維持するに足る金額しか貯蓄できないし、失業した場合には、短期間などではすまないからだ。自分のために永続的な財産を貯めるのは不可能だ。そしてそうでなければ、その人物だけが労働者であるのをやめ、別の人物がそれに代わるというだけのこと。高賃金を得たら、それでよい生活をする以上の何ができるだろうか？ イングランドのブルジョワジーは、賃金が高いときの労働者の豪勢な暮らしに派手に騒ぎ立てて見せる。でも人生を楽しめるときに楽しんでおくのは、かれらにとって自然なばかりかきわめて賢明なことなのだ。そんな財宝をため込んだところで労働者にとっては大して長続きするものではないし、最終的には虫と錆び（つまりはブルジョワジー）がそれを奪ってしまうだけ。だがこうした生活は、他のあらゆるものよりも道徳を破壊するものだ。カーライルが綿紡績業者について述べることは、イングランドの労働者すべてに当てはまる：<sup>\*21</sup>

「商売は、現在はふくれあがった繁栄を示しているがやがて無活動と「操短」へと弱まるのが博打の性というものだ。彼らは博打打ちのように暮らし、いまは豪奢な過剰に暮らし、次には飢餓に暮らす。黒ずんだ反逆的な不満が彼らを食い荒らす。人類の心に救う最も惨めきわまる気分だ。イングランドの商業は、世界的な痙攣じみた変動を持ち、計り知れぬ変わり安い蒸気の悪魔を持ち、あらゆる道筋を不確かなものとし、あらゆる人生をおぞましいものとする。落ち着き、堅実、安定した連続性など人類にとって真っ先にくる祝福は与えられない。世界は彼らにとって家などではなくおんぼろの監獄、無謀な乱費、反逆、乱痴気、自分と全人類に対する憤りなのだ。それは緑で花に満ちた世界、青空が果てしなく頭上に広がっている世界、神の作業と統治の世界なのだろうか、それとも淀んだ油の浮くトペテ、硫黄の煙、綿のかす、ジン暴動、怒りと重労働ばかりの、悪魔が造り悪魔が支配する世界なのか？」

そして他のところでは以下の通り：<sup>\*22</sup>

「不正、真実と事実と自然の秩序に対する不貞は、この世における唯一最大の邪悪であり、不正の感覚はこの世において耐えがたい最大の苦痛であるため、この労働者たちの状態に関するわれわれの大きな疑問は次のようなものとなる：それは公正か？ そしてそもそも、かれら自身はこれが公正かどうかについてどういう意見を持っているのだろうか？ かれらが発することばは、答として非常に重要だが、その行動はさらに重要だ。反抗、不機嫌、上流階級に対する仕返しじみた反抗の

<sup>\*20</sup> イングランドにおいて、労働階級のブルジョワジーに対する反逆が連合結社の自由により合法化されていることは後で述べる エンゲルス注

<sup>\*21</sup> 『チャーチスト主義』 p. 54, et seq. エンゲルス注

<sup>\*22</sup> 同上, p. 40. 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

ユーモア、一時的な上司が命じる事に対する敬意の低下、精神的な上位者の教えることに対する信頼の低下は、下層階級の普遍的な精神としてみますます一般的になりつつある。こうした精神を批判してもいいし、糾弾してもいいが、万人はそれがそこにあることを認識し、それが残念だと知り、それを変えないと致命的であることを知るべきだ」

事実関係でカーライルは完全に正しく、唯一まちがっているのは様々な労働者を上流階級に刃向かうものとして非難していることだけだ。この怒り、その情熱はむしろ、労働者たちが自分の立場の非人間性を感じているという証拠であり、畜生の水準に貶められるのを拒絶し、いつの日かブルジョワジーの下僕の立場から自らを解放するという証拠なのだ。これは、こうした怒りを共有しない人々の場合に見られる。その人々は自分に降りかかった運命の前に慎ましく頭を垂れ、できるだけ立派な私的生活を送り、公的な問題に関わろうとせず、ブルジョワジーが労働者の鎖をさらにしっかりさせるのに手を貸し、工業時代が始まる前に広まっていた知的な無の状態と同じ地平に立っている。そうでなければ運命に翻弄され、経済的な立場をすでになくしたのと同様に、道徳的な立場をも失い、その日暮らしとなり、飲酒して放埒へと陥る。そしていずれの場合にもその者は畜生だ。いま挙げた階級は主に「悪徳の急速な増加」に貢献しており、ブルジョワジーはそれを実に恐れるが、でもそれを生み出した原因の発端を作ったのは自分たちなのだ。

労働者の道徳退行を招くもう一つの原因は、かれらが仕事に縛られているということだ。自発的ななら、生産的活動は人間が知る最高の喜びだが、強制的な苦労は最も残酷で人を貶める処罰となる。朝から晩まで自分の意志に反して何か同じことしかやらせてもらえない以上にひどいことはない。そして労働者が自分を人間と感じれば、それだけ労働も憎悪するようになる。というのもその制約、それが自分にとっていかに無意味であるかを感じてしまうからだ。何のために働くのか？ その仕事が好きだから？ 自然な衝動？ いやいや全然！ お金のために働くのであり、その労働自体とはまったく関係ないもののために働くのだ。そしてその労働時間も実に長いし、まったく単調さが途切れず、これだけでも最初の数週間では、まだ多少なりとも人間感情が残っていたら拷問に等しいだろう。分業は、矯正労働の残酷な影響を倍増させた。ほとんどの分野では、労働者の活動は単なるつまらない、純粋に機械的な操作になっており、それが毎分毎分繰り返され、それが毎年毎年まったく変わらずに続くのだ<sup>\*23</sup>。針穴を開けたり歯車にやすりをかけたりといった労働を、幼い子供時代から毎日十二時間行ってきて、その間常時、イングランドのプロレタリアに強制された条件の下で暮らしてきた人物は、三十歳になった時にどれだけの人間的感情や能力を維持できるだろうか？ これは蒸気の導入以来も変わっていない。労働者の活動は易しくなり、筋肉の力は節約されたが、仕事そのものは無意味で単調のきわみとなった。知的活動の領域はまったく残されず、注意もそれ以外のことは考えられない程度に要求される。そしてこうした仕事という刑罰、それだけであらゆる時間を必要とする労働刑は、労働者に寝食の間も与えず、開かれた空気の中で身体運動はまったくできず、自然を享受することもなく、まして知的活動などさらにできないものなので、こうした刑罰は人間を畜生の水準にまで貶めるのに実に役立つのだ。ここでも労働者は選択を迫られ

<sup>\*23</sup> ここでもぼくのために証言してくれるブルジョワ証人を呼び出そうか？ 一人だけ選ぼう。誰もが読むであろう人物、つまりアダム・スミス『国富論』（マカロック四巻版）、vol. iii, book 5, chap. 1, p. 297. エンゲルス注

る。自分をこの運命に屈服させ、「よい」労働者となり、ブルジョワジーの利益に「忠実に」したがうことでほぼまちがいなく畜生になるか、それとも反逆し、自分の人間性を求めてさいごまで戦うしかない。これはつまり、ブルジョワジーに対する戦いを行うしかないということだ。

そしてこうした条件すべてが労働者の間に広範な道徳低下を生み出すと、古い影響に加えて新しい影響も生じ、それがこの道徳低下をもっと広め、最も極端なものにしてしまうのだ。この影響は人口の集中化だ。イングランドブルジョワジーの物書きたちは、大都市の道徳低下傾向について殺人的だと叫んでいる。倒錯したエレミヤのように、かれらは都市の破壊ではなく、成長に対して挽歌を詠うのだ。アリソン州シェリフはほとんどあらゆることを、そして『大都市の時代』著者ヴォーン医師は、さらにこの影響を重視する。そしてこれは当然だろう。というのも財産保有階級は、労働者の体と魂を破壊しがちな他の条件に対して、あまりに直接的な利害を持ちすぎている。貧困、不安定、過労、強制労働などが人をだめにする主な影響なのだと認めたら、だったら貧困者に財産を与え生存を保証し、過労を禁止する法律を作るべきだという結論を出さざるを得ず、そんなことはブルジョワジーが決してやろうとしないことだ。だが大都市は実に自発的に成長し、その人口はあまりにまったく自発的に流入してきて、そして製造業とそこから利益を得る中産階級だけが都市を創ったという洞察があまりに縁遠いものなので、支配階級としてはあらゆる邪悪をこの一見すると避けがたい原因のせいにするのがきわめて便利なのだ。大都市は実は、すでに萌芽を見せていた邪悪をもっと急速で確実に成長させるだけなのだが。アリソンはこれを認めるだけの人道性を持っている。かれはサラブレッドのリベラル派製造業者ではなく、中途半端なトーリー党ブルジョワでしかないので、したがって完全なブルジョワが未だに完全に盲目なのに対して、ときどきは目を開くのだ。その発言を聞こう\*24;

大都市においてこそ「悪徳がその誘惑を広げ、快楽がその蠱惑をもたらし、愚行が魅力を広げ、罪が逃げおおせるといふ希望により症例され、怠惰がそのお手本の多さにより育まれているのである。卑しい者や放埒な者が、田舎生活の単純さから逃げて走る人間の腐敗は、こうした大いなる市場においてなのである。ここでこそ、かれらはこうした破廉恥行為を実行する被害者を見つけるのであり、それを行う危険に報いるだけの利益が得られるのだ。ここでの美德は、それが行われる目だたなさのために抑圧されている。罪は検出が難しいために熟成する。放埒はそれが約束する即座の快楽により報われる。だれでもセントジャイルズやダブリンのごったがえす路地や、グラスゴーの貧困地区を夜に歩けば、こうした観察の証明にたっぷり出くわすことだろう。下層階級の無秩序な習慣や淫らがましい快楽を不思議に思うこともなくなるだろう。世界にこれほどの犯罪があるということではなく、むしろいま以上の犯罪が起こっていないことを不思議に思うだろう。こうした混雑した状況における人間腐敗の大きな原因は、悪いお手本の伝染性と、若者たちに対して日々密接にもたらされる悪徳の誘惑を避けるのがきわめて難しいということなのだ。美德の強さについてどう考えるにせよ、経験から見て高い階級の人々が残虐な犯罪や無秩序な習慣から逃れているのは、幸運なことに誘惑の現場から離れていることにあるおかげなのだ。そして下層民たちを現在襲っているような誘惑にさらさ

\*24 『人口の原理』 vol. ii, p. 76, et seq., p. 82, p. 155. エンゲルス注

れる場所では、いまや上層階級とてその影響に屈する点では下層民に負けるものではない。大都市の貧困者にことさら不運なのは、こうした抵抗しがたい誘惑から逃げ出せず、どこへ向かおうとも魅惑的な形の悪徳や、罪深い楽しみの誘惑に出くわしてしまうということなのだ。大都市において貧困者の若者から、悪徳の魅力を隠しておくのが経験的に不可能だと言うことこそ、かれらを実に多くの道徳劣化の原因にさらしてしまうのだ。こうしたものはすべて、放埒さの被害者たちの人格における異常な、あるいは極端な欠如から生じたりするものではなく、貧困者がさらされている誘惑のほとんど抵抗しがたい性質からきているのだ。金持ちは彼らの行いを譴責するが、似たような原因の影響に対しては、ほぼまちがいに彼らに負けず劣らずすぐに屈することだろう。美德では決して抵抗できず、特に若者が一般に抵抗できないような、ある程度の悲惨と、ある程度の罪への近接性があるのだ。こうした状況における悪徳の発達は、身体的な感染と同じくらい確実であり、通常は速度も同じくらいすばやい」

そして別のところでは：

「上流階級たちが自分の利益のために、労働階級を大量に小さな区間に引き込むと、罪の感染は急速で避けがなくなる。下層民たちは、道徳や宗教的な指導の点で現在のような状況にあると、しばしば周囲の誘惑に屈するのは、チフスの患者になってしまうのと同じくらい、ほとんど責められないと言える」

たくさんだ！ 半分しかブルジョワでないアリソンは、自己表現のやり方がいかに偏狭だろうと、大都市が労働者の道徳発達に与える邪悪な影響を伝えてくれている。別のある純血ブルジョワ、反穀物法連盟の中心にいる人物アンドリュー・ウレ医師<sup>\*25</sup> は反対側について明かしている。大都市における生活は、労働者の中の陰謀団を促進し、平民に力を与えるものだとかれは述べる。もしここで労働者が教育を受けていなければ（つまりブルジョワに従うように教わっていなければ）、物事を一方的にしか見られず、悪意ある利己性の立場からしか考えられず、小ずるいデマゴグにあっさりだまされてしまうかもしれないではありませんか。いやいや、それどころか自分たちに最大の利益を与えてくれる存在たる、慎ましくて事業性に富む資本家たちを、嫉妬深く敵対的な視線で見ることでもできてしまうかもしれないのですぞ。ここでは適切な訓練のみが求められるのです。さもなければ国家的な破産などの恐怖が生じ兼ねません。なぜなら労働者の革命がどうしても起こってしまうことになるからです。そしてこのブルジョワのこうした恐怖はまったく正当なものだ。もし人口の集中が財産保有階級を刺激し発達させるとしても、それは労働者のさらに急速な発達を強制するものとなる。労働者たちは階級として自分たちを捕らえるようになり、一体感を得る。自分たちは個人としては弱くても、団結すれば力を持つのだと感じるようになる。ブルジョワジーからの距離感、労働者特有の、生活の立場に対応した見方の発達は、抑圧の意識が目覚めることで育まれ、労働者たちは社会的政治的重要性を獲得するようになる。大都市は労働運動の生誕地だ。その中で初めて労働者たちは自分たちの状況を顧みるようになり、それに反対して闘争を開始する。大都市の中でプロレタリアートとブルジョワジーの対立が初めて露わとなる。そこから労働組合、チャーチスト主

\*25 『製造業の哲学』 ロンドン、1855年、p. 406, et seq. この立派な著作には後でまた触れる機会があるだろう エングルス注

義、社会主義が生まれるのだ。大都市は、田舎では慢性的な形で登場する社会体の病気を急性のものに変え、そしてそれによりその病気に本性を発揮させ、それを治療する手段を与えることになったのだ。大都市と、それが世間的な知性に対する強い影響なしには、労働階級の進歩は現状よりはるかに遅れていただろう。さらに、それは労働者と雇用者の間に最後に残った父権的な関係を破壊してくれた。これは大規模製造業により、単一の雇用者に依存する従業員の数が増えたことで生じた結果だ。確かにブルジョワジーはこうしたことを嫌悪しており、それも無理はない。というのも古い条件下で、ブルジョワは自分の使用人たちの反逆という点では比較的安泰だったからだ。好き勝手に威張り散らして収奪しまくり、それでもちょっとばかり一文もかからない見下すような友情を与えたり、ときにちょっとしたつまらない贈り物をするだけで従属と感謝とへりくだりを受け取れたのだ。そうした友情や贈り物は、見かけはすべて純粋な自己犠牲的で自発的な心の善良さからのおのだが、実際にはいささかも義務感以上からやっているわけではない。ブルジョワ個人として、自分が自分で創ったのではない状況下に置かれたら、こうした義務を部分的に果たしたりはするかもしれない。だが支配階級の一部としては、その支配という事実だけから、全国民の状況について責任を持つのに、ブルジョワジーはその立場が求めることを何一つやっていない。それどころか暗黒を自分個人の利益のために収奪したのだ。労働者の隷属を偽善的に覆い隠していた父権的な関係においては、労働者は知的にゼロにとどまるしかなく、まったく自分の利益に鞭で、単なる私的個人となる。雇い主から疎外されたとき、雇い主と従業員の唯一のつながりが、金銭的な利潤のつながりだけだと思い知ったとき、まったく試練に耐えられなかった両者の感情的絆が完全に消え去ったとき、そのときに初めて労働者は自分の利益を認識しはじめ、独立性を発達させはじめる。そのとき初めて、労働者は思考、感情、意思表示においてブルジョワジーの奴隷たることをやめる。そしてこの目標にとって大規模製造業と大都市製造業はきわめて多大な貢献をしてきた。

イングランドの労働者の性質を形成するにあたり、大きな勢いを持つ別の影響は、すでに言及したアイルランド人の移民だ。一方でこれは、すでに見た通り、イングランドの労働者を劣化させ、文明から引き離し、その苦勞を増した。だがその一方では、労働者とブルジョワジーとの亀裂をそれにより深めて、迫り来る危機を早めたのだ。イングランドが苦しんでいる社会性の病気がたどっている道筋は、肉体的な病気の道筋と同じだからだ。それはある法則にしたがって進行し、独自の危機を持ち、その最後の最も激しい危機が患者の運命を決する。そしてイングランド国民はその最後の危機の下で倒れることはできず、そこから前進し、再生紙、生まれ変わるしかできないので、この病気の進行を加速するものはすべて、喜ぶのが筋というものだ。そしてこの進行に対してアイルランド移民は、情熱的で移り気な気性をイングランドとイングランドの労働階級に輸入するため、さらに貢献してくれるのだ。アイルランド人とイングランド人は、フランス人とドイツ人のような関係だ。そして表面的で興奮しやすい炎のようなアイルランドの気性を安定した合理的で慎ましいイングランドの気性と混ぜることで、長期的にはどちらにとっても生産的な結果にしかならない。イングランドブルジョワジーの粗野な利己主義は、アイルランド人の性格（ひどすぎるほどに鷹揚で、主に感情で支配する）が介入して、イングランド人の冷たく合理的な性質を、部分的に人種の混合と部分的に通常的生活における接触で和らげていなければ、労働階級に対する掌握をさらに続けていただろう。

これらすべてを鑑みると、労働階級がだんだんイングランドのブルジョワジーとはまったく分離した人種となってきたのも驚くべきことではない。ブルジョワジーは、地上の他

のどんな民族と比べても、そのただ中に住む労働者たちとのほうが共通性が少ないのだ。労働者はブルジョワジーのものとはちがう方言をしゃべり、別の考え方や理想を持ち、別の習慣や道徳原理を持ち、ちがう宗教と政治を持つのだ。したがってこの両者は二つのまったくちがった民族であり、人種的なちがいによるものに匹敵するほどの差を持ち、大陸にいるぼくたちはその片方であるブルジョワジーしか知らない。でもイングランドの未来にとってはるかに重要なのはまさにもう一つのほう、プロレタリアートなのだ\*<sup>26</sup>。

イングランドの労働者の公的 성격については、それが結社や政治原理の面でどのように表現されているかについて、また後で触れる機会があるだろう。ここでは上に挙げた影響の結果を検討し、それが労働者の私的な性質にどう影響しているかを見よう。労働者は通常の生活でブルジョワより人道的だ。すでに、乞食はほとんど労働者だけに物乞いをしがちだという事実はすでに述べたし、一般に貧困者の維持についてはブルジョワジーがやることよりも、労働者がやっていることのほうが多いことも指摘した。この事実は、だれでも自分でいつの日でも証明できることなのだが、マンチェスターの聖堂参事会員パーキンソン医師のこんな発言でも裏付けられる\*<sup>27</sup>：

「貧乏人は、金持ちが貧乏人に与えるよりも多くを相互に与える。世がこの主張についての裏付けを得たのは、余らの最も古く最も教養ある最も観察力鋭い医師たるパーズレー医師の証言からである。この医師の人道性は、その教養や才能に劣らぬほど傑出しており、しばしば毎年貧乏人が相互に与える毎年の総額は、同じ時期に金持ちが寄付した金額を超えたとおおっぴらに主張しているのだ」

他の点でも、労働者の人道性は絶えず心地よい形で現れている。かれらは自分でも苦境を経験しているので、困っている人々の気持ちになれるし、だから財産保有階級よりもお金を必要としているのに、もっと近寄りやすく、親切で、お金に汚くない。というのもお金はそれで買えるものの価値しかないが、ブルジョワにとってはそれが特別な内在的価値を持ち、神様としての価値を持つので、このためブルジョワはいまのように陰険で、低級な守銭奴になっているのだ。労働者はこんな感情をまったく知らず、お金に対する畏怖の念にもブルジョワよりは動かされない。ブルジョワは、活動すべてが利得を目指しており、金が入った袋を貯めることが人生の目的であり終着点だと思っているのだ。したがって作業員はブルジョワに比べてずっと偏見がなく、ありのままの事実についてもっとはっきりした目を持っており、個人的な利己性のめがねを通してすべてを見たりはしない。教育がろくにないため、宗教的な思い込みからは逃れているし、宗教的な質問は理解できず、そんなもので悩んだりせず、ブルジョワジーを縛る狂信主義もまったく知らない。そしてたまたま何か宗教を持っていても、それは単に名前だけであり、理屈さえ知らない。現実的に労働者はこの世のために生き、この世で自分の居心地をよくしよと苦闘する。ブルジョワジーの作家はすべてこの点で意見が一致している。労働者たちは宗教的ではなく、教会にも行かないという点だ。この一般的な主張から除外されるべきなのは、アイルランド人、わずかな高齢者、半ブルジョワたち、監督者、検査役といった連中だ。だが大

\*<sup>26</sup> (1892) 大規模工業がイングランドを二つのちがう国に分裂させたという発想は、周知のごとく、同時期にディズラエリが小説『シビル、あるいは二つの国』で展開したものだ 1892年ドイツ版へのエンゲルス注

\*<sup>27</sup> 『マンチェスター等における労働貧困者の現状について』 Rev. Rd. パーキンソン、マンチェスター聖堂参事会員、第三版、ロンドンとマンチェスター、1841年。パンフレット エンゲルス注

衆の間ではほとんど普遍的に、宗教に対してはまったくの無関心が広がっており、最大でもちょっとした神様進行の痕跡があるが、あまりに未発達なのでほんの数語にしかならなかったり、不倫、無神論といった単語に対する漠然とした嫌悪感があるくらいのものだ。あらゆる宗派の教会は、労働者とは非常に険悪な関係にあるが、それでも影響力を失ったのは最近のことだ。だが現在では、「あいつは聖職者だ！」と叫ぶだけで、司祭は公開会合の壇上から追い落とされてしまう。そして労働者の他の生活条件と同じく、宗教や文化的な貢献の欠如は、極幼少期から階級的偏見を注ぎ込まれてきて満たされているブルジョワよりも、労働者をもっと制約のない状態にして、引き継がれてきた安定した教条や出来合の意見からもっと自由にしてくれる。ブルジョワはもはやどうしようもない。基本的には、いかにリベラルな様子を示そうとも基本的には保守派であり、その利害は財産保有階級と結びついていて、あらゆる活発な運動にとっては死んだも同然だ。イングランドの歴史的発展における前衛の地位を、ブルジョワジーは失いつつアルノだ。労働者がそれに取って代わろうとしている。まずは権利の主張として、次いでそれを事実上奪取するのだ。

こうしたすべては、それと対応した労働者の公的な活動（これについては後述）と共に、この階級の性質のよい面を形成している。よくない面もやはり手短にまとめると、これまで出てきた原因からかなり自然に導かれる。泥酔、性的な不品行、暴力、財産権の無視は、ブルジョワが労働階級批判で持ち出す主要な点だ。かれらが深酒をするのは当然だろう。州シェリフのアリソンは、グラスゴーでは土曜日の晩ごとに労働者三万人ほどが飲んだくれると主張しており、この推定はどう見ても誇張ではない。そしてその都市で1830年には12軒に一軒、1840年には十軒に一軒が酒場だった。物品税の対象となったのは酒が2,300,000ガロン、それが1837年には6,620,000ガロンになった。1823年のイングランドでは1,976,000ガロンだったのが、1837年には7,875,000ガロンになった\*28。1830年のビール法はビール酒場（ジェリーハウス）の開店を容易にするもので、その店主はビールを売って人々がその場で飲んだくれられるようにする。これはビール酒場を言わば、万人の玄関にもってくるに等しい形で深酒の拡大に貢献した。ほとんどあらゆる街路にはそうしたビール酒場が数軒あり、田舎で家が二、三軒隣接していれば、そのうち一軒はジェリーショップだ。これらに加え、大量のナイショ店がある。これは免許を受けていない秘密の酒場で、大都市では同じくらい秘密の醸造所が、隠れた場所で大量の酒を造っているが、滅多に警察の訪問を受けることもない。ガスケルは、こうした秘密醸造所がマンチェスターだけでも百ヶ所以上あると推定しているし、その生産高は少なくとも156,000ガロンに及ぶとみている。これに加えてマンチェスターでは、各種のアルコール飲料を売るパブが千軒以上あり、少なくともグラスゴーと住民数に比例するくらいはある。他のあらゆる大都市でも、物事の状況は同じだ。そして通常の深酒の結果だけでなく、男女、さらに子どもや、赤ん坊を腕に抱いた母親でさえ、ブルジョワ政権の最も墮落した被害者たち、泥棒や詐欺師や売春婦たちがいるこうした場所と、しょっちゅう接触することを考えるよう。多くの母親は腕に抱いた赤ん坊に人を飲ませることも考えよう。すると、こうした場所に頻繁に出入りすることからくる道徳低下効果は否定しがたいものとなる。

土曜の晩に、特に賃金が支払われて仕事がいつもよりちょっと早めにあがると、全労働

\*28 『人口の原理』随所 エンゲルス注

階級が自分の貧困地区から出てきて主要大通りに流れ込むと、深酒がそのあらゆる猛威をもって見られることになる。こうした晩にマンチェスターから出てくるときには、大量の千鳥足の人々や、同じくらいドブに横たわっている連中を見ないですむことは滅多にない。日曜の晩になると、同じ場面が通常は繰り返され、ただ土曜ほどの騒々しさはない。そしてお金が尽きると、飲んだくれどもな最寄りの質屋に出かけて、手持ち品をなんでも質入れする。質屋はどの都市にも大量にある　マンチェスターには 60 軒以上、サルフォードのチャペル通りでは、一つの通りに十軒から十二軒が並ぶのだ。家具、日曜の衣服（あれば）、台所用品が土曜の晩に大量に質屋から請け出されるのだが、それもほぼまちがいなく、次の水曜日までにまた質屋に舞い戻り、やがてついに何らかに事故で最終的な請け出しが不可能となり、一つ、また一つと物件は高利貸し的手中に落ちる。そうでなければ高利貸しは、ボロボロの使い古された質草に対し、それ以上一ファージングたりとも出さないと宣言することになる。イングランドにおける労働者の泥酔ぶりを見たら、この階級は年間に泥酔用の酒に対して総額 2500 万ポンドくらいを支出するというアシュレー卿の発言<sup>\*29</sup> も容易に信じられる。そして外部状況の劣化ぶり、心身の健康の恐るべき低下、家庭内のあらゆる関係の崩壊はその結果として容易に想像がつく。確かに、慈善団体は力を尽くしているが、何百人もの労働者の中に禁酒家が数千人いたところで物の数ではない。禁酒を奉じるアイルランドのマシュー神父がイングランド都市を訪問すると、三万人から六万人が禁酒の誓いを立てる。だがほとんどは一ヶ月もしないうちにその禁を破る。マンチェスターで過去 3、4 年に禁酒の誓いをした人物を数えたら、町の全人口を上回ることだろう　そしてそれでも、泥酔が少しでも減っているようには見えないのだ。

酩酊をもらす酒を享受した結果としての泥酔について、イングランドの労働者が持っている主な欠点は性的な淫蕩だ。だがこれも無慈悲な論理をたどるもので、自分の自由を適切に利用する手段がないまま、自力に任された階級の立場から、避けられない必然として生じて着るものだ。ブルジョワジーは労働階級に対してこの二つの快樂しか残して折らず、それに対して大量の労働や苦勞を押しつけているので、結果として労働者は、人生から何かを引き出そうとして、全精力をこの二つの楽しみに傾け、それを過剰に推し進め、きわめて野放図にそれに屈する。畜生にしか魅力のない状況に置かれた人々は、それに反逆するか完全な獣性に走るかのどちらかしかない。そしてさらに、ブルジョワジーが売春維持のために十分に努力するのを考慮すれば　そして毎晩ロンドンの通りを満たす売春婦四万人のうち、高潔なるブルジョワジーを相手にしている者は何人いることだろう！生活するために、肉体を通行人に提供しなくてはならない彼女たちのうち、ブルジョワジーの誘惑のせいである者が何人いることだろう！　労働者を性的な獣性で軽蔑する権利など最もないのがブルジョワジーなのはまちがいない。

労働者たちの全般的な欠点の原因は、野放図な快樂への渴望、用心の欠如、社会秩序におさまる際の柔軟性、目先の快樂を犠牲にしてもっと遠い利益を得ることができないという点にたどれる。だがそれに何の不思議があるだろう？　ある階級が、その疲れ果てる重労働によりごく少数のきわめて官能的な快樂しか買えないのであれば、そうした快樂に盲目的かつ狂ったように飛び込むのが当然ではないか？　だれもその教育の手間をかけないような階級、無数の偶然にもてあそばされる存在、人生で安心を知らない階級　そうした

\*29 下院での討議にて、1845 年 2 月 28 日　エンゲルス注

階級が用心だの、「立派さ」だの、遠い楽しみのために目先の快楽を犠牲にするだのをやるインセンティブなどなにかあるだろうか？ その遠い楽しみというのは、まさにプロレタリアートが暮らす永遠に変動し揺らぐ条件のために、きわめて不確実なものになってしまっているのだ。労働階級は、社会秩序のあらゆる欠点を負わされ、その長所はまったく楽しむことがなく、社会システムは純粹に敵対的な側面しかその階級には見せない。そんな階級が、その社会秩序に敬意を払えなどとだれが要求できるだろうか？ まことそれは、あまりに過大な要求でございます！ だが労働者は社会の現在の仕組みをそれが存在する限り逃れるわけにはいかないし、個人としての労働者がそれに抵抗すれば、最大の損失はその本人にふりかかる。

だから労働者にとって、社会秩序は家族生活をほとんど不可能にする。快適性のない、汚い家で、一夜の宿にすら不適切なほどの代物で、家具も設備もなく、しばしば隙間だけで暖かくもなく、人間で過密な部屋を臭い空気が満たしていれば、家庭の快適性など不可能だ。夫は一日中働きづめで、おそらく妻や年長の子供たちも同様であり、みんな職場がちがう。顔を合わせるのは夜と朝だけで、みんな永遠に飲酒の誘惑にさらされている。そんな状況でどんな家族生活ができるというのか？ でも労働者は家族から逃れられず、家族の中で暮らすしかなく、その結果は家族トラブルや家庭内の口論が永遠に続くこととなり、これは親にとっても子にとっても道徳低下を招く。あらゆる家事の放棄、特に育児放棄はイングランドの労働者の間ではあまりに多く、そして既存の社会制度によりあまりに協力に後押しされているのだ。そしてこの道徳劣化をもたらす影響の中、このような野蛮な形で育てている子どもが、最終的にとってもよい子になり道徳的になれと期待されている！ 実に自己満足なブルジョワが労働者に対して押しつけるこうした要件は、なんとも幼稚でありますなあ！

既存社会秩序に対する軽視は、その極端な形態、つまり違法行為において最も目立つものとなる。労働者の道徳低下をもたらす影響がもっと強力に作用して、通常より集中したものになれば、その労働者は水がレ氏 80 度（訳注：知らなかったが、摂氏、華氏みたいに温度系としてレ氏というのがあるのだそう。水の沸点が 80 度となる）で液体であることをやめて蒸気状態になるのと同じくらい確実に、違法者となる。現在のブルジョワジーによる残酷で野蛮化する扱いの下では、労働者はまさに水と同じくらい自発的意志のないモノとなり、まったく同じ必然性をもって自然法則に従うようになる。ある地点で、あらゆる自由がなくあんな。したがってプロレタリアートの拡大につれてイングランドの犯罪も増え、イングランド国民はいまや世界で最も犯罪性の高い存在となった。イングランド内務大臣の年間犯罪表を見ると、イングランドにおける犯罪増加は、理解しがたいほど急速に進んだことが明らかだ。刑事犯の逮捕者数を年ごとに見ると、イングランドとウェールズだけで以下の通り：1805, 4,605; 1810, 5,146; 1815, 7,818; 1820, 13,710; 1825, 14,457; 1830, 18,107; 1835, 20,731; 1840, 27,187; 1841, 27,760; 1842, 31,309。つまり、37年で7倍になったということだ。こうした逮捕のうち、1842年にはランカシャーだけで4,497件、つまり全体の14パーセント以上となっている。そしてロンドンを含むミドルセックスでは4,094件、全体の13パーセント超だ。だから大量のプロレタリア人口を持つ大都市を要する二地区が、全犯罪のうち四分の一を生み出している。人口で見れば、四分の一にはほど遠いのだが。さらに、犯罪表はほとんどあらゆる犯罪がプロレタリアート内で起こることを直接的に証明している。というのも1842年の平均を取ると、犯罪者100人のうち、32.35人は読み書きできない。58.32人は、読み書きが不完全だ。6.77人は十分

に読み書きできる。0.22人は高等教育を受けていたが、2.34人については教育水準がわからなかった。スコットランドでは、犯罪はなお急速に増えている。1819年には、刑事犯罪の逮捕はたった89件だったが、1837年にはすでにその数が3,126人に増え、1842年にはそれが4,189人になった。かのアリソン州シェリフが自ら公式報告をまとめたラナークシャーでは、人口は30年ごとに倍増したが、犯罪は5年半ごとに倍増、つまり人口より六倍も急速に増えている。その罪状はあらゆる文明国と同じく、大半が財産に対するもので、したがって何らかの欠乏が原因で起こった犯罪だ。というのも、すでに自分が持っているものはだれも盗んだりしないからだ。財産に対する犯罪（窃盗）の人口比を見ると、オランダでは1:7,140で、フランスでは1:1,804だが、ガスケルの執筆時点では1:799だった。対人犯罪の人口に対する比率は、オランダでは1:28,904、フランスでは1:17,573、イングランドでは1:23,395だ。犯罪総数の対人口比は、農業地区では1:1,043だが、工業地区では1:840だ<sup>\*30</sup>。イングランド全体では、今日の比率は1:660となっている<sup>\*31</sup>。ガスケルの本が出てまだ十年たつたないかだというのに！

こうした事実は、だれでも、ブルジョワですら、立ち止まったこうした物事の状態の既決を考えさせるに十分だろう。もし道徳低下と犯罪がこの割合であと二十年も続けば（そしてイングランド製造業がその二十年間でいまほど繁栄しなければ、犯罪の累進的な倍増はもっと急速に起こるしかない）、結果はどうなるだろうか？ 社会はすでに、目に見えて崩壊状態にある。新聞を手に取りれば必ず、社会的な絆がすべて切れていることを裏付ける、きわめて衝撃的な証拠ばかりが目につく。ぼくの目の前にあるイングランド雑誌の山を無作為に見てみよう。『マンチェスターガーディアン』1844年10月30日号は、三日間について報道したもののだが、もはやマンチェスターについて細かい事件をいちいちすべて掲載したりせず、単に最もおもしろい事件だけを掲載している。ある工場の労働者たちが事前通告なしに高賃金を求めてストライキを起し、平和判事により作業再開を命じる判決を受けたとのこと。サルフォードでは少年数名が泥棒でつかまり、破産した商売人が債権者たちをごまかそうとした。近所の町からの報道はもっと詳細だ。アシュトンでは、窃盗二件、強盗一件、自殺一件。ボルトンでは窃盗二件、歳入詐欺一件。リーでは窃盗一件。オールダムでは、賃金スト一件、窃盗一件、アイリッシュ女性同士のけんか一件、非組合員の帽子屋が組合員に襲撃される、母親が息子に殴られる。警察への攻撃一件、教会の強盗一軒。ストックポートでは、賃金に不満を持つ労働者、窃盗一件、詐欺一件、夫に殴られる妻一件。ワリントンでは窃盗一件、けんか一件。ウィガンでは窃盗一件、教会強盗一件。ロンドンの新聞による報告はもっとずっとひどい。詐欺、窃盗、暴行、家族の口論がひしめきあっている。『タイムズ』1844年9月12日号がぼくの手元にあるが、そこにはたった一日で、強盗一件、警察の攻撃一件、父親が不義の息子を養うよう命じる判決、親による児童遺棄、妻による夫の毒殺が出ている。似たような報告があらゆるイングランドの新聞で見られる。この国では、社会戦争が全面的に進んでいて、万人が自分だけのために自衛し、やってくるあらゆる人に対して自分一人で戦い、敵と宣言された人物に怪我をさせるかどうかは、自分にとって何が最も有利かというシニカルな計算によるのだ。もはや同法との平和的な相互理解に達しようなどとはだれも考えない。一頃で、みんな自分の隣人を、排除すべき敵か、よくても自分の利益のために利用すべき道具と見ているのだ。

\*30 『イングランドの製造業人口』第10章 エンゲルス注

\*31 総人口約1500万人を、有罪犯罪者の数(22,733)で割ったもの エンゲルス注

そして犯罪表が示すように、この戦争は毎年拡大し、ますます暴力的で、情熱的で、解決不能になってゆく。敵は二つの大きな集団に別れつつある。片方はブルジョワジー、片方は労働者だ。このそれぞれが万人に対して行う戦争、ブルジョワジー対プロレタリアートの戦争は、まったく驚くべきことではない。というのもそれは、自由競争の原理が唯一採り得る論理的な続編だからだ。だが、これほど急速に嵐雲がわき起こっているのに、ブルジョワジーが実に静かですましきっていることには、十分驚いていいかもしれない。ブルジョワジーはこうしたことすべてを日々新聞で読んでいるのに、こうした社会状況について憤懣を表明するとは期待しないが、その結果について怯え、犯罪という形で日々症的にあらわれているものが、全面的に噴出するのを恐れないという点については驚くべきかもしれない。だがそれを言うなら、これはしょせんはブルジョワジーでしかないし、その立場からすれば事実すら見えないのであり、ましてその結果を予想などできないのだ。唯一驚嘆すべきなのは、階級的な偏見と出来合の意見が、人間のある階級まるごとを、これほど完璧な、ほとんど狂ったようなとさえ言ってもいいかもしれない盲目性に押さえ込める、ということなのだ。その一方で、国の発達はブルジョワジーが見ていようがお構いなく進み、いつの日か財産保有階級を、その哲学において夢にすら見ていない出来事により驚かせることだろう。

## 第 6 章

# 個別の産業分野：工員

原文：<http://bit.ly/1dNHHIm>

今度はイングランドの製造業プロレタリアートにとって、重要度の高い分野を扱おう。まずはすでに決めた原則にしたがい、工員から始めることにする。つまり、工場法の下に置かれている人々だ。この法律は、水力や蒸気力を使って羊毛、絹、綿、亜麻などの紡績や紡織を行っている工場での労働時間を規制するもので、したがってイングランド製造業の重要な部門をカバーしている。ここで雇用されている階級は、イングランド労働者すべての中で最も知的で精力的であり、したがって最も不穏であり、ブルジョワジーに最も嫌われている。それは全体として、特に綿労働者が突出しているが、労働運動の先頭に立っており、その主人たる製造業者、特にランカシャーの業者たちは、ブルジョワによる先導の先端に立っているのだ。

すでに「はじめに」で、繊維材料を加工するのに雇われている人々が、まず昔の暮らし方から引き裂かれたことを見た。したがって、後年の機械発明の進歩が、こうした労働者を最も深く永続的に左右したのも驚くことではない。ウレ<sup>\*1</sup>、ベインズ<sup>\*2</sup>などが伝える綿製造業の歴史は、あらゆる方向での改善の歴史であり、そのほとんどは他の産業分野にも取り入れられた。手作業はほとんど全面的に機械作業に引き継がれ、あらゆる操作は蒸気や水の助けを借りて行われ、毎年さらなる改善が行われる。

よい秩序の社会状態だと、こうした改善は喜びの元にしかない。万人の万人に対する戦争においては、個人は自分だけの利益を確保して、多数派から生活手段を奪ってしまう。機械の改善はすべて労働者を雇用から追い出し、その進歩が大きければ、その分だけ失業者の数も増える。したがって、大きな改良ごとに、多くの労働者に対しては商業危機と同じく、欠乏が作り出され、悲惨と犯罪が生み出される。いくつか例をとろう。一番最初の発明、ジェニー紡績機は一人で動かすものだったが、同じ時間でつむぎ車が生み出したものの少なくとも 6 倍を生産した。したがって、ジェニーが新しく一台入ると、つむぎ手は五人失業した。紡績機はこんどは、ジェニーよりはるかに生産高が高く、一人で動かせたので、さらに多くの人から雇用を奪った。ミュール紡績機は、生産高に比べてさらに必要な人手が少なかったから、同じ影響を持ち、ミュールに加えられたあらゆる改良ごと、スピンドルの倍増ごとに、雇用された労働者の数をさらに減らした。だがミュールの

\*1 A. ウレ医師 『大英帝国の綿製造業』、1856 年 エンゲルス注

\*2 E・ベインズ Esq 『大英帝国綿製造業の歴史』 エンゲルス注

スピンドル数の増加はあまりに大きかったので、これにより労働者の大軍がまるごと仕事から放り出された。というもつむぎ人一人が、子供数人を糸つなぎ人として使い、スピンドル 600 本を動かしたとしたら、その人物はいまやミュール二台に搭載した 14000 本から 2 万本のスピンドルを操れるので、大人をつむぎ手二人とかれらが雇っていた糸つなぎ人の一部が追い出される。そして自己駆動（自動）ミュールが紡績工場のきわめて多数に導入されてきたので、つむぎ手の仕事はすべて機械がやるようになっている。いまぼくの手元には、マンチェスターのチャーチスト公認指導者ジェイムズ・リーチの筆になる本がある\*<sup>3</sup>。著者は何年にもわたり各種の産業分野で働いており、工場や炭鉱でも働き、ぼくと個人的にも知り合いで、正直で信頼できる有能な人物だと思われる。政治的な立場の結果として、リーチは労働者自身が集めた各種工場の詳細な情報を大量に持っており、各種の表を公表をしているが、それを見ると 1841 年には 1829 年と比べて 35 工場で、ミュールのつむぎ工員は 1083 人減っていたが、その 35 工場におけるスピンドルの数は 99,429 本も増えていたという。また（半自動の）紡績機がまったく入ったことがなく、最初から自己駆動（自動）紡績機だけの工場も五つあげている。スピンドルの数は 10 パーセント増えたが、つむぎ工員の数は 60 パーセント以上も減った。そしてリーチは、1841 年以来、紡績機の二層構造などの各種手法によりあまりに多くの改良が導入されたので、調査されたいくつかの工場では、工員の半数がクビになったという。ある工場だけでも、しばらく前にはつむぎ工員が 80 人雇われていたのに、いまはたった 20 人しか残っていない。他の工員たちはクビになったか、子供の作業を子供の賃金でやるようにまわされている。ストックポートについてリーチは似たような話をしている。1835 年にはつむぎ工員 800 人が雇われていて、1843 年にはそれがたった 140 人になっていた。だがこの間の過去 8、9 年に、ストックポートの製造業者は大幅に増えているのだ。似たような改良が紡績前処理機でも見られ、操作員の半分がいまやクビになった。改良型の前処理機が導入されたある工場では、八人中 4 人の工員がクビになり、残った工員 4 人についても雇い主は賃金を八シリングから七シリングに減らした。同じプロセスが織物産業でも興っている、力織機は、手織り分野を次々に制圧していったし、手動織機よりはるかに多くを生産できるうえ、織り工員一人で織機二台を見られるので、大量の労働者がこれに取って代わられた。そして各種の製造業、たとえば亜麻や羊毛紡績、絹紡績などでも話は同じだ。力織機もまた、羊毛やリネン織りなどを次々に支配しつつある。ロックデールだけでも、フランネルや他の羊毛織り産業で、手動織機よりも力織機のほうが多い。これに対してブルジョワジーは通常、機械の改善は生産費用を引き下げることで完成品をもっと低価格で供給し、そうした価格低下は消費を大幅に増やすので、失業工員たちも新設工場でやがて完全雇用を達成できるのだと答える\*<sup>4</sup>。ブルジョワジーは、製造業全体の発展に有利なある条件下においては、減税量が安い商品の価格低下はすべて消費を大幅に増やし、工場の新規建設をもたらすという点では正しい。だが主張の中でこれ以上のものはすべてウソだ。ブルジョワジーは、価格低下のこうした結果が生じて工場が新設されるまでに何年もかかるという事実を無視している。また機械の改良がすべて実際の仕事、力の使用をますます機械に頼り、したがって成人の仕事は単なる監督になってしまい、これはか弱い女性や子供ですら立派にこなせるものだし、その賃金は半分か三分の二だという点も黙っている。

\*<sup>3</sup> 『マンチェスター工員による工場からの頑固な事実』労働者階級により発行され献呈。著者 Wm・ラシュレー、ロンドン、オリヴァー。1844 年、p.28、他 エンゲルス注

\*<sup>4</sup> 『工場調査委員会報告』と比べてみよう 1887 年アメリカ版へのエンゲルス注

したがって成人男性は製造業の増加においてますます置き換えられてしまうのであり、再雇用されないことも触れられない。産業分野がまるごと崩壊したり、あまりに変わってしまっただけから勉強しなすなくてはならないことも隠されている。そして、児童労働の禁止が持ち出されたときに通常主張したがる、工場労働はなるべく早いうちに学習しないとちゃんと学べないのだという主張も隠している。改善プロセスは着々と進み、ある工員が新しい分野でなんとか落ち着いたら（それができればの話だが）その仕事さえ奪われてしまい、そしてそれと共にパンを獲得するため残された最後の安定性すら奪われてしまうということも述べていない。だがブルジョワジーは機械改善の便益を被る。まだ古い機械がたくさん使われ、その改善がまだ一般に導入されていない初期の年月に大量投資をする資本機会を持っているのだ。そしてこうした改善と不可分の欠点についても目を閉ざさないでくれというのは、ブルジョワジーには荷が重いだらう。

機械の改善で賃金下がるという、労働者たちが何度も繰り返し続けてきた事実にも、ブルジョワジーたちは意気込んで反論している。ブルジョワジーは、単位作業の価格は下がっても、週の仕事についての総賃金はむしろ落ちるよりは上がっており、工員の条件も劣化するより改善していると頑固に主張する。だが週の総賃金もまた、多くの産業分野で機械の改良にともない、引き下げられているのはまちがいないのだ。たとえば通称細糸つむぎ人たち（ミュールで細糸をつむぐ）は、確かに週30シリングから40シリングという高賃金を得ているが、これは賃金を高くしておく強力な結束を持つからで、それにこの仕事が長い訓練期間を必要とするからだ。だが粗糸つむぎ人たちは自動紡績機と競合しなければならず（細糸では自動紡績機がまだできていない）、結社もこうした機械の導入とともに崩壊してしまったので、とても低い賃金しかもらえていない。あるミュールつむぎ人は、週に14シリング以下しか稼げないと語っており、この主張は、粗糸つむぎ人たちは週に16シリング6ペンス以下しかもらっていないというリーチの発言とも一致している。リーチによれば、多くの工場で粗糸つむぎ人たちは、数年前は30シリング稼いでいたのに、いまでは12.5シリングかき集められれば上出来で、過去一年で平均でこれ異常は稼いではいないという。女子供の賃金の下落率ももっと低いかもしれないが、これは単に、もとがあまり高くなかったからというだけだ。女性数名、子持ちの寡婦たちを知っているけれど、週に8、9シリング稼ぐのに苦労している。そしてその一家はそれだけの金額ではまともな生活ができないということは、イングランドにおける生活の必要最低限の価格を知っている人ならだれでも賛成するしかない。機会の改善により賃金全般が引き下げられたというのは、工員たちの全員一致の証言だ。ブルジョワたちによる、労働階級の条件は機会により改善されたという主張は、工場地区における労働者たちのあらゆる集会において、偽りであるときわめて強烈に宣言されている。そして下がったのは相対賃金、つまり単位作業あたりの価格だけで、絶対賃金、つまりその週に稼ぐ絶対金額は同じままだというのが正しかったとしてもそこから何が導かれるだろうか？ 製造業者たちは、改善ごとに工員たちに自分の利得のほんのわずかな分け前すら与えることなく懐を肥やしているのを、工員たちはだまって見守るしかないということだ。ブルジョワは、労働者と戦うにあたり、自分の政治経済学における最も普通の原理すら忘れてしまう。別の時であればマルサスを金科玉条のごとく引き合いに出すのに、労働者を前にすると不安で叫び出すのだ。「機械の改良なしには、イングランドで増大した何百万もの人口はどこで職

を見つけなければならないのだ？」と\*<sup>5</sup>。機械とそれがもたらした産業の拡大なしには、そうした「何百万人」はそもそも世界にもたらされたり育ったりすることもなかったというのを、ブルジョワジーが熟知していないとでも言うようだ。！ 機械が労働者に与えた恩恵といえ一つだけ。それが労働者の頭の中に、機械がもはや労働者に逆らうのではなく労働者のために働くような手段となる社会改革の必要性を納得させた、という点だけだ。賢いブルジョワたちは、マンチェスターなどの街路を清掃する人々（とはいえこれですらいまや過去の話だ。この目的のための機械も発明されて導入されている）塩やマッチ、オレンジ、靴紐を道端で売る人々、あるいは乞食さえしている人々に、昔は何をしていたか尋ねてみるといい。そうすれば、そのうちかにかくの人が、自分のもと工場工員だったのが機械のために仕事をクビになったのだと答えるかわかるだろう。現在の社会状態の下で機械の改良の結果は、労働者にとっては、ひたすら危害をもたらすものであり、しばしば最高度に抑圧的なものとなるのだ。あらゆる新しい進歩派失業をもたらし、欠乏と苦悶をもたらし、それがなくても通常は「余剰人口」があるイングランドのような国では、失業は工員にふりかかる最悪の事態だ。そして、この人生における立場の不確実性というのは、何と意気消沈させ、不安をもたらす影響だろうか。それが機械の絶え間ない進歩の結果として労働者にもたらされるものだ。労働者たちはそんな影響なしでもすでに十分に危うい立場なのに！ 絶望を避けるためには、二つの方法しかない。内部でも外部でもブルジョワジーに反逆するか、それとも飲んだくれて全般的な道徳低下に陥るか。そしてイングランドの工員たちは、どちらに走るのにも慣れている。イングランドのプロレタリアートの歴史は、機械とブルジョワジーに対する何百もの蜂起を伝えている。そしてぼくたちはすでに、道徳の解体については語ったが、それ自体は絶望の別の形でしかないのだ。

最悪の状況は、進歩を見せている機械に対して競争しなければならない労働者に訪れる。かれらが生産する財の価格は、機械が創る似たような製品の価格に合わせて動き、機械のほうがもっと安上がりの方楽なので、その人間の競合は最低の賃金をもらうしかない。同じことが、古い機械の稼働に雇われていて、それが後の改良機械と競争しているような場面の工員すべてに起こる。そしてつらい目にあわされる者が工員以外にはいるだろうか？ 製造業者は古い機械を捨てたりはしないし、そこから生じる損失が続くのも放置はしない。こわれた機械からは何も作れないので、社会の普遍的なスケープゴートたる生きた労働者を締め付けるのだ。機械と競争しているあらゆる労働者のうち、最もひどい使われ方をしているのが、手動織機の綿織り人たちだ。最低のわずかな賃金しかもらえず、しかも重労働でありながら、週に10シリング以上稼げない状態となっている。布織りの分野は次々と力織機に制圧され、手動織機は他の分野でクビになった労働者たちの最後のよりどころなので、常に労働者が過密な状態にある。したがってここから、平均的な季節において、手動織機工員は週に6、7シリングも稼げればましなほうで、こんな金額を稼ぐのすら、一日十四時間から十八時間も織機に向かわねばならない。ほとんどの布製品は湿度の高い織機部屋でないと横糸が切れてしまうし、この理由もあって、そして一部は貧困のせいでまともな居室にお金が出せないこともあって、こうした織機工員の作業部屋は通常は木の床や舗装した床がない。ぼくはこうした布織り人たちの居室をいろいろ尋ねてみた。遠く、醜悪な中庭や路地にあり、通常は地下室に置かれているのだ。こうした手動織機の工員たち六人が、数人はお互いに結婚して、作業室1、2室と大きな寝室一室の小屋

\*<sup>5</sup> これは『工芸と職人』でJ・C・サイモンズが投げかけた質問だ。 エンゲルス注

に同居している。その食事はほとんどジャガイモだけで、ときにはオートミール、牛乳はめったになく、肉が出ることはほとんどない。その大多数はアイルランド人かアイルランド出身だ。そしてこうした貧しい手動織機の織り手たちは、危機になれば常に真っ先に苦しむことになり、そこから回復するのは最後で、工場システムに対する攻撃に反撃する際の足がかりとしてブルジョワジーに利用されているのだ。ブルジョワは勝ち誇って叫ぶ：見てみる、こうしたかわいそうな生き物たちが貧窮する一方で工場の工員たちは栄えているではないか、これでも工場システムは悪いと言えるのか、と！ 主導織機の織り手たちをここまで恥知らずに押し潰したのは、当のブルジョワたちが保有する機械でないとも言うようではないか！ そしてブルジョワジーは、ぼくたちと同じくらいそれを熟知していないとも言うようだ！ だがブルジョワジーは自分の利害がかかっているのです、多少のウソやちょっとした偽善などどうでもいいのだ。

機械がますます人間の仕事を置き換えるという事実をもっと細かく検討してみよう。人間の労働は、紡績でも布織りでも、主に切れた糸をつなぐことだ。機械はそれ以外のすべてをやる。この作業は筋力は必要とせず、柔軟な指さえあればいい。したがって男性は必要ないどころか、手に筋肉がつきすぎているために、女子供よりもこの作業には向いて織らず、したがって自然に女子供に取って代わられている。したがって、腕力、つまり力の発揮が蒸気や水力に置き換われれば、それだけ男性の雇用は必要なくなる。そして女子供のほうが安く働かし、男性よりもこうした分野では活躍するから、女子供が男にかわることとなる。紡績工場では、紡績機はほぼ女性や女の子だけが配備されている。ミュールには男性一人が大人の紡績工となる（自動機械の導入でそれすら不要になる）。そして糸つなぎ係が数人いて、これは通常は子どもや女性、ときには18歳から20歳の若者で、ごくたまに他の仕事をクビになった高齢の紡績工<sup>\*6</sup>がいる。力織機では、15歳から20歳の女性が主に雇われ、男性はごく少数だ。だが男性も、21歳になってまだこの仕事に残っている人はほとんどいない。準備用の機械ですら、女性しか見つからず、あちこちで梳綿用の枠を清掃して研ぐのに男性が数人いるだけだ。これに加えて、工場はどこも大量の子どもを雇っている。梳綿用の繊維はぎ取り人として、ポピンの装着と取り外しを行うためだ。そして男性はごくわずかに監督として雇われており、蒸気機関のエンジニア、大工、荷運び人などもある。でも紡織工場の実際の仕事は女子供がやっているのだ。これを製造業者たちは否定している。

製造業者たちは、機械が成人男性工員を置きかえないと証明する入念な表を発表した。この表によると、雇われた工場労働者のうちむしろ半分以上、正確には52パーセントが女性で、48パーセントは男性、そしてその工員のうち半数以上が18歳以上だった。ここまでは結構。だが製造業者たちはとても注意深く、成人のうち何人が男性で何人が女性かは明かさないようにしている。そしてこれこそまさに問題の点なのだ。これ以外にも、この表は明らかに機械工、エンジニア、大工など、工場でどんな形であれ雇われている男性を数えており、事務員すら含んでいるかもしれないのだが、それでもまだ真実全体を語るだけの度胸がない。こうした刊行物は一般に、ごまかしや歪曲、歪んだ主張が入ってお

<sup>\*6</sup> 1845年10月工場査察官L・ホーナー報告：「ランカシャーにおける綿工場のいくつかの部門では賃金についてきわめて異常なことが生じている。何百人もの若者、通常は20歳から30歳までの人々が、糸つなぎ人などとして雇われているのだが、週に8、9シリング以上は受け取っていないのである。同じ屋根の下で13歳の子供たちは5シリング稼いでおり、16歳から20歳の若い女性が週に10-12シリングを得ている。」 エンゲルス注

り、平均の計算は、何も知らない読者にはいろいろ証明しているように見えるが、事情のわかった読者には何も教えてくれないようなものだし、最も重要なポイントに関する事実は隠されている。そしてそれが証明しているのは、関連した製造業者たちの利己的な盲目性と、堂々ぶりの欠如でしかない。アシュレー卿が下院で行った、1844年3月15日の十時間法案審議の演説での主張をいくつか検討しよう。ここでかれは、工員たちの性別と年齢について述べており、これは未だに製造業者たちに反駁されていない。その発言は、イングランド製造業のごく一部をカバーしているだけなのだ。1839年に大英帝国で稼働していた工員419,590人のうち、192,887人、つまり半分近くが18歳以下であり、242,296人いた女性のうち、112,192人が18歳以下だったのだ。したがってここから、18歳以下の男性工員は80,695人、成人男性工員は96,599人、つまり全体の四分の一にも満たない数だったことがわかる。女工の比率は、綿工場では、561/4パーセント、羊毛工場では691/2パーセント。絹工場では701/2パーセント、亜麻紡績工場では701/2パーセントだ。この数字を見れば成人男性のクラウディングアウトはよくわかる。だがこの事実の裏付けがほしければ、手近な工場にいけばすむ。したがって必然的に、既存の社会秩序の逆転がかれらに強制されることで、労働者にとってきわめて破壊的な結果をもたらされることになる。女性の雇用はすぐに家族を分裂させる。というのも妻が毎日工場で12時間も13時間も過ごし、夫も同じだけの時間を同じ工場か別の工場で費やすなら、子どもはどうなるだろう？ 雑草のように育つしかない。週に1シリングか18ペンスで保育に出され、どんな扱いを受けるかは想像がつく。したがって子供たちが犠牲となる事故は、工場地区ではひどい水準にまで激増する。マンチェスター検死官の一覧<sup>\*7</sup>が9ヶ月間について述べた一覧は以下の通り。火傷での死亡69件、溺死56件、墜落死23件、その他死因67件、つまり事故死総数215件だ<sup>\*8</sup>。これに対してリバプールの非製造業地区では、12ヶ月間で死亡事故はたった146件となっている。どちらの数字も鉱山事故は除外してある。そしてマンチェスター検死官はサルフォードでは権限がないので、比較のために挙げた両地区の人口はほぼ同じだ。『マンチェスターガーディアン』は、ほとんど毎号のように、火傷による死者を一、二件掲載している。母親の雇用により幼児の死亡率全般が上がったというのは自明であり、これは悪名高い事実によってまったく疑問の余地がないものとなっている。女性はしばしば、出産後3、4日で工場に戻り、もちろん赤ん坊は置いていく。夕食時になると急いで帰宅し、子どもを食べさせて自分も何か食べるが、それがどんな種類の赤ん坊を生み出すかもまた自明だ。アシュレー卿は、何人かの女工の証言を繰り返している：

「M. H. は20歳で二人の子を持ち、幼いほうの赤ん坊がもうちょっと年配のもう片方の子どもに世話を受けております。この母親は朝五時のすぐ後に工場に向かい、家には夜8時に戻るので。一日中胸からは母乳が流れるので、衣服から母乳がしたたり落ちて有様」「H. W. は三人子持ちで、月曜の朝五時に家を出て、土曜の晩に戻ってくるのです。子どもの世話があまりに多く、朝三時までには寝られない。しばしばびしょ濡れであり、そのまま働きに出ざるを得ない」彼女はこう申しました。「あたしの胸はすさまじく恐ろしい痛みを生じていて、母乳でびしょび

\*7 『工場査察委員会報告』ホーキンス医師の証言、p.3 1887年アメリカ版へのエンゲルス注

\*8 1842年にマンチェスターの診療所に持ち込まれた事故のうち、189件は火傷によるものだった。そのうち死亡に到ったのが何件かは書かれていない エンゲルス注

しょなんですよ」

子どもをおとなしくさせるための薬物使用がこの悪名高い仕組みにより育まれ、工場地区では大いに広まっている。マンチェスターの主任登録官ジョンス医師は、この習慣こそがけいれんによる多数の死の主因だと考えている。妻の雇用は家族を完全かつ確実に解体してしまい、この解体は家族に依存した今日の社会においては、親にとっても子供たちにとっても、きわめて道徳劣化的な結果をもたらす。子供に対してまったく構ってあげられない母親、生まれてからの一年間で、最も普通の愛情込めた世話すら行う次官のない母親、それどころかほとんど赤ん坊にも会えず、本当の母親になれない母親は、どうしても無関心になり、それを愛情の欠けた見知らぬ者のように扱う。そんな条件下で育った子供は、後の家族生活にもまったく不向きとなってしまう、ずっと孤独に慣れてしまったので、自分自身が作った家族でも落ち着きを感じることはなくなり、したがってすでに全般的に労働階級で見られる家族の劣化にさらに貢献することになる。似たような家族の解体は、子供の雇用でももたらされる。子供たちが経験を積んで、親にとっての毎週の負担額以上に稼げるようになると両親に食事代や家賃を入れるようになり、残りは自分で使う。これが怒るのは通常、14歳か15歳くらいだ。言い換えると、子供たちは己を解放するのであり、両親の住居は単なる下宿屋と考え、後は自分の望みにしたがって他のところに好き勝手に移るようになるのだ。

多くの場合、妻の雇用により家族が完全に解体するわけではなく、むしろひっくり返ってしまう。妻が家族を養い、夫が家に残って子供の面倒を見たり、掃除や炊事を行う。こうした例は実にしょっちゅう起こる。マンチェスターだけでも、そうした家事に押し込められた男性は何百人もいる。他の社会条件は以前のままたまなのに、家族内だけでこうしたあらゆる関係が逆転することから生じる怒りは容易に想像がつく。いま手元には、イングランドの労働者からの手紙がある。送り主はリーズ市のムーアサイド、ウッドハウス、パロンズビル居住のロバート・パウンダーだ（ブルジョワジーはこの住所でかれを探してみるといい。正確な住所を挙げたのはまさにそのためだ）で、オーストラリア宛てに書かれたものだ。

かれは、職探し中の無職労働者がランカシャーのセントヘレンスにやってきて、旧友を訪ねたときの話を仕立てている。友人は、みすぼらしい湿った地下室にいて、家具はほとんどなかったという。

「そして我が哀れな友人がそこに入ると、哀れなジャックは火の近くにすわっていて、何をしてお思いで？　なんと、すわってヘアピンを使い妙棒のストッキングをつくらっていたのです。そして旧友が戸口にいるのを見たときに、それを隠そうとしました。でもジョー、というのはその友人の名前なのですが、それを見てしまい、こう言ったんです。『ジャック、汝は一体全体何をしておるのだね？　奥方はどこだね？　それが汝の仕事かね？』　すると哀れなジャックは恥じ入ってこう言うんですよ。「いやこれはオレの仕事じゃねえが、うちのかわいそうな女房は工場におるんだ。朝五時半に出かけて夜八時まで働かにならんし、その頃にはもうくたくたなので、帰ってきた頃には何もできず、だからオレもできる限り女房のためにやることをやらにならんのだ。だってオレは仕事がないし、もう三年も何も仕事がないし、生きている限り仕事になさそうだから」と言って、でっかい涙を流したんですよ。ジャックはまたこうも言いました。「こらじゃ女子供の仕事は

たっぴりあるが、男の仕事はないんだよ。男の仕事を見つけるより、道に百ポンド落ちてるのを見つけるほうが簡単なほどだ。でも汝やその他だれにでも、女房のストッキングをつくらっているのを見られるとは思わなかったよ。だってひどい仕事だから。でも女房は立ってもいられないくらいなんだ。女房もクビになるかもしれない、そうになったらオレたちどうなるか見当もつかん。というも、彼女が一家の大黒柱でオレが女房役というのは多少はましなくらいで、まったくひどいことだよ、ジョー。そしておいおい泣いて、また言うんです。「昔はこうじゃなかったんだがな」。ジョーは言いました。「そうだな、でも仕事になけりゃ、なんでよそにいかないんだ」。ジョー、できるうちに言っておきたいんだが、でもこれで十分にひどいんだ。結婚したときにはたっぴり仕事があったのは知ってるだろう、そしてオレが怠け者でなかったのも。「ああ、あんたは怠け者じゃなかったのは知ってる」。そしていい家具のある家にも入って、メアリーは仕事なんかせずにすんだ。オレ一人で二人分稼げた。でもいまや世界はさかさまだ。メアリーが働いて、オレが家に居残ることになり、子供の世話して、掃除洗濯、料理つくろいをするんだ。そして哀れな女房が夜に帰ってくるとくたくただ。汝にはわかるだろう、ジョー、別の生き方に慣れたオレにはつらいことだよ」「そうだな、つらいことだな」。そしてジャックはまた泣きだし、結婚なんかしなきゃよかたと言い、生まれてこなきゃよかったと言いましたよ。でもメアリーと結婚したときには、こんなことになるなんて思いもしなかったそうです。「この件でしばしば泣いたもんだ」とジャック。さてこの話を聞くとジョーは、工場やその雇い主や政府を呪い罵倒したそうで、それも子供時代から工場にいて学んだ罵倒すべてを口にしたとのことだ。

この手紙に描かれたものほどキチガイじみた状況をだれが想像できようか！ だがこの状況は、男の性を奪い、女性からはあらゆる女性らしさをうばいつつも男性に真の女性性を与えることはできないし、女性に真の男性性を与えることもできない。この状況は男女両性を、もっとも恥辱に満ちた形で貶めるものであり、それを通じて人間性をも貶めるものだ。これこそが、ぼくたちの大いに誉め称える文明の最終的な結果であり、自分の状況やその子孫たちの状況を改善しようという何百世代もの努力や苦闘の成果なのだ。自分たちの労働と苦勞がこんなふざけた結果になっていることについて、ぼくたちは人類や、さもなくば人間社会がこれまで救済をまちがった方向に求めていたことを認めねばならない。両性の役割のこれほど完璧な入れ替わりが起こるのは、両性がそもそも発端からまちがった立場に置かれていたからだとも認めねばならない。もし工場システムにより必然的にもたらされた、夫に対する妻の支配が非人間的なものであれば、妻に対する夫の完全な支配もまた非人間的なものだったにちがいない。もし妻がいまや、自分のほうが共通の所有物における大きな割合、いやそのすべてを供給するという事実に基づいて自分の優位性を主張できるのであれば、そこから必然的に導出されるのは、この共同での所有という仕組みはまったく真実ではなく合理的でもないということだ。というも家族の一人が攻撃的に、自分のほうが大きな割合を貢献したと勝ち誇ることになるからだ。もし現在の社会の家族がこのように解体されるのであれば、その解体は単に、根底においては家族というものを結びつけている絆というものが、根底においては家族愛などではなく、共同の所有という単なる架空のものを隠れ蓑にした、その下にある個人の利害に過ぎないということ

を示しているものに他ならない\*9。同じ関係が、明示的に宿賃を支払っておらずに両親を養っている子供たちについても存在する。ホーキンス医師は工場検討委員会報告書で、この関係がかなり一般的に見られるものだと証言しており、マンチェスターではそれが悪名高いほどに多いという。この場合、さっきの場合の妻たちと同様に、子供たちが家の主となり、アシュレー卿はこの一例を演説の中で挙げている。ある男性が、娘二人がパブにでかけるのを叱責した。すると娘二人は、自分たちはあれこれ命令されるのにはうんざりだと答えて、こう言ったそうだ。「まったくこんちくしょうめが、あんたなんかを養わなきゃいけないなんて」。そして自分の仕事からの収入を自分のために使おうと決意した二人は家族の家を出て、両親たちを運命に任せて置き去りにした。

工場育ちの未婚女性は、既婚者たちに比べて少しもマシというわけではない。九歳から工場で働いた少女は、家事などまったく理解していないのは当然であり、そこから当然わかるのは、女性行員たちは家の切り盛りについてまったく経験がなく不適任だということである。編み物も縫い物もできず、料理も洗濯もできず、その他火事の最も通常の作業すら馴染みがなく、面倒を見なければならぬ幼い子供ができると、それをどうやっていいのか、皆目見当がつかない。工場検討委員会報告書はこうした例を大量に挙げており、ランカシャーの長官だったホーキンス医師は、以下のように意見を述べている。

「少女は早期に無謀に結婚いたします。家庭生活の一般的な仕事を学ぶための時間も、手段も、機会もございません。そしてそうした知識を得たとしても、それを練習する時間がやはりまったくないので、(中略) 毎日12時間以上も子供の元を離れている若い母親がおります。その留守中に赤ん坊の面倒をだれが見るでしょうか? 通常はどこかの少女が高齢女性で、はした金で雇われており、その仕事ぶりは報酬に見合ったものでしかありません。あまりにしばしば、工場一家の住居は家庭ではないのです。それはときには地下室であり、料理も洗濯も清掃も、修繕もまともな生活もまったくなく、暖炉わきへ招くものもありません。これらを含む各種の理由から、特に幼児の命をもっとよく保存するために、いつの日か既婚女性はあまり工場で雇われないようになる時代がくることを望むと表明させていただきたい」

だがこれは悪の中でも実に軽いものでしかない。女性を工場で雇う道徳的な帰結はさらにひどいのだ。両性の各種年齢の人々を一つの作業室に集め、小さな場所に人々を密集させ、しかもその人々に知的、道徳的教育を一切与えないことの必然的な結果は、女性の性質の良好な発達に資するものではない。製造業者は、こんな問題に多少なりとも配慮する場合でも、何か醜聞的なことが実際に起こった場合にしか介入できない。墮落した人格を持つ人物画、もっと道徳的で、特にもっと若い人々に与える、永続的だがそれほど明瞭でない影響については、製造業者は見極められないし、その結果としてそれを防止することもできない。だがまさにこの影響のほうが被害が大きいのだ。工場での言葉遣いは、1833年の報告書において多くの証人が「不適切」「汚い」「劣悪」等々と評しているものだ。そ

\*9 既婚女性がどれほど大量に工場にいるかを見るには、ある製造業者が提供した情報を見ればよい。ランカシャーの412工場では、既婚女性が10,721人が雇われていた。これらの女性の夫たちのうち、工場に雇われていたのはたった5,314人だ。3,927人は他のところで雇われており、821人は失業しており、659人については情報が無い。言い換えると、工場一カ所につき、男性3人まではいかなくても2人は、妻の仕事で養われているということだ。 エングルス注

これは、大都市で大規模に行われているのをすでに見たのと同じプロセスが、小規模で行われていることになる。人口の集中は、それが大都市であろうと小さな工場だろうと、同じような人々に同じような影響を与える。工場が小さければその分だけ密集も大きく、接触も避けがたくなる。そしてその結果は望ましいものではない。レスターでの目撃者は、娘を工場にやるくらいなら乞食をさせると述べた。工場は完全に地獄の門なのだと。そして町の売春婦の大半がその状態になったのは、工場で雇われたせいなのだと。またマンチェスターのある証人は、「若い工場従業員のうち、十四歳から二十歳までの工員の四分の三が、身持ちのよくない状態であると躊躇なく主張したのだった」。コーウェル委員は私的な意見として、工場工員たちの道徳性は、労働階級一般の平均より少し下だと述べている。そしてホーキンス医師はこう述べる。

「性的な道徳性の推定は、数字に還元するのはほとんど不可能です。しかも私自身の観察と、私が会話をした人々の一般的な意見、さらには我々の証拠の本質を信用するのであれば、工場生活が若き女性の道徳性に与える影響について、きわめて残念な見方が頭をもたげることになるのです」

加えて、工場への奉仕は、他の奉仕すべてと同様に、いや他のものよりも高い水準で、初夜権を主人に与えるのである。この点でもまた、雇い主は従業員の人格や魅力に対する絶対権を持っているのだ。クビにするという脅しは、もともとどのみち大して貞操に重きを置いてはいない女子たちであれば十中九回、いや百中 99 回は、あらゆる抵抗を蹴倒すのに十分だ。主人が意地悪なら、そして公式報告はそうした例をいくつか挙げているが、工場はその主人のハーレムにもなる。そしてあらゆる製造業者がそんな力を行使しないという事実は、その女子たちの立場を少しも変えるものではない。製造業の草創期、従業員のほとんどが雇われたばかりで、教育も社会の偽善に対する配慮もなかった頃には、既得権の行使を邪魔するものなど何もなかった。

工場労働が女性に与える影響の正しい判断のためには、まず子供の労働を考え、それから仕事の性質そのものを考えることが必要になる。製造業の草創期から、子供は工場で働かされていた。当初はほとんど完全に機械が小さいという理由のためだったが、機械は後に大きくなった。救貧院の子供たちですら大量に雇われ、製造業者たちに何年にもわたり丁稚として貸し出されていた。まったく同じ宿舍と食事と服を与えられ、もちろん主人たちの完全な奴隷となって、もちろん極度の無謀さと野蛮さをもって扱われていた。すでに 1796 年には、この嫌悪を催す仕組みについての世間の反対が、パーシヴァル医師とロバート・ピール卿（閣僚の父親であり、かれ自身もまた綿製造業者だ）を通じてあまりに強烈に表明されたために、1802 年の議会は丁稚法を可決し、これにより最も悪質な邪悪は排除された。だんだん、自由労働者の競争がましてこの丁稚制度自体が消えた。工場は都市に作られ、機械はもっと大規模に作られ、作業室はもっと換気がよく立派なものになった。また大人や若者の仕事もだんだん増えていった。工場で働く子供の数はちょっと減って、働き始める年齢も少し上がった。いまでは、八、九歳未満の子供はほとんど使われていない。その後、後で見るように、国家権力が何度か介入して、子供たちをブルジョワの金銭欲から保護することになった。

労働階級、特に工員たちの子供の高い死亡率だけでも、乳児期にかれらが過ごすひどい状態の証明としては十分なものだ。そうした影響は、生き残った子供にももちろん作用しているが、悪条件に倒れる子供たちほど強力には働かない。最もいい場合でもその子たち

は病気がちとなり、あるいは成長がなにかしら阻害され、結果として心身の活力が平常以下となってしまふ。工員の9歳の子供で、欠乏、疎外、状況変化を、寒く湿った環境で不十分な衣服と不健全な住宅で過ごした者は、もっと健全な状況で育てられた子供による労働力を持つにはほど遠い。9歳という歳でその子は工場に送られて一日6.5時間(かつては8時間で、そのさらに前は12時間から14時間、ときには16時間だった)も働かされ、13歳になるまでそれが続く。その後は一日12時間労働が18歳まで続く。それまでの、人を弱らせる影響は相変わらずだが、そこに労働が加わるのだ。確かに9歳の子供は、工員の子供ですら、一日6.5時間労働でもやっていけるのは事実だし、ここから直接引き起こされるような成長への目に見える悪影響は指摘できないかもしれない。だが、そうした子が工場の湿った重苦しい空気の中において、しかも暑く湿っていることが多い環境におかれていることが、よい健康に貢献することはあり得ない。そしていずれの場合にしても、心身の発達だけに専念すべき子供の時代を、冷酷なブルジョワジーの貪欲さの犠牲にし、かれらを学校と新鮮な空気から引き離し、製造業者の便益のために酷使するというのは許し難いことだ。ブルジョワジーは言う。われわれが子供を工場で雇わなければ、どのみち発達に不利な環境に留まるだけではないか、と。だがこれは、ブルジョワがまず労働階級の子供たちを不利な環境において、それからそうした悪環境を自分の利益のために活用し、工場システムと同じくらい当のブルジョワジーたちの責任であるものを利用して、今日の罪を昨日の罪によって弁明しようというしているという告白でなくてなんだろうか。そして工場法がある程度はかれらの手を縛らなかったのであれば、この工場をひたすら労働階級のために建設したというこの「人道的」「博愛的」ブルジョワジーは、いかにこうした労働者の利益の面倒を見てくれたことだろうか！ 工場査察官にせつつかれる前にかれらがどのように振る舞っていたかを聴いてみよう。1833年の工場検討委員会報告において、かれら自身が認めた証言が、かれらを有罪とするであろう。

中央委員会報告は、製造業者たちは五歳の子供は滅多に雇わず、六歳だとそれが少し増え、七歳もかなりいるが、通常は8歳から9歳の子を雇うとのことだ。そしてその労働日は一日14時間から16時間労働であり、ここに食事時間や休憩時間は含まれない。製造業者たちは監督者たちが子供を殴り、濫用するのを許し、しばしば自らその活動に活発に参加した。あるスコットランド製造業者の事例が報告されている。この人物は16歳の逃亡工員を馬で追いかけて、無理矢理連れ戻し、その際に主人の馬がトロットする後を全速力で追わせて、しかも道中ずっと長い鞭でその工員を殴り続けたとのことだ。工員たちがもっと激しく抵抗する大きな待ちでは、もちろんこうしたことはあまり多くなかった。でもこの長時間労働ですら、資本家たちの貪欲さを満たすには不足だった。かれらの狙いは、建物と機械に投資した資本へのリターンを、ありとあらゆる手を尽くして最大にし、それらをできる限り稼働させ続けることなのだった。したがって製造業者たちは、夜間労働という恥知らずの仕組みを導入した。一部は工員たちを二群雇い、その片方だけでも工場すべてを埋め尽くせるくらいの数だ。その片方が日中十二時間働き、もう片方が夜十二時間働くのだ。これが幼い子供たちの体躯に与える影響は言うまでもなく、また若者や大人の健康にも大きな影響を与える。永続的な夜の睡眠不足によるものであり、これは日中どれだけ寝ても取り戻せないのだ。神経系すべてが乱され、体躯全体が疲労して虚弱化するのが不可避の結果となり。それにより飲酒と羽目をはずした性的耽溺の誘惑が生まれてしまふ。ある製造業者の証言では、夜間労働が自分の工場で行われていた二年間で、私生児の数は倍増し、あまりに全般的な道德劣化が激しかったので、夜間労働を諦めざるを得

なくなったとのことだ。他の製造業者はもっと野蛮で、多くの工員が週に何回か、まとめて30、40時間働くように要求し、ほんの数時間の睡眠時間しか与えなかった。というのも夜間シフトは完全なものではなく、工員の一部だけを置きかえるように計算されたものだったからだ。

委員会の報告でこの野蛮さに触れたものは、これに関係するものでぼくが知っているものすべてを上回るものだ。そこで述べられているような劣悪な行動は、他のどこでも見られない。それでもブルジョワたちは絶えず、この委員会の証言を自分自身に有利なものとして使うのをこれから見ることになる。こうした残虐行為の結果はかなりすぐに明らかとなった。委員たちは自分たちの前に片輪の群れが登場したという。そうした障害は長時間労働から生じたものだったのだ。この体躯湾曲は、通常は脊椎や脚の湾曲という形で生じ、リーズのMRCSであるフランシス・シャープは以下のようにそれを描写している。

「リーズにやって参りますまで、私はこのような大腿骨下部の端の独特な曲がりを見たことはありませんでした。最初はクル病を疑いましたが、その出現頻度、特にクル病が子どもを襲う時期（八歳から14才）を過ぎた年齢で生じている頻度と、それがかれらの工場労働開始以後に生じたと発見したことで、すぐに私の見解は変わりました。いまではこうした症例を百件近くも診たでしょうか、そしてそれが過大な労働のせいだとほぼ断言できます。私の知る限り、その全員が向上に所属し、当人たちもまた自分たちの病状をこの原因のせいだと述べているのです」「背骨の歪曲は、明らかに長時間立った状態での労働のせいであり、その県数は三百を下ることはないでしょう」

まさに同じなのが、リーズの病院で18年も医師を務めてきたヘイ医師の証言だ。

「工場働く人々の間では背骨の病気がきわめて多発いたします。その一部は純粹に労働のせいです。他は、もともと虚弱だった体質や、ひどい食べ物で虚弱化した身体に労働が加わったせいで生じたものです。四肢の歪曲が背骨の病気よりもっと頻発しているようでした（中略）膝が内側に曲がり、足首の軟骨の弛緩がきわめて多く盛られ、また大腿骨の歪曲も頻発しています。大腿骨の先端部が異様に肥大化して大幅に歪んでいます。そしてこうした奨励は、長時間労働が普通だとされる工場や製造所から生じているのがわかったのです」

ブラッドフォード市の外科医ビューモントとシャープも、同じ証言をしている。ドリンクウォーター、パワー、ルードン医師による報告もこうした障害の事例を多数含んでおり。またタフネルとデヴィッド・バリー卿の報告書は、こうした点をあまり見てはいないのが、一つ例を載せている。ランカシャーの委員であるコウウェル、タフネル、ホーキンスの報告は、工場システムによるこうした身体生理的な結果の側面をほぼすべて無視しているが、片輪の数に関してこの地区はヨークシャーに比肩するものだ。ぼくがマンチェスターに出かけるときにも、ほぼ必ずそうした片輪3人か4人に出会う。まさにここに描かれたような脊椎と脚の歪みを示しており、それを間近に観察できることも多かった。いま挙げたヘイ医師の記述にずばり対応する人物を一人、個人的に知っているけれど、この人物はペンドルトンのダグラス氏の工場でこうした症状になったという。この工場は、かつては毎夜毎夜の超実感労働のため、工員たち全員の間でうらやましからぬ悪名を轟かせていたのだ。こうした片輪の障害がどこから来ているのかは、一目でわかる。膝が内

側と後ろ側にまがっており、足首は歪んでむくみ、脊椎はしばしば前傾しているか片側に曲がっている。だがその頂点に座しているのは、マクレスフィールド絹地域にいる慈善的な製造業者様たちだ。かれらは、何と五歳、6歳くらいから、最も若い子どもを雇っている。タフネル委員の追加証言の中には、あるライト工場長なる人物の証言が見られる。この人物の妹は二人ともきわめて恥ずかしい形で片輪となっており、このライト氏はいくつかの通りにいる片輪の数を数えたのだった。そうした通りの一部は、マクレスフィールドでも屈指の清潔で美しい通りなのだ。タウンレー通りには10人、ジョージ通りには5人、シャーロット通りには4人、ウォーターコッツには15人、バンクトップは3人、ロード通り7人、ミルレーン12人、グレートジョージ通り2人、救貧院では二人、パークグリーンは一人、ベックフォード通り2人。その家族たちはみんな、片輪がそのようなのは絹をよりあわせる工場における過大労働の結果なのだと全員一位で宣言したのだった。ある少年は、あまりに身体が歪んでしまい、もう階段を上れなくなったという。そして娘たちも背中や腰が歪んでいる。

他の身体変形もまたこの過剰労働から生じている。特に扁平足で、これはD・パリー卿のしばしば観察したものだが、リーズの医師や外科医も報告している。もっと強い体質、よい食事など、他のもっと有利な条件で若い工員たちがこうした野蛮な収奪の影響に抵抗できた場合でも、少なくとも背中や腰、脚の痛み、関節の腫れ、動脈瘤、腿やふくらはぎに大きく永続的な潰瘍は見られる。こうした影響は、工員たちのほとんどすべてで見られる。スチュアート、マッキントッシュ、D・パリー卿の報告には何百もの事例があがっている。実は、こうした症状の一部に苦しめない工員などほとんど一人もいなかったのだ。そして他の報告でも、同じ現象の発生がほとんどの医師により証言されている。

スコットランドを扱う報告は、それをまったく疑いのない形で述べている。ダンディーとダンファームラインの亜麻紡績工場と、グラスゴーやラナークの綿工場で、一日13時間労働は18歳から20歳の男女にとってすら、最低でもこうした症状を引き起こすのだ。

こうした影響のすべては、工場労働の性質によって簡単に説明がつく。これは、製造業者たちに言わせればきわめて「軽い」労働であり、まさにそれが軽いからこそ、活力を削ぐものなのである。工員たちはあまりやることがないのに、ずっと立っていなければならない。たとえば窓の縁やバスケットなどにすわったりする者は罰金を科せられ、この永続的な立ち姿、脊椎や腰や脚に対するこの上体部分の絶え間ない力学的な圧力は、どうしてもこれまで述べたような結果をもたらすのである。立っていることは仕事自体の必要性からくるものではない。ノッティンガムでは椅子が導入され、結果としてこうした症状は消えており、工員たちは一日の労働時間に不満を述べなくなっている。だが工員がブルジョワだけのために働き、その仕事を上手に行うかどうかにかまらぬ関心のない工場では、おそらく工員は製造業者にとって納得が行き利潤をもたらすよりも多く椅子を使うことになる。そしてブルジョワのために少しでも少ない原材料を費やすため、工員は健康と頑強さを犠牲にせねばならないのである。この長時間にわたり引き延ばされる上体を起こした状態と、工場の中で普通に見られる悪い空気とは、これまでの述べた身体の歪曲だけでなく、あらゆる活力の目に見える減少を引き起こし、その結果として、局所的ならず全般的な各種の影響が引き起こされるのである。工場の空気は一般に、湿気ていて暖かく、通常は必要以上に暑く、換気があまりよくない倍には、不純で淀み、酸素が不足して、ほこりと機械油の匂いに満ちている（機械油はほとんどあらゆるところで床に染みつき、浸透し、腐敗している）。工員たちは暑さのせいで薄着であり、気温が変動した場合にはすぐに風邪

を引く。すきま風はかれらには耐えられず、だんだん生じる無気力が、あらゆる肉体機能を蝕むのでそれが動物としての体温を引き下げる。その分は外から補わねばならず、したがって工員たちにとっては、あらゆる戸口や窓を閉めておくのが最も快適であり、暑い工場の空気の中にいるほうがいいのだ。だがそこで、外の寒く雨降りまたは霜の降りた屋外に出ることで急激に温度が変わり、しかも雨から保護する手段もなく、濡れた衣服を乾いた衣服に着替えることもできないので、この状況が永続的な風邪をもたらすことになる。そしてこれらすべてとともに、身体の筋肉のどれ一つとして、脚は例外かもしれないが、まともに動かしたり、本当に活動させたりすることがないのだということを考え合わせよう。またこうした条件をもたらす、活力を奪う弛緩する傾向に対抗するものはないことも考えよう。そして筋肉に強さを与え、体力に柔軟性と強度を与えるような影響が一切欠けていることを考えよう。さらに若い頃から、工員たちはあらゆる新鮮な空気の中のレクリエーションが与えられていないことを考えよう。すると、『工場報告』における医師たちのほとんど全員一致の発言として、病気への抵抗力が大幅に低下していること、活力の大幅な減退、精神力や体力の絶え間ない弛緩が指摘されているのもまったく不思議とは思えなくなってしまう。D・バリー卿の発言をまずは聞こう：

工場労働が工員に与えるよからぬ影響は以下の通りである。「(1) かれらの心身活動を、普遍の止まることのない力で動く機械のペースと背一角にあわせて動かさなくてはならないという不可避の必然性。(2) 不自然なまで長時間にわたり、またあまりに素早く繰り返される、状態を起こした姿勢の継続。(3) 睡眠剥奪」(あまりに長すぎる労働時間の結果として、脚の痛みと全般的な肉体の衰え)。「こうした原因にさらに加えて、低く混雑したほこりっぽいまたは湿った部屋、濁った空気、暑い大気、絶え間ない発汗もしばしば加わる。したがってこのため、特に男の子はしばらく工場で働いた後では、そのように雇用されていない男の子たちと比べて例外はほとんどなく 男の子時代のバラ色のふくよかさを失い、青白く痩せた体つきになるのである。職人の工房で、土間にはだして立っている空引き糸担当少年ですら、工員の少年よりもずっと外見を維持しやすい、なぜならこちらはときどき新鮮な空気を味わえるからである。「だが工員は食事時間以外は一瞬たりとも休憩を得られず、自ら努力しなければ決して外気に触れることはない。あらゆる成人男性紡織人は青白くやせている。かれらは食欲不振と消化不良に襲われている。あらゆる紡織人は、子供時代からずっと工場育ちであり、そのうち背の高い頑健な男性がほとんど、いやまったくいないことを見れば、こうした生活形態は男性的な肉体の発達に不都合であると結論しても差し支えなからう。男性に比べて女性は、工場労働による外見の衰退はずっと少ない」(これはごく自然なことだ。だがこれから、女性も独自の病気を持っていることを示そう)

またパワーもこう述べる。

「工場システムによりブラッドフォードでは大量の身体異常が発生しているという信念を、私は一切の躊躇なく述べる。(中略)長く継続的な労働が身体づくりと四肢に与える影響は、実際の異常で示されるだけではない。そのもっと広く見られる指標は、成長の抑制、筋肉の弛緩、華奢な身体つきに見られる」

また、すでに引用したリーズの外科医 F・シャープ氏も述べている<sup>\*10</sup>。

スカーボローからリーズに引っ越したとき「リーズの子供たちの全般的な外見は即座に、スカーボローや隣接地域で見たものと比べ、ずっと青白く、また体力もずっと劣るものに見えた。またその多くは、年齢のわりに発育が遅いように見えた（中略）瘰癧、肺病、腸の病気、消化不良も無数に生じており、これは専門家として、同じ原因によるものだということを私はまったく疑問視していない。その原因とは」工場労働である。「身体の気力は、きわめて長時間の労働で弱められたと思っており、それが多くの病気の基盤となっていると私は考える。田舎から工場に加わる人々がなければ、工場の人々はすぐに衰弱してしまうだろう」

またブラッドフォードの外科医ビューモント氏もこう述べる。

「私はまた、ここやその周辺の工場での労働システムが、全身の特異な弛緩をもたらす主原因となっており、それが子どもたちを流行伝染病にきわめて弱くするか、医学的な症状を引き起こし安くしてしまうと考えている。（中略）こうした工場のほとんどにおいて、もっと全体的な規制が必要だと考える。それは換気や清潔さの面での規制だ。私の医学という臨床が豊富な経験を与えている、悲惨な影響に対する特異な脆弱性に対して大幅に生産性をそれはもたらすことだろう」

似たような証言がヘイ医師からも得られている [ヘイではなく、ウィリアム・シャープ・ジュニアである（『工場調査委員会』第二報告書、1833, C. 3, p. 23)]:

(1) 「私は最も有利な状況下の工場システムが子どもの健康に与える影響を観察する機会を得た」(ブラッドフォードのウッズ工場という、この地区の中で最高の工場で、かれは工場の勤務医だった)。(2) 「こうした有利な条件下にあってすら、その影響は確実に、そして大幅に障害をもたらすものになっていた。(3) 1832年の間、ウッズ工場で雇われた子供たちの五分之三は、私の医療支援を受けた。(4) もっとも大きな傷害をもたらす影響は、身体障害の多さではなく、虚弱、病弱な体質が蔓延するということである」(3) このすべては、ウッズにおける児童労働時間が十時間にまで引き下げられたことで大幅に改善された。

こうした証言を引用しているコミッショナーのロウドン医師自身もこう述べている:

「子供たちがきわめて不適切かつ残酷なまでに長時間の労働を毎日強いられていることは明らかに示されたと思う。そして大人たちさえ、どんな人間も堪え忍べるとは思えないほどの労働量を強いられている。；この結果として、多くが早死にしている。多くが生涯にわたり永続的な影響を受けている。そして生き残った人々の悲惨な身体から生まれてくる子孫が障害を持つというのも、生理学的に考えて、あまりに根拠がありすぎることである」

そして最後にホーキンス医師がマンチェスターについてこう述べる。

「ほとんどの旅行者は、マンチェスター、それも特に工場階級でごく普通に見かけ

<sup>\*10</sup> イングランドの外科医は医師たちと同じくらい科学的な教育を受けており、外科手術の実務だけでなく医療も実践している。そして一般医、各種の理由から医師よりも好まれている。 エンゲルス注

られる背の低さ、やせ細り、青白さなどに驚くと思う。大英帝国だろうとヨーロッパだろうと、体格や顔色が国の標準からここまで明らかに劣化しているような町を他では見たことがない。既婚女性たちは、イングランドの妻の通常の特徴に比べて驚くほど小さい(中略)マンチェスターの工場で私が検分した少年少女たちは、きわめて多くが鬱屈した表情をしており、青白い顔色だったということを述べずには射られない。その表情や身ぶりには、幼い時代の快活さ、活力、楽しさなどがまったく見られなかった。少年少女ともに私の質問に対して、土曜午後や日曜には遊びたいとは思わず、単に静かにしていただきたいのだと答えた」

さらに、ホーキンスの報告書から別の箇所を追加しよう。これはここには半分くらいしかあてはまらない内容だが、でも他のどこで引用するのも似たようなものだ。

「飲酒、放蕩、浪費が工場労働者たちの人格における主要な欠点である。そしてこうした邪悪はすぐに現状のシステム下で形成された習慣にまでたどれ、そこからほとんど必然的に生じてくるものなのである。消化不良、心気症、倦怠がこの階級に蔓延しているのは万人の認めるところだ。単調な労働を12時間続けたら、何かの刺激を求めるのはあまりに自然なことだ。だが上で述べたような陰惨な状態をそこに加えると、酒への移行は急速で永続的なものとなる」

こうした医師やコミッショナーたちの証言に対し、報告自体は何百件もの証明を提供している。若い工員の成長が仕事により抑制されていることについては、何百もの証言が述べている。その一つとして、コウエルは日曜学校の17歳の若者46人の体重を示している。工場で働いている26人だと、その平均は104.5ポンドであり、工場で働いていない20人だと、平均は117.7ポンドだ。マンチェスターで最大の製造業者の一人で、労働者への反対運動の旗手であるロバート・ハイド・グレッグ自身が、あるとき次のように述べたように記憶している。もし物事が現状のまま続いたら、ランカシャーの工員たちはやがてピグミー種族になってしまうというのだ。兵員募集担当官は、工員たちは軍人としてはきわめて不適切であり痩せて神経質そうで、外科医たちにはしばしば不適格として却下されていると述べる。マンチェスターでは、身長5フィート8インチ(身長170センチ)の男子などほとんど得られないという。通常はたった5フィート6インチから7インチでしかなく(身長160センチ台後半)、一方農業地区にいけば、ほとんどの採用新兵は5フィート8インチを超えているという。

生活と労働の条件のため、人々はかなり早く消耗してしまう。そのほとんどは40歳でもう働けなくなり、45歳まで続けられる者はごくわずかで、50歳まで続くものはほとんどいない。これは体格の虚弱性のみならず、しばしばミュール紡績の結果として生じる視力低下の結果でもある。ミュールでは、工員は細かい並行した糸を中止せねばならず、これがきわめて目に負担を強いるのだ。

ハーブルとラナークのいくつかの工場で雇われている工員1,600人のうち、45歳以上は10人しかいなかった。ストックポートとマンチェスターでの各種工場で働く22,094人のうち、45歳以上は145人しかいない。この143人のうち、16人は特別なお情けで雇い続けられており、一人は子どもの仕事をしていた。131年の紡績人の一覧を見ると、45歳以上はたった7人で、その131人全員が職に応募したところ製造業者たちによって「年齢が高すぎる」ために断られた。だから高齢のため生活手段を失ってしまったのだ！

大製造業者アッシュワース氏は、アシュレー卿への手紙の中で、40歳近くなると紡績人たちは求められる糸の量を作れなくなり、したがって「ときには」クビになると認めている。40歳の工員を「年寄り」と呼んでいるのだ！ コミッショナーのマッキントッシュは、1833年報告で同じ形の表現を行っている。

「こんな形で子供時代を過ごさねばならないのを見て心の準備は出来ていたが、その加齢ぶりがあまりに全面的であるため、人々が自己申告する年齢はなかなか信じられないほどだ」

グラスゴーのスメリー外科医は、主に工員の治療をしているが、かれらにとって40歳は高齢だという。そして似たような証拠が他にも見つかる。マンチェスターでは、この工員たちに見られる早期の加齢はあまりに普遍的なので、40歳の男性はほとんどみんな、10歳から15歳も年上に見られるが、もっと豊かな階級では、男も女も、暴飲しない限り外見をきわめて良好に保っているという。

工場労働が女性の身体に与える影響も、目立つ特異なものだ。長時間労働による身体異常は女性のほうがずっと深刻だ。超時間労働はしばしば腰の異常を引き起こす。その一部は腰骨の位置と発達異常であり、一部は脊椎下部の変形となる。

ロウドン医師は報告書で述べる。「変形した腰や、ここで述べた他の病気を自分で申告した患者はいなかったが、その症状をみれば3羽あらゆる医療関係者はその原因として可能性が高いものが」若者の長時間労働であるとわかるし「それは専門家としても道徳水準的にもきわめて高い人々が記録しているのである」

工員たちが、他の女性よりももっとつらい出産を強いられるというのは、助産婦や産科医数名が証言している。また流産の確率も高い。さらに彼女たちは、工員すべてに共通する全般的な虚弱に苦しみ、妊娠しても出産直前まで工場で働き続ける。そうでないと賃金を失うし、あまりにはやく休みに入るとクビになりかねないからだ。女性が晩には工場で働き翌朝出産するのもよくあることだし、機械の最中で工場で出産するのも珍しくはない。そしてブルジョワジーの紳士たちはこれが特に衝撃的だとも思わないにしても、その細君たちは、妊婦を出産日まで一日12時間、13時間も働かせ（以前はもっと長かった）るよう間接的に強制するのが残酷な行為であり、悪名高い野蛮な行為だと認めるかもしれない。それも立った状態のままであり、しばしば身をかがめねばならないのだ。だがそれだけではない。もし女性たちが二週間で仕事に戻るよう強制されなければまだましなほうであり、みんな感謝して運がよかったと思うのだ。多くは8日後に工場に戻るし、中には3日か4日で戻ってフルタイムの仕事に戻る女性も多い。ぼくは一度、製造業者が監督員にこう尋ねるのを聞いた。「だれそれはまだ戻ってないのか？」「いいえ」「出産からどれだけ経った？」「一週間です」「彼女はどうか考えてもとっくに戻っていてしかるべきだな。あそこのあいつは三日で戻ったぞ」もちろん、クビになり、飢えるのを恐れて、彼女は弱った身体を押さえて痛みをこらえつつ工場に戻るのだ。製造業者の利益は、従業員が病気で家に留まるのを容認しない。病気になってはならないのだ。長い出産でじっと横になっていようと思っただけではいけない。そうでないと製造業者は、機械を止めたりその気高き頭を一時的な対処策のためにひねらなければならなくなるのだ。そしてそんなことをするよりも、製造業者は病気になった従業員をさっさとクビにする。聞いてほしい。

女子が重病になりほとんど働けない。「病欠を頼んだら？」「ええ旦那は休みを与えるのになかなか頑固なんです。四分の一日休むとクビになりかねないんです」

あるいはD・バリー卿はこう述べる。

労働者トマス・マクダートは微熱だった。「首になりかねないので四日以上は職場を離れられない」

これがどんな工場でも見られる。若い娘の雇用は、発達期に各種の異常をもたらす。一部の、特によい食事をしている女性の間では、工場の熱が発達プロセスを加速し、おかげである一例では13歳、14歳の女の子が完全に成熟してしまう。すでに引用したロバートソン（『工場調査委員会報告』の中でマンチェスター「有力」産婦人科医として挙げられていた）は、『イングランド北部医学外科学ジャーナル』で、11歳なのに完全に身体が発達したばかりか妊娠中の少女がいたと報告しており、そしてマンチェスターでは15歳で出産することも決して珍しくないとのことだ。こうした場合には工場の熱の影響は熱帯気候の影響と同じであり、こうした気候での場合と同じく、異常に早期の発達の裏返しとして、未熟な年齢と虚弱さが見られるのである。その一方で、女性の体格発達の衰退が見られ、乳房はほとんどかままったく発達しない。初潮は17歳か18歳まで起こらず、時には20歳になってからで、しかも激しい生理痛を無数の症状、特に貧血症とが伴う場合がきわめて多い。これは医学報告がすべて一致して述べていることだ。

こうした母親、特に妊娠中も働かざるを得ない母親たちの子どもは、強壯ではあり得ない。それどころかそうした子供たちは、この報告によれば、特にマンチェスターではきわめて虚弱だ。そしてたった一人、バリーだけはかれらが健康だと主張するが、それでもさらにかれが査察を行ったスコットランドでは、既婚女性はほとんどまったたく工場働いていないと付け加えている。さらに、その国の工場は（グラスゴーを例外として）ほとんどすべて地方部にあり、これは子どもの強壯化に大きく貢献する条件だ。マンチェスター近隣の工員の子供たちはみんな元気でバラ色だが、市内の子供たちは青白く腺病質だ。だが9年目になると、その頬の血の色はすぐに消え去る。みんな工場に送り込まれ、やがて田舎の子と都会の子を区別するのは不可能になるからだ。

だがこれらすべてに加えて、一部の工場労働は特に傷害が多いのだ。綿や亜麻紡績工場の多くの部屋では、空気は繊維質のh凝りだらけで、これは胸に影響をもたらす。特に梳綿やカーディング室での労働者でこれが顕著だ。これに我慢できる体質の人もあるが、そうでない人もある。だが工員に選択の余地はない。仕事がある部屋に行かねばならない。自分の胸が健康かどうかはおかまいなさだ。このほこりを吸い込む最もありがちな症状は吐血、大きな音をたてる呼吸、胸の痛み、咳、不眠だ。つまりぜんそくの症状すべてが、最後に肺結核の最悪の症例で終わるということだ。特に不健康なのは、若い少年少女が実施する、リネン毛糸の湿紡績だ、スピンドルから水がかれらにふりかかり、衣服の全部は絶えず濡れた。そして常に床にも水がたまっている。綿工場の折り重ねでもこれほどではないが似たような状態となり、結果として風邪や胸の症状が継続的に発生することになる。工員すべてしゃがれた粗い声の特徴だが、特に湿紡績と折り重ね工員はそれが顕著だ。スチュアート、マッキントッシュ、D・バリー卿はこの作業の不健全性と、ほとんどの製造業者がそれを実施する少女たちの健康にあまりに配慮していないことについて、きわめて強い用語で意見を述べている。亜麻紡績のもう一つの影響は、肩の特種な変形で、

特に右の肩甲骨が突き出してくるのだ。これは仕事の性質から出てくるものだ。この種の綿紡績と綿の旧型紡績はしばしば膝の皿の病気を引き起こす。膝の皿は、糸が切れたのをつなぐときにスピンドルのチェックに使われるのだ。こうした種類の仕事に共通するのは、しばしば身をかがめて低い機械に対してしゃがむことが多く、これは全般に工員たちの成長を抑止する効果を持つ。ぼくが雇われていたマンチェスターの綿工場の紡績室では、背の高い体格のいい女の子は一人として見た覚えがない。みんな背が低く、太って体つきの悪い、身体の発達全体という綿から見て明らかに醜い女の子ばかりだった。だがこうした病気や奇形とは別に、工員たちの手足はまた別の形で苦しむことになる。機械の間での作業は、大量の事故を引き起こし、程度の差はあれ深刻なものが多いが、するとこれはその工員が自分の仕事におおむね完全に不向きになってしまうという二次的な影響を持つ。最もありがちな事故は、機械にはさまれて指の関節が一つちぎれてしまうことで、それより少ないのは指一本丸ごとなくなる、あるいは手の半分またはすべて、腕一本なくなる、などだ。するとこうした事故の中であまり深刻でないものの場合にもしばしば破傷風が起こり、死が伴うことになる。身体の歪んだ人々に加え、多くの傷害を負った人々がマンチェスターではよく見かけられる。こちらは腕がなかったり腕の一部しかなかったり、こちらは足がなかったり、こちらは脚の三分の一がなかったり。戦役から戻ったばかりの軍隊の中で暮らしているような感じだ。だが機械の最も危険な部分は、シャフトからそれぞれの機械に動力を伝えるベルトの部分であり、特にそこにバックルが使われている場合だ（とはいえ、これは今はほとんど使われなくなっているが）。このベルトに捕まった人物はだれであれ目にもとまらぬ速度で上に運ばれ、頭上の天井と下の床にあまりにも強大な力でたたきつけられるので、体内にほとんどまともな骨が残っていないほどで、即死となる。1844年の6月12日から8月3日にかけて、『マンチェスターガーディアン』は以下の深刻な事故を報道している（同紙は些末な事故は報道しない）。6月12日には、マンチェスターで少年が破傷風で死亡、その原因は歯車で手が潰されたこと。6月15日には、サドルワースの若者が車輪に巻き込まれて、完全に砕かれて死亡。6月29日、マンチェスター付近のグリーンエイカース・ムーアで機械工房で働いていた若者が、砥石の下敷きになり肋骨二本折れてひどくずたずたになる。7月24日、オールドハムの少女がストラップに五十回も引きずり回された挙げ句に死亡。全身骨折。7月27日、マンチェスターの少女がブロワー（生の綿花を受け入れる最初の機械）に巻き込まれ、傷害を負って死亡。8月3日、デューケンフィールドでポピン回転工がベルトに巻き込まれ、肋骨すべて骨折して死亡。1842年にマンチェスター病院は機械によって生じた傷害や手足切断を962件治療している。一方、その病院地区内の他の事故件数は2,426なので、他の原因と機械による事故との比率は五対二ということになる。サルフォードで起こった事故はここには含まれていないし、また民間診療の外科医が治療したものも入らない。こうした場合、事故がその被害者をさらなる労働に不適格にするかどうかにかかわらず、雇い主がせいぜい医師に支払いを行うか、きわめて例外的な場合うには、その治療期間中も賃金を支払う。その工員が、働けない場合にその後どうなるかは、雇い主の知ったことではない。

『工場報告』はこの問題につき、雇い主はあらゆる事故について責任を負わせねばならない、というのも子供たちは適切な注意ができず大人たちは自分の利益になる場合にしか注意しないから、と述べている。だが報告を書いた紳士たちはブルジョワであり、したがって自分で矛盾することを述べ、後になって工員たちの過失による暴挙の問題について各種のたわごとをもちださずにはいられないのだ。

問題の状況はこういふことだ。子どもが注意できないのなら、子どもの雇用は禁止されるべきである。大人が無謀な行為をするのなら、その人々は大きくなりすぎた子どもで、危険性を十分に理解できるだけの知性の水準に達していない。そしてこれの責めを負うべきは、かれらを知性が発達できないような状況においておくブルジョワジー以外にはあるまい。あるいは機械の設置が不備なのであり、まわりに柵を作るべきであり、その供給もブルジョワジーの負担になるべきである。あるいは工員たちが、直面している危険の脅威よりも大きな誘因にさらされているということだ。賃金を稼ぐために急いで働かねばならず、注意を払う暇がなく、そしてこれについても責めを負うべきはブルジョワジーだ。たとえば多くの十個は、工員たちが動いている機械を掃除しているときにおこる。なぜか？

そうしないとブルジョワジーは、機械が動いていない休憩時間にその機械の清掃を工員にやらせるからであり、労働者はもちろん自分の休憩時間を少しでも犠牲にしたいとは思わない。自由時間はすべて労働者にとって実に貴重なので、それを少しでもブルジョワのために犠牲にするよりは、自分の命を週に二回危険にさらすのだ。雇い主が、機械の清掃に必要な時間を勤務時間の中で設定すればいい。そうすれば、工員は二度と動いている機械を掃除しようなどとは思いつかないだろう。要するに、どの観点から見ても、責めを最終的に負うべきなのは製造業者であり、そして製造業者は最低でも、片輪になった工員の一生にわたる扶養が義務づけられるべきであり、また事故に続いて被害者が死んだ場合には、被害者の家族の扶養も義務づけられるべきだ。製造業の最初期には、事故の比率は現在よりはるかに高かった。というのも機械が劣ったもので、小さく、もっと密集し、ほとんどまったく柵で囲われていなかったからだ。だがこれまでの事例が証明するように、事故比率はいまだにかなり高く、ある単一の階級の利益のために、これほどの身体欠陥や傷害を許容し、これほど多くの生産的に働く人々を、ブルジョワジーに奉仕している中で、ブルジョワジーの失策のために怪我をしたからという理由で欠乏と飢餓に追いやるという状態について、深い疑問を引き起こさずにはいられない。

憎悪に満ちた製造業者たちの金銭欲のみが生み出した病気の見事な一覽だ！ 子どもを産めなくなった女性、奇形児、虚弱な人々、押し潰された四肢、世代丸ごとが破滅させられ、病気と衰弱を負わされている。これが純粋に、ブルジョワジーの財布を満たすためなのだ。そして個別事例の野蛮さを見よう：たとえば子どもが監督者たちによりベッドの中で裸でつかまえられ、殴り蹴りして工場に連れて行かれ、服は腕にまで引っ張りあげられ、眠気はげんこつで吹き飛ばされ、それでも仕事中に眠ってしまい、そしてある哀れな子どもが監督のかけ声で寝たまま飛び上がって、機械がすでに止められているのに自分の仕事の動きを機械的に行ったりしたそうだ。疲れすぎて家に帰れない子供たちが、乾燥室の羊毛の中に隠れてそこで寝ようとして、鞭でなぐらないと工場から追い出せなかったそうだ。何百人もの子供たちは毎晩家に帰ってきてあまりに疲れているので、眠くて食欲もないから夕食も食べられず、そして両親たちは子どもたちがベッドの横でひざまずき、お祈りをしている間にそのまま眠ってしまったのを見つけたそうだ。こうしたものすべてを読み、そしてこれ以外に百もの悪徳と悪行をこの一冊の報告書だけで読むことができる。これはすべて宣誓下の証言であり、数人の目撃者によって裏付けられ、コミッショナーたち自身が信頼できると宣言した人々により供述されているのだ。これがリベラル党の報告書、ブルジョワの報告であり、以前のトーリー党の報告書を覆し、製造業者たちの心の純粋さを回復するために作られた報告書なのだ。そして当のコミッショナーたち自身がブルジョワジー側に経っており、こうしたものすべてを自分自身の意志に反して報告している

のだ。それを考えたとき、慈善だの自己犠牲だのを自慢してみせつつ、実はその唯一の目的が財布をいっぱい満たすことでしかない階級に対し、怒りと軽蔑が全身に満ちる以外に何ができようか。一方、ブルジョワジーたちが身ずら選んだ使徒たるウレ医師の口を通じて語るのを聞こうではないか。ウレ医師は著書『製造業者の哲学』で、労働者たちは自分たちの犠牲と賃金とは何の比例関係もないと言われ、主人と従業員との良好な相互理解がこれで阻害されるのだと述べている。この代わりに、労働者たちは熱意と生産性を持って自分を売り込むように頑張るべきであり、主人たちの繁栄に大喜びすべきだったというのだ。そうなればかれらは監督や上官になり、いずれはパートナーにもなって、それにより（ああ、叡智よ、お前はハトのように語る！） 「同時に自分の仲間たちの労働の、市場における需要を高めたことになる！」

「工員たち間のまちがった見方からもたらされた、暴力的な衝突や操業中止がなければ、工場システムはもっと急速かつ有益な形で発達したはずだ」

これに続いて、工員の抵抗精神についての長ったらしい恨み言が続き、そして最高給の労働者である細糸紡績人のストライキについては、以下のようなおめでたい主張が行われる：

「実は、かれらが賃金委員会を暢気に維持して、その屋内労働にとってはあまりに豊かで興奮をもたらす食事により不安病へと自らをぜいたくにも駆り立てるのを可能にしたのは、かれらの高賃金だったのである」

ブルジョワが児童労働をどう描いているか聞こう。

「私はマンチェスターとその周辺地区の双方で多くの工場を訪問し、数ヶ月にわたり抜き打ちで紡績室に、しばしば一人で、一日の時間も変えて訪問したが、子どもに対する体罰は一件たりとも目にしなかった。いやそれどころか、不機嫌な子どもを一人として見たことさえない。みんないつも陽気で元気だった。そして自分たちの筋肉の軽い利用を喜び、その年齢に自然に備わった運動能力を楽しんでいた。産業の光景は、悲しい感情を喚起するどころか、私の心では、常に爽快に思えるのだった。ミュールのキャリッジが固定ローラービームから引き揚げられるにつれ、切れた糸の端をつなぎ合わせる子どもたちの器用さを目にするのは喜ばしいものだ。そして数秒間その小さな筋肉を動かした後で、のんびり休んで自分の好むどんな態度でも取り、やがて糸の伸ばしとより合わせがもう一度完了するまでその休みは続くのだ。こうした活発なエルフたちの労働はスポーツにも似ており、それを習慣づけることで、かれらは快適な俊敏さを獲得するのだ。自分の技能を理解している子供たちは、どんな見知らぬ人にも喜んでそれを披露する。一日の動労による疲弊とはいえば、みんな晩に工場を後にするときにはそんな様子を一切見せていなかった。というのも、彼らは即座にどんなご近所の遊び場でもスキップを初め、学校から帰る少年たちと同じくらいの敏速さで、お遊戯を始めたのだ」

いやそうでしょうかとも！ まるであらゆる筋肉の即座の運動が、硬直し弛緩して育てられた体躯にとって喫急に必要なものだとでも言うようだ！ ウレは、この一時的な運動の興奮が数分後に止まっているかどうかを確認するため待つべきだったのだ。それに、ウレはこうした上演が、5、6時間の労働後の午後だけにだけ見ているが、でも晩では見ていない

のだ！ 工員たちの健康についていえば、ブルジョワたちはここまで何ヶ所で引用してきた 1833 年報告を、こうした人々のすばらしい健康状態の証拠として使おうとするだけの厚顔さを持ち合わせている。断片的で歪曲した引用により、瘰癧など工員たちにまったく見られないと証明しようとし、工場システムにはあらゆる重病がまったくないのだという、確かに事実ではあることを述べている（かわりにありとあらゆる慢性病が見られるという点についてはもちろん隠している）。我々が友人ウレがイングランドの公衆に対して最も醜悪な欺瞞をごまかしてみせる図々しさを説明するためには、この報告が巨大なフォリオ版三巻の構成となっており、飽食したイングランドのブルジョワでそんなものを通読しようなどという者はいないということを理解せねばならない。さらに、ウレが 1833 年工場法についてどう述べているかを見よう。これはリベラル派ブルジョワジーにより可決されたもので、製造業者に対してはこれから見るように、きわめてお粗末な制限を課しているにすぎないものだ。この法律、特にその義務教育規定について、ウレは馬鹿げており製造業者に対する横暴な規制であり、これで 12 歳以下の子供はすべて雇用から排除されてしまうという。そしてその結果はどういうものだろうか？ その軽く有益な職業から追放された子供たちは、何の教育も受けられない。暖かい紡績室から冷たい世界へと追い出され、乞食と泥棒で食いつなぐしかない。工場と日曜学校における、どんどん改善する状況とは悲しいまでのコントラストとなる。慈善の仮面の下で、この法律は貧困者の苦勞をかえって強化子、良心的な製造業者が有益な仕事をするのを大きく阻害するか、ひょっとすると完全にそれを止めてしまうかもしれない。

工場システムの破滅的な影響は、かなり早い時期から一般の注目を浴び始めていた。すでに 1802 年の丁稚法については触れた。後に 1817 年頃、当時スコットランドのニューラークの製造業者だったロバート・オーウェン、後のイングランド社会主義創始者は、回想記や請願により、工員たち、特に子供たちの健康を保証する立法が必要だと主張して政府に呼びかけ始めた。故ロバート・ピール卿などの慈善家たちがオーウェンと力をあわせ、やがて 1819 年、1825 年、1831 年の工場法を確保したが、最初の二つのものは執行されることがなく、最後のものも部分的にしか執行されなかった。この 1831 年の法律は、J・C・ホプハウス卿の動議に基づいたもので、綿工場においては夜七時半過ぎから朝五時半までの間には 21 歳以下のものは一切雇用されてはならないと定めていた。そして、あらゆる工場では 18 歳以下の若者は、一日十二時間以上は働いてはならないと定めていた。土曜ならそれが九時間だ。だが工員たちは主人に文句を言おうものならクビになりかねなかったもので、この法はあまり事態を改善しなかった。工員たちにもっと抵抗力のあった大都市では、大規模製造業者たちは法に従おうという業界の取り決めを持つにいたった。でもここですら、田舎の雇用者と同じく、そんなものを気に掛けない連中はいた。一方、一日十時間労働制限を要求する声が工員たちの間で活発になった。つまり、18 歳以下の工員たちは一日十時間以上働かせてはいけないという法律だ。労働組合はアジテーションを通じて、この要求が製造業全般に広まるようにした。当時マイケル・サドラーが率いていたトーリー党の慈善的な派閥はこの計画にとびつき、議会で提出した。サドラーは工場システムの調査のために議会委員会を設け、この委員会が 1832 年に報告書を出した。その報告は強烈に党派性が強く、工場システムの強い反対者が、党の利益のためにまとめたものだった。サドラーはその高貴な情熱のおかげで、極度に歪んでまちがった主張にも平気でごまかされてしまった。そうした主張は、まさに質問の形態により証言者たちから引き出されたもので、確かに真実は含まれていたが、かなり偏向した形の真実なのだった。当

の製造業者たちも、自分たちを怪物扱いする報告書に腹を立てて、いまや公式の調査を要求した。厳密な報告書は、この場合には自分たちに有利になるはずだと知っていたのだ。ホイッグ党、正真のブルジョワたちがそれを牛耳っているのを知っていたからで、その人々は製造業者と仲が良く、製造業に対する一切の規制に反対しているからだ。おかげでかれらは、リベラル派ブルジョワで構成された委員会を設け、その報告書はこれまでほくも大量に引用している。この報告書はサドラーのものに比べると少し真実に近いが、真実からの逸脱方向はサドラーのものとは正反対だ。そのページでも、それは製造業者たちへの共感を述べ、サドラーの報告書への不信を語り、独立にアジテーションを行う労働者や十時間法支持者たちへの嫌悪を示している。労働者が人間にふさわしい生活を送る権利など一切認めていないし、独立した活動や独自の意見の権利も認めていない。十時間法案を支持するのは、子供たちのためだけでなく自分の利益も考えてのことだといって工員たちを非難している。そしてアジテーションを行う労働者をデマゴグ、悪意に満ちたよからぬ輩等々と述べており、つまりはブルジョワジーの側についた書き方になっている。そしてそれでも製造業者たちを完全に無罪放免にはできず、雇用者たちの肩に大量の悪名を背負わせることとなったので、この報告書の後ですら、十時間法案支持のアジテーション、製造業者への憎悪、製造業者に対する委員会のきわめて手厳しい糾弾は完全に正当化されるものとなっているのだ。だが一つだけちがいがあつた。サドラーの報告書は、製造業者たちが公然と隠すことなく蛮行に精を出していたと述べているが、いまやこの蛮行は主に、文明と人間性の仮面の元に行われていたことが明らかとなったのだ。それなのに、ランカシャーの医療コミッショナーであるホーキンス医師は、報告書の冒頭部分で明らかに十時間法案支持の意見を述べている。そしてコミッショナーのマッキントッシュは、自分の報告がすべての真実を含んではいない、と述べる。というのも工員たちに雇い主の不利になるような証言をさせるのはきわめてむずかしいし、製造業者たちも、工員たちの公憤のために大きな譲歩を余儀なくされるだけでなく、工場の査察の準備をして、掃除をしたり機械の速度を落としたりするからなのだ。特にランカシャーでは、かれらは労働室の監督官をコミッショナーたちの前につれてきて、その監督官が労働者のふりをして雇い主がいかに人間的か、仕事がいかに立派なものか、工員たちが十時間法案に対して無関心か、ときにそれを嫌がっていると証言するという手を使っている。だがこれは、まっとうな労働者ではない。自分の階級を見捨てて、もっとよい給料のためにブルジョワジーの手下となり、資本家の利益のために労働者と戦うようになった連中だ。かれらの利益は資本家の利益であり、したがってかれは、製造業者自身にも増して労働者に嫌われているほどだ。

だがそれでも、この報告書は製造業ブルジョワジーが従業員に対して示す、きわめて恥知らずな無謀さを十全に示すには十分だ。産業収奪システムの悪名高さすべてが持つ非人間性が全面的に表れている。この報告書において、働き過ぎがもたらした疾病や傷害と、製造業者たちの冷たい計算ずくの政治経済学とを比べて見るほど嫌悪を催すものはない。製造業者たちは、かれらがかくかくしかじかの数の子供たちを毎年片輪にするのを禁じられたら、自分たちは、そしてそれと道連れにイングランドすべてが、荒廃へと向かうと証明したがっているのだ。すでに引用したウレ医師の発言だけでも、これほど馬鹿げたものでなければその嫌悪感は一層強まったことだろう。

この報告書の結果として生まれたのが 1833 年工場法で、これは 9 歳以下の子どもの雇用を禁じ（ただし絹工場は除く）、9-13 歳の子どもの労働時間を週 48 時間か一日あたり 9 時間以下に制限し、14-18 歳の子どもは週 69 時間、あるいは一日あたり 12 時間を最大

とし、食事休憩として最大 1.5 時間を義務づけた。そして 18 歳以下の人物の夜間作業を完全に禁止する条項は継続した。14 歳以下の子どもは一日二時間の通学が義務づけられ、製造業者は工場外科医の年齢証明書と教師からの登校証明なしには子供を雇うことが禁じられ、処罰の対象とされた。これに対する補償として、雇用者は子供の週賃金から一ペニーずつ引き出して教師の支払いに充てることができた。さらに外科医や査察官が指名されていつでも工場を訪問し、工員の宣誓つき証言を得て、治安判事の前での訴追を通じて法を執行できるようになった。これこそウレ医師があれほど節操ない表現で罵倒していた法律なのだ！

この法律の影響、特に査察官の任命により、労働時間は平均で 12 時間から 13 時間に減り、子供の労働がなるべく減らされたということだった。これにより、最も劣悪な悪行の一部はほぼ完全に消えた。身体の変形はいまや体質の悪い人にしか生じなくなり、過剰労働の影響もずっと目立たないものになった。それでも、『工場報告』にはもっと細かい障害、たとえば足首のはれ、足腰背中 of 虚弱化と痛み、動脈瘤、下半身の潰瘍、全般的な衰弱、特に骨盤付近、吐き気、食欲不振と異様な飢餓感との交互到来、消化不良、心気症、工場のほこりや悪い空気による胸の症状等々が大量に掲載されており、そのすべてが J・C・ホブハウスの(1831 年の)法律にある規定通り一日最大労働時間 12 時間から 13 時間の工員たちに生じている。この点でグラスゴーとマンチェスターからの報告が特に注目値する。こうした症状は 1833 年法以後も続き、いまだに労働階級の健康を蝕み続けているのだ。ブルジョワジーの野蛮な利潤貪欲に、偽善的な文明的形を与えようという配慮がなされ、製造業者たちを法の力によって、あまりに目立つ悪行はしないように抑えようと努力がなされ、それにより連中のインチキ慈善をひけらかす自己満足の口実を与えようというわけだ。それだけでしかない。新しい委員会が今日指名されたら、事態は概ね昔と同じままだということがわかるだろう。思いつきめいた、通学の義務化について言えば、これはまるで中身が伴っていない。というのも政府がよい学校を提供できていないからだ。製造業者たちが教師として雇ったのは、消耗した旧工員たちで、その連中のもとに子供たちを一日二時間送ることで字面上は法律を守ったことになる。だが子供たちは何も学んでいない。そして工場査察官の報告だけを見ても(これは査察官の職務範囲に限られ、つまり工場法の施行の範囲内の記述に限られている)かつての邪悪がどうしても残っているという結論を裏付けるだけのデータは得られる。査察官のホーナーとサンダースは、1843 年 10 月と 12 月の報告で、子供の雇用を廃止したり大人の雇用により置きかえたりできるような各種の産業部門では、一日労働時間はまだ 14 時間から 16 時間、あるいはもっと長いと述べている。こうした部門の工員たちの中には、ちょうど法律の規定をぎりぎり越えただけの若者たちがたくさんいた。多くの雇い主は法律を無視し、食事時間を減らし、規定より長く子供たちを働かせ、その違反から生じる利潤に比べれば、科せられそうな罰金はごく少額だとわかっているのだから、見つかって訴追されるリスクを冒すのだ。特にいま現在、商売がことさら繁盛している時期には、雇い主たちはこうした点で大きな誘惑にさらされている。

一方、十時間法を求めるアジテーションは、工員たちの間でまったく衰えを見せてはいない。1839 年にはそれを求める声がかたもや大きくなり、サドラー亡き後でその後を継いだのは、下院ではアシュレー卿とリチャード・オストラという二人のトーリー黨員だった。特に推すトラーは、工場地区でずっとアジテーションを実施してきた人物であり、サドラー存命中もそのような形で活発に活動してきたので、労働者たちには特に人気

があった。工員たちはオストラを「善良な王様」「工場の子供たちの王様」と呼んでいて、工場地区でオストラを知らなかったり畏敬の念を抱かなかったりする子供は一人もいないし、かれが待ちにやってくるときに、歓迎にやってくる行列に加わらない子もいない。オストラは新救貧法にも大反対をして、このためソーンヒル氏により負債のため収監されてしまった。オストラはこのソーンヒル氏の地所に差配人として雇われており、借金があったのだ。ホイッグ党は何度も、借金を肩代わりするなど他のエサをちらつかせ、救貧法反対のアジテーションだけはやめてくれと提案したのだった。だが無駄だった。かれは牢屋に入ったまま、工場システムと救貧法を糾弾する『フリート文書』を刊行したのだった。

1841年のトーリー政権は、再び工場法に注目した。内務大臣のジェイムズ・グレアム卿は1845年に、児童の労働時間を6.5時間に制限する法案を提案し、また登校義務の実施をもっと有効にしようとした。これとの関連で重要だったのは、学校もましなものを提供しゆおうとしたことだ。だがこの法案は、反対者の嫉妬によって暗礁に乗り上げた。というのも、花退社の子供たちには宗教教育は義務づけられていなかったものの、そこで提供されていた学校は、国教会の全般的な監督下に置かれることになっており、聖書が一般的な図書とされ、したがってあらゆる指導の基盤には宗教が置かれ、これを見て反対者たちは自分たちが脅かされていると思ったのだ。製造業者とリベラル派はおおむねかれらと手を組み、労働者たちは教会問題で分裂し、したがって力を持てなかった。法案反対者たちは、サルフォードやストックポートなどの大製造業町では劣勢となり、他のマンチェスターなどでは労働者たちを恐れて法案の一部についての攻撃しかできなかったが、それでも法案反対の署名を二百万人近く集め、これによりグレアムは大いに震え上がってしまい、法案そのものを引っ込めてしまった。翌年には学校条項を落とし、前法案の提案にかわり、八歳から13歳の子供は一日6.5時間労働に制限され、したがって午前中いっぱい、または午後いっぱい自由になるようにすべきだとした。そして13歳から18歳の若者たちと女性すべては、12時間労働に制限すべきだとした。そしてまた、それまでよく見られた法の迂回も防止すべきだと。かれがこの提案を出すのはやい、十時間法のアジテーションが空前の激しさで再開された。ちょうどそのとき、オスラーが釈放されて自由の身となった。友人たちの多くと労働者たちからの募金でかれの借金は返済され、そしてオスラーは運動に全力で飛び込んでいった。下院での十時間法擁護者たちも増え、それを指示する大量の署名も各方面から殺到して味方となり、そして1844年3月19日に、アシュレー卿は賛成179票反対170票で、工場法の「夜」という単語が夜6時から朝6時までの時間を指すという決議を取り付け、これにより夜間労働の禁止というのは、労働時間の制限を12時間にするという事になったのだった。これは休憩時間を含むものなので、実働時間は一日十時間となる。だが省はこれに同意しなかった。ジェイムズ・グレアム卿は黒海からの辞任をちらつかせ、法案をめぐる次の議決では、下院は僅差で十時間と十二時間の両方を却下したのだった。グレアムとピールはこんどは、新しい法案を提出すべきだと発表して、それが可決しなければ辞任すると述べた。新法案は前の十二時間法とまったく同じでちょっと形式上の変更を加えただけのものとなっており、そして三月にはこの法案の主要部分を拒否したのと同じ下院が、いまやそれを全面的に認めた。その理由というのは、十時間法の支持者たちのほとんどはトーリー党員で、省が潰れるよりは法案が廃案になったほうが良いと思っていたからだ。だがどんな動機だったにせよ、下院はこの問題に関する投票で、議決ごとにも前の決断をひっくり返したため、あらゆる労働者からは大

いに軽蔑されることとなり、議会改革が必要だというチャーティストの主張をきわめて見事に証明することとなったのだ。省に反対票を投じた議員三人が、こんどは賛成票を投じてそれを巢喰った。どの区分でも、反対派の大半は省に賛成票を投じ、自分自身の党の大半は省に反対票を投じたのだ。子供は六時間半雇用、その他の工員は一日十二時間と述べた以前のグレアムの提案は、いまや法文となり、そしてこれと、機械が壊れたり霜や湯水で十分な水力が得られなかったことから生じた時間のロスを補うための残業を制限する条文とあわせて、一日12時間以上の労働はほぼ不可能となった。だが、かなり近いうちに十時間法が本当に採用されるという点はもはや疑問の余地がない。もちろん製造業者はみんなそれに反対している。それに賛成の製造業者など、十人もいるかどうか。みんなこの忌まわしい決めごとに対し、正当卑劣を問わずありとあらゆる手を尽くしているが、これは労働者からのますます深まる憎悪を引き出す以上の結果をもたらしてはいない。法案は可決する。労働者は、自分たちにできることはやるし、この法案を手に入れるということは昨春に証明した。十時間法案が生産費用を引き上げて、イングランド生産者たちが外国市場においてまったく競争できなくしてしまうことになり、賃金はかえって下がるという経済的な議論はすべて、半分は正しい。だがこれで証明されるのは、以下の点だけだ。つまり、イングランドの産業的な偉大さは工員たちの野蛮な扱いとその健康の破壊、世代丸ごとの社会、肉体、精神的な頹廃によってしか維持できないものだという事だ。当然ながら、もし十時間法だけでおしまいであるなら、もちろんイングランドは破綻するだろう。だがこの法案は必然的に他の改善ももたらすから、それがこれまでどってきたのはまったくちがう道筋にイングランドを向かわせることになる。だからこれは、進歩でしかあり得ないのだ。

こんどは、工場システムの別の面を見てみよう。これはこのシステムがいま生み出している病気のように、法規制によって簡単に修正できるものではない。すでに一般的な形では雇用の性質について触れたし、そこで述べた事実からある類推を可能にするだけの細部も提示した。機械の監督、切れた糸のつなぎなおしというのは、工員たちの思考力をまるで使う作業ではない。だがその一方で、工員たちが精神を別のことで使うのは邪魔するような作業だ。また、この仕事が筋肉に対して、運動の機会をまったく与えないものだというのも見てきた。したがってこれは、まともに言うなら労働ではなく退屈であり、考えられる限りもっともげんがりして飽き飽きさせるようなプロセスなのだ。この完全な単調生の中で、工員たちは心身の力を退行するに任せるしかなく、八歳のときから毎日退屈し、一日中退屈しきっているのが使命となってしまう。さらに、一瞬たりとも休めない。エンジンは絶え間なく動く。歯車、ベルト、スピンドルが、止まることなく耳元でうなりガチャガチャと音をたて、一瞬でも休憩しようとしたら、背後には監督官がいて罰金帖をつけているのだ。このように工場に生き埋めにされるという宣告、疲れ知らずの機会に絶え間ない注意を払うという宣告は、工員たちには最悪の拷問だと受け取られており、それが心身に与える影響は長期的にはすさまじいものだ。痴呆をもたらそうと思ったら、しばらく工場労働をさせるのが一番手っ取り早い。そしてそれでも工員が自分の知性を巢喰っただけでなく、それを他の労働者たちよりも育み研ぎ澄ますなら、それは自分の運命とブルジョワジーに逆らったのみ可能となるものだ。というのも仕事において考え感じられる内容はどの瞬間にもそれしかないからだ。あるいは、このブルジョワジーに対する糾弾が労働者の最大の情熱にならないなら、不可避免的に生じる結果は泥酔と道徳劣化と一般に呼ばれるものすべてとなる。肉体的な衰弱と病気は、工場システムの普遍的な結果だが、そ

れだけでコミッショナーのホーキンスにこの道徳劣化も不可避だと宣言させるに十分だった。そこに心的な停滞が加わったらどれほど悪化するだろう。そしてすでに述べた、あらゆる労働者を道徳劣化にもたらず影響もそこに加わって作用したらどうだろう！だから特に製造業町では、泥酔と性的過剰がぼくのすでに述べたような水準にまで達しているのを見ても、何ら驚くべきことではない\*11。

さらに、ブルジョワジーがプロレタリアートを鎖でしばる奴隷制は、工場システムでこそ最もはっきり目に見えるのだ。ここでは法律上、そして事実上のあらゆる自由が終わる。工員は朝5時半には工場にいないてはならない。数分でも遅刻したら罰金だ。十分も遅刻したら、朝食が終わるまでは入れてもらえず、その日の賃金の四分の一が差し引かれる。実際に仕事をしない時間は、12時間中の二時間半だけなのだが。飲み食い寝るのも命令にしたがわねばならない。もっとも火急の用足しを行う場合でも、それに絶対に必要な最低限の時間だけしか与えられない。住まいが工場から半時間のところか、それとも工場まで丸一時間もかかるところなのか、という点は雇い主には知ったことではない。横暴な鐘の音が、工員をベッドから、朝食から、夕食から呼びつける。

工場の中ではまた、工員が何ともひどい時を過ごさねばならない。ここでは雇い主が絶対的な決まりを定める。好き勝手な規則を作り、その暗号帖に好きなことを追加し、そしてそこにきわめておかしな内容を追加しても、法廷は労働者にこう述べるのだ。

「君はもともと自分自身の主人だった。もしやりたくないのなら、だれもそんな契約に同意しろと強制はしなかったはずだ。だがいまや、自由意志でそこに加わった以上、君はそれに縛られねばならないのだ」

というわけで、労働者がこの取引において得られるのは治安判事と法の嘲笑だけだ。その治安判事当人がブルジョワだし、法律だってブルジョワによって作られているのだ。こうした判決はあまりに大量に下っている。1844年10月、マンチェスターのケネディ工場の工員たちがストライキを起こした。ケネディは工場の中の規制を書いたプラカードを根拠に工員たちを訴えた。そこには、一つの部屋で同時に二人以上の工員が仕事を辞めてはいけないと定められていたのだ。法廷はケネディ指示の判決を下し、その理由としては上に引用した説明が行われた。そしてこの手の規則は通常どんなものがご存じだろうか！たとえば：1. 入り口は業務開始から十分後に閉じられ、その後だれも朝食時間までは部屋に入れない。この時間に不在の者はすべて、織機一大あたり3ペニーを失う。2. それ以外の時間に機械が稼働している時間に部屋を離れる者は、一時間事に織機一台あたり3ペニーを失う。勤務時間内に監督官の許可を得ずして部屋を離れる者はすべて、3ペニーを失う。3. ハサミを持ってこなかった織り手は一日あたり1ペニーを失う。4. 織機

\*11 別の有能な審判の言うことを聞こう。「この例 [つまりアイルランド人] を、綿製造の各種部門に従事する人々すべての休みなき労働とあわせて考慮すると、かれらの致命的な道徳劣化についても、不思議と思う気持ちはなくなってしまふ。長時間の消耗する労働が毎日、毎年続いているのは、人間の知的道徳的な能力を発達させるのに向いたものではない。同じ機械的なプロセスがいやになるほど繰り返される、果てしないドタ作業の退屈な単調さは、シーシュポスの拷問にも似ている。その労苦は、あの岩のように、疲れ切った工員に永遠にふりかかり続けるのだ。同じ筋肉の絶え間ない伸張と収縮により、心は深みも強さも獲得できない。怠惰な無活動の中で知性は眠る。だが人間の天性の中でもっと卑しい部分が昇進することになる。人間をこのような厳しい労苦にさらすのは、ある意味で、人間を動物の習慣になじませるようなものだ。その人は無謀になる。人間を特徴つける欲望や習慣を無視するようになる。暮らしの快適性や細やかさを無視するようになる。さもない困窮の中で、わずかな食べ物だけで暮らし、些末な利益は飲酒に費やすことになる」 - J. ケイ医師 - エングルス注

の杵、ブラシ、オイル缶、ホイール、窓などが壊れたらすべて織り手が弁償する。5. 織り手は一週間前に告げることなく仕事をやめてはいけない。製造業者はどの従業員であっても、仕事のまずさや態度の悪さなどで予告なしに辞めさせられる。6. お互いにしゃべったり、歌ったり、口笛を吹いたりするのを見つけた工員はすべて6ペニーの罰金となる。労働時間中に持ち場を離れたら罰金6ペニー。いまぼくの目の前に別の工場規定があって、これによると3分間遅刻した工員はすべて四分の一時間分の賃金を失うし、二十分遅刻してきたら、日給の四分の一を失う。朝食時間まで出社しない工員は、月曜日なら1シリングの罰金、それ以外の日は6ペニーを失う等々。いまの規定はマンチェスターのジャージー通りにあるフェニックス工場の規定だ。こうした規則は、大きく複雑な工場では必須なのだという人もいるだろう。そうしないと各種部分が調和のとれた動きをしなくなってしまうからだ、ということもできる。そうした厳しい規律が、軍隊と同じようにここでも必要なのだという主張もあるだろう。その通りかもしれないが、これほど恥知らずの圧政なくして維持できないような社会秩序とは何だろうか？ 目的が手段を正当化するのか、あるいは手段のひどさから目的のひどさも推測することが正当化されるかのどちらかだ。兵役経験のある者はすべて、短期間でも軍の規律にさらされるというのがどんなものか知っている。だがこうした工員たちは9歳のときから死ぬまで、肉体的にも精神的にも剣の下で暮らすことを余儀なくされるのだ。これはアメリカの黒人よりもひどい奴隷だ。なぜなら黒人より厳しく監視され、それなのに人間らしく暮らすよう要求され、人間のように考え感じるといわれるのだから！ まこと、かれらはこれをやるのに、抑圧者たちに対して燃え上がる怒りを抑えられないし、自分たちをこんな立場に置き、自分たちを機械に貶めるものごとの秩序を憎悪するしかない。だが遥かに恥知らずなのは、工員たちの大量の証言によれば、多くの製造業者たちは工員たちに課した罰金をきわめて冷酷な厳しさで取りたてるということだ。これは、貧窮したプロレタリアからそれまで強請り取ったお金に加え、さらなる利潤を積み上げようとするためなのだ。リーチによれば、工員たちはしばしば工場の時計が十五分進められてドアが閉じられ、事務員が中で罰金帖を持って多くの不在者の名前を記録するのだという。リーチによれば、このようにして閉め出された工員が95人いて、かれらが閉め出されたその工場の時計は夜には町の時計よりも15分遅れているのに、朝には15分進んでいるのだという。『工場報告』にも似たような事実を述べている。ある工場では時計は労働時間中に贈らせられたので、工員たちは残業代も出ないのに残業をすることになった。別の工場では、丸15分もこれで労働時間が追加された。別の工場には時計が二つあり、一つは通常の時計で一つは機械の時計で、機械の時計はメインシャフトの回転数を記録する。もし機械の動きが遅いと、労働時間は機械時計で計られ、12時間での回転数が達成されるまで労働が続く。もし仕事があまくいって、規定の回転数が通常労働時間よりはやく達成されたら、工員たちは十二時間の終わりまで労働を強いられる。証人たちによれば、よい仕事を持ち、残業までしながら、それでも売春婦としての道を選んだ女の子たちも知っているという。こんな圧政に屈するよりみただから、というのだ。罰金の話に戻ると、リーチは臨月近い女性たちが、一瞬すわって休んだという咎のために6ペニーの罰金を受けた例を何度も見たという。ダメな作業に対する罰金は完全に恣意的だ。製品は製品室で検査を受け、監督は当の工員を呼びつけることもなしにリストにしたがって罰金を科すので、工員は自分が罰金を受けたということが、監督官から賃金を受け取ってその製品はたぶんすでに出荷されたか、まちがいなくすでに手の届かないところに行っている。リーチはそうした罰金リストを手に入れており、これは長

さ3メートルで、総額35ポンド17シリングにもなる。そしてこのリストが作られた工場では、新任の監督官が罰金が少なすぎて週に罰金が5ポンド足りないとしてクビになったと述べている。そして繰り返しておく、リーチがまったく信頼に足る人物でウソがつけないのはぼくも知っているのだ。

だが工員たちは、もっと他の面でも雇い主の奴隷となっている。その妻や娘が主人の眼鏡にかなうと、命令が下る、というよりほのめかしだけで、彼女は雇い主に自らを差し出さねばならないのだ。雇い主がブルジョワの利益にかなう請願書に署名を集めたいと思えば、工場にそれを送るだけでいい。議会選挙を左右したいと思えば、自分の手下の工員たちが大挙して投票所に行くようにして、その者たちは自分の意志にかかわらずブルジョワ候補者に投票する。公開集会で多数派を取りたければ、通常よりも30分はやく仕事を切り上げて、舞台に近いところにかれらの席を取り、満足いくまでかれらを見張る。

さらに特に二つの仕組みで、工員は製造業者の支配下に入らざるを得なくなる。物払いシステムと宿舍システムだ。物払いシステムというのは工員にモノで支払いをするというもので、以前はイングランドの到るところで行われていた。製造業者は「工員の便宜のため、そして小売り商人たちの高価格から守るため」に店を開く。ここでは各種のものがツケで販売され、そして工員たちがもっと安く買い物ができる店にいかないようにするためだ。これは「トミーショップ」と呼ばれ、通常は他よりも25パーセントから30パーセント高い。賃金はお金ではなく、その店のツケ相殺という形で支払われる。この悪名高い仕組みに対する世間的な糾弾のおかげで1831年に物払い法が可決し、ほとんどの従業員については給与現物支給は無効で違法とされ、罰金が科されることとなった。でも他のほとんどのイングランド法と同じく、その執行はきわめて散発的でしかない。町では、かなり効果的に実施されているが、地方部ではこの物払いシステムは、公然とまたは隠れた形で大幅に継続している。レスター市でもかなり広く見られる。いまぼくの手元には、この違法行為について一ダース近い摘発例があるが、これは1843年11月から1844年6月までのもので、主に一部は『マンチェスターガーディアン』、一部は『ノーザンスター』で報道されたものだ。このシステムはもちろん、いまではそれほどおおっぴらには行われていない。賃金は通常は現金で支払われているが、雇い主はそれでも工員たちに買い物を物払い店で行うよう強制するために使える手段がいろいろある。だからこの物払いシステムに対抗するのはむずかしい。今や法から隠れた形で実施できるからで、唯一の制限は工員が賃金を現金で受け取るということだけだからだ。1844年4月27日付け『ノーザンスター』は、ヨークシャー地方のハダースフィールドに近いホルムファースの工員からの手紙を掲載している。パワースという名前の製造業者についてのもので、以下の通りだ。

「のろわしいブツばらい仕組みがホルムファースでみらりるほどすげえ行われていて、それを止めようとするだけの道徳的な勇気を持つ人がだれも見つからないというのはほとんどふしぎなことです。こののろわしい仕組みに苦しまれるしょうじきな手動紡績織り店はたくさんにおるのです。これが一つの種類です。あの貴重な自由取引の連中の中で、ご近所中が呪う製造業者が一人おりまして、織り手に対して実に残酷なのであります。縦糸を一つかけ終えますと、一ポンド14シリングか1ポンド16シリングになるんですが、一ポンドを現金で払い、残りはモノで支払うのです。そのモノは衣服で、しかも通常の店よりも4割から5割増しの値段であり、多くの場合にそのモノは不良品なのです。でも『自由取引マーキュリー』

が工場労働について言うように「別にそれを受け取る義務はない、まったくのオプションでしかない」とのこと。はいその通り。でもそれを受け取らねば飢え死にするしかありません、一ポンドゼロリングゼロペニー以上の稼ぎをしたければ、次の縦糸をもらえるまでに一週間か二週間待たねばなりません。でも一ポンドゼロリングゼロペニーとモノを受け取れば、いつだって縦糸が与えられるのでございます。これが自由取引主義というもの。ブローラム卿は、『若き日には何かしら取っておいて、高齢になったら教会の慈善に頼らずにすむようにすべきだ』とおっしゃいます。とっておくのはこうした不良品にすべきでしょうか？これが天の主からきたものでなければ、わたしの脳みそが、労働から得られるモノと同じくらいの不良品にちがいないと思うことでしょう。無印紙の新聞が流通していたときには、ホルムファースには通報者がたくさんおりました。ブライス家、イーストウッド家などです。でもあの人たちはいまだここにいるのでしょうか。ああ、だがこいつは話がまったくちがうのです。このブツ払いの雇い主は自由取引の敬虔な一員なのであります。日曜日にはいつも二回も教会にでかけ、牧師さんの言うことを実に熱心に繰り返します。『われわれはやるべきことをやらずに残した。やるべきでないことをわれわれはやった。そしてわれわれはもはや救いがたい。だがわれわれをお許しください、よき主よ』　そう、哀悼する間われわれを許し給え、そうすればまた織り手どもに欠陥商品で賃金を支払いますので」

宿舎システムは、ずっと罪のないものに見えるし、ずっと無害な形で生じてきたものだが、それでも従業員に対し、同じくらい奴隷化する影響をもたらす。田舎の工場の近くには、しばしば工員たちの住む住居が不足している。製造業者はしばしば、そうした住居を建てねばならなくなるが、喜んでそれをやる。というのもそこから、投資した資本の利子に加えて、大きな利得が得られるからだ。労働者の住居保有者が平均で投資資本に対して6パーセントのもうけを得られるなら、製造業者の宿舎はその二倍は優に稼ぐと計算できる。というのも自分の工場が完全に操業停止していない限り、その宿舎には確実に住人がいるし、しかも家賃はしっかり払ってくれるからだ。したがって、かれは他の住宅所有者たちが苦勞する二つの主要な欠点を持たずにすむのだ。宿舎は決して空室が出ないし、そして賃料回収のリスクもない。だがそうした宿舎の賃料は、そうした欠点が全面的にふりかかる住宅と同じで、通常の住宅所有者と同じ賃料を得ることで、製造業者は工員を犠牲にして、12から14パーセントという見事な投資を行ったことになる。というのも、他の競合住宅所有者の二倍も利潤をあげるというのは明らかに不公正だからだ。そうした他の住宅所有者は、同時に製造業者との競争からも排除されているのだ。だがこの製造業者が、一銭の支出たりとも熟慮しなければならぬ非所有階級のポケットから固定利潤を引き出すというのは、二重の不正を含意している。だが製造業者たちは、その富すべてが従業員たちを犠牲にして得たものであり、非所有階級を食物にするのは慣れている。だがしばしば起こるのは、製造業者が工員たちに自分の宿舎に入るよう無理強いし、そしてクビにするぞと脅しつつ、通常よりも高い家賃を払わせたり、あるいは住んでもいない家についてすら家賃を払わせたりすることなのだ！　こうなるとただの不正ではなく悪行の域に達する。『リベラルサン』で引用された『ハリファックスガーディアン』は、アシュトン・アンダー・ライン、オールダム、ロックデールなどの何百人もの工員が、雇い主からその家に住んでいようとまいと家賃を払うよう強制されていると主張する。宿舎システム

は地方部では普遍的だ。これにより丸ごとムラができており、製造業者たちは自分の家と競争する相手が少ないかまったくいないために、市場水準などまったく無視して自分の家賃を好き勝手に固定してしまえる。そして宿舍システムは、工員に対する雇い主の力として、主人と使用人の関係に反するどんな力を与えるのだろうか？ 後者がストライキを起こすと、雇い主は自分の家から出て行けと通知するだけですむし、その通知は退去一週間前でよいのだ。その後、工員はパンも得られないどころか屋根もなくなり、浮浪者となってしまい法に追われる身となって、まちがいなく苦役生活を強いられることになるのだ。

以上が、ぼくの紙幅の許す限り十全に、そして身を守るすべもない労働者に対するブルジョワジーの英雄的な行為についての党派的な精神を最小限に抑えて描き出した、工場システムの素描となる。そうしたブルジョワジーの行為について無関心ではいられないし、それについての無関心は犯罪ですらある。1845年の自由なイングランド人の状態と、1145年にノルマン人領主たちの鞭の下にあった、サクソン人農奴の状態とを比べてみよう。農奴のほうは *glebae adscriptus*、つまり土地に縛られていたが、宿舍システムを通じた自由な労働者も同じだ。農奴は主人に対し *jus primae noctis*、つまり初夜権を与えねばならなかった。自由な労働者は、求められれば、主人に対して初夜ばかりでなく、夜ごとのすべての権利を与えねばならない。農奴は財産を獲得できなかった。農奴が得たものはすべて主人が取り上げてよかった。自由な労働者は財産を持っていないし、消費の圧力のせいで財産を得ることもできず、ノルマン人の領主たちですらしなかったことを、現代の製造業者は行う。物払いシステムを通じて、製造業者は毎日、労働者が即座の必需品として必要になるものの詳細を監督する立場につく。地主と農奴との関係はそのときに一般的な習慣や、当時守られていた法律に規定されていた。それが地主に対応する規定だったからだ。自由な労働者と主人との関係を律する法律は、雇い主の利益にも対応しないし、一般的な慣習とも対応していないので遵守されていない。地主は農奴を土地から切り離すことはできないし、農奴隷を土地と分離して売ることもできないし、ほとんどすべての土地は領土で資本はなかったので、そもそもその農奴は売れないということだった。現代ブルジョワは、労働者が自分自身を売り渡すよう強制する。農奴は自分が生まれた土地の奴隷で、労働者は自分自身の生活必需品と、それを買うのに必要なお金の奴隷だ。どちらもモノの奴隷なのだ。農奴は、万人が自分の居場所を持っていた封建主義の社会秩序において、自分を養う手段が保証されていた。自由な労働者はまったく何の保証もない。かれが社会の中で居場所があるのは、ブルジョワジーがかれを利用できるときだけだからだ。その他あらゆる場合には労働者は無視され、存在しないかのように扱われる。農奴は戦争のときには主人のために自らを犠牲にしたが、工場の労働者は平和時に自分を犠牲にする。農奴の主人は自分の農奴たちを仔牛の頭のように扱う野蛮人だった。工員たちの雇い主は文明的で、自分の「雇い人」を機会として扱う。要するに、この両者の立場はほとんど同じといってもいいほどで、どちらの立場が悪いかといえば、それは自由な労働者のほうなのだ。どちらも奴隷で、唯一のちがいはといえば、片方の奴隷制はごまかしがなく、オープンで、正直だ。もう片方はこずく、狡猾で、偽装されており、自分自身とその他万人から巧妙に隠されていて、昔のものよりはるかに悪質な、隷属制なのだ。慈善的なトーリー党が、工員たちを白人奴隷と呼んだのは正しかった。だが偽善で返送した奴隷制は、自由への権利を少なくとも外面的な形では認める。そして自由を愛する世論に屈してみせ、ここにこそ古い農奴制と比べたときの歴史的進歩が存在する。自由の原理が確認されており、被抑圧者たちもいつの日か、この原理が実施されるようにすることだろう。

本章を終えるにあたり、労働者たち自身が工場システムについての気持ちを述べた詩のスタンザをいくつか挙げよう。パーミンガムのエドワード・P・ミードが書いたこの詩は、労働者の中に広まっている見方を正確に表現している。

王様がおりまして、それも無慈悲な王様で。詩人の夢見る王ではなく  
 倒れた圧制者であり白人奴隷は皆知っている。その無慈悲な王とは蒸気。  
 その王の腕は鉄の腕、そして一本しかないその腕でも  
 その強い腕には魅力があり、何百万人もがそれに屈する。  
 古代の陰気なモロクのようにその祖先はヒモンズ峡谷に立ち  
 その腹は燃えさかる炎で、食べ物子ども  
 その司祭たちは腹をすかせた連中で、血に飢え誇り高く大胆  
 血を黄金に変える王の巨大な手を導くのはかれら  
 その奴隷の鎖から強突く張りな利潤を得るべく、自然の権利すべてをしばり  
 美女の苦痛を嘲笑し、多くの涙にも目を閉ざす  
 労働者の息子たちの嘆息やうめきはかれらの耳には音楽で  
 若き男女のガイコツめいた影が蒸気王の地獄に登場  
 こうしたこの世の地獄は蒸気王の誕生以来絶望をふりまく  
 というのも天国は人の心のためにあるが、肉体はその工場で殺されるから  
 だから王を倒せ、モロク王を、何時ら何百万もの労働者よ  
 かれの手に鎖を、さもなくばこの土着の地はその王の手で倒される  
 そしてその忌み嫌われる太守たち、各工場の主たちよ、いまは黄金と血をすすすが  
 国民の不興により倒されねばならぬ、その化け物たる神と共に

過去 12 年にわたり、自分たちに向けられてきた糾弾に対して製造業者たちが行った回答の詳細については、扱う暇も紙幅もない。こうした人々は自分たちの利益と思っているものに目がくらんでいるために学習しないのである。さらにまた、多くのかれらの反論はこれまでの部分でも扱ってきたので、ここでぼくが追加すべきは以下のことだけだ。

マンチェスターにやってきて、イングランドにおける物事の状態を知りたいと願う人もいるだろう。もちろん立派な人々へのきちんとした紹介状をもらおう。そして労働者の状態について一言二言述べる。すると初のリベラル派製造業者何人が、ロバート・ハイド・グレッグとか、エドモンド・アッシュワース、トマス・アシュトンにも紹介される。そしてかれらはこちらの願いを知る。製造業者たちは理解を示し、どうすべきか理解している。そこでかれは、田舎にある自分の工場に連れて行ってくれる。グレッグ氏はチェシャーのクワリーバンク工場に、アッシュワース氏はボルトン近くのタートン工場に、アシュトン氏はハイド工場に。見事な配置の立派な建物を案内してくれるが、そこには換気装置もあるし、また頑丈で広々とした部屋、見事な機会、あちこちにいる健康そうな工員も示してくれる。すばらしい昼食を出してくれて、工員たちの家を訪ねてみないかという。そして小屋に連れて行かれると、そこは真新しく清潔で整頓され、あっちこっちへと案内してくれるが、もちろんそれは工場監督や機械工の家だけだ。「工場だけの稼ぎで暮らす家族」が見られるようにという配慮となっている。それ以外の家族を見ると、働いているのは妻と子どもだけで、夫はストッキングのつくろいをしているのが見られるかもし

れない。雇い主がついているので、君は都合の悪そうな質問がしづらい。みんな給料はよく、快適で、田舎の空気のおかげで比較的健康だ。あなたは悲惨や飢餓についての誇張された考え方をだんだん改めるようになってくる。だが、その小屋の仕組みが工員を奴隷にしていること、近くにタコ部屋工場があるかもしれないこと、人々が製造業者を憎悪していること、こうした点を工員たちは指摘してくれない。製造業者がいっしょにいるからだ。製造業者は学校を作り、図書室を作りなどはしている。でもその学校で子供たちを従属するよう訓練していること、図書室ではブルジョワジーの利益になるような文献しか容認しないこと、チャーチストや社会主義者の新聞や本を読めば従業員はクビになること、そうした話はすべて君から隠されている。穏やかな父権的關係を目にすることだろう、監督官たちの生活は目にすることだろう、精神的にも道徳的にも奴隷になったらブルジョワが工員に何を約束してくれるかを見ることだろう。この「田舎の製造業」こそは常に雇い主が見せたがるものなのだ。というのも、そこでは工場システムの欠点、特に健康面からの欠点は、豊かな空気と周辺環境のためにある程度消えており、そして労働者たちの父権的な隷属がここでは最大限に維持できるからだ。ウレ医師は、この意図を熱狂的に支援してみせる。だが自分の頭で考えてチャーティストになる工員たちこそ哀れなり！ かれらに対しては、製造業者の父権的な愛情は即座に終わってしまう。さらに、もしマンチェスターの労働者地区を案内してもらいたいなら、工場待ちでの工場システム展開を見たいと思うなら、金持ちブルジョワの支援などいつまでたっても得られはしない！ こうした紳士方は、自分の従業員がどんな状態かも、何を求めているかも知りはしないし、自分たちを不安にさせたり、自分の利益に反して行動せざるを得なくするようなことは、決して知ろうとはしないのだ。だがありがたいことに、そんなことは何の影響もない。労働者たちがやらねばならないことは、かれらが自分で実行するのだから。



## 第7章

# その他の工業分野

原文：<http://bit.ly/TQaiDE>

工場システムについてはかなり長く扱わねばならなかった。というのもこれは工業時代のまったく新しい創造物だからだ。他の労働者についてはもっと手短かに扱える。なぜなら工業プロレタリアート全般や、特に工場システムについて言えることは、すべてにせよ部分的にせよ、こちらにも当てはまるからだ。だから、単に工場システムが各種の工業分野にどこまで無理矢理入り込みおおせているかを記録し、それがどんな特殊性を持っているか記録すればそれですむのだ。

工場法の下で扱われている四部門は、衣料品製造に従事している。だから次に扱うのを、こうした工場から材料を得ている労働者にするといちばん具合がいい。まずはノッティングム、ダービー、レスターのストッキング編みだ。これらの労働者に触れて、児童雇用委員会は、低賃金が課す長時間労働と、雇用の性質からくる座りっぱなしの生活と目の酷使が、体質全体を虚弱にして特に目がおかしくなると述べている。夜間労働は、ランプの光を集中させることで作るきわめて強力な光なしには不可能であり、そのために光をガラスの玉を通すが、これは視力にとってきわめて有害だ。40歳になるとほとんど全員がめがねをかけている。糸巻き（spooling）とヘム処理に雇われた子供たちは、通常は健康と体質に大きな損傷を受ける。6、7、8歳のときから、小さな閉ざされた部屋で一日十時間から十二時間働くのだ。かれらが仕事で気雑したり、きわめて普通の家事労働にもつけないほど虚弱になったり、あまりに近視で子供時代からめがねが必要になったりすることもまれではない。コミッショナーたちは、その子供たちの多くが瘰癧体質になった症状をあれこれ示しているのを発見したし、製造業者たちはこの状態で働いた少女たちは、虚弱すぎると言って雇おうとしないのが通例だ。こうした子供たちの状態は、「キリスト教国として恥」であり、法的な介入の願いが報告書では表明されている。『工場報告』はさらに、ストッキング編みはレスターで最低の賃金しかもらえておらず、一日十六時間から十八時間働いても週に6シリングか、どんなにがんばっても7シリングしかもらえないと付け加えている。もともとは20シリングから21シリング稼いでいたが、大型枠の導入でその仕事は台無しになった。大半はいまだに古く小さい一重枠で働いており、機械の進歩と競争するのに苦勞しているのだ。ここでも、あらゆる進歩は労働者にとって不利になる。それでもコミッショナーのパワー氏は、ストッキング編み手たちのプライドを記録している。自分たちは自由であり、食事時間や睡眠時間、労働時間を計る工場の鐘などないというのだ。かれらの立場は今日でも、工場委員会がいまの記述をした1833年から少しも改

善されていない。ほとんど食うや食わずのサクソンのストッキング編みからの競争のせいだ。この競争はほとんどあらゆる外国市場で、イングランドに比べてあまりに強すぎる。愛国的なドイツのストッキング編みにしてみれば、自分の餓死しそうな賃金でイングランドの兄弟たちもまた飢えると知って大喜びしているにちがいない！そして本当に、サクソン人職人はドイツ産業のさらなる栄光のために誇り高く喜んで飢え続けるのではないだろうか。父なる国の荣誉が、その食卓に何もなく、皿は半分空であることを求めているのだ！おお、この競争とは何と気高いものであろうか、この「国々の競争」は！これまたリベラル紙でブルジョワジーの手先の代表格である『モーニングクロニクル』には、ヒンクリーのストッキング編みからの手紙が掲載され、そこに仲間の労働者たちの生活状態が書かれていた。いろいろ書かれていたが、109の枠で、50世帯、321人が養われているという。それぞれの枠は平均5.5シリングの稼ぎになる。書く世帯は平均で週に11シリング4ペニー稼ぐ。ここから家賃、枠の賃料、光熱費、石けん、針、あわせて5シリング10ペニー払うので、残った食費は一日一人あたり1.5ペニーだ。衣服代はゼロ。

ストッキングの編み手は言う。「こうした貧窮した人々の耐えている苦しみの半分ですら、目は見ず、耳は聞かず、心は理解できない」

ベッドはまったくないか部分的にしかなく、子供たちはボロを着てはだして駆け回る。男たちは目に涙を浮かべて言う。「もう何日も肉を味わっていない。もう肉の味すら忘れかけている」。そして最後に、その一部は日曜日にも働いている。世間は日曜日の労働を何よりも許せないと思うようだが、糸枠を揺する音はご近所中で聞こえている。

その一人は言う。「私の子供を見てください。それ以上は何も尋ねてくださるな。貧困が私にそれを強いるのです。子供たちがパンを求めて泣くのに、正直にパンを得られる唯一の手段を講じないわけにはいかない。この月曜朝に、私は朝二時に起きて深夜近くまで働いた。その後毎朝6時に起きて、毎晩十一時から十二時の間まで働いた。それ以上長くは働けない。そんなことをしたら早死にしてしまう。だから毎晩十時に仕事を終えて、その分の時間を埋め合わせるために日曜日に働くのです」

レスターでもノッティンガムでもダービーでも、賃金は1833年以来上がっていない。そして最悪なのは、レスターですでに述べた通りトラック方式がすさまじく広がっているということだ。だからこの地域の編み手があらゆる労働者運動に活発に参加するのも不思議ではない。糸枠作業は主に男性が行うので、労働運動も活発で有効なものとなる。

この靴下編み工地区には、レース産業の本拠もある。言及した三郡では、全部でレース枠が2760個使われており、イングランドのその他すべての地区ではそれがたった787個だ。レース製造は、厳密な分業により大いに複雑化しており、いくつもの部門を包含している。毛糸はまず、14歳以上の少女たちから成る巻き工たちで糸巻きに巻かれる。糸巻きは、八歳以上の男の子たちから成る糸工によりフレームに設置され、糸が細い穴に通されるが、その穴は機械毎に平均で1,800個もある。そしてその糸が行き先へと渡される。すると編み手がレースを案で、それが機械から幅広の布のように出てくるので、きわめて幼少の子供たちが、それをつなぐ糸を引き出して分割する。この作業はレースのランニングまたはドロウイングと呼ばれ、子供たちはレースランナーと呼ばれている。こうしてレースは、販売できるようになる。巻き工は、糸工と同じく、決まった労働時間がなく、枠の糸巻きが空になったらいつでも呼び出され、編み手が夜間労働なので、常時工場の作業室にいたことが求められている。この不規則性、ひんぱんな夜間労働、それに伴う無秩序な暮らしは、無数の身体的、道徳的な悪徳を育み、特に野放図な性的放蕩が早期から

見られる。この点については、あらゆる目撃者が全員一致で指摘している。仕事はとても目に悪く、糸工の場合には永続的な傷害はあまり広く見られないが、目の炎症、痛み、涙目、瞬間的な視界の乱れなどが糸通し作業中に生じている。だが巻き工にとっては、この作業が目に深刻な被害を与え、角膜のひんぱんな炎症だけでなく、多くの黒内障や白内障をもたらしているのは確実だ。編み手たちの作業自体もとてもむずかしい。枠は絶えず幅が広がり、いま使われているものはほとんどすべて三人が交替で作業をしなければならないほどで、それぞれが八時間ずつ働き、枠は24時間ぶっ通しで使われることになる。だから巻き工や糸工たちはしょっちゅう夜中に呼び出され、枠が遊ぶことがないように働かねばならない。1,800ヶ所の穴に糸を通すのは、子供三人で少なくとも二時間はかかる。多くの枠は蒸気駆動で、成人男性の仕事はこのためなくなっている。そして『児童雇用委員会報告』は子供たちが招集されているレース工場だけに触れているが、ここから出てくるのは編み工たちが最近は大工場室へと移動させられているか、蒸気編みがかなり普及してきたかのどちらかだということで、いずれの場合にも工場システムの前進だ。中でも最も不屈きなのはランナーたちの仕事であり、これは通常七歳の子供で、中には五歳や四歳の子もいる。コミッションナーのグレンジャーは、この仕事に二歳の子供が一人使われているのさえ見つけた。複雑な編み物から引き出すべき糸を針でたどるのは、とても目に悪いし、特に通例としてその仕事が14時間から16時間も続くならなおさらだ。最もましな場合でも、極度の近視が生じる。最悪の場合は、黒内障から治療不能の盲目となるが、これがあまりにひんぱんに生じる。でもそれ意外にも子供たちは、絶えず背中を丸めて座り続けている結果として、虚弱で胸がくぼみ、消化不良で瘰癧症となる。女の子の間では子宮の機能不良がほぼ全員に見られ、脊椎の湾曲もまた実に多いので、「あらゆるランナーは、その歩き方を見ればわかる」。目や身体づくりすべてに対する同様の結果が、レースの刺繍からも生じている。医学界の目撃者は全員一致で、レース生産に雇用されている子供全員の健康が深刻な問題を生じていて、みんな青白く虚弱で病気がち、成長不良であり、他の子供たちよりはるかに病気への抵抗力がないという意見を述べている。子供たちが通常苦しむ症状は、全般的な虚弱、頻繁な卒倒、頭痛、脇や背中や腰の痛み、心拍過大、吐き気、嘔吐と食欲不振、脊椎屈曲、瘰癧、結核だ。女子レース製造者の健康は絶えず深く圧迫されている。貧血、出産の困難、流産といった苦情がいたるところで見られる。児童雇用委員会の同じ下位係官はさらに、子供たちがあまりに多くの場合、まともな服装をしておらずぼろをまっとうしており、十分な食事も得られず、通常はパンと紅茶だけで、しばしば肉は何ヶ月も与えられないと述べている。その道徳的な状態はといえば以下のように報告されている。

「ノッティンガムの待ちではあらゆる人々、警察も司祭も製造業者も労働者も親たちも、現在の労働システムこそは不道徳性の最も肥沃な源だと意見が一致している。糸工たちは通常は少年で、巻き工は通常は少女であり、それが両親の家から夜のどんな時間にも呼び出され、そしていつまで仕事がかかるかわからないので、家を離れる便利で逆らえない口実ができたことになり、また不適切な関係を持つためのあらゆる環境が整っていることになる。これはノッティンガムできわめてひどい水準にまではびこっていると広く述べられている不道徳性に、ひとかたならぬ貢献をしているはずだ。子供たち自身への直接的な邪悪に加え、その子供たちが属する過程の平和と快適性もまた、このきわめて不自然な状態により犠牲になっている

のだ」

もう一つレース製造の一分野として、ボビン-レース作業 (bobbin-lacework) があり、これはノーザンプトン、オックスフォード、ベッドフォードの農業地域で実施されており、従事しているのは主に子供と若者だが、どこへ言っても食事のひどさについて苦情を述べており、肉を味わうことはほとんどないと言う。その雇用そのものが、きわめて劣悪なものだ。子どもたちは小さな換気の悪い湿った部屋で働かされ、ずっとすわりっぱなしで、レースのクッションの上に身をかがめている。この疲れる位置で身体を支えるため、少女たちは木製コルセットのついた保持具を身につけており、これはそのほとんどの幼い年齢において、まだ骨がきわめて柔らかい時期なので、肋骨が大きく歪んでしまい、みんな胸が狭くなってしまっている。この子たちは通常、空気の悪い中ですわったままの仕事を続けた結果として、最悪の消化不良に苦しんだあげく結核で死亡する。そのほぼ全員が、まったく教育を受けられず、中でも道徳的なしつけはほとんどまったく受けない。華美が大好きで、この二つの影響の結果としてかれらの道徳的な状態は目を覆うばかりであり、売春がほとんど蔓延している。

社会がブルジョワジーの立派なレディ方にレースを身につける喜びを買ってあげるための代償がこれなのだ。なんとまったくお安いお値段ではないか！ 目の見えなくなった労働者がほんの数千人、衰弱した労働者たちの娘たち、嫌悪すべき群集たちがその虚弱性を、同じくらい「劣悪」な子供たちや、そのさらに子どもたちへと伝えているのだ。だがそれで何が起こるだろうか？ 何も、何もまったく！ 我らがイングランドのブルジョワジーたちは、政府委員会の報告書を無関心なまま放置して、その妻や娘たちは以前と同じくレースに身をやつす。なんと美しいものだ、イングランドブルジョワたちの落ち着きぶりときたら。

ランカシャーとスコットランド西部の綿布プリント事業所においては、大量の作業員が雇用されている。イングランドの産業において、機械による創意工夫がこれほど見事な結果を生み出した分野は他にないが、労働者たちをこれほど酷使した産業分野も他に例を見ない。蒸気力で動かされる、彫り込みをした円筒の活用と、こうした円筒で一度に4色から6色をプリントする手法の発見により、手作業が完全に駆逐されたのだ。これは綿の紡績と織布における機械の適用で手作業が消えたのと同様だ。そしてこうしたプリント作業における新しい仕組みは、布の製造の場合よりもはるかに手作業工員を駆逐することになった。いまや一人の男が、子供一人を助手につけて、かつては木版プリント職人200人が行っていた作業をまかなっている。機械一台が、プリントされた生地を毎分28ヤードも生産する。おかげでキャラコプリント工たちは、きわめてひどい影響を受けている。ランカスター、ダービー、チェスター郡は(下院へのプリント工たちによる陳情によれば)1842年にはプリント綿布製品を1100万点出荷していた。このうち、10万点は手作業だけでプリントされており、90万点は一部機械で一部手作業だ。そして1000万点が機械だけの生産で4色から6色のプリント地となっていた。機械は主に新しく、絶えず改良を経るため、手作業プリント工の人数は、存在する仕事量に比べてあまりに多すぎ、したがってその多くは飢えている。陳情によれば、飢えている者の数は全体の四分の一であり、それ以外も週にたった一日か二日、最高でも三日しか雇用されず、しかも低賃金だという。リーチはあるプリント作業場(ランカシャー郡のバリー近くにあるディープリール)について、手作業プリント工は平均で月に5シリング以上は稼いでいないと述べており、

一方で機械プリント工はかなりよい賃金を得ていることも知っているという。このように、プリント作業場は完全に工場システム同然となっているのだが、工場システムに対する法制度的な規制の対象にはなっていない。こうした作業場は、流行に応じた製品を生み出すのであり、したがって決まった作業がないのだ。小規模の注文がきたら、半ドンで仕事をする。あるパターンが大ヒットして商売が繁盛したら、一日十二時間、あるいは徹夜でも働く。マンチェスター付近のぼくの家の近所には、ぼくが夜遅くに帰ってきたときもしょっちゅう明かりのついているプリント作業場があった。そして、そこではときに、子どもたちまでそんなに長いこと働かされているため、ロビーの隅っこや石段の上で、一瞬でもいいから休んで眠ろうとするのだと聞いた。こうした主張が本当かどうかについて法的な裏付けはないが、あればその企業をここで名指ししただろう。この点について『児童雇用委員会報告』はきわめて手薄であり、単に少なくともイングランドでは、子どもたちはほとんどがかなりきちんとした身なりと食事を得ていると述べ（もちろんきちんとしたと言っても、親の賃金に応じて相対的にはある）さらにその子どもたちがまったく教育を受けず、道徳的にはかなり低い水準にあると書くだけだ。こうした子どもたちが工場システムの下に置かれていることを思い出していただき、そしてそれについてこれまで述べたことを参照してもらうように申し上げれば十分で、話を先に進めていいだろう。

衣服類の製造で雇用されているその他の労働者については、言い残したことはほとんどない。漂白工の作業はきわめて劣悪であり、肺に害を及ぼす塩素を吸わざるを得ない。染色工の作業は多くの場合は全身作業を必要とするためにとても健康的だ。これら労働者の賃金についてはよくわかっていないが、平均賃金よりも手取りが少ないと推測すべき理由はそれなりにある。そうでなければ、苦情が出るはずだからだ。ファスチアの裁断工たちは、綿ピロードの大量消費の結果として比較的人数が多くて3-4千人とされるが、工場システムの影響で間接的に、きわめてひどく苦しむことになっている。かつて手動織機で編まれた布製品は、完全に均質ではなかったために、糸の個別の列を裁断するにあたっては熟練工が必要だった。力織機が使われるようになって、糸目は均質となった。それぞれの糸目は、その前のものと完全に平行になっているため、裁断も最早、熟練の技など不要となった。機械の導入で雇用から蹴り出された労働者たちはファスチア裁断へと向かい、競争により賃金を低下させた。製造業者たちは、女子供を雇えばいいことに気がつき、おかげで賃金は女子供の水準にまで下がり、それでも何百人もの男たちが雇用から蹴り出された。製造業者たちは、その作業をやるのも工場自体の中でやればよく、裁断工の工房でそれをやって、間接的にその賃料を支払うよりも安上がりになることに気がついた。この発見以来、2階建ての裁断工の工房は多くの小屋で空き部屋となっているか、住居として貸し出されており、裁断工は労働時間の自由な選択を失い、工場の鐘の支配下に置かれてしまった。45歳くらいと思われる裁断工が話してくれたとことでは、昔は一ヤードの作業で8ペンスもらえたが、いまもらえるのは1ペニーだという。確かに、いまの均質な生地は以前よりすばやく裁断できるが、それでも以前と比べて一時間に2倍は無理だから、稼ぎはかつての四分の一以下になってしまったという。リーチは各種の商品について、1827年に支払われた賃金と1843年の賃金を一覧にしている。それによると、1827年に裁断工の賃金として一ヤードあたりそれぞれ4ペンス、2.5ペンス、2.75ペンス、1ペニー支払われた物件は、1843年には一ヤードあたりそれぞれ1.5ペンス、1ペンス、0.75ペンス、3/8ペンスが支払われている。リーチによれば、平均週賃金は以下の通りだという：1827年、£1 6s. 6d.; £1 2s. 6d.; £1; £1 6s. 6d.; そしてその同じ仕事が1843年に

は 10s.; 7s.; 6s. 8d.; 10s.; となり、さらにはいまの最後の賃金ですら雇用を見つけれない労働者が何百人もいた。綿産業の手動布織り職人についてはすでに述べた。他の生地織布は、ほとんどすべて手動織機で生産されている。ここではほとんどの労働者が、織り手たちと同じように、機械で置きかえられてしまった競合たちがひしめきあうことにより苦しむことになり、そしてそれ以上に、仕事のできが悪いと工員たちと同じように、厳しい罰金制度の下に置かれることとなる。たとえば絹の織り手を見よう。イングランド全体で最大級の絹製造業者であるブロックルハースト氏は、自分の帳簿から取った一覧表を議員たちの前に示した。それを見ると、1821年には 30s., 14s.;  $3\frac{1}{2}$  s.,  $\frac{3}{4}$  s.,  $1\frac{1}{10}$ s, 10s の賃金を支払った作業に対し、1831年にはたった 9s.,  $7\frac{1}{2}$  s.,  $2\frac{1}{4}$  s.,  $1/3$ s.,  $\frac{1}{2}$  s.,  $6\frac{1}{4}$  s. しか支払っていない。この場合、機械の改善はまったく行われていない。でもブロックルハースト氏のやっていることは、全体の標準として捉えてまったく構わないだろう。この一覧表を見ると、織り手たちの平均週賃金は、各種の差し引き後には 1821 年だと 16.5 シリングだったものが 1831 年にはたった 6 シリングになっていた。そのときから賃金はさらに下がっている。1831 年には織り手の賃金 4 ペンスをもたらしした製品（サーセネット一枚）が、1845 年にはたった 2.5 ペンスしかもたらさないし、地方部の織り手の大多数は、こうした製品を 1.5-2 ペンスでこなさない仕事を得られない。さらに、かれらは賃金から恣意的な差し引きを受けている。仕事を受け取る織り手はすべてカードを渡されるが、そこには通常、成果物は一日のある決まった時間に戻すようにという指示が書かれている。また、病気のために働けない織り手は、3 日以内にそれを事務所に報せるべし、さもないと病気は理由とは見なされない。織り手が糸の到着を待たねばならなかったというのは、遅れの理由として十分とは見なされない。製品の一部の欠陥（たとえば規定の面積の中に一定数以上の横糸があった場合）、賃金の最大半分が差し引かれる。そして製品が指定時間までに完成していなければ、戻す一ヤードあたり一ペニーが差し引かれる。こうしたカードの指示に伴う差引額はあまりに大きく、たとえばランカシャー郡のリーに週二回やってきて、織られた製品を集める人物は、雇用主に毎回少なくとも罰金 £15 を持ち帰るほどだ。これは当人が自分で認めていたことで、しかもこの人物は最も甘い人物の一人と言われているのだ。こうした問題は、かつては仲裁によって解決されていた。でも労働者は通常、仲裁にこだわったりすればクビになったから、この慣行はほぼ丸ごと捨て去られ、製造業者は恣意的に、検察、証人、裁判官、立法者、執行官の役を一人で恣意的に演じ分ける。そしてその作業員が裁判所に訴え出たら、答えはこうだ。「カードを受け入れたときには、契約を交わしたのであり、その契約にはしたがわねばならないぞ」。この話は、工員の場合と同じだ。それに、雇用者は、賃金差し引きに同意するという文書に強制的に署名をさせるのだ。そしてもし労働者が反逆したら、町のあらゆる製造業者がその人物が、リーチの言い方だと、

「あらゆる ticket-made 法律や社会秩序の敵であり、社会において自分の上位者であるとわきまえるべき人々の叡智を疑問視するだけの尊大さを持った人物であると知るのである」

もちろんながら、労働者たちは完全に自由だ。製造業者たちは別に、自分の材料や card を使った作業をするよう強制はしないが、それでも労働者に対して告げることがあって、それをリーチは単純な英語に翻訳している。

「わたしのフライパンで焼かれたくないなら、どうぞそこから出て勝手に火に足を踏み入れたまえ」

ロンドン、特にスピタルフィールズの絹織り人たちは、一時的に貧窮状態に置かれる暮らしを長いこと続けており、そして未だに満足できる状態にはなっていないことは、イングランド全体における労働運動、特にロンドンでの労働運動において最も活発な役割を果たしていることからわかる。かれらの間に蔓延する貧窮は、東ロンドンで起こった熱病の流行をもたらし、労働階級衛生状態検討委員会の招集を引き起こした。だがロンドン熱病病院の最新報告を見ると、この病気がいまだに衰えを見せていないことがわかる。

繊維衣料に続いて、イングランド産業における圧倒的に重要な製品は金属製品だ。この産業の中心地はバーミンガムであり、各種の細やかな金属製品が生産されている。ナイフやフォーク、スプーンなどはシェフィールド郡で作られ、錠前や釘といったもっと粗い製品はスタッフォードシャー、特にウォルヴァーハンプトンで生産されている。こうした産業で雇用されている労働者の立場を描くにあたっては、まずはバーミンガムから始めよう。バーミンガムでは、仕事の性質は金属加工が行われているほとんどの場所と同様に、古い手工芸的な性質をある程度残している。小規模の雇い主もまだ見つかるし、かれらが自宅にある工房で見習いたちと作業をしているのだ。あるいは蒸気力が必要な場合でも、大工場建築の中が小さな工房に分割されていて、それぞれが小雇用主に賃貸され、エンジン駆動のシャフトを提供されており、機械から動力を得ている。『Revue des deux Mondes』誌での、多少は調査のあとがうかがえ、それまでこの問題についてイングランド人やドイツ人が書いたものよりは優れている一連の論説を執筆したレオ・フォシェは、これをランカシャーにおける製造業と貸費させて「Democratie industrielle」と表現しており、それが雇い主にとっても従業員にとっても、ことさら優れた結果を生み出しているわけではないという観察を述べている。この観察はまったく正しい。というのも多くの小規模事業者たちは、自分たちの間で利潤を山分けしても、十分には喰っていけないほどののだ。その利潤は競争によって決められ、他の場合には単一の製造業者が全部得ていたはずの利潤となる。資本の集中傾向がかれらの足を引っ張っている。金持ちになる事業者一社に対して10社が破滅し、もっと安く販売できる新興企業一社の圧力のおかげで、100社がかつてないほどの不利な立場におかれる。そして、当初から大資本家を向こうに回して競争しなければならぬ場合、かれらがきわめて苦しい状態で苦悶するしかないことは火を見るより明らかである。見習いたちは、これから見る通り、小規模雇用者の下にいる場合でも製造業者の下にいるのと負けず劣らずひどい状態であり、唯一のちがいは、小規模雇用者の下ならかれらもいずれは小規模雇用者となり、ある程度の独立性を実現できるかもしれない。つまり工場システムの下に比べれば、ブルジョワジーにせめて直接的に搾取される部分が少ないということだ。だからこうした小規模雇用者は、まるっきりのプロレタリアではない。部分的には見習いの仕事に頼って暮らしているからであり、またまるっきりのブルジョワでもない。自分を養う主要な手段は自分自身の作業だからだ。バーミンガムの鉄加工業におけるこの特殊などっちつかずの立場は、かれらがイングランドの労働運動と全面的かつためらいなく参加することがほとんどないせいで生じている。バーミンガムは政治的には過激だが、チャーティストの街ではない。そしてここでは工場システムが圧倒的な優勢を持つ。分業はここではきわめて細かいところまで徹底され（たとえば針

製造業など) 蒸気力の利用に加えて大量の女子供の雇用が行われているため<sup>\*1</sup>、まさに「工場報告」で示されたのと同じ特長が再び表れている。女性がほとんど幽閉に近いまでに働かされていること、家事を行うことができないこと、家と子供の放棄、無関心、家庭生活をむしろ嫌う、道徳の劣化。さらに、男性が雇用から押し出され、機械が絶え間なく改良され、子供が幼い頃に家を出てしまい、夫が妻や子供に養われ等々。子どもたちは飢えかけてボロをまとっているとされ、その半分は腹が満たされるというのがどういふことかも知れないと言ひ、多くの子供は昼飯までは何も口に入れず、あるいは丸一日を、一ペニー分のパンを昼飯時に食べるだけで終わってしまうという。子供が朝の八時から夜7時まで何も食べ物を得られないことも実際にある。その衣服はきわめてしばしば、裸をほとんど隠しきれない程度でしかなく、多くは冬ですらはだした。そたがってみんな、年齢の割に小柄で虚弱であり、多少なりとも活気を見せることは滅多にない。そして、こうした肉体力を再生産する手段がかくも不十分な人々に対して、閉ざされた部屋におけるつらい長時間の作業が要求されていることを考えると、バーミンガムには兵役にふさわしい大人がほとんどいないのも無理からぬものと思えるのだ。

兵員募集軍医によれば、労働者は「身長が短く、虚弱で、全体として肉体的な力に劣っている。検査にやってきた男たちの多くは背骨と胸が歪んでいる」

兵員募集軍曹の見立てによれば、バーミンガムの人々は身長が5フィート4-5インチ(163-165センチ)で、他のどこの人々よりも身長が短い。兵役の613名のうち、従軍可能と判断されたのはたった238人だった。教育についていえば、金属加工地域からの各種証言や見本についてはすでに述べたので、そちらを参照してほしい。さらに『児童雇用委員会報告』によれば、バーミンガムでは5歳から15歳の子どもたちの半数はまったく学校に行かず、行く児童も絶えず入れ替わるので、少しでもまとまった訓練を与えるのはまったく不可能であり、みんなきわめて早い時間に早退させられて仕事に就かされるという。報告書は、雇われている教師がどんな類なのかも明記している。ある女教師は、道徳指導をしているかという質問に対して、いいえ、週3ペンスの授業料では、それはあまりに過大な要求ですと述べ、でも子どもたちによい原則を植え付けるようかなりの手間をかけていると述べた(そしてそれを言うにあたり、英語もかなりまちがえた)。委員たちは学校で、絶え間ない騒音と無秩序を目撃している。子どもたちの道徳的な状態はこれ以上はないほど乱れている。あらゆる犯罪者の半分は15歳以下の子供であり、1年で10歳の犯罪者90人、中には44件の重犯罪が実刑を受けた。医院の意見によれば、野放図な性交渉はほとんど普遍的であり、しかもきわめて幼い時期から始まる。

スタフォードシャーの鉄工業地区では、状況はさらにひどい。というのもここで作られている粗い金物は大した分業も必要なく(一部例外はあるが)蒸気力や機械も使えないからだ。したがってウォルヴァーハンプトン、ウィレンホール、ビルストン、セジリー、ウェンズフィールド、ダーラストン、ダドレー、ワルサールなどでは、工場の数は少ない。あるのは主に炉が一つの工房で小規模職人が一人か、あるいは見習い数名と働いている場所ばかりであり、見習いは21歳になるまで職人に仕える。小規模雇用者たちは、おおむねバーミンガムとほぼ同じ状況だ。だが見習たちは、一般的に、ずっとひどい。かれらが

<sup>\*1</sup> 1845年版と1892年版のドイツ語版では、ここに以下が入っている。「そして労働そのものを売るのはではなく、出来上がった製品を売なのだ。1887年のアメリカ版と1892年イギリス版で、労働の販売が削除されたのは、マルクス主義の政治経済学において後に、労働者が資本家に売るのは労働「力」であり労働ではないという見解になったこととの関連がもしれない。

食べている肉はほとんどが病死した動物やその他自然死した動物、汚染された肉、魚であり、屠殺が早すぎた仔牛肉や、輸送中に窒息死したブタの肉などが主で、こうした食べ物は小規模雇用者だけでなく、見習いを 30-40 人雇う大規模製造業者も使っている。ウォルヴァーハンプトンではこの習慣は普遍的らしく、その自然な結果として、しばしば食中毒その他の病気が生じている。さらに、子どもたちは通常は十分な食べ物をもらえず、作業用のボロ以外にはほとんど衣服を持たず、それもあってこの子たちは日曜学校に行けない。住居は劣悪で汚く、しばしばあまりに汚いので病気が発生する。そして物質的には不健康な作業ではないのに、子どもたちは虚弱で力がなく、多くの場合はひどく身体が歪んでいる。たとえばウィレンホールでは、果てしなくろくに身をかがめているために、背中と片足が歪んでいる人物が無数にいる。その片足をかれらは「後ろ足」と読んでいるが、おかげで両脚は K の字を描く。また、3分の1以上の労働者は脱腸だと言われる。ここでも、ウォルヴァーハンプトンと同様に、少女たちの間には思春期の遅れが無数に見られる（というのも少女たちも炉での作業をするからだ）。そして少年も同様であり、19歳までそれが続くこともある。セジリーとその周辺地域では、ほぼ唯一の製品が釘だが、釘製造者たちは極度にボロボロの掘っ立て小屋で暮らし働いており、そこからの汚物はほとんど類を見ない。少年少女たちは 10-12 歳から働きはじめ、一日に釘を千本作れるようになって、ようやく一人前の技能を身につけたとされる。釘 1200 本に対して支払いは 5.75 ペンスだ。釘はすべて 12 回叩かれ、そして金づちは 1.25 ポンド（570 グラム）あるので、釘作りはこの貧相な稼ぎを得るために 18000 ポンド（約 8.1 トン）を持ち上げねばならない。この重労働と不十分な食べ物のため、子どもたちは必然的に未発達で標準以下の骨格となり、委員たちの観察もこれを裏付けている。この地区における教育の状態はといえば、これまでの章でデータを示したとおり。とんでもなく低い水準なのだ。子どもたちの半数は日曜学校にさえ通わないし、残り半分も不定期に行くだけだ。他の地区と比べると、字が読める子はきわめて少ないし、書くとなれば成績はずっと悪くなる。当然ながら、7 歳から 10 歳あたりで、学校に通うことでやっと多少の有益な結果が得られそうになったところで、かれらは仕事に就かされ、日曜学校の教師たちは、鍛冶工や鉋夫だったりするために、字が読めず、自分の名前を書くにも苦労したりする。一般的な道德状態は、こうした教育状態に対応したものだ。ウィレンホールでは、ホーン委員の主張によれば（そしてその主張の裏付けとして提供されている大量の証拠によれば）、労働者の間には道德観というものがまったく存在していない。一般に、子どもたちは親に対する恩義をまったく認めず、かれらに一切愛情を感じたこともない。自分の発言についてまったく考えることができず、あまりに鈍重で、絶望的なまでにバカなので、一日 12 時間から 14 時間も働かされ、ボロをまとい、食べ物も十分に得られず、数日後にまで痛みが残るほど殴られているのに、自分たちが立派な扱いを受けてすばらしい状態にあると主張することも多い。自分たちが朝から、夜に止めるのを許されるまで重労働を続けるという生活以外の別の生活についてまったく知らず、疲れていないかという質問もこれまでに耳にしたことがなかったため、意味がわからなかったという。

シェフィールドでは賃金はましだし、労働者の外部状況もましだ。その一方で、いくつかの仕事の分野は特筆される。というのも、それが健康に対して極度に有害なものだからだ。いくつかの作業は、道具を絶え間なく胸に押しつけねばならず、多くの場合には結核をもたらす。他にたとえばヤスリの目立てなどは、身体の全体的な発達を遅らせて消化不良を引き起こす。ナイフの持ち手用の骨削り作業は、頭痛と胆汁異常、そして多数雇用さ

れている少女たちには貧血をもたらす。中でも最も劣悪な作業はナイフの刃やフォークの研磨作業だが、これは乾いた砥石で行うと、まちがいなく早死にする。この作業の劣悪さの一部は身体をかがめた状態になることで、胸と腹が押し潰されてしまう。だがそれ異様に、研磨中に大量に放出される鋭い金属粉粒子が空中に満ち、それがまちがいなく吸い込まれてしまうという点がある。乾燥研磨工の平均寿命は35歳にも満たず、「濡れ研磨工」の寿命も45歳を超えることは滅多にない。シェフィールドのナイト医師はこう述べる：

この職業の危険性について多少の見当をお伝えしようと思うなら、「研磨工のなかで最高の大酒飲みがときには寿命が最も長い、なぜならかれらは欠勤が多いから」と主張するのがいいかもしれない。全体として、シェフィールドの研磨工たちは「全部で2500人ほどいて、このうち150人、つまり男80人と少年70人ほどがフォーク研磨工だ。かれらは28歳から32歳で死ぬ。カミソリ研磨工は、濡れ砥石でも乾燥砥石でも研ぐが、40歳から45歳で死ぬ。テーブルナイフの研磨工は濡れ砥石を使うので、40歳から50歳で死ぬ」。

この医師はまた、研磨工のぜんそくと呼ばれる病気の経過について以下のように描写している。

「研磨工として育てられた者は、通常は14歳頃に働きはじめる。体つきのよい研磨工は、20歳くらいになるまではこの仕事で大した不都合は感じない。その頃に、独特の苦情の症状がだんだんと忍び寄ってくる。その呼吸がちょっとした運動、特に階段を上がったり丘を登ったりするだけで、通常よりもかなり荒くなる。絶え間ない、そしてますます悪化する呼吸困難を楽にするため、肩を持ち上げるようになる。前屈みになり、仕事ですわっているのに慣れているその体制での呼吸がいちばん楽なようだ。肌の色合いがどろどろした汚い外見となる。顔つきは不安の表情となる。胸がしめつけられるような感覚をこぼすようになる。声が荒く、しゃがれてくる。咳が大きく、まるで空気を木製の管で吸い込んでいるかのような音になる。時には大量のほこりを吐き出し、それが時には痰と混じり合ったり、ときには丸いまたは円筒状の塊が、薄い痰の膜に覆われて出て来る。喀血、横になれない、寝汗、痙攣性下痢、極度の憔悴、その他、肺結核の通常症状すべてがかれらをあの世へと連れ去る。だが、そうかって死ぬまでには、働けなくなって自分も家族も養えないまま何ヶ月、いや何年にもわたって苦しまねばならないのだ」。さらに追加すると「研磨工ぜんそくを予防・治療しようとするこれまでのあらゆる試みは、完全に失敗している」

このすべてをナイトが書いたのは十年前だ。それ以来、研磨工の数と病気のひどさは増すばかりだが、砥石に覆いをつけたり、粉塵を人工的な吸気により運び去るといった予防の試みは行われてきた。こうした手法は少なくとも部分的には成功しているが、研磨工たちはこうした予防策の採用を望まず、これらの仕掛けをあちこちで破壊すらしている。改善により、もっと多くの労働者がこの仕事にやってきて、それにより賃金が引き下げられると思つてのことだ。かれらとしては、短く楽しい人生を送りたいわけだ。ナイト医師はしばしば、ぜんそくの初期症状でやってくる研磨工たちに、研磨作業に戻れば確実に死ぬとしばしば告げてきたが、何の役にもたたない。ひとたび研磨工になった者たちは絶望に陥り、まるで自分自身を悪魔に売り渡したかのようだ。シェフィールドでの教育はきわめ

て低い水準にある。教育統計に専念してきたある聖職者は、就学年齢にある労働階級の子供 16500 人のうち、字が読めるのはわずか 6,500 人だろうとみている。これは、子どもたちが七歳のときに学校から連れ去られ、遅くとも 12 歳で学校をやめるという事実と、教師たちがまったくの役立たずだという事実からきている。その一人は実刑を受けた泥棒で、刑務所から出てきたら、学校で教える以外に糊口をしのぐ手段が見つからなかったのだという！ シェフィールドでの若者の不道德ぶりは、他のどこよりも激しいようだ。どの町に一等賞をあげるべきか判断するのはむずかしいし、報告書を読むと、それぞれについての記述ごとに、ここそ一番だと思ってしまう！ 若い世代は日曜をずっと街路に寝そべってコイン投げをして過ごしたり、闘犬をしたり、ジン酒場に入りたりして、夜遅くまで恋人と座り、そして暗くなると二人で連れ立って散歩にでかける。委員が訪れたエール酒場では、両性の坂者が 40 人から 50 人すわり、そのほとんど全員が 17 歳以下で、どの少年の横にも少女がいた。あちこちでランプが行われ、他ではダンスが行われ、どこでも飲酒が行われている。その一同の中にはプロの売春婦を公然と名乗る連中もいた。このありさまでは、あらゆる目撃者が証言するとおり、早期からの野放図な性交、14 歳や 15 歳の少女から始まる売春などがシェフィールドではきわめて多いのも無理はないだろう。野蛮で悲惨な犯罪もしょっちゅう起こる。委員が訪れた一年前に、主に若者で構成される集団が、やすや燃料をたっぶり揃えて町に放火しようとしたところで逮捕された。後で、シェフィールドの労働運動も同じ野蛮な性質を持っていることを示そう。

この金属産業の二つの中心地以外に、ランカシャー州ワリントンに針工場があり、そこでは労働者、それも特に児童労働者の間では欠乏と不道德と無知が大いにはびこっている。そしてランカシャー州のウィガンの近所と、スコットランドの東部には針製造用の炉がたくさんある。こうした後者の地域からの報告は、スタフォードシャーのものとはほぼまったく同じ話を物語っている。この産業で、工場街で実施されている区分がもう一つあり、その本質的な奇妙さというのは、機械による機械の製造業だということで、労働者たちは他の産業から押し出されたために、最後の頼みの綱すら奪われ、自分たちを置きかえてしまう敵そのものを作り出す仕事に従事することになるのだ。平削りや穿孔、ねじ切り、車輪やナット作り等々を動力ろくろで行う作業は、これまでよい賃金で定職を得られていた大量の人々を失業させている。そしてお望みなら、そういう人々はマンハッタンで群れをなしているのが見られる。

スタフォードシャーの鉄地区の北側には、これから注目しようとしている別の産業地域が広がっている。陶器製造業だ。その中心部はストーク自治市にあり、ヘンレイ、バースレム、レイン・エンド、レイン・デルフ、エトルリア、コールリッジ、ラングポート、タンストール、ゴールデンヒルを含んでいて、全体で住民 7 万人ほどだ。児童雇用委員会はこの問題について、この産業の一部分野の、せり器製造部門では、子どもたちは暖かい広々とした部屋で軽作業を担当しているという。それ以外の部門では、正反対に、つらい疲弊する労働が必要とされており、十分な食べ物もよい衣服ももらっていない。多くの子どもたちは苦情を述べている。「食べるものも不十分で、しかもほとんどが塩とジャガイモ、肉もパンも決してもらえず、学校もいかず、服も持ってねえ」「今日は夕食になーんも食うもんがねえ、家でも夕食なんか絶対ねえ、ほとんどがジャガイモと塩、たまにパン」「これがおいらの持ってる服のすべて、家に日曜用の晴れ着なんかねえ」子どもたちの中でもことさら怪我の多い仕事は型運び業で、型に入れた製品を乾燥室に型ともども運んで、製品がきちんと乾燥して作業が終わったら空の型をもとの場所まで戻して運ばねばならな

い。だからかれらは一日中行ったり来たりして、年齢の割に重たい重荷を抱え、またこれを高温の中でやらねばならないので、この作業の消耗は大幅に増すのだ。こうした子どもたちは、ほとんど一つも例外なしに、やせて青白く、弱々しく発育不良だ。ほとんど全員が胃腸障害、吐き気、食欲不振に苦しんでおり、多くの子が結核で死ぬ。同じくらい虚弱なのは、「ジガー」と呼ばれる少年たちで、これはかれらが使う「ジガー」ホイール（機械ろくろ）からきた名前だ。だがこうした中で最も怪我の多いものといえば、完成した製品を大量の鉛や、しばしばヒ素を含む液体に浸ける仕事であり、またその浸けたばかりの製品を素手で引き上げる仕事だ。こうした労働者の手や衣服は、大人も子供も、常にこの液体で湿っており、ざらざらした物体を絶えず扱うために皮膚が柔らかくなりすりむけ、指はしばしば血がにじみ、絶え間なくこうした危険な物質の吸収がきわめて起きやすい状態になっている。結果として激痛が生じ、胃腸の深刻な病気、慢性的な便秘、疝痛、ときには結核、そして中でも最もありがちなのが、子供のてんかん症だ。成人の間では、手の筋肉の部分的な麻痺、鉛中毒、四肢全体の麻痺はごく当たり前に起きる。ある目撃者は、自分といっしょに働いていた子供二人は、職場で痙攣して死んだと言う。また液体浸け作業を子供時代に2年間手伝っていた人物は、最初下腹部に激痛がはしり、それから痙攣が生じて、おかげで二ヶ月も寝たきりになり、痙攣の発作の頻度があがっていき毎日となり、それがてんかん発作10回から20回をともない、右腕が麻痺して、医師たちは二度と四肢がまともに使えないと告げているという。ある工場以下書では、浸し作業場にいる四人の男たちがみんなてんかん症で、激しい鉛中毒となっており、少年11人はすでに数人がてんかん症を示していた。要するに、この恐ろしい病気はこの職業に普遍的につきまとうのだ。そしてこれまた、ブルジョワジーの金銭的な利益を増やすために！ せつ器が磨かれている部屋では、空気は石の粉塵まみれで、そこで息をするのはシェフィールドの研磨工の鉄粉塵と同じくらい有害だ。労働者たちは息ができなくなり、横にもなれず、荒れたのどと激しいせきに苦しみ、そして実に弱々しい声になってしまい、ほとんど何を言っているかわからないほどだ。かれらもまた、すべて結核で死ぬ。陶器地区では、学校は比較的数が多く、子どもたちに学習の機会を与えと言われる。だがその子どもたちはきわめて早い時期から仕事に狩り出され、一日十二時間かそれ以上の労働を強いられるため、学校などに通っているだけの余裕がある状態ではなく、したがって医院の診察した子どもたちの四分の三は読みも書きもできず、地区全体は底知れぬ無知に陥っている。何年も日曜学校に通った子どもたちですら、文字の見分けがつかないし、道徳と宗教の教育も、知的な教育に負けずおとらず、きわめて低水準だ。

ガラスの製造業でも、成人にはほとんど無害と思われる作業でも、子供にとっては耐えがたいものが生じている。労働の過酷さ、労働時間の不定期性、ひんぱんな夜間作業、そして特に作業場の高温（華氏100度から130度（摂氏38-55度くらい））は、子どもたちに全般的な虚弱と病気、発育停止、そして特に目の疾患、下腹部の不具合、リウマチと気管支の症状をもたらす。子どもたちの多くは青白く、赤い目をして、ときには何週間も目が見えなくなり、激しい吐き気、嘔吐、咳、熱、リウマチに苦しむ。ガラスが炉から引き出されるとき、子どもたちは立っている板が足の下で燃え出すほどのきわめて高温の中に入らねばならない。ガラス吹き職人たちは通常、虚弱と胸の疾患で若くして死ぬ。

全体として、この報告は工場システムの段階的ながらも着実な導入が、あらゆる産業分野で生じていることを裏付けており、それを特によく示すのが女子供の雇用だ。すべての事例で、ぼくは機械の進歩とそれによる労働者としての男の置きかえをたどることが必要

だと思った。紙幅の都合で、現在の生産システムのある側面を詳細に描き出すことはできないのだが、その結果についてはすでに工場システムを扱う中で描いたし、製造業の性質について多少なりともなじんでいるあらゆる人物は、書き足りない部分を自分で補えるはずだ。あらゆる面で機械が導入され、労働男性の独立性のあらゆる痕跡がこうして破壊されている。あらゆる方面で、家族は妻や子供の労働により解体され、夫が雇用から蹴り出されて妻子供にパンを依存するようになって逆転させられている。いたるところで、不可避な機械はこの商売の偉大な資本主義的命令と、労働者の定めを宣告するのだ。資本の中心化はたゆみなく進み、社会を大資本家と何も持たない労働者とに分断する力は、ますます強まり、国の産業発展は急速に、避けがたい危機へと大股に向かうのだ。

すでに述べたように、手工芸でも資本の力と、場合によっては分業が同じ結果をもたらし、小さな商売人は押し潰され、かわりに大資本家と何も持たない労働者をお互いに据えることになった。こうした手工芸職人については言うべき事はほとんどない。というのものがこれらに関することはすべて、プロレタリアート全般を扱っていた部分ですすでに述べられていたからだ。産業革命の当初から、この分野での仕事の性質とそれが健康に及ぼす影響には、ほとんど変化が見られない。だが工場工員との絶え間ない接触、見習いとはおおむね個人的な関係にあった小規模雇用者からの圧力に比べてずっと強く感じられる大資本家からの圧力、都会生活の影響、賃金の低下などは、あらゆる手工芸職員たちを労働運動の活発な参加者にした。これについては間もなくもっと詳述することになるので、それまでここではブルジョワジーの金銭よくに収奪されている驚異的なまでの野蛮さという点で注目し、ロンドンのある分野の労働者に目を向けることにしよう。それは、ドレス製造業とお針子女性だ。

ブルジョワ女性の個人的な着飾りに奉仕する製品の生産こそが、労働者の健康にとって最も悲惨な帰結をもたらすものだというのは奇妙な事実ではある。すでにこれについてはレース製造工の事例で見たが、いまやさらなる証拠を得るため、ロンドンのドレス製造企業に目を向ける。彼らは大量の若い少女たちを雇っている　　のべ 15000 人いると言われる　　それが職場で寝食を取り、通常は田舎から連れてこられ、したがって雇用者たちにとっては文句なしの奴隷となっている。ファッションのシーズンは四ヶ月ほど続くが、この期間中の労働時間は、最高の職場ですら一日 15 時間であり、きわめてひどい場合だと一日 18 時間にもなる。だがほとんどの工房では、仕事はこうした時期には決まった規定まったくなしに続くので、少女たちは休息と睡眠に、24 時間中の六時間以上は決して得られず、通常は 3-4 時間ももらえないどころか、時には実に 2 時間未満しかもらえず、一日 19 時間から 22 時間働き、ヘタをすると徹夜作業ということもしばしばある！　　かれらの労働に対する唯一の制限は、針をもう 1 分たりとも持てないという絶対的な肉体の限界だけだ。こうした哀れな生き物たちが、九日も昼夜連続で着替えすらできず、一瞬かそこからマットレスの上で休憩できるくらいで、食物はあらかじめ切り刻まれて提供され、飲み下すのに最小限の時間しかかからないようにされていたという。要するに、こうした不幸な少女たちは現代の奴隷監督からの道徳的な鞭、クビにするという脅しにより、かくも長く休憩もない労苦へと縛り付けられている。こんな仕事は強い男ですら堪えられず、まして 14 歳から 20 歳の繊細な少女などがとても耐えられるものではない。これに加えて、作業室や寝場所のひどい空気と身をかがめた姿勢、しばしばひどい消化不能な食べ物、これらすべてが、新鮮な空気からの完全な遮断と組み合わせさせて、この少女たちの健康にとってきわめて悲しい結果をもたらしているのだ。無気力、疲弊、衰弱、食欲減退、肩や背中

や腰の痛み、特に頭痛がきわめてすぐに始まる。続いて背筋が曲がり、肩が高くなり変形し、やせほそり、腫れて涙の流れ、ひりひりする目、それがまもなく近視となる。咳、胸の閉塞、息切れ、その他女性の身体的発展における各種の障害が生まれる。多くの場合、目があまりに酷使されて、治療不能な失明が生じる。だが視力が続いて仕事を続けられたとしても、結核がこうしたお針子やドレス製造の悲しい生涯に終止符を打つことになる。はやめにこの仕事をやめた者たちですら、慢性的に健康を害したままとなり、身体がおかしくなる。そして結婚しても、生む子供は虚弱で病弱となる。委員たちの尋問した医療関係者はみんな、健康を破壊して早死にを招くためにこれ以上見事に計算された生涯のあり方はないと合意している。

いささか間接的とはいえ、同じくらいの残酷さをもって、ロンドンの他のお針子女性たちも収奪されている。コルセットづくりに雇われた少女たちは、つらい消耗する仕事をやらされ、特に目を酷使する。そしてそれでどのくらいの賃金が得られるのか？ ぼくは知らない。だが知っていることがある。受け取った材料についての保証金を支払わねばならず、仕事をお針子女性に振り分ける中間業者は、完成品一つあたり 1.5 ペンスを受け取るのだ。ここから業者は自分の取り分を差し引く。少なくとも 0.5 ペニーだ。だから少女のポケットに入るのは最大でも 1 ペニーとなる。ネクタイを縫う少女たちは、一日 16 時間を仕事に拘束され、週に 4.5 シリングをもらう。だがシャツ作りの仕事が最悪だ。通常のシャツについては、一枚 1.5 ペンスをもらう。これが昔は 2-3 ペンスだった。でも Radical な理事会が仕切るセントパンクラス<sup>セントパンクラス</sup>の作業所がそれを 1.5 ペンスで請け負うようになったので、外部の哀れな女性たちも同じ値段でやるしかなくなった。高級でファッションナブルなシャツだと、一日 18 時間で仕上げられるが、6 ペンスが支払われる。こうした縫い子の女性たちの週賃金は、こうした数字やお針子女性と雇い主を含む多方面からの証言で見ると、2 シリング 6 ペンスか、深夜まで続くきわめて重労働なら 3 シリングだ。そしてこの恥知らずな野蛮さにさらに追い打ちをかけているのが、この女性たちは自分たちが預かった材料について保証金を支払わされるということだ。もちろん女性たちは、これをやるためには受け取った材料の一部を質に入れるしかなく（雇い主はこれを十分に承知している）、自腹で損をしてそれを請け出すことになる。あるいは材料を請け出せなければ、治安判事の前に引き出されることになる。これは 1843 年 11 月に、ある縫い子女性に起こったことだ。こんな末路に入り込み、どうしていいかわからなくなった女性は、1844 年に運河で自らを溺れさせた。こうした女性は通常、とんでもないポロポロの小さな屋根裏部屋に暮らし、そこには詰め込めるだけの人数が詰め込まれ、そして冬になると、得られる暖房はその労働者たち自身の体温だけなのだ。こうして彼女たちは身をかためて作業を続け、朝の 4 時や 5 時から深夜まで縫い続け、1、2 年で健康を破壊して早死にしてしまう。そしてその間に人生の最も慎ましい必需品すら手に入れられないのだ\*2。そしてかれらの下には上流ブルジョワジーの見事な装飾馬車が走り、ひょっとして 10 歩ほど離れたところでは、どこかの哀れな洒落者が、ファロ（博打の一種）で労働者たちの 1 年の稼ぎ以上の額を、一晩ですってしまいかもしれないのだ。

\*2 存命中のイングランドユーモア作家の中で最も才能があり、そしてあらゆるユーモア作家と同じく人間的な感情に満ちあふれているが、精神力はいささか不足している人物であるトマス・フッドは、1844 年初頭に『シャツの歌』という美しい詩を発表し、これはブルジョワジーの娘たちから、同情に満ちた、だが何の役にも立たない涙を引き出すことになった。もともと『パンチ』誌に掲載されたこの詩は、あらゆる新聞に転載された。お針子たちの状態に関する議論が当時の新聞には満ちていたため、それをことさら抜粋するには及ばまい。 エンゲルス注

---

これがイングランドの製造業プロレタリアートの状態である。あらゆる方面でどちらに顔を向けても、見つかるのは一時的なものも永続的なものも含めて、労働者たちの状態から生じている欠乏と病気ばかりであり、道徳劣化なのである。あらゆる方向で、人間が肉体的にも精神的にも緩慢でありながら着実に貶められ、最終的には破壊されるのである。こんな状態がいつまでも続くものだろうか？ いや続いてはならないし、続くはずもない。労働者たち、この国の大多数を占める者たちが黙ってはいない。かれらの意見を聞くのではないか。



## 第 8 章

# 労働運動

原文：<http://bit.ly/1HmtxsC>

ぼくがこれほど詳細に何度も証明しなかったとしても、イングランドの労働者たちがこの状態で幸福を感じられることはないというのは認めざるを得ないだろう。かれらの状態は、まるごと一階級の人々が、人間として考え、感じ、生きられる状態ではないことも。したがって労働者たちは、この人を獣のようにしてしまう状態から逃れようと苦闘するのは当然であり、自分たちにもっとよい、もっと人間的な地位を得ようとするのももっともなことだ。そしてこれを実現するには、かれらを搾取し続けるブルジョワジーの利益を攻撃するしかない。だがブルジョワジーは、富と国の力により自分たちが使える力をすべて動員して、自分の利益を守ろうとする。労働者たちが現状を変えようと決意するのに比例して、ブルジョワは労働者の宿敵となるのだ。

さらに労働者は、あらゆる瞬間にブルジョワジーが自分を奴隷、財産として扱っていると感じずにはいられない。そして何はなくともこの理由だけからも、労働者はブルジョワジーの敵として台頭しなくてはならない。現在の社会において労働者が自分の男らしさを保てるのは、ブルジョワジーに対する憎悪と反逆においてだけなのだ、ということをおぼくはこれまでのページで百通りも示してきたし、やろうとおもえばさらに百通りもそれを示せる。そして労働者はその教育、またはその教育欠如のおかげで、そしてさらにはイングランド労働階級の欠陥に流れる熱いアイリッシュの豊富な血のおかげで、財産保有階級の圧制に対してきわめて激しい情熱を持って抗議できるのだ。イングランドの労働者は最近ではもうイングランド人ではない。その金持ちの隣国民のような、計算高い守銭奴などではないのだ。もっと十全に発達した感情を持ち、生来の北方的冷淡さは、情熱の制約なしの発達とそれがかれに及ぼす支配力により克服されるのだ。イングランドブルジョワの利己的傾向を実に大幅に強化する理解力は、利己性をイングランド人の支配的な性向にしてしまい、その感情的な力を金銭欲という一点にすべて集中させることになったが、労働者にはそうした理解力の涵養が不足しており、したがって労働者たちの情熱は外国人のゆに強く力あふれるものなのだ。イングランドの国民性は、労働者においては殲滅させられているのだ。

すでに見た通り、男らしさの行使が可能な分野はすべて失われており、唯一残っているのは自分の人生の条件すべてに対する反対だけなので、労働者がこの反対においてこそ、最も男らしく、高貴で、同情に値する存在となるのも当然のことだ。これから見るように、労働者の全エネルギー、全活動が、まさにこの一点に向けられており、一般教育を実

現しようという試みでさえ、すべてこれと直接関係しているのだ。確かに、個別の暴力行為や残虐行為すら報告はするが、イングランドにおいては社会戦争が公然と猛威をふるっていることは常に忘れてはならない。また、この戦争を偽善的に、平和や果ては慈善の仮面の下で戦うのはブルジョワジーの利益になることであり、労働者にとって唯一の助けは物事の真の実情をむき出しにして、この偽善を破壊することなのだ。さらに労働者によるブルジョワジーとその召使いどもに対するきわめて暴力的な攻撃は、ブルジョワジーが隠密に詐術的に労働者に行使しているものを、公然と偽装成しに表現したものにすぎないということも忘れてはならない。

労働者の蜂起は、最初の工業発展のすぐ後から始まり、いくつかの段階を経てきた。イングランド人の歴史におけるその重要性の検討は別所に譲らねばならない。それまではイングランドプロレタリアートの状態の特長を示すような生の事実だけにとどめることにする。

この反乱における最初期の、最も粗雑で、最も実りの少なかったものは犯罪という反乱だ。労働者は貧困と欠乏の中で暮らし、他人が自分よりよい目にあっているのを見た。金持ちの怠惰なやつらより社会に貢献している自分が、こうした条件の下でなぜ苦しまねばならないか、かれははっきり理解できなかった。欠乏が財産の神聖さに対するの伝来の敬意を押さえつけ、かれは泥棒に走った。製造業の拡張とともに犯罪が増えた様子はずーに見た通り。毎年の逮捕件数は、毎年消費される綿花の梱数と一艇の比率を保つ様子も見た。

労働者たちは間もなく、犯罪では事態は改善しないことに気がついた。犯罪は、社会の既存秩序に対して、孤立した形で、たった1人の人間としてしか抗議できない。それぞれの犯罪者に対して、社会は全力を挙げて立ち向かい、その圧倒的優位性を持ってそれを押し潰した。さらに窃盗は抗議の最も原始的な形であり、このためもあって、労働者はこの手法を内心ではいかに承認しようとも、その公的な意見の普遍的な表現形式とはならなかった。階級として、労働者がブルジョワジーへの反対を初めて表明したのは、産業時代の最初期に機械の導入に抵抗したときだった。アークライトなど最初の発明家たちはこのやり方で糾弾され、その機械は破壊された。後に、機械に対する蜂起はたくさん生じ、その起こり具合はボヘミアにおける印刷業者への妨害とずばり同じ形だった。つまり工場が壊され、機械は破壊されたのだ。

この形式の反対もまた孤立しており、特定地域に限られており、現在の社会的な仕組みの中で、ある一つの特長にだけ向けられていた。目先の目標が実現されたら、社会の力は総力をあげて、保護されぬ悪漢どもを心ゆくまで処罰し、一方で結局は機械は導入されることになった。新しい反対の形を見つけねばならなかった。

この時点で、旧態依然とした未改革で寡頭独裁政治的なトーリー議会の施行した法律という形で、支援がやってきた。この法律は、その後に改革法案がブルジョワジーとプロレタリアートの区別を法的に容認し、ブルジョワジーを支配階級と定めてからは、下院で可決されることはあり得なかっただろう。これは1824年に施行され、労働者が労働目的で連合を組むことをそれまで禁じていたあらゆる法律を無効化した。労働者たちは、それまで貴族とブルジョワジーにのみ許されていた権利を獲得した。すなわち、自由な結社の権利だ。確かにそれまでも秘密結社は存在したが、決して大した結果を実現はできなかった。グラスゴーではサイモンズが記しているように、布織り人たちのゼネストが1812年に起こったが、これは秘密結社により実現したものだ。これは1822年にも繰り返さ

れ、このときには結社に参加せず、結社のメンバーから階級に対する裏切り者と見なされた労働者二人の顔に硫酸がかけられた。被害者は二人ともこの傷害の結果として視力を失った。また1818年に、スコットランド鉱夫連合はゼネストを実施するだけの力を手に入れていた。こうした結社はメンバーたちに、沈黙と秘密の宣誓を行わせ、会員一覧、収入役、会計役、地方支部を持っていた。だがすべてが秘密裏に行われたために、その成長は限られたものとなっていた。だが、1824年に労働者が自由結社の権利を手に入れたとき、こうした組織はすぐにイングランド全域に広がり、もっと大きな力を獲得した。あらゆる産業分野で、労働組合が組織され、個別の労働者をブルジョワジーの圧制とネグレクトから守るのが意図なのだと公然と述べるようになった。その目的は、集団として、権力として雇用者と取引をすることだった。雇用者の利潤に基づいて賃金水準を調整し、機会があれば賃金を上げ、しかも全国のそれぞれの業種で賃金水準を均一にすることだった。そこでかれらは資本家と、普遍的に遵守されるべき賃金スケールを合意しようとした。そしてこのスケールの採用を拒絶した個人の従業員たちに、ストライキをして職場を離れるよう命じた。さらに、労働への需要を高止まりさせ、賃金を高い水準にとどめるために、見習いの数を制限しようとした。そして新しい道具や機械という手段によりもたらされた間接的な賃金削減に、できる限り抵抗しようとした。そして最後に、失業した労働者を金銭的に支援しようとした。これは直接的に行うこともあれば、カードを使ってその持ち主を「ソサエティ会員」として正当化するという手段を使うこともあり、その持ち主たる労働者は同志の労働者たちに支援されつつ職場から職場へと渡り歩き、雇用を見つける最高の機会について指示を受けるのだ。これは渡り労働者制度であり、その放浪する人物は渡り労働者だ。こうした目的を実現するため、会長と書記が給料を得て専業となる（というのも、そんな人物を雇おうとする製造業者がいるとは思えないからだ）。そして委員会が週ごとに会費を集め、結社の目的のための支出を監視する。これが実現可能で役に立つことが示されると、個別地区の各種産業が連盟を作って団結し、決まった時間に代表会議を設けた。ある産業の労働者をイングランド全土でまとめて一つの大きな労働組合を作ろうという試みも行われた。そして何度か（最初は1830年）大英帝国全土で全産業の労働組合連合を作り、産業ごとに個別の組織を設けようという試みも行われた。しかしこうした結社はどれも結局長続きはせず、一時的にすら実現しないことも多かった。というのもこうした連盟を可能かつ有効にするためには、例外的なまでに普遍的な興奮が必要となるからだ。

こうした組合が目標達成に使う通常的手段は以下の通り：もし一部の雇用者が組合の指定する賃金の支払いを拒絶したら、代表団が送られるか陳情書が送付される（ご覧の通り、労働者は工場の君主が己の小さな国家において絶対権力を持っていることを認知する方法をわかまえているのです）。これが不首尾に終われば、組合は従業員たちに仕事を止めるよう命令し、あらゆる工員は家に帰る。このストライキは、その業界の雇用者のうち数社程度が組合の提案に沿った賃金調整を拒否しているときには部分ストライキとなり、あらゆる雇用者がそれを拒否した場合にはゼネストとなる。法的通知の起源が切れたあとでストライキが実施される場合には（必ずしもそうとは限らない）、これが労働組合の合法手段の範囲となる。だがこうした合法的な手段は、組合の外に労働者たちがいたり、ブルジョワジーが提供する一時的な利益のために組合から離れる組合員がいたりすれば、とても弱いものとなる。特に部分ストライキの場合、製造業者はこうした厄介者たち（knobsticks、スト破りと呼ばれる）からすぐに労働者を雇えてしまい、組合労働者の

努力が無駄になってしまいかねない。スト破りは通常、組合員たちにより脅迫され、罵倒され、殴られるなどのひどい扱いを受ける。つまりはあらゆる面で脅されるわけだ。すると訴追が続き、法遵守のブルジョワジーが権力を掌握しているため、組合の力はほとんど毎回のよう、ちょっと違法行為が出ただけで、組合員に対する司法判決が下されただけで、破られてしまうのだ。

こうした労働組合の歴史は、労働者たちの長い敗北の連続であり、それがごくわずかな孤立した勝利で途切れているだけだ。こうした努力は当然ながら、労働市場において需要と供給の関係から賃金を決める経済法則は変えられない。だから労働組合は、この関係に影響するあらゆる大きな力に対して無力なままだ。商業的な危機にあっては、労働組合自体が賃金を引き下げたり完全に解体したりすることになる。そして労働需要が大幅に増える時期には、賃金率は資本家同士の競争により自発的に設定された水準を超えた設定はできない。だが小規模で単発的な影響に対処する場合には組合は大きな力を持つ。もし雇用者が、集中した集会的な反対を予想しないでよいなら、自分の利益のために賃金をだんだん低い水準へと引き下げるはずだ。実際、同業の製造業者と繰り広げなくてはならない競争の戦いにより、雇用者はそうせざるをえないのであり、賃金はすぐに最低水準となってしまう。だがこの製造業者同士の競争は、平均的な状況においては、労働者たちからの反対によりある程度制約される。

あらゆる製造業者は、自分の競争相手も曝されている条件により正当化されていないような賃下げの結果はストだということを知っている。これはまちがいに製造業者にとっては痛手となる。というのも資本はストが続く限り遊休化してしまい、機械はさびついてしまうからで、そうした場合にその賃金引き下げを強行できるかどうかは大いに疑問だ。そして、もし自分が賃金引き下げに成功したとしても、競合他社もすぐにそれに倣い、したがって自分の方針のもたらした便益も消えてしまうことも確実に知っている。そうなれば、労働組合は危機の後に、通常よりも急速な賃金上昇をもたせさせることも多い。というのも製造業者としては、賃上げが競合他社により強制されるまでなるべく遅らせるほうが得なのだが、いまや労働者たちが市場の改善後すぐさま賃上げを要求し、そしてこうした状況で製造業者が命令を下せる労働者の供給が少なくなっているということを根拠にそれを理由づけられるようになるのだ。でも労働市場に影響するもっと重要な力に対しては、労働組合は無力だ。こうした場合、飢えによりスト参加者たちはしだいにどんな条件でも仕事を再開する方向に押しやられてしまい、そして数人がそれを始めてしまったら、労働組合の力は破られてしまう。というのもこうした少数のスト破りは、市場において財の供給在庫残高とともに、ブルジョワジーが事業中断の最悪の影響を克服できるようにしてしまうからだ。労働組合の資金は、救済を必要とする労働者の数の多さのためにすぐに底をついてしまい、店主たちが高利で与えてくれるツケもいずれは止まってしまい、そして欠乏のために労働者たちは、再びブルジョワジーの轡の下に自らを置くようだがすることになる。だがストが労働者にとって悲惨な終わり方をする場合がほとんどなのは、製造業者たちが自分の利益のため（そしてそれがかれらにとっての利益となるのは、労働者の抵抗を通じてのみだということも言うておこう）、無駄な賃金引き下げを避けるしかないのに対して、労働者たちは事業の状態により課せられるあらゆる賃下げで自分の状況悪化を感じ、それに対しては力の限り自衛しなくてはならないからなのだ。

だったらこう尋ねるだろう。「それならなぜ労働者たちはそうした場合にまでストライキをするのだろうか、そんなことをしても無駄だということがあまりに明らかなのに？」

それは単に、賃下げが避けられない理由によるものである場合も含め、労働者はあらゆる賃下げに対して抗議せざるを得ないためだ。かれらは人間として、社会的条件に屈服させられるものではなく、社会条件のほうが人間である自分たちに屈服すべきだということを、宣言せざるを得ないと考えているからだ。かれらが黙っていれば、そうした社会条件を受け入れたことになってしまい、ブルジョワジーが労働者を好況時には収奪し、不況時には飢えさせる権利があると認めることになってしまうからだ。こうしたことに対し、労働者はあらゆる人間感情を失わない限り反逆しなくてはならない。そして彼らがその抗議にストという手段を使って他の手段に頼らない理由は、かれらが実務的なイングランド人として行動で自らを表現するからであり、ドイツの理論家のように抗議が適切に記述されて棚におさめられたらすぐに寝てしまい、抗議者たちと同様に黙って眠りこけ続けるような存在ではないからなのだ。イングランド労働者の活発な抵抗は、ブルジョワジーの金銭欲をある程度の範囲内に抑える効果を持ち、ブルジョワジーの社会的政治的全能性に対して労働者の反対を活発に活かし続け、そして支配階級の権力を破るためには労働組合やストライキ以上のものが必要だという認識を同時に高めることにもなる。だがこうした労働組合やそこから生じるストライキに本当の重要性を与えているのは、それが競争を廃止させようという労働者による初の試みだということなのだ。それはブルジョワジーの優位性が完全に当の労働者同志の競争、つまりかれらの団結の欠如に基礎を置くものなのだという事実が認識されているということを含意している。そしてまさに労働組合が、いかに一面的な形で、いかに狭いやり方とはいえ、己を現在の社会秩序の中核的な要所に対抗するものとして方向付けているからこそ、それはこの社会秩序に対してかくも危険なものとなるのだ。労働者たちがブルジョワジーを攻撃し、同時に既存社会秩序すべてを攻撃するにあたり、これほどのアキレス腱は他にない。もし労働者同志の競争が破壊されたら、もし全員がこれ以上はブルジョワジーに収奪されないと決意すれば、財産の支配は終わりを迎える。賃金は需要と供給の関係に依存しているのであり、つまり労働市場の偶発的な状態に依存しているが、それは単に労働者たちがこれまで奴隷として扱われ、売買されるのに甘んじていたからでしかない。労働者が、もうこれ以上は売買されたりしないぞと決意し、労働の価値の決定において、労働力だけでなく意志を持つ人間としての地位を取るなら、その瞬間に今日の政治経済は丸ごと終わりを迎えるのだ。

実のところ、もし労働者たちが自分たち同志の競争を廃止するという段階の先に進まないのであれば、賃金率を定める法則は長期的には再び力を持つようになるだろう。だが、再び退いて自分たち同志の競争再出現を許すつもりがない限り、かれらはその先に進まねばならないのだ。そしていったんそこまで進んだのであれば、必然的にかれらはその先に進まねばならない。ある1種類の競争だけを廃止するのではなく、競争そのものをすべてなくしてしまうのだ。そして労働者はまさにそれをやるだろう。

労働者たちは日に日に、競争が自分たちにどう影響するかをますますはっきりと理解するようになっていく。資本家同志の競争が商業的な危機をもたらすことで労働者にも影響をおよぼすということを、ブルジョワよりもはるかに明確に理解するようになっており、そしてこの種の競争もまた廃止されねばならないと理解しつつある。そして間もなく、それをどのように実現するかも学ぶだろう。

こうした労働組合が、財産保有階級に対する労働者の辛辣な憎悪を涵養するのに大きく貢献するということはほとんど言うまでもない。したがってそこから出て来るのは、幹部組合員たちがそれを黙認しようとしまいと、異様な興奮時において、絶望の淵にもたらさ

れた憎悪や、あらゆる抑制を圧倒する野生の情熱のみでしか説明できないような、個人の行動なのである。こうした行動の例としては、しばらく前に述べた硫酸による攻撃や、その他いくつかの行動が挙げられる。以下に例をいくつか挙げよう。1831年に、荒っぽい労働運動の間に、マンチェスター付近のハイドの製造業者である若きアシュトン、草原をある晩横切っているときに射殺され、暗殺者の痕跡はまったく見つからなかった。これが労働者の復讐行為であるのはまちがいない。放火や爆破未遂などは実にありがた。1845年9月29日金曜日に、シェフィールドのハワード街で、パッジンのノコギリ工場を爆破しようという試みがあった。使われた手段は、鉄パイプを封印して火薬を満たしたものであり、被害は甚大だった。翌日、シェフィールド近くのシェールズムーアで、イベットソンのナイフとやすり工場に対して類似の試みがあった。イベットソン氏はブルジョワ運動への活発な参加、低賃金、スト破りだけの雇用、救貧法を自分の利益になるよう悪用するといった行為のために、嫌われる存在となっていた。1842年の危機のときには、賃金引き下げに応じない工員について、仕事があるのにそれを受け入れようとする人物であり、したがって賃金引き下げが実に不可避なのにそれを受け入れない以上、救貧の対象にはならないのだと報告している。爆発によりかなりの損害もたらされ、それを見物にやってきた労働者はみんな、「その物件がまるごと吹っ飛ばされなかった」ことだけを残念だとしていた。1843年10月6日金曜日、ボルトンにあるエインズワースとクロンプトンの工場に放火しようという試みは何の被害も与えなかった。これはごく短期間に同じ工場に対して行われた放火未遂として3回目か4回目だった。1844年1月10日水曜日にシェフィールドの町議会会合で、警察長官は爆発を生じさせるという目的だけのために作られた鑄鉄の機械を提示した。それはシェフィールドのアル街にあるキッチン氏の工房で見つかったもので、火薬4ポンドが詰められ、導火線には火がつけられたが、爆発には至らなかったのだという。1844年1月21日日曜日には、ランカシャーのバリーにあるベントレー&ホワイトの木工場、火薬の袋による爆発が生じ、甚大な被害をもたらした。1844年2月1日、シェフィールドのソーホー車輪工場が放火され炎上した。

いま4ヶ月間に起こった6件を挙げたが、そのすべての原因はひたすら、労働者が雇用者に対して恨みを抱いたということだ。こんなことが可能な社会状態とはいかなるものか、ぼくがここで改めて言うまでもないほどだ。こうした事実はそれだけで、イングランドにおいては1843年のような好況の年においてすら、社会戦争が公然と明確に戦われているという十分な証拠であり、それなのにイングランドのブルジョワは立ち止まって考えようとする！ だが最も雄弁に物語る事例は、1838年1月3日から11日まで巡回法廷で採りあげられた、グラスゴー暴力団の事例だ。法廷記録によると、この地方で1816年から続く綿紡績労組は、珍しいほどの組織力と力を持っていた。組合員は、多数決の結果に従うという誓いに拘束されており、あらゆるストのたびに組合員の大半が知らない秘密委員会を持ち、それが組合の資金を絶対的に仕切っていたのだという。この委員会はスト破りや面倒な製造業者の首や工場への放火に賞金をかけていた。このため紡績において男性ではなく女性のスト破りが雇われている工場が放火された。こうしたスト破りの娘を持つ、マクファーソン夫人という人が殺され、その殺し屋は二人とも組合の経費でアメリカに送られた。1820年という早い時期でも、マクワリーというスト破りが撃たれて手傷を負い、これに対して下手人は組合から20ポンドを受け取ったが、発見されて終身流刑となった。最後に1837年5月に、オートバンクとマイルエンドの工場でのストの結果として騒動が起こり、そこでダースほどのスト破りが虐待された。同年7月になっても騒動

は続いており、スト破りのスミスなる人物があまりに虐待されて死亡した。委員会はいまや逮捕され、捜査が始まり、主要組合員たちは共謀参加、スト破り虐待、ジェームズとフランス・ウッドの工場への放火で有罪とされ、7年の流刑となった。この話に対し、われらがよきドイツ人たちは何と言うだろうか？\*1

財産保有階級、特にその中でも労働者と直接接触する製造業の資産家は、こうした労働組合に対して最大限の罵倒を持って非難し、それがいかに役立たずかを労働者に絶えず証明しようとしている。その理由付けは経済学的には完全に正しいが、まさにそのために部分的にまちがっており、そして労働者の理解にとってはまったく何の影響も持たない。ブルジョワジーがまさにそんな説明に躍起になること自体が、それがこの問題に無関心ではいられないことを示している。そしてストによる直接的な損失に加えて、この話の状態は、製造業者の懐におさまるものはすべて、必然的に労働者のふところから奪われるものという構造になっている。だから、労働者は労働組合が賃金の引き下げにおいて、少なくともある程度ご主人方に対抗して抑えているということを知らなかったとしても、かれらはやはり、単純に敵である製造業者に損失を与えるためだけに労働組合を支援する。戦争においては、相手の損は自分の得であり、労働者は雇用主に対して戦争同然の立場にいるため、かれらは単に偉大な君主が紛争に陥ったときにやることをやっているにすぎない。他のブルジョワ全員を圧倒的に引き離しているのが、我らが友人のウレ博士で、労働組合の最も苛烈な敵だ。博士は綿紡績労働者の「秘密法廷」に対し、口で泡をふきながら糾弾してみせる。綿紡績は労働者の中でももっとも組織力が高い産業で、その法廷は、言うことをきかない製造業者すべてを麻痺させられると豪語しており、「そうすることで長年にわたり有益な雇用を与えてくれた人物に破滅をもたらすのである」。博士は「産業の創意あふれる頭脳とそれを維持する心臓が、破廉恥な低級組合員たちにより拘束されてしまう」時代について話をしている。イングランド労働者が、ローマ時代の平民ほど易々と丸め込まれようとしなないのは、何とも残念な話ではありますな、汝、現代のメニーアス・アグリッパよ！そして最後に、博士はこう述べる。ある時、粗野なミュール紡績人たちは自分たちの力をどう見ても堪忍できないほど濫用したという。高賃金は、製造業者への感謝の念を目覚めさせ、知的な向上（もちろんブルジョワジーに有益となる無害な研究分野での向上だ）へと向かわせるかわりに、高慢を生み出して、反逆精神の持ち主たちのストライキ支援の資金となり、そのストは多くの製造業者を次々に恣意的に襲ったのだ。デューキンフィールドのハイドとその周辺近隣における、この種の不幸な紛争の際に、このままでは自分たちがフランスやベルギーやアメリカの業者により市場から追い出されてしまうのではと恐れた製造業者たちは、シャープ、ロバーツ & Co. の機械工場に頼り、シャープ氏に対してその創意あふれる心を自動ミュールの製造に向け、「この産業を、苛立たしい奴隷と確実な荒廃から救って」くれないかと頼んだ。

\*1 「兄弟たる労働者を、己の友愛団とその友愛団の目的を放棄した存在として運命づけ、裏切り者で逃亡者として死ぬよう仕向けるべく、秘密会議に集い冷酷な考察を持って判決を下し、そしてその人物を処刑させ、それも公的な判事や首つり人によるのではなく、私的なものにより処刑させるなど仕向けるというのは、こうした人々の心の中にあるのはいかなる粗野な正義なのであろうか。まるで古き忠誠の残虐法廷や秘密裁判が、突然この奇妙な姿で復活したかのようだ。突然驚愕する眼前で再興し、それもいまや鎖帷子をまとうのではなくファスチアンの上着をまとい、ウェストファリアの森林に集うのではなくグラスゴーの舗装されたギャローゲートに集うとは！……その最悪の頂点においてすら、少数においてそれがこのような形を取ってしまうとは、こうした気性は多数派の中に広く広がった毒気に満ちたものにちがいない」――カーライル「チャーティズム」p. 40.――エンゲルスによる注

「数ヶ月かけて、かれは熟練労働者の思考、感情、手業を当初から備えたかに見えるほどの機械を生み出した。そしてそれはできた直後から、新しい統制の原理を示し、その感性状態では熟練紡績人の機能を十分に果たせるものとなった。こうしてこのアイアンマンと工員たちが適切にも呼んだこの機械が、ミネルヴァの求めに応じて現代のプロメテウスの手から飛び出した。産業階級に再び秩序をもたらし、大英帝国こそが技芸の帝国であることをはっきり示すことが確実な被創造物である。このヘラクレス的な傑作のニュースは労働組合に絶望を広げ、その機械がゆりかごを離れるはるか以前に、いわばそれは無秩序のヒドラを絞殺せしめたのであった」

ウレはさらに、4-5色を同時に布にプリントできる機械の発明は、キャラコプリント職人たちの争議の結果だったと証明してみせる。力織機による布向上での糸繰り職人たちの頑固ぶりが、糸繰り機械の新しい完成版を生み出した等々、類似の例をいくつか挙げている。その数ページ前に、この同じウレは、機械が労働者にとって有益だと詳細に証明しようとかかなりの手間をかけているのだ！だがこれはウレだけではない。『工場報告』で製造業者のアシュワース氏をはじめとする多くの人々は、労働組合に対する怒りを機会あるごとに表明している。こうした賢いブルジョワたちは、どこかの政府と同様、自分の理解できないあらゆる動きの根っこは、悪意に満ちた扇動家たちやデマゴグ、裏切り者、わめきたてるバカ者どもや、不安定な若者にあるのだとしている。かれらは、労働組合の有給エージェントたちが煽動に関心するのはそれで生計をたてているからだという。まるでそうした支払の必要性を労働者に強制したのは、そうした人々を雇用しようとしないうブルジョワではなかったとでも言わんばかりだ！

こうしたストライキの驚くべき頻度は、社会戦争がイングランド全土でどれほど広く勃発しているかを、何よりも雄弁に物語っている。どこかの方角でストライキが起きずには、一週、いや一日たりとも過ぎることはない。こちらでは賃下げに抵抗し、あちらでは賃金水準引き上げ拒否への抵抗として、あるいはスト破りの雇用のせいだったり虐待の継続に反対したり、ときには新しい機械に反対したり、あるいはその他ありとあらゆる理由でのストが見られる。こうしたストライキは、最初は小規模なものだが、ときには激しい闘争をもたらす。確かにそれで何かが決定づけられるわけではない。でもそれは、ブルジョワジーとプロレタリアートとの決戦が近づいているという最強の証明となっている。それは労働者の軍学校であり、ここで労働者は避けがたい大闘争に向けての準備を整えるのだ。それは個別の産業部門による、自分たちも労働運動に加わったぞという宣言書なのである。そして『ノーザンスター』紙（これはプロレタリアートの運動すべてを報道する唯一の新聞だ）のバックナンバー一年分を検討すると、都市と地方のすべての製造業でプロレタリアたちが労働組合結社でまとまったことがわかり、そしてときどきゼネストという手段で、ブルジョワジーの優位性に反対して抗議してきたこともわかる。そして戦争学校として、労働組合は無敵だ。労働組合の中には、イングランド人独特の勇気が発達している。大陸ヨーロッパでは、イングランド人、特に労働者は臆病で革命など実行できない、なぜならフランス人とはちがって、かれらはときどき暴動を起こしたりすることもないから、そしてその理由は明らかにブルジョワ体制を实におとなしく受け入れているからだ、と言われていた。これは大まちがいだ。イングランド労働者は勇気の点でだれにもひけをとらない。フランス人と同じくらい不満を抱いてはいるが、その戦い方がちがうの

だ。フランス人は、その天性からして政治的であり、社会的な邪悪に対して政治的な兵器により闘争する。イングランド人にとっては、政治はブルジョワ社会の利益を守るものとしてのみ関心があるものなので、政府に対して戦うのではなく、直接ブルジョワジーに対して戦うのだ。そして現在では、これは平和的な形でしか実行できない。事業の停滞と、それに伴う欠乏により、リヨンでの反乱が 1834 年に生じ、共和国が勝利した。1842 年にはマンチェスターで、似たような原因から人民憲章と賃金引き上げを求めて全面ストが生じた。ストライキには勇気が必要であり、時には蜂起に比べてずっとしっかりした勇気、ずっと大胆で確固たる決意が必要だというのは自明だ。欠乏の何たるかを経験から知っている労働者が、妻子と共にその欠乏に直面し、共に何ヶ月にもわたる飢えと悲惨に耐え、その間ずっと揺らぐことなくしっかり立ち続けるというのは、まったく並大抵のことではない。フランスの革命家を待ち受ける死や重労働の刑など、徐々に飢え、毎日のように家族の飢えを目撃し、将来ブルジョワジーから確実に仕返しされるのを知るのに比べたら何ほどのことだろうか。そのすべてをイングランドの労働者は、財産保有階級の軛の下に隷属するよりはむしろ自ら選び取るのだ。あらゆる抵抗が無意味で無駄になった場合にのみ武力に屈する人物の、頑固で制圧し難い勇気の例についてはまた後でお目にかかる。そしてまさにこの静かなる忍耐、この毎日百回もの試練に直面する永続的な決意においてこそ、イングランドの労働者は最も敬意を集めるその人格の側面を発達させるのだ。ブルジョワをたった一人屈服させるためにこれだけの忍耐を行う人々は、ブルジョワジー全体の力をも破ることができるだろう。

だがそれ以外にも、イングランドの労働者は何度もその勇気を証明してきた。1842 年のストライキがそれ以上の成果をもたらさなかったのは、人々が一部はブルジョワによってそれに無理矢理参加させられたこと、一部はその目的について明確に理解せずきちんと団結もしていなかったことからきている。だがこれを除けば、かれらは争点となっている問題が具体的で社会的なものである場合に、勇気を示している。1839 年のウェールズ蜂起は言うまでもなく、1843 年 5 月にはマンチェスターで立派な戦いが行われた。ぼくがそこに暮らしていた頃のことで、レンガ会社のポーリング&ヘンフリーが、賃上げなしにレンガを大きなものとして、そのレンガをもちろん高い値段で売った。賃上げを拒絶された労働者たちは仕事をストライキして、レンガ製造工労組は同社に宣戦した。同社は一方で、かなり苦勞しつつもその近隣とスト破り勢から労働力を確保した。そのスト破りたちに対して、当初は脅しが使われた。すると経営陣は中庭を警備するのに 12 人を雇い、その全員が元兵士や警官で、銃で武装していた。脅しが無為に終わったため、レンガ置き場は、陸軍バラックから 400 メートルも離れていなかったのだが、レンガ職人の群集によって夜の 10 時に襲撃された。かれらは軍隊的な秩序で進み、その最前列は銃で武装していた。そして無理矢理押し入ると、警備員を見たときに発砲し、乾燥のために広げてあった未乾燥のレンガを踏みつぶし、目の前にあるものすべてを破壊し、建物に押し入って、家具を破壊してそこで暮らしていた監督の妻を蹂躪した。警備員たちは一方で茂みの背後に陣取り、そこから安全に邪魔されずに発砲できるようにした。襲撃者たちは燃えるレンガ炉の前に立っており、その炉からのまばゆい光に照らされていたので、敵からのあらゆる銃弾は命中し、一方でかれらの銃弾はすべて外れた。それでも銃撃戦は銃弾が切れるまでの半時間続き、訪問の目的 中庭にある破壊可能なものすべての破壊 は達成された。そこで軍隊が接近し、レンガ工たちはマンチェスターから 5 キロのエックルスに退却した。エックルス到着のしばらく前に、かれらは点呼を取り、各人は支部の中の番号で

点呼を取ってから分かれたが、四方八方から接近しつつあった警察の手にますますしっかりと落ちただけだった。手傷を負った者の数は相当なものだったが、数えられたのは逮捕された者だけだった。その一人は銃弾を三発（もも、すね、肩）受けたが、それにも関わらず徒歩で六キロも移動していた。こうした人々は、かれらもまた革命的な勇気を持つことを証明し、銃弾の雨にもひるまないことを示した。そして1842年に起きた通り、丸腰の大群衆が、全員に共通する明確な目的もなしに、閉ざされた市場において、店を警備する数名の警官と暴漢たちによって制圧されてしまったのであるが、これは決して勇気の不足を示すものではない。正反対で、公共の（つまりブルジョワの）秩序の召使いどもがいなかったとしても、その群集はやはりあまり騒動を引き起こさなかつたろう。労働者たちが具体的な目的を持っているとき、かれらは十分な勇気を示す。たとえば、パリーの工場襲撃の場合がそうで、ここは後に大砲で守らねばならなかった。

これとの関連で、イングランドにおける法の遵守について少々言わせてもらう。確かに法はブルジョワには聖なるものだ。なぜならそれは自分が起草し、自分たちの合意で施行され、自分たちの利益と保護にかなうものだからだ。個別の法が自分に害を与えることがあっても、法体系の網目全体は自分の利益を守るのだと知っている。そして法の神聖、社会のある一方の能動的な意志と、もう片方の受動的な受容により確立された秩序の神聖さは、なによりもブルジョワの社会的な地位の最も強い支持なのだということも知っている。イングランドのブルジョワは、自分自身がその法に再現されているため（神の中に自分自身が再現されているのを見るのと同様だ）、警官という、ある意味では自分自身のクラブの中にいる人物の警棒は、ブルジョワにとってはすばらしい慰撫するような力を持つ。だが労働者にとってはまったく話がちがう！ 労働者は、法がブルジョワにより自分たちに行使すべく容易した棍棒なのを、あまりに熟知しているし、あまりに何度も繰り返された体験からそれを学んでいる。そして、他に手がないうちを除いては、決して法に訴えようとはしない。イングランドの労働者たちが警察を恐れていると思い込むのは馬鹿げている。というのも、マンチェスターでは毎週のように警官が殴られ、去年などは鉄のドアと鎧戸により保護された警察署を襲撃しようという試みさえなされたのだから。1842年ストにおける警察の力は、すでに述べた取り、明確に定義された目的が労働者自身に欠けていたせいではない。

労働者は法律に敬意をいだかず、法を変えられないときにその力に従うだけなので、ブルジョワジーの法体系にかわる、プロレタリアの法律を導入したいと思い、少なくともその法律の改定案を提案するというのはごく自然なことだ。この法案が人民憲章であり、その形態は純粋に政治的なもので、下院に民主的な基盤を要求するものだ。チャーティズムは労働者たちのブルジョワジーに対する反対を簡潔にまとめたものとなる。労働組合やストで、反対派は常に孤立したままだ。個別のブルジョワに対して、個別の労働者たちやその一派が戦っているわけだ。もし戦いがゼネストになったとしても、それは労働者が意図的にやったものであることはほとんどない。あるいは、意図的に起こったときですら、その根底にあったのはチャーティズムではない。だが、チャーティズムにおいては、ブルジョワジーに対して蜂起するのは労働階級全体であり、そしてまず攻撃するのは、ブルジョワジーが身の回りに築いた法制度の壁、その政治力なのだ。チャーティズムは1780年から1790年の間に、民主党の内側から発達し、プロレタリアートとともに、その中で台頭し、フランス革命の間に力を増して、講和の後に前衛党として登場した。当時の拠点はパーミンガムとマンチェスターで、後にロンドンにも拠点を置いた。自由党ブル

ジョワとの連合により旧議会の寡頭独裁集団から改革法案を強引に引き出し、それ以来着実に勢力を固め、ブルジョワジーに対抗する労働者政党としてますます明確な存在となってきた。1838年に、ロンドン一般労働者協会の委員会が、ウィリアム・ロヴェットを長として、人民憲章を起草した。その六カ条は以下の通りだ。

1. 成年で正気であり犯罪者として起訴されていない全男子による普通選挙
2. 年次議会
3. 貧困者でも立候補できるように、議員への歳費支払い
4. ブルジョワジーからの贈賄や恫喝を防ぐために投票箱を使った投票
5. 平等な代表選出を確保するため、平等な平等選挙区
6. あらゆる投票者が立候補できるよう、立候補者は土地で300ポンド保有しなければならないという今ですら単なる名目状でしかない財産要件を廃止すること

この六カ条は、すべて下院再構築に限られており、人畜無害に思えるが、イングランドの基盤を女王と貴族含めひっくり返すのに十分なほどのものなのだ。憲法のいわゆる王室と貴族的な部分が持続できているのは、ブルジョワジーがこうした上辺だけの存在継続に利益があると見ていたからにすぎない。そしてこのどちらも、今日では上辺だけの存在以上のものを持ってはいないのだ。だが本当の世論が完全に下院を裏付けるようになり、下院がブルジョワジーだけでなく国民全体の意志を反映ようになれば、それは全権を実に完璧にくみ取るので、王室の長と貴族から最後の光輝も剥がれ落ちてしまうはずだ。イングランドの労働者は貴族にも女王にも敬意を抱いていない。ブルジョワは、現実にはかれらに許容している権力はないも同然だが、それでも個人的にかれらに上辺だけの畏敬を示している。イングランドのチャーティストは政治的には共和主義で（とはいえこの用語はほとんどかまったく使わない）、各国の共和政党と同調しており、どちらかといえば民主主義を好むと述べている。だがチャーティストは単なる共和主義者ではないし、その民主主義も単に政治的なものではない。

チャーティズムは1835年の当初から、主に労働者の間の運動だったが、当時はまだブルジョワジーとは明確に区別されていなかった。労働者の前衛主義は、ブルジョワジーの前衛主義と手を携えていた。憲章はこの双方の合い言葉だ。両者は年次の全国大会をいっしょに開催し、まるで一つの政党であるかのようだった。中産階級の下位は、改革法案と1837-1839年の不景気をめぐる失望の結果として、ちょうど非常に好戦的で暴力的な精神状態にあったので、乱暴なチャーティストの煽動をきわめて好意的な目で見たと。この煽動の凶暴さについては、ドイツのだれ一人として想像もつかない。人々は武装するよういわれ、しばしば反逆を支持された。フランス革命の場合と同じくピケが容易され、1838年にはメソジスト派の牧師であるスティーブンスなる人物が、終結したマンチェスターの労働者に対してこう述べた。

「諸君らは政府の力も、きみたちの抑圧者が使える兵士も、銃剣も大砲も恐れる必要はない。きみたちはこうしたものよりはるかに強い武器を持っている。銃剣や大砲が無力となる武器、十歳の子供でも使える武器だ。マッチ数本と、<sup>ピッチ</sup>瀝青につけた藁の束さえきみたちが手に取れば、このたった一つの武器に対し、それが大胆に使われた場合に、政府やその何十万もの兵士に何ができるものか見てみたいものだ」

その年にはすでに、労働者のチャーティズムが持つ特異なほど社会的な性格があらわれ

てきた。この同じスティーブンスは、マンチェスターのモンテサクロとも言うべきケーサー  
ルムーアでの20万人の集会でこう語った。

「わが友人諸君、チャーティズムは主要目的が自分への得票であるような、政治  
的運動などではない。チャーティズムはナイフとフォークの問題なのだ。憲章は、  
よい家、よい飲食物、反映、労働時間短縮なのだ」

新救貧法と十時間法案に対する反対運動は、すでにチャーティズムときわめて密接な  
ものだ。当時のあらゆる会合でトーリー党のオーストラが活躍し、労働者の社会条件  
改善を願う何百もの請願書が、バーミンガムで採択された人民憲章についての全国請願  
書とともに回覧された。1839年にも煽動はずっとその勢いを失わず、同年の末にかけて  
それが少しおさまり始めると、ブッシー、テイラー、フロストはイングランド北部、ヨー  
クシャー、ウェールズでの同時蜂起を促進すべく呼びかけた。フロストの計画は頓挫し、  
攻撃を早めに始めざるを得なくなった。北部の人々は、フロストの試みの失敗を聞いて、  
退却に間に合った。二ヶ月後の1840年1月、ヨークシャーのシェフィールドとブラッド  
フォードで、いくつかの通称スパイ暴動が起き、興奮はだんだん衰えていった。一方、ブル  
ジョワジーはその関心をもっと実務的なプロジェクト、もっと自分にとって利にあるも  
の、つまりは穀物法に向けた。マンチェスターで反穀物法協会が形成され、結果として前  
衛のブルジョワジーとプロレタリアートとのつながりが弱まった。労働者たちは間もなく、  
穀物法の廃止は自分たちにはほとんど役に立たないのに、ブルジョワジーにはきわめ  
て有利だを見て取った。だからこのプロジェクトに動員されることもなかった。

1842年の危機がやってきた。煽動は再び1839年と同じくらい激しくなった。でも今  
回は、金持ち製造業ブルジョワジーが、この危機できわめて苦しんでいたために、ここに  
参加した。反穀物法連盟と現在呼ばれているものが、明確に革命的な論調を採用するよう  
になった。その機関誌や扇動家たちは、露骨なほど革命的な言語を使うようになったが、  
そのきわめて大きな理由は、1841年以来保守党が政権を握っていたことだった。チャー  
ティストたちがこれまでやったように、こうしたブルジョワ指導者たちは人々に反逆を呼  
びかけた。そして危機により最も苦しむ立場にあった労働者たちは、手をこまねいては  
いなかったが、これは同年の憲章を求める全国請願書が350万の署名を集めたことから  
も証明される。要するに、二つの前衛党がちょっと疎遠になってはいても、再び両者は  
ここで手を組んだわけだ。1842年2月14日にマンチェスターで開催された、自由党と  
チャーティストとの会合で、穀物法廃止と憲章採択を促す請願書が起草された。翌日、そ  
れが両党に採択された。春と夏は、暴力的な煽動と景気の悪化の中で過ぎた。ブルジョワ  
ジーはこの危機と、そえがもたらす欠乏と、全般的な興奮状態を利用して穀物法廃止を実  
現しようと決意していた。当時、保守党が政権を握っていたので、自由党ブルジョワジー  
は自分たちの法遵守の慣習を半ば放棄していた。労働者の助けを借りて革命を実現しよう  
としていたのだ。労働者たちは、ブルジョワジーたちが自分の指を火傷せずにすむよう  
に、火から栗を取りだす役目を与えられたのだった。1839年にチャーティストたちが提  
唱した「聖なる月」、ゼネストという発想が復活した。だが今回は、仕事を辞めたがった  
のは労働者ではなく、工場を閉鎖して工員たちを田舎の教区に送り出し、貴族の土地を占  
拠させて、トーリー党議会とトーリー内閣に対して穀物法廃止を強制させようとした製造  
業者たちだった。当然ながら反逆が起きただろうが、ブルジョワジーたちは安全なまま背  
後にとどまり、最悪の事態が起きた場合にも自分に危害が及ぶことなく、結果を待ってい

ればよい。7月末に景気が回復しはじめた。期は満ちた。機会を逃さぬよう、ステリーブリッジの三社が景気改善にもかかわらず賃金引き下げを行った。これが独自に行われたのか、他の製造業者、特に連盟加盟者たちとの合意の下で行われたものなのか、ぼくは知らない。しばらくしてそのうち2社は賃下げを取り下げたが、三社目のウィリアム・ベイリー&兄弟社は頑固に譲らず、反対する工員たちに対して「これがお気に召さないのであれば、ちょっとでかけて遊んでいたほうがいいぞ」と告げた。この見下すような回答に対し、工員は大いにバカにして応じた。そして工場を離れ、町の中を更新し、仲間たちみんなに仕事をやめるよう呼びかけた。数時間ほどで、あらゆる工場が操業を止め、工員たちはモットラムムーアに更新して会合を開いた。これは8月5日に行われた。8月8日に一同は五千人強でアシュトンとハイドに更新し、工場と炭坑をすべて止め、会合を開いたが、そこでの議題はブルジョワジーが期待したような穀物法の廃止ではなく、「公正な一日の作業に対して公正な日給を」というものだった。8月9日にかれらはマンチェスターに更新し、当局(すべて自由党)から何も抵抗を受けずに工場を閉鎖させた。11日にはストックポートにつき、ブルジョワジーたちのお気に入りのお申し子たる救貧院を襲撃しているときに初めて抵抗にあった。同日、ボルトンでゼネストと紛争が生じたが、そこでも当局は抵抗しなかった。やがて放棄は製造業地区すべてに広がり、収穫と食物生産以外のあらゆる雇用が停止状態となった。だが反逆的な工員たちは静かだった。かれらは自分で望まないのにこの反逆に加わることとなったのだった。マンチェスターのトーリー党員パーリーという唯一の例外を除き、あらゆる製造業者たちは、いつもの習慣とは逆に、これに反対しなかった。この事態は、労働者たちはまったく何も明確な目的を持つことなく開始されたものだったが、その理由は、労働者たちがみんな穀物法反対のブルジョワジーに利用されて射殺されたりするまいという決意で団結していたことだった。残りの労働者はといえば、一部は憲章を実施させたいと思い、一部はこれが早すぎると考えて、単に1840年の賃金水準を確保したいと思っただけだった。この点で、蜂起すべてが崩れた。もしこれが、最初から意図的で決然とした労働者たちの蜂起だったなら、まちがいなく目標を達成したことだろう。だが雇い主たちによって、自らの意志に反して街路に出て行った群集たちは、何も明確な目的を持たず、何もできなかった。一方、ブルジョワジーは、2月15日の同盟を実施するために指一本たりとも動かさなかったが、やがて労働者たちが自分たちの手先になるつもりはないことに気がつき、また自分たちが法遵守の立場を放棄した非論理的なやり方が危険をもたらしかねないことも認識した。したがってブルジョワジーはその法遵守的な態度を復活させ、労働者に刃向かう政府の側についたのだった。

そして忠実な傭兵を特別警官として導入した(マンチェスターのドイツ商人たちもこの催しに参加し、口に葉巻を加えて太い警棒を手に、まったくそぐわない様子で市中を行進したのだった)。プレストンでは、群集に対する発砲命令を出し、おかげで意図せざる人々の反乱は、いきなり政府の全軍事力のみならず、資産保有階級すべてとも直面することになってしまった。労働者たちはこれという目的もないので、だんだん離れていき、放棄は邪悪な結果なしに終わりを迎えた。その後ブルジョワジーは次々に恥ずべき行動に及んだ。人民の暴力に対する恐怖を表明してみせることで自分に罪はないふりをしようとしたが、その発言は春の自分自身の革命的な物言いとはまるで一貫性のないものだった。そして蜂起の責めをすべてチャーティストの教唆者たちに押しつけようとしたが、実はそんな人々を全員あわせたよりも自分たちのほうが蜂起をもたらすのに貢献してきたのだ。さらにはまったく比類ないほどの恥知らずぶりで、法の名前を聖なるものとするという昔の態

度に逆戻りした。チャーティストたちは、この蜂起をもたらす点ではほとんど何の咎もなく、ブルジョワジーが機会を最大限に活用しようとしてやったことを単純に実施しただけなのに、訴追され有罪となったが、これに対してブルジョワジーは何の損失もなく逃れ、それに加え、作業が止まっている間に古い在庫をかなりの利ざやで売り払ったのだった。

蜂起の果実は、プロレタリアートがブルジョワジーと決定的に袂を分かったことだった。チャーティストたちはそれまで、あらゆる犠牲を払っても憲章を実現するという決意を隠したことはなかったし、革命すら厭うものではなかった。ブルジョワジーは、いまや突然、暴力的な変化がすべて自分の立場に与える危険に気がついて、物理的暴力についてはそれ以上何も聞きたくないと言え、目的を果たすのに道徳的な力だけを使おうと提案した。まるでそれが、物理的な力の直接・間接的な脅し以外の何かであるとも言えるように。これが両者の異論の一点だが、これですら後にチャーティストたち（かれらは少なくともブルジョワに比べて信頼に値する）が、かれらもまた物理的な力に訴えるのをやめたと主張したことで消えてしまった。意見がわかれた第2の点は、こちらが主要なもので、チャーティズムの持つ純粋性をあらわにしたものだが、穀物法への反対だった。この点についてブルジョワジーは直接的な利害を持ち、プロレタリアートは持たなかった。だからチャーティストたちは二つの党派に分かれてしまい、その政治プログラムは字面上は一致していたのだが、それでもまったくちがったものとなっており、したがって連合できなかった。1843年1月のバーミンガムでの全国大会で、急進ブルジョワジー代表のスタージは、チャーティスト協会の規則から憲章の名前を削除すべきだと提案した。その名目は、この名前が蜂起の祭の暴力の記憶と結びつけられるようになったからというものだった。この連想はちなみに、何年も前から存在したものであり、これに対してスタージ氏はそれまでなんら異論を述べたことはなかったのだが、労働者たちは憲章への言及と削除を拒否し、スタージ氏は否決されると、このご立派なクェーカー教徒は急に従順さをふり捨て、会堂から外に出ると急進ブルジョワの中で「全面選挙教会」を創設したのだった。この思い出があまりにジャコパン派的過激ブルジョワジーの中で忌まわしいものとなっていたので、かれは普通選挙という名前すら改変して、得体の知れない全面選挙なるものにしてしまったわけだ。労働者たちはそれを嘲笑し、静かに独自の道へと向かった。

この瞬間からチャーティズムは労働者の運動隣、あらゆるブルジョワ要素から解放されたのだった。「全面」派の機関誌である『ウィークリーディスパッチ』や『ウィークリークロニクル』『エグザミネー』等は、次第に他の自由党新聞と同じ眠たげな調子へと陥り、自由貿易支持を掲げ、十時間法案と、その他あらゆる労働者だけの要求事項を攻撃し、その急進過激主義をすべてだんだん背景へと退かせていった。急進ブルジョワたちは、あらゆる衝突において自由党と手を組んで労働者たちに反対し、全体としては穀物法の問題（これはイングランド人全体にとっては自由貿易の問題だ）を主要な関心事とした。こうしてかれらは自由党ブルジョワの支配下に入り、今ではきわめて哀れな役割しか果たしていない。

これに対してチャーティストの労働者たちは、プロレタリアートのブルジョワジーに対する闘争すべてを、これまでの2倍の熱意を持って実施するようになった。自由競争はあまりに長く労働者の苦しみを引き起こしたので、嫌われていた。その使徒たるブルジョワジーが敵として宣告された。労働者たちは、競争の完全な自由が起きたら、損失が待ち受けているだけだ。それまで労働者が行った要求である十時間法案、資本家からの労働者の保護、高賃金、地位の保証、新救貧法の廃止、チャーティズム「六カ条」に基本的に属

するすべてのものは、自由競争や自由貿易と直接的に対立するものだ。すると労働者たちが自由貿易と穀物法廃止など認めたいと思わない（これはイングランドのブルジョワジー全体にとって理解しがたい事実だ）のは当然だし、少なくとも穀物法問題そのものに対してはまったく無関心であったとしても、その支持者大しては深い敵意を抱いているのも無理はないだろう。この問題はまさに、プロレタリアートがブルジョワジーと袂を分かち、チャーティズムと急進主義とが分かれる問題そのものなのだ。そしてブルジョワジーは無理も無いことだがこれを理解できない。というのもかれらにはプロレタリアートが理解できないからだ。

ここにこそ、チャーティストの民主主義と、それまでのあらゆる政治的ブルジョワ民主主義とのちがいがあがる。チャーティズムは基本的に社会的な性格のもので、階級運動だ。「六カ条」は、急進ブルジョワにとってはこの問題の始まりにして終わりであり、最大でも憲法のさらなる改訂を求めるものでしかないが、プロレタリアにとってはさらなる目的のための一手段にすぎない。「政治権力は我らが手段、社会的幸福が我らの目標」というのがいまやチャーティストたちのはっきり綴られた戦争の叫びなのである。スティーブンス牧師の「ナイフとフォーク問題」が真実だったのは、1838年のチャーティストたちのごく一部にとってでしかなかった。だが1845年には、それがあらゆるチャーティストにとって真実なのだ。もはやチャーティストの中には単なる政治家はいないし、その社会主義はきわめて発達が遅れてはいて、その主な貧困対策はこれまで土地割り当て制度でしかなく、これは製造業の導入により克服されてしまったとはいえ、そしてその主要な実務的提案は明らかに反動的なものであるとはいえ、それでもこうした手法そのものが、二つの選択肢を示しているのだ。それは、再び競争の力に屈して旧態依然とした状態を復活させるか、あるいはかれらが自ら競争を克服してそれを廃止するかという選択だ。一方で、現在のチャーティズムのどっちつかずの状態、純粋に政治的な政党からの分離は、まさにその特長となる性質、その社会的側面を、今後発達させねばならないことを示している。社会主義への接近は不可避だ。特に、次の不景気が労働者を、純粋な欠乏の力によって、政治的な対処療法よりも社会的な対策へと向かわせるのだから。そして、現在の産業と商業の活発な状態に続いて、不景気は遅くとも1847年に、おそらくは1846年にやってくるはずだ。しかもそれは、これまでの危機の規模も威力もはるかに超えたものとなるだろう。労働者たちはもちろん、自分たちの憲章を掲げる。だが一方では、その憲章という手段で実現できる多くの点と、いまはほとんど理解できていない点とについて、もっと明確に見通すことも学ぶだろう。

一方、社会主義者の煽動もまた前進する。イングランドの社会主義は、それが労働階級に影響する限りにおいてのみぼくたちの考察対象となる。イングランドの社会主義者たちは、共同所有の段階的な導入を、ホームコロニーという形で導入しようとしている。これは2、3000人ほどの集団で、農業と製造業を両方実施して、平等な権利と平等な教育を享受するものだ。離婚の実施ももっと容易にして、合理的な政府を確立し、良心の完全な自由と罰の廃止を要求し、それを犯罪者の合理的な処遇により置きかえるよう述べている。これはかれらの実務的な手法であり、その理論的な原理はここでぼくたちが意に介するものではない。イングランドの社会主義は製造業者オーウェンとともに台頭し、したがって最終的にはブルジョワジーとプロレタリアートの階級対立の廃止要求へと到達はするものの、手法面で見るとブルジョワジーに対する大きな配慮とプロレタリアートに対する大きな不正を伴って進んできた。

社会主義者たちはまったくおとなしくて平和的であり、社会の既存秩序がどんなに悪くろうとそれを受入れ、拳げ句に世論を説得するという意外のあらゆる手法を拒絶している。だがかれらは、この手法による成功こそが自分に向いたものであり、自分たちが現在構築している原理にとってふさわしいものだとは教条的に確信しているため、まったくお話にならない。下層階級の道徳的墮落を嘆きつつ、この古い社会秩序の解体に見られる進歩の要素がまったく目に入らず、私的利益と偽善により財産保有階級にもたらされた腐敗がずっと大きいのだと認識することを拒否するのだ。歴史的な発展もまったく認めず、国民を共産主義の状態に一夜のうちに置こうと願い、国民の政治的発展によりそうした変化が可能かつ必然となるような不可避の進歩でそれが実現するとはまったく考えない。確かにかれらは、なぜ労働者がブルジョワに対して敵意を持っている化は理解しているが、こうした階級憎悪を不毛なものとしているのだ。この階級憎悪こそは結局のところ、労働しゃがその目標に近づける唯一の道徳的インセンティブだというのに。かれらはその代わりに、イングランドの現状にとって遥かに実りの少ない事前と不変の愛を唱えるのだ。かれらが認知するのは心理的な発展だけだ。抽象化された人間の発展であり、過去とのあらゆる関連から外れたものなのだが、実は全世界はその過去に基づいているのであり、それは個々の人間も同様なのだ。したがって、かれらはあまりに抽象的で、あまりに形而上学的で、ほとんど何も実現できない。かれらの一部は労働階級からリクルートされているが、かれらが動員したのはほんの小さな一部でしかなく、しかもその中でも最も教育の高いしっかりした人々だ。現在の形だと、社会主義は決して労働階級の共通信条にはなり得ない。腰を低くして、しばらくはチャーティストの観点に立ち戻らねばならない。だが真のプロレタリア社会主義はチャーティズムを経たことで、ブルジョワ要素を完全に消し去り、多くの社会主義者やチャーティストの指導者（ほとんどが社会主義者だ）がすでに心の中では到達している形態を取っているが、それが短期間にイングランドの人民の発展史において、重要な役割を果たさなくてはならない。イングランド社会主義は、フランスのものよりもはるかに豊かな基盤を持つが、その理論的な発展の後ろ盾にはなるものの、しばらくはフランスの観点に道を譲って退き、後にフランス社会主義を超えるようにしなければならない。一方フランス社会主義も、さらに発展する。イングランド社会主義は、労働者の中で広く見られる宗教不在について、最も明白な表現を提供している。その表現はあまりに強いので、労働者の大半は、無意識のうちに、かつ単に実務的に非宗教的だが、それでもひるむくらいだ。だがここでも、必要性により労働者は信仰の残滓を放棄せざるを得なくなる。信仰は、かれらがますますはっきりと認識するように、かれらを弱体化させて運命に甘んじさせるだけのものであり、吸血鬼のような財産保有階級に対して従順で忠実になるよう仕向けるものなのだ。

したがって、労働者の運動がチャーティストと社会主義者という二つの派閥に分裂するのは明らかだ。チャーティストは理論的には後進的だが、すべてがまじりっけなしのプロレタリアで、自分たちの階級を代表する存在だ。社会主義者たちはもっと未来を見て、苦境に対する実務的な対処法を提案はするが、もともとブルジョワジーの出なので、このために労働階級と完全には融合できない。社会主義とチャーティズムとの連合、フランス教唆主義をイングランド的な形で再現するものが、次の一歩となり、これはすでに始まっている。するとこれが実現されたときにはじめて、労働階級はイングランドの真の知的リーダーとなる。一方、政治的、社会的な発展は続き、この新しい党、このチャーティズムからの新たな決別を涵養することになるのだ。

労働組合主義者、チャーティスト、社会主義者など労働者たちのこうした各種派閥は、しばしば連合することもあれば、しばしば分離することもあるが、それぞれの自分の特長に基づいて多くの学校や読書室を設け、教育を促進しようとしている。あらゆる社会主義者と、ほぼあらゆるチャーティスト機関はこうした場を持つし、多くの産業労働組合も同様だ。ここで子供たちは純粋なプロレタリア教育を受け、ブルジョワジーの影響からすべて逃れられる。そして読書室では、プロレタリア雑誌や書籍しか見つからない。あるいはほとんどそれしかない。こうした仕組みはブルジョワジーにとってはとても危険なものなので、そうした機関のいくつか、「メカニック」養成機関をプロレタリアの影響から引き揚げて、ブルジョワジーに有益な科学を広める手段とするのに成功している。ここではいまや自然科学が教えられ、これは労働者をブルジョワジーに対する反対から引き離し、ブルジョワジーにもっとお金をもたらす発明を行う手段として労働者を使うことにもなりかねない。だが労働者にとっては、大都市での長時間労働のために自然などこれっぽっちもお目にかかれなことがあまりに多いので、自然科学になじむことは現在はまだ役に立たずなのだ。ここでは政治科学が説教され、そこでは自由競争が偶像崇拜の対象であり、その教えが労働者にとって持つ意味は結局のところ、労働者は飢餓に甘んじる以上に合理的なことは何もできないということなのだ。ここではあらゆる教育がおとなしく、虚弱で、支配的な政治や宗教にへつらうものなので、労働者にとってはそれは単に、おとなしい服従、受動性、運命のあきらめきった盲従を絶え間なく説教しつづけるだけでしかない。

労働者の大半は当然ながらこうした機関とはまったく関係がなく、プロレタリアの読書室に向かい、自分の利益に直接関係する問題についての議論を行う。すると自己満足したブルジョワジーは「自分は言うべきことは言った」と述べ、「しっかりした教育のメリットよりも、悪意に満ちたデマゴグたちの怒りの妄言のほうを好む」階級から、軽蔑をこめて目をそむけるのだ。しかしながら、労働者たちはブルジョワジーの利害に満ちたお説教と切り離せる場合には、しっかりした教育をありがたく享受するのだということは、特に社会主義教育機関で教えられている科学的、美的、経済学的なテーマについての講義が多いことで証明されているし、またそうした講義の出席率も高い。ぼくはしばしば労働者が、ファスチアン製の上着がほとんどちぎれそうになっているのに、地学、天文学などのテーマについて語るのを聞いたが、それはドイツの最も「教養ある」ブルジョワが保有する知識よりも博識なものだったことも多い。そしてイングランドのプロレタリアートが独立した教育を達成するのにどれほど大きな成功をおさめているかは、現代の哲学、政治学、詩的文献の画期的な産物はほとんどすべて労働者だけが読んでいるという事実でことさら示されているのだ。ブルジョワたちは、社会条件とそれに伴う偏見に隷属させられているため、進歩の道を切りひらくものすべての前で、身震いし、お祈りを唱え、十字を切る。プロレタリアはそうしたものに目を閉ざすことなく、喜んで見事にそれを検討するのだ。この点で特に社会主義者たちは、プロレタリアートの教育のためにすばらしい成果を貢献してくれた。フランスの唯物論者のエルベシウス、ドルバック、ディドロなどを翻訳して、それを最高のイギリスの作品とともに廉価版で頒布したのだ。シュトラウス『イエスの生涯』やブルードン『財産とはなにか』もまた、労働者の間でしか流通していない。シェリー、天才にして予言者たるシェリー、そして既存社会に対する輝ける完成と辛辣な風刺を持つパイロンのほとんどの読者はプロレタリアートだ。ブルジョワジーが所有しているのは去勢された版や家族版で、今日の偽善的な道徳にあわせて削除されたものでしかない。最新の偉大な実践哲学者たるベンサムとゴドウィン、特に後者は、ほとんどプロ

レタリアートだけの所有物だ。というのもベンサムは急進ブルジョワの中にも学派を持つけれど、その教えを一步進めるのに成功したのは、プロレタリアートと社会主義者だけだからだ。プロレタリアートはそれを基盤として、主に雑誌やパンフレットから成る文献を構築し、これはその内在的価値において、ブルジョワ文献すべてに比べてはるかに進んでいる。この点については後述する。

もう一点だけ触れておこう。工場の工員たち、特に綿地域にいる者たちは労働運動の中核を構成している。ランカシャー、特にマンチェスターは、最強の労働組合が存在する場所であり、チャーティズムの中心値であり、社会主義者が最も多い場所だ。工場システムがある産業部門を支配すればするほど、そこで雇われる労働者たちは労働運動に参加する。労働者と資本家との対立が鋭くなればなるほど、労働者の中のプロレタリア意識は明確になる。バーミンガムの小規模職人は、不景気で苦しんでいるが、それでもプロレタリアのチャーティズムと工房主の急進主義との間の不幸な中間位置に立ち続けている。だが一般に、製造業で雇用されている労働者はすべて、何らかの形で資本とブルジョワジーに対する抵抗に肩入れしている。そしてみんなは以下の点で連帯している。つまりかれらは労働者として、かれらが誇りに思っており、チャーティスト会合で一般的な呼びかけであるこの肩書きの下に、あらゆる財産保有者とはまったく別の階級を構成し、別の利害と原理を持ち、別のものの見方をするという点だ。そしてこの階級にこそ、国民発達の力と能力が存在しているという点なのだ。

## 第9章

# 鉱山プロレタリアート

原文：<http://bit.ly/1Eseo4x>

イングランドほど巨大な製造業に必要な原材料と燃料の生産は、かなりの数の労働者を必要とする。だがその産業に必要なあらゆる原材料のうち（農業地区に属する羊毛を除いては）、イングランドが生産するのは鉱物だけだ。つまり、金属と石炭だけとなる。コーンウォールは銅、すず、亜鉛、鉛を豊かに埋蔵しているが、スタフォードシャー、ウェールズなどの地域は大量の鉄を保有し、イングランドの北部と西部ほぼ全域、スコットランド中心部、アイルランドの一部地域は石炭を実に豊富に生産している\*1。

コーンウォールの鉱山ではおよそ 19,000 人の男性と、女子供 11,000 人が雇われ、一部は地上、一部は地下で働いている。地下の鉱山では、雇われているのはほとんどが 12 歳以上の少年だけだ。こうした労働者の常態は、『児童雇用委員会報告』によれば、物質的にはかなり耐えやすいもので、イングランド人はしばしば自国の強く大胆な鉱夫を自慢してみせる。こうした鉱夫は、鉱脈をたどって海の底にまで向かうというのだ。だがこうした労働者の健康はといえば、同じ『児童雇用委員会報告』はちがった診断を下している。パーハム医師の知的な報告によれば、鉱山の中で主に見られるような、酸素があまりなく、粉塵がまじり、爆破薬の煙に満ちた空気は、肺に深刻な影響を与え、心臓の活動を阻害し、消化器の働きを衰えさせるという。消尽する重労働、特にはしごの上り下りは、こうした被害の発達を大きく促進する。一部の鉱山では屈強な若者ですら、一日一時間以上ははしごで過ごさねばならず、さらに一日の仕事の初めと終わりにははしごの昇降があるのだ。おかげでこの仕事にととも若い年から就いている男は、地上で働く女性たちの背丈にはまったく届かない。そして奔走馬性結核で早死にする者も多い。さらに中年のほと

\*1 1841 年国勢調査によれば、大英帝国（アイルランド除く）の鉱山で雇われている労働者数は以下の通り：

	20 歳以上男性	20 歳未満男性	20 歳以上女性	20 歳未満女性	合計
炭坑	83,408	32,475	1,185	1,165	118,233
銅鉱山	9,866	3,428	913	1,200	15,407
鉛	9,427	1,932	40	20	11,419
鉄	7,773	2,679	424	73	10,949
すず	4,602	1,349	68	82	6,101
その他	24,162	6,591	472	491	31,716
合計	139,238	48,454	3,102	3,031	193,825

炭鉱と鉄鉱で働く鉱夫は同じ人々であることが多いので、炭鉱に計上された鉱夫の一部、そして「その他」で挙げた鉱夫のかなりの部分は、鉄鉱山に計上されるべきものだ。 — エンゲルス注

んどの鉱夫は緩慢な結核で死ぬ。また老けるのもはやく、35歳から45歳にかけて仕事ができなくなる。多くは立て坑の暖かい空気から（粗い息をしながらはしごを登ってきた後で）地上の冷たい外気にさらされると、呼吸器の急激な炎症に襲われる。そしてこうした激しい炎症はしばしば致命的となる。地上作業は、鉱石の粉碎と選別だが、女子供に任せ、外の空気の中で行われるので非常に健全とされる。

イングランド北部、ノーザンバーランドとダラムの境界には、アルストンムーアの広大な鉛鉱山がある。この地区からの報告は、ほぼ完全にコーンウォールからのものと一致している。ここでも、酸素の不足、過剰な粉塵、火薬の煙、炭酸ガス、言おうが、働く場所の空気に交じっている。結果としてこの鉱夫たちはコーンウォールと同様に身長が低く、ほとんどが30歳を超えると一生にわたり胸の症状に苦しみ、それが特にこの仕事を、ほとんどの場合はそうだがずっと継続したときには、結核で終わり、こうした人々の平均寿命を大幅に縮めている。この地区の鉱夫たちが、コーンウォールの鉱夫よりも少し長生きするとしたら、それはかれらが19歳になるまでは鉱山に入らないからだ。これに対してコーンウォールでは、すでに見た通り、同じ作業が12歳から始まる。それでも、ここですら医学の証言によると、大半の鉱夫は40歳から50歳で死ぬ。地区の公的台帳に登録された死亡鉱夫79人は、平均寿命が45歳だが、うち37人は結核で、6人がぜんそくで死んでいる。周辺地区のアレンデル、スタンホープ、ミドルトンでは、平均寿命はそれぞれ49歳、48歳、47歳であり、胸部疾患による死亡はそれぞれの総数の48、54、56パーセントを構成していた。こうした数字を、通称スウェーデン表と比べてみよう。これはスウェーデン全住民を網羅する死亡率の詳細な表で、イングランドではイギリスの労働者の平均寿命について、これまでに達成できる基準として最も正確なものとして認められている。これによると、19歳まで生き延びた男性は、57.5年の平均寿命を達成する。だがこれに基づくと、イングランド北部の鉱夫たちは寿命を平均で10年奪われていることになる。だがスウェーデン表は、「労働者」の寿命の基準として受け入れられているのであり、したがって現在では、プロレタリアートが暮らす不利な条件に影響された平均的な寿命の可能性を示すものとして認められており、つまりこれ自体が寿命の標準として通常のものより短いのだ。この地区ではまたもや、都市ですすでにお馴染みの掘っ立て小屋や就寝所が見られ、都市と同じくらい汚く、嫌悪を催す過密状態となっている。ミッチェル評議員はこうした睡眠バラックの一つを訪れた。長さ6メートル、奥行き5メートルで、男性42人と少年14人、つまり合計56人を収容するようになっており、そのうち半分はまるで船のように他の人の頭上にある寝台で眠っている。醜悪な空気が逃れる開口部はない。そしてこの豚小屋で眠った人は、訪問に先立つ三晩はだれもいなかったにもかかわらず、その臭気と空気があまりにひどかったため、ミッチェル評議員は一瞬たりともそれに耐えられなかった。それが暑い夏の夜に56人詰め込まれていたら、どんなにひどかっただろうか？ そしてこれはアメリカの奴隷船の船倉などではなく、自由に生まれたイギリス人たちの住居なのだ！

今度はイギリスの鉱業で最も重要な部門である、鉄と石炭鉱山に目を向けよう。『児童雇用委員会』はこれをまとめて扱っており、この対象の重要性から要求されるだけの詳細な記述を行っている。この報告の最初の部分はほぼすべてがこうした鉱山で雇われている労働者の状態に当てられている。だが工業労働者の状態についてすでに詳細な記述を行っているため、この問題については、現在の議論で必要となる部分に限った手短な記述にとどめられる。

石炭と鉄鉱石の鉱山はおおむね同じやり方で運用されていて、四、五、七歳の子どもが雇われている。かれらは、鉱夫がゆるめた鉱石や石炭を、その場所から馬の通路や主坑道まで運ぶ仕事と、労働者や材料の移動のためのドアの開閉（これは鉱山の各部分を仕切って換気をコントロールする）に就かされる。ドアの見張りには一番小さい子どもたちが通常は雇われ、この子たちは通常一日 12 時間使われ、暗闇の中、一人きりで、通常は湿った通路にすわり、ほぼ何もしないという状態で、麻痺するような、残酷な無為から救われるだけの仕事もない。一方の石炭や鉄鉱石の運搬はきわめて重労働だ。石は車輪のついていない大きな風呂桶で、坑道のでこぼな地面をひきずって運ばねばならない。湿った粘土や水の中を運ぶことも多く、しばしば急な傾斜や、あまりに天井が低くて労働者が四つん這いで移動しなくてはならないところも通る。だからこのきわめて消耗する労働のためには、高齢の子どもたちや成年前の少女たちが雇用される。風呂桶一つあたり、状況に応じて成人男性一人か少年二人が使われる。そして少年二人なら、一人が押して一人が引く。石炭や鉱山を壁から掘り崩す作業は、成人男性や、一六歳以上の強靱な若者が行うが、これまたきわめて疲れる作業だ。一日の労働時間は通常は 11 時間から 12 時間、もっと長引くことも多い。スコットランドでは 14 時間にも達し、倍時間労働もよくある。この場合、すべての従業員は 24 時間ずっと地下で働き、ときには 36 時間ぶっ通しで働くこともある。決まった食事時間などというものはほとんどなく、おかげでこうした人々は、飢えと時間の許容するときに食べるのだ。

鉱夫たちの生活水準は、全体としてはそこそよいものであり、賃金は周囲の農業労働者たち（かれらは飢え死に寸前で暮らしている）に比べれば高いとされる。ただしスコットランドの一部とアイルランドの鉱山は別で、ここではすさまじい悲惨が広がっている。この主張についてはまた後で立ち戻る機会があるだろう。ちなみにこの主張はあくまで相対的なものにすぎず、全イングランドで見た最貧層と比べればまし、という話でしかない。その前に、現在の採掘手法から生じる悪について検討しよう。そうすれば読者は、お金でいくらもらおうとも、鉱夫がこんな苦しみに対する補償となり得るかどうか判断できるだろう。

石炭や鉄鉱石を運ぶのに使われる子どもたちや若者たちは、みんな過労を訴える。最も無謀に運営されている工業事業所ですら、これほど極度の過大労働は見られない。報告書すべてがこれを裏付けており、ページごとに事例がたくさん出ている。子どもたちが家に帰り着いたとたんに石の炉端に倒れ込み、食べ物を一口もとらずにそのまま眠りに落ち、寝たまままで身体をあらってベッドに運んでやらねばならない場合が多々ある。ときには帰宅中に横になってしまい、深夜になって道端で寝ているのを両親が見つけるという場合さえある。こうした子どもたちの間では、日曜日はずっとベッドで過ごして、一週間の働き過ぎから多少なりとも回復しようとするのが普遍的なやり方のようだ。教会や学校を訪れる子はほとんどおらず、そういう子たちですら、教師たちはかれらがいつも居眠りをして、学ぼうという意欲がまったくないとこぼす。同じことが高齢の少女たちや女性についても言える。かれらは最も熾烈な形で過大に働かされている。この疲労は、ほぼ常に最も痛々しい水準まで押しやられ、体格の発達にも影響せずにはいない。こうした過労の最初の結果は、活力が筋肉の偏った発達につながることで、したがって特に腕、脚、背中、肩、胸など押したり引いたりして主に使われる筋肉は、異様に大きく発達するのに、それ意外の身体は栄養不足のために萎縮してしまうのだ。他の何よりも身長が影響を受け、小さく矮小になる。鉱夫たちはほとんど全員背が小さく、例外はレスターシャーとワーウィック

シャーの鉱夫たちで、かれらは例外的に望ましい環境で働いている。さらに、少年少女ともに思春期が遅れ、少女となると初潮が18歳まで遅れることも多い。実際、サイモンズ評議員の前に19歳の少年が登場したが、歯以外は11歳か12歳を超えている様子がまったくなかった。このように子供時代が長引くのは、根本的には発達が抑制されているという徴以外の何物でも無い。そしてこれは、後年にまちがいに影響を与える。脚の歪み、ひざが内側に曲がって足が外側に曲がり、背筋の歪みなど他の発育不良が、ほとんどずっと制約された仕事中の体勢のために、こうした弱い身体ほど大きく表れるのだ。そしてこれがあまりに頻発するので、ヨークシャーとランカシャーでも、さらにノーザンバーランドとダラムと同様に、鉱夫はその背格好だけで他の百人の中からでもすぐに見分けがつくと多くの商人が言っている。これは医師だけが言うのではない。女性は特にこの仕事で苦しむようであり、他の女性のように身体がまっすぐであることはほとんどか、まったく無い。ここでもまた、鉱山の女性は仕事のおかげで腰骨が歪み、出産も結果として困難か、ときに致死性にすらなるといった事実の証言もある。だがこうした局所的な身体の歪み以外に、炭坑夫たちは仕事の性質から容易に説明がつく、数々の特殊な症状に苦しんでいる。まっ先に上がるのが消化器系の病気だ。食欲不振、胃痛、吐き気、嘔吐が最も多い。続いては猛烈なほどの渴きであり、これを癒すには坑内のきたない生暖かい水しかない。消化は押さえられ、他の症状がそれによりすべてもたらされる。心臓の病気、特に心肥大、心臓と心膜の炎症、心臓の房室間の血流収縮、さらに大動脈入り口の収縮も、鉱夫たちの病気として何度も言及され、過労により簡単に説明がつく。そして同じことが、いつまでも続く過重労働の直接的な結果としてのほぼ普遍的な血管破裂についても言える。一部は同じ理由から、そしてもう一部はひどい粉塵まみれの空気に炭酸ガスと炭化水素が交じったもののおかげで（こんなものは実に簡単に避けられるのだが）、肺の危険で苦痛に満ちた症状がいろいろ発生している。特にぜん息は、ほとんどの地区では40歳で、一部では30歳でほとんどの鉱夫が発症し、ごく短時間でもはやかれらは働けなくなる。湿った鉱山で働いている鉱夫たちの場合、胸の圧迫は当然ながらずっと早期に始まる。スコットランドの一部地区では、20歳から30歳にかけてこれが生じ、この期間は発症した肺は、特に熱を発する炎症や病気にかかりやすくなる。この種の労働者に見られる独特な病気は「黒い唾」と呼ばれ、これは肺全体が石炭の粉塵で飽和することから生じ、全般的な虚弱、頭痛、胸の圧迫、濃く真っ黒な痰の喀出となってあらわれる。一部の地区では、この病気はかなり軽症ですむ。だが一部の地区では、まったく治療不可能だ。これは特にスコットランドで顕著となる。スコットランドでは、いま述べた症状がさらに強い形であられるだけでなく、短いぜいぜい言う呼吸、高心拍（毎分100回を超える）、突発的な咳き込み、やせ細り虚弱の進行などで、患者はすぐさま仕事ができなくなる。この病気のあらゆる症例は死亡で終わる。東ロシアンのペンカイトランドのマッケラー医師は、適切な換気が行われている炭坑ではすべてこの病気は見られないが、換気のよい炭鉱から悪い炭鉱に移った鉱夫はこれにかかることが頻発するのだという。鉱山所有者の利潤への貪欲さが、換気設備の使用を阻害していることこそが、この労働者の病気がそもそも存在することに対する責任を負うべきだ。ワーウィックやレスターシャーの労働者は例外として、リューマチも炭坑夫の間では普遍的な病気であり、特にしばしば湿った職場から生じることが多い。こうした病気の結果として、あらゆる地区で例外なしに炭坑夫たちは速く老け、40歳から間もないうちに働けなくなる。もちろんその時期は場所ごとにちがうのではあるが、45回目から50回目の年になっても仕事に就ける炭坑夫は、実際にわめて珍しい。こうした労働

者は40歳で老年に入ることが普遍的に認識されている。これは、炭坑脈から石炭を掘り崩す者たちにも当てはまる。重い石炭のかたまりを風呂桶に入れる荷積み人は、28歳から30歳で老けるので、炭鉱地区では荷積み人は若くなる前に老いるというのがよく言われていることだ。この速すぎる老化に続いて、鉱夫の早死にがやってくるというのは理の当然であり、かれらの中で60歳に達する者はかなりの例外的な存在だ。鉱山がかなり健全である南スタフォードシャーですら、51歳に達する男はほとんどいない。この労働者たちの早期の高齢化に伴い見られるのは、工場の場合と同じく、高齢者の雇用不足の頻発であり、かれらはきわめて幼い子供たちに養われている。炭鉱での仕事をざっとまとめるなら、コミッショナーの一人であるサウスウッド・スミス氏が言うように、一方では子供時代が引き延ばされており、一方では速すぎる加齢が見られるので、人間として自分の力を十分に保有していると思われる人生の期間、成年の期間は大幅に短縮され、人生全般の長さもまた平均以下だ。これまたブルジョワジーの借り方側に記載されるべきものだ！

いま扱ったすべては、イングランド炭坑の平均の話でしかない。だが多くの場所では、状態はずっとひどい。特に、石炭の薄層が採掘されている現場だ。隣接する砂や粘土を取り除くと、石炭は高価になりすぎるので、鉱山所有者はその薄層だけの採掘しか認めない。他の炭鉱なら通路は高さ1.2メートルから1.5メートル以上になるが、ここではきわめて低いものとなり、その中で立ち上がること自体が考えられない。作業員は脇で横になり、石炭をつるはしでゆるめる。ひじを支点として使うので、間接の炎症が起こり、膝立ちにならねばならない場合は、ひざも炎症を生じる。石炭を運ぶ女子供は四つん這いで這いずり、風呂桶には輓と鎖でつながれている（鎖はしばしば脚の間を通り）。それを後ろから男が、手と頭を使って押すのだ。頭で押すと局所的な肌荒れが生じ、痛い腫れや潰瘍もできる。また多くの場合に坑道は濡れているので、こうした労働者たちは深さ10センチの污水や塩水の中を這いずることになり、これまた特殊な肌荒れにさらされる。鉱夫たちに固有の病気が、このことさら恐ろしくつらい重労働でどれほど促進されるかは容易に想像がつく。

だが炭坑夫に降りかかる邪悪はこれがすべてではないのだ。大英帝国すべてを見ても、男が最期を迎えるのにこれほど多様な方法を持つ職業は他にない。炭坑は、最高に恐ろしい災害が大量に起こる現場であり、それはブルジョワジーの利己性から直接やってくるものだ。こうした鉱山で実に容易に生じる炭化水素ガスは、大気と組み合わせると爆発物となり炎に接触すると炎上し、その範囲内にいる人をすべて殺す。こうした爆発は、ほとんど毎日のようにどこかの鉱山で発生している。1844年9月28日には、ダラムのハスウェル炭坑で爆発が起こり、96人が死亡した。これまた大量発生する炭酸ガスは、炭坑の深い部分にたまり、しばしば人の身長にまで達して、その中に入った人はすべて窒息する。鉱山の各部分を分離しているドアは、爆発の拡大と気体の移動を防ぐためのものだ。だがそれが小さな子供に任されていて、子どもたちはしばしば眠りこけたりサボったりするため、この防止方法は幻想でしかない。立て坑で新鮮な空気を入れて適切に換気をすれば、こうした有害な気体のどちらについても、その有害な影響をほぼ完全に排除する。だがこの目的のためにはブルジョワはお金を使おうとはせず、むしろ労働者にデイヴィー燈を使うように指示する。これは暗すぎてまるでつかいものにならないため、通常はかわりにロウソクが使われる。爆発が起きたら、鉱夫の無謀さが責められるのだ。ブルジョワがよい換気を提供していれば、そんな爆発はそもそも不可能に近かったはずなのだが。さらに、数日ごとに作業場の天井が崩落し、その中で働かされている労働者を生き埋めにした

り重傷を負わせたりする。ブルジョワとしては、こうした薄層をなるべく徹底的に掘り尽くすのが利益にかなっているため、こうした事故が起きてしまうのだ。それを言うなら、こうした人々が鉱山に降りるためのロープもまた腐っており、切れ、このため不運な者たちは転落して潰れてしまう。こうした事故は、特別な例をわざわざ挙げるまでもなく、『鉱業ジャーナル』によれば合計で毎年1400人ほどを奪う。『マンチェスターガーディアン』によれば、ランカシャーだけでも毎週事故が少なくとも二、三件あるという。ほとんどあらゆる鉱山地区で、検死官の陪審を務める人々はほとんどすべての場合に鉱山所有者に生活を依存している人々であり、これがあてはまらない場合ですら、昔からの習慣で判決は「事故死」になることが確実だ。さらに陪審は鉱山の状態などにほとんど関心を示さない。というのもかれらはこの件について何もわかっていないからだ。だが児童雇用委員会は、こうした事例の相当数についての直接的な責任は鉱山所有者にあるとためらわずに指摘している。

鉱山人口の教育と道徳について言えば、児童雇用委員会によれば、コーンウォールではかなりよく、アルストンムーアでは優秀だ。だが炭坑地区を全体的に見ると、その正反対で、きわめて低い水準であると報告されている。労働者たちは、無視された地域の地方部に住んでおり、かれらがへとへとになるまで仕事をする限り、警察以外にはだれもかれらのために手間をかけようなどとはしない。したがって、子どもたちが仕事に就かされる幼少期から、精神教育は完全に無視されるということだ。昼間の学校は手の届くところではなく、夜学や日曜学校は単なる形だけの代物で、教師たちは役立たずだ。だから字が読める者はほとんどおらず、書ける者はさらに少ない。かれらの目がいまだに閉ざされていない唯一の点というのは、自分たちの嫌で危険な仕事に対して賃金があまりに低すぎるという点だけだ。教会にはほとんどかままったく行かない。あらゆる司祭は、かれらの非宗教性が比較にならないほどだとこぼす。実のところ、宗教的なことについても世俗的なことについてもかれらの無知はあまりに激しいため、これまでのページで無数の事例により示した工場工員たちの無知ぶりなど、これに比べればモノの数ではないほどなのだ。The categories of religion are known to them only from the terms of their oaths. その道徳性は、仕事自体により破壊されている。あらゆる鉱夫たちの過大労働が必然的に飲酒につながるのは自明だ。かれらの性的関係はといえば、男女子供とも鉱山でのすさまじい暑さのため、多くの場合に全裸か、ほとんどの場合には全裸に近い状態で働く。暗く、人気のない鉱山における結果は想像がつくだろう。ここでの私生児の数は極度に多く、地下のほとんど野蛮人に等しい人々の間で何が起きているかを示している。だがこれは、両性間の非正規交合が、大都市でのように売春の水準にまで低下してはいないことも証明している。女性の労働は、工場の場合と同じ結果をもたらし、家族を解体させ、母親がまったく家事作業をできなくしている。

『児童雇用委員会報告』が議会に提出されたとき、アシュレー卿は鉱山における女性の労働を全面禁止し、子供の労働も大幅に制限する法案を急いで提出した。この法案は採用されたが、ほとんどの地区ではまったく無視されている。というのもこれが実施されているかどうかを監督する鉱山査察官がまったく指名されなかったからだ。鉱山が立地している地方部の地区では、法律逃れはきわめて簡単だ。そして昨年、スコットランドのハミルトン公爵領の炭坑において、女性60人以上が働いていたという公式の通知を鉱山労働組合が内務大臣につきつけたからといって、だれも驚く者はいない。あるいは『マンチェスターガーディアン』紙が、ウィガン近くの鉱山で爆発に巻き込まれて死んだのに、だれも

これによって法律違反が明らかになったことについでれも何ら手を講じなかったことも当然のことだろう。女性の雇用が打ち切られた個別の事例はあるが、一般には昔ながらの状態が未だに続いている。

だがこれらは、炭坑夫たちに知られている災いのすべてなどではない。ブルジョワジーは、こうした人々の健康を台無しにするだけでは飽き足らず、突然死の危険にさらしたままにして、教育のあらゆる機会を奪うだけでは飽き足らずに、きわめて恥知らずなやり方で、かれらを他の方面でも収奪するのだ。ここではトラック方式が例外どころか常態であり、ほとんどの地区で何の偽装もなく公然と行われている。宿舍方式もまた普遍的であり、ここではほとんど不可欠なものと言えらる。だがここでもそれは、労働者をもっとしっかり収奪するために使われているのだ。こうした抑圧手段に加えて、各種の直接的なインチキを追加する必要がある。石炭は重量で販売されるが、労働者の賃金は主に容積で測られる。そしてその者の風呂桶が完全に一杯でない場合にはまったく賃金が得られないのに、風呂桶があふれていた場合には一銭たりとも余計にもらえない。もし風呂桶の中に、規定量以上の土が入っていたら（これは鉱夫よりは、その作業中の薄層の性質にずっと依存する）鉱夫は賃金丸ごともらえないどころか、さらに罰金までくらう。罰金制度は炭坑では実に見事に完成されており、週丸ごと働き続けた哀れな野郎が賃金をもらいにくると、ときには監督（かれは恣意的に罰金を決めて当の労働者と話しあったりしない）に、賃金がないどころか、いくらいくらの罰金を追加で払わねばならないと言われる！ 監督は一般に、賃金に対する絶対的な権限を持っている。行われた作業を記録し、労働者にいくら支払うかは好き勝手に決められて、労働者はそれに従うしかない。一部の鉱山では賃金は重量ベースだが、計量用の秤がインチキで、重りが当局の検査を受けていない。ある炭坑では、秤の誤りについて苦情を申し立てたい労働者はすべて、三週間前に監督にそれを通知しなくてはならないという規定が本当にあった！ 多くの地区、特にイングランド北部では、労働者を年単位で雇用するのが通例だ。その期間には他の雇い主の下では働かないと約束するのだが、鉱山所有者はかれらの仕事を与えるとは決して約束しないので、かれらはしばしば何ヶ月にもわたり仕事がなく、他で仕事を探したら契約違反のかどで六週間にわたり踏み車送りとなる。他の契約だと、鉱夫たちは14日ごとに26シリングの仕事に約束されるが、それが与えられない。他の場合には、雇用者たちは鉱夫たちに少額を先渡しして、あとで精算するようにして、債務者たちを縛り付けておく。北部では、賃金支払いを一週間遅らせることで鉱夫たちを仕事に縛り付けている。そしてこうした奴隷状態の労働者たちの隷属を完成させるかのように、炭坑地区の治安判事はほとんど全員が当の鉱山所有者自身か、あるいは鉱山所有者の親類や友人なのであり、こうした新聞もほとんどない、あっても支配階級に奉仕するばかりでそれ以外のアジテーションなどほとんどない貧しく非文明的な地域においてはほとんど無限の力を保有している。こうした哀れな炭坑夫たちが、自分自身の利害に関わる事件で治安判事となっている人々により、どれほど収奪され圧政を受けているかは、ほとんど想像を絶するほどだ。

この状態がずっと長いこと続いていた。労働者たちは、自分たちがまさに命までだまし取られるためにそこにいるのだということ以外に何も知らなかった。だが次第にかれらの間にすら、そして特に工場地帯でもっと賢い工員たちと接触することで必然的に影響を受けた結果として、「石炭王」たちの恥知らずな弾圧に対する反抗精神が台頭してきた。男たちは労働組合を組織してしばしばストライキをするようになった。文明化された地区では、全身全霊でチャーティストたちに加わっている。イングランド北部の大石炭地域は、

あらゆる工業的な交流から切り離されているために、ずっと後進的なままだったが、やがて一部はチャーティスト、一部はもっと賢い当の鉱夫たち自身の度重なる努力の結果、1843年に全体的な抵抗精神が台頭してきた。こうした運動は、ノーザンバーランドとダラムの労働者をも捕らえ、かれらは王国中の炭坑夫一般労働組合の最前線に進み出るようになって、プリストルのチャーティスト弁護士 W・P・ロバーツを、それまでのチャーティスト裁判で傑出していたことから自分たちの「総代理人」に任命した。この労働組合は、やがて地区の大多数に広がった。エージェントがあらゆる方面で任命され、このエージェントたちがどこでも会合を開いて新規組合員を確保した。1844年のマンチェスターにおける初の代表会合では、代表されている組合員数は六万人であり、六ヶ月後のグラスゴーにおける第2回会合では十万人だった。ここでは炭坑夫たちのあらゆる問題が議論され、もっと大規模なストの決定が下された。鉱夫たちの権利を守るため、いくつかの雑誌が創刊され、特にニューキャッスル・アポン・タインの『鉱夫支援』が顕著だ。1844年3月31日に、ノーザンバーランドとダラムの鉱夫たち全員の契約が期限を迎えた。ロバーツは新しい合意書を起草する力を与えられ、その中で以下の点を要求した。

1. 体積ではなく重量に基づく賃金
2. 公的な検査官の検査を受けた、通常の秤を使った重量の決定
3. 契約の半年ごとの更新
4. 罰金システムを廃止して実際に行った仕事に基づいて賃金を支払う
5. 雇用主は鉱夫たちに対し、週に最低4日の専従サービスを保証するか、それに相当する賃金を支払う

この合意は「石炭王」たちに提出され、交渉を行う代理人が任命された。だがかれらは、かれらにとって労働組合は存在せず、個別労働者ごとに交渉を行わねばならず、労働組合などは認知しないと回答した。またかれらは、いまの要求をすべて無視した独自の合意書を提出し、当然ながらこれは鉱夫たちに拒絶された。こうして宣戦布告が行われた。1844年3月31日、鉱夫4万人がつるはしを起き、郡の炭坑すべてが無人となった。労働組合の資金は実に豊富であったため、各家族に対して2シリング6ペンスの補助金が数ヶ月にわたり毎週保証できた。このように鉱夫たちが主人たちの忍耐力に朝鮮している間に、ロバーツは比肩し難い粘り強さを持ってストとアジをまとめ、会合の開催を手配し、イングランドの端から端まで動いて平和的かつ合法的な煽動を訴えかけ、これまでイングランドではまったく前例がないほどの規模で、身内びいきの治安判事やトラック方式の主人たちに対する十字軍を実施したのだった。これをかれは年初から始めた。鉱夫が治安判事によって有罪とされたあらゆる場所で、ロバーツは王座裁判所から身柄提出令状を出してもらい、依頼人をロンドンにつれてきて、必ず無罪判決を得た。たとえば1月13日に、王座裁判所のウィリアムズ判事は南スタフォードシャーのビルストンにある治安判事たちにより有罪とされた鉱夫三人を無罪とした。この三人の罪状は天井が崩れそうな場所で働くのを拒否したというものだったし、そして実際そこは、かれらが戻る前に陥没したのだった！ それ以前にも、バターソン判事は労働者六人を無罪にしたので、ロバーツという名前は鉱山所有者を震え上がらせるようになっていた。プレストンでは依頼人たちは投獄されていた。一月第一週に、かれはこの一件の現地捜査を行うためにその地に赴いたが、到着してみると受刑者たちはみんな刑期が明けないのに釈放されていたのだった。マンチェスターでは投獄された者たちが7人いた。ロバーツはその全員について身柄提出令状と

無罪をワイトマン判事から得た。プレスコットでは、炭坑夫9人が投獄されていた。南ランカシャーのセントヘレンズで騒乱を引き起こしたとの罪状であり、裁判を待っているところだった。ロバーツが現場にやってくると、全員が即座に釈放された。このすべてが、2月前半に起こったのだった。4月になるとロバーツはダービーで投獄されていた鉱夫一人、ウェイクフィールドで4人、レスターで4人を釈放させた。これがしばらく続いたため、オマワリどもも多少は鉱夫に敬意を払うようになった。トラック制度も同じ運命をたどった。一つ、また一つとロバーツは悪評高い鉱山主たちを裁判所に引き出し、嫌がる治安判事たちにかれらを有罪宣告するよう説得した。この神出鬼没の「電光石火のような」「総代理人」に対する恐れがかくも広がったため、たとえばベルパーではロバーツがやってくると、トラック会社が以下のような通知を公開した。

通知！

ペントリッチ炭坑

ハスラム氏一同は（誤解を避けるため）通知を出すのが適切と考える。この炭坑で雇われているすべての人々は賃金を全額お金出受け取り、それを好きなところで使ってかまわない。もしハスラム氏一同の店で買えば（これまで同様）卸値で買い物ができる。だがそこで買い物をする必要はなく、その店に行こうが他の店に行こうが同じ仕事と賃金が与えられる。

この勝利は、イングランドの労働階級に最大級の喜びを引き起こし、労働組合に大量の新組合員をもたらした。一方、北部のストは進行中だった。鉱夫は誰一人手を動かさそうとせず、主要な石炭港であるニューキャッスルは、あまりに商品が不足したので、ことわざにもかかわらず石炭をスコットランド沿岸から運んでこなければならなかった。当初、労働組合の資金が続いている間は万事快調だったが、夏にかけて闘争は鉱夫たちにとってずっとつらいものとなった。かれらの間にはすさまじい欠乏が蔓延した。イングランドの全産業における労働者からの貢献は、スト参加者の大量の数の前にはほとんど役にたたなかったため、お金が足りなかった。だからスト参加者たちは、小店主からかなりの損失をかぶって借金するしかなかった。あらゆるメディアは、わずかなプロレタリア雑誌を除けばすべてかれらの敵だった。ブルジョワは、鉱夫たちを支援するだけの道理をわきまえていたかもしれない少数の者ですら、リベラル系や保守系の新聞から鉱夫たちについてのウソしか学べなかった。鉱夫12人による代表団がロンドンにでかけ、そのプロレタリアートからお金を受け取ったが、これまた支援を必要とする大人数の前では焼け石に水だった。だがこれにもかかわらず、鉱夫たちは揺らぎみせず、もっとめざましいこととして、鉱山主やその忠実な召使いどもの敵意や挑発にもかかわらず、静かに平和を保っていた。復讐行為は一切無く、裏切り者は一人もひどい扱いを受けず、鉱山主たちは相変わらず優位に立てる見込みがなかった。だが連中の使える手口がまだ一つあった。かれらは宿舍制度を思い出した。こうした反抗的な精神の持ち主たちが住んでいる家は、かれらの財産なのだということに思い当たったのだ。7月には退去通知が労働者に出され、一週間で四万人全員が屋外に放り出された。このやりかたは嫌悪を催すほどの残酷さで実施された。病人、虚弱者、高齢者、小児、妊婦すら、無慈悲にもベッドから叩き出されて道端のドブに投げ出された。ある工員は、まさに臨月の陣痛の最中だったのに、髪の毛をつかんでベッドからひきずりだされ、通りに出されたのだった。兵士や警官の大群がいて、ちょっとでも抵抗が見られたら、この暴力的な手続きをもたらした治安判事が少しでも合

図したとたんに発砲しようとしていた。これもまた、労働者たちは抵抗せずに耐えた。この労働者たちが暴力を使うだろうというのが期待だった。全力で、法を冒すように促され、それにより軍が介入してストを終わらせる口実にしようというわけだ。家なき鉱夫たちは、総代理人の警告を忘れずに動揺を見せず、家財を湿地や収穫後の農地において、辛抱を続けた。一部の、他に行き場がない人々は道端やドブの中で寝起きし、他には他人の土地で暮らし、それにより訴追され、そして「半ペニーの価値減損」をもたらしたことで、一ポンドの罰金を科され、支払えないとなると踏み車送りとなった。こうしてかれらは、去年の夏の残り端をさらに8週間以上も野宿状態で家族とともに生き続け、自分や子供たちの屋根がわりといえ、ベッドのキャラコ製カーテンしかない状態だった。労働組合からのわずかな仕送りと、小規模商人からの急激に減少するツケだけが助けだった。ここでダラムに相当数の炭鉱を所有するロンドンデリー卿が、「自分の」町であるシーハムの小商人たちに対して、「自分の」反抗的な労働者に対してツケをこれ以上認め続けることは大いに遺憾であると脅しをかけた。この「貴い」貴族は、労働者に対して発した勅令の、荒唐無稽で尊大で文法まちがいだらけぶりにより、このストにおける最初の道化役を自ら買って出た。こうした勅令をかれは何度も発効したが、その結果は国民たちの物笑いの種になっただけだった。自分たちの試みが何一つとして効果がないと、鉱山主たちはものすごい費用をかけて、まだ労働運動のないアイルランドやウェールズの一部から労働者を輸入した。そしてこのようにして労働者に対する労働者の競争が復活すると、スト実施者の強さは崩壊した。鉱山主たちはかれらに労働組合を否定し、ロバーツをクビにして、雇い主たちが決めた条件に従うよう強制した。こうして9月末に、炭坑夫たちによる炭鉱主に対する5ヶ月にわたる大戦が終わった。この戦いは、抑圧された者たちが忍耐力と勇氣と知性と冷静さで戦ったものであり、最高の畏敬が払われて然るべきだ。こうした人々は、『児童雇用委員会報告』で見たように、1840年というごく最近の段階ですら完全に野蛮で道徳感覚がまったく欠如していると書かれていたのに、こうした戦いはそれらの人々が持つ何という真の人間の文化水準、熱意、人格的強さを示していることか！ だがこうした4万人もの鉱夫たちを、一人の人間であるかのように立ち上がらせ、規律正しいのみならず熱意も持ち、ある一つの決意に動かされた軍となって、最大級の冷静さと沈着さをもって、それ以上の抵抗は正気の沙汰ではないような段階を超えてまでこんな戦いを戦わせるようになった圧力というのは、いかにつらいものだっただろうか！ そして、何という戦いだったろう！ 目に見える生死ある敵に対してではなく、飢餓、欠乏、悲惨、家無しなどに対する戦いであり、富の猛威に対して狂気へと挑発された己自身の情熱に対する戦いなのだ。もしかれらが暴力で反逆したなら、武装もなく防衛力もなければ射殺され、ものの一、二日で鉱山主たちの勝利が決まっただろう。この遵法的な自制は警察に対する恐れから出たものではなく、熟慮の結果であり、労働者の知性と自制を最もよく証明している。

このようにいして労働者たちは再び、前例なき忍耐にもかわらず、資本の力の前に屈服することとなった。だがこの戦いは無駄ではなかった。まず、この19週間にわたるストライキはイングランド北部の鉱夫たちを、これまで沈んでいた知的な死から永遠に引きはがした。かれらは眠りから覚め、自分の利益を守ろうと敏感になり、文明の運動に参加し、特に労働者の運動に参加したのだ。このストライキは、まず炭鉱主たちの残虐さをすべてはっきり示したし、ここでの労働者たちの反対が永遠のものであることを明らかにして、労働者の少なくとも三分の二をチャーティストのメンバーにした。そしてこうした決

意の固い経験ある男たちが3万人も獲得できたのは、もちろんチャーティストたちにとっても大いに価値あることだ。さらにこのストライキすべてを特長づけた忍耐と遵法性は、それに伴う活発なアジと組み合わせさせて、世間の関心を鉱夫たちに集めた。炭素の輸出税に関する論争に際し、下院における唯一の明らかなチャーティスト議員であるトマス・ダンコムは、炭坑夫たちの状況を問題視し、その請願書を朗読させ、演説によりブルジョワ新聞にも、少なくとも議会議事録報告の中で、この問題の正しい記述を掲載させた。ストの直後に、ハスウェルでの爆発が起こった。ロバーツはロンドンに向かい、ピール内相に耳を貸すよう要求し、この事件のしっかりした捜査において鉱夫たちの代表となるよう固執し、イングランドの第一線の地質学と化学の専門家であるライエル教授とファラデー教授を任命して現場を訪れさせたのだった。その後、いくつかの爆発が連続し、ロバーツはここでも首相に対して詳細を伝え、首相は労働者保護のために必要な手立てを、できれば次の議会、つまり1845年のいま開かれている議会会期中に提案すると約束した。このすべては、労働者たちがストによりあらゆる敬意に価する自由を愛する人々だと自ら証明し、その相談役としてロバーツを採用しなければ実現できなかったらう。

北部の炭坑夫たちが、労働組合を否定してロバーツをクビにするよう無理強いされたということが伝わるか伝わらないかのうちに、ランカシャーの鉱夫たちは一万人ほどの労働組合を組織して、総代理人に年俸1200ポンドを保証した。昨年秋に、かれらは700ポンドを集め、そのうち200ポンド以上は給料や裁判費用に支出して、残りは働き口がないか、雇い主との不和により失業した人々の支援が主な用途だ。このように労働者たちは絶えず、自分たちも団結すれば立派な力となり、そして究極的にはブルジョワジーの力さえ克服できるということを、絶えずますますはっきり理解するようになっている。そしてこの洞察は、あらゆる労働運動で得られるものだが、労働組合と1844年のストライキによって、イングランドの全鉱夫たちのために勝ち取られたのだ。きわめて短期間のうちに、工員たちとの間に存在する知性とエネルギーの差は消えうせ、王国の鉱夫たちはあらゆる面で工員たちと肩を並べるだろう。このようにして、ブルジョワジーの足下では、一つ、また一つと地面の一部が消えうせつつある。そして彼らが依存している基盤とともに、その社会政治的な第建築物がすべて崩壊するまでにどれだけかかるだろうか？

だがブルジョワジーは警告に耳を傾けない。鉱夫たちの抵抗は、かれらをなおさら起こらせるだけだ。労働者の一般運動における前進の一步をありがたく思うどころか、財産保有階級は、これまで受けてきたような扱いに従うだけの存在ではないと宣言するくらい愚かな人々の階級に対する、怒りの源としか思わなかった。非所有労働者たちの公正な要求の中に、「神聖にして人間的な秩序」に対する生意気な不満と狂った反逆を見て取り、最高の場合でも「煽動によって生計をたて、働くには怠惰すぎる悪意のデマゴグたち」が勝ち取った成功（ブルジョワジーが全力で抵抗すべきもの）を見て取るだけだ。もちろんブルジョワジーは、ロバーツや労働組合のエージェントたち（かれらには当然ながら労働組合は支払いを行わねばならない）が傲慢な詐欺師どもであり、労働者のポケットから最後のファージングを引き出そうとする連中なのだと労働者に対して描き出そうとして、もちろん失敗している。こんな狂気が財産保有階級の間で栄えるとき、それが一時的な利潤のためにあまりに盲目となり、時代の最も明らかな徴を見る目すらなくなってしまうとき、イングランドの社会問題に対する平和的な解決の望みはまちがいなく放棄せざるを得ないだろう。唯一の可能な解決策は暴力革命であり、これは確実に起こるしかない。



## 第 10 章

# 農業プロレタリアート

原文：<http://bit.ly/1LA119I>

「はじめに」で、プチブルジョワジーとかつての労働者たちのわずかな独立と同時に、放棄された耕作地が大農場となり、小規模農家が大規模農家の圧倒的な競争に潰されたときに、小農もまたかつての工業と農業作業の連合が解体された様子を見た。それまでのように地主や借地権の持ち主となるかわりに、いまやかれらは大農家や地主たちの使役人として己を雇用させるしかなくなった。しばらくはこの地位も我慢できるものだったが、かつての地位に比べれば立場は悪化した。工業の発展は人口増加と足並みを揃えてはいたが、製造業の進歩がやがて速度を落とし、機械の永続的な改良により製造業が農業人口余剰をすべて吸収するのが不可能になった。この時点以降、これまで製造業地区だけに存在し、しかもたまにしか見られなかった貧窮が農業地区でも見られるようになった。同時期に、フランスとの 25 年にわたる戦争が終わった。各種戦場での生産の低下、輸入の停止、スペインにおける英軍への補給に伴う需要は、イングランドの農業に人工的な繁栄をもたらしており、さらには軍のために、大量の労働者が通常の職業から徴用されていた。こうした輸入取引の抑制、輸出の機会、労働者の軍事需要が、いまや唐突に終わった。そして必然的な結果として、イギリスが農業不況と呼ぶものが生じた。農民たちは穀物を低価格でウルシ中區、結果として低賃金しか支払えなかった。1815 年には価格維持のために穀物法が可決され、小麦価格がクォーターあたり 80 シリング以下で続いた場合には穀物輸入を禁じることになった。こうしたうまくいくはずもない法律は何度か改定されたが、農業地区での不景気を緩和するには成功しなかった。唯一の成果は病気を変えたことでしかなく、外国からの自由競争下であればもっとこの病状は急激なものとなって一連の危機となっただろうが、それが慢性的なものとなり、農業労働者たちに重たくかつ均一にのしかかるものとなっただけだった。

農業プロレタリアート誕生からしばらくの間は、製造業で破壊されつつあった主人と人との関係が、ドイツでいまだにどこでも存在する農夫と作男たちとの関係としてイングランドでも発達した。これが続いている間は、作男たちの貧困はそれほど目立たなかった。かれらは農夫と運命を共にして、クビになるのは最もギリギリの必要性が生じた場合だけだった。だがいまやこのすべてが変わった。作男たちはほとんどどこでも日雇いとなり、農夫たちが必要と思ったときにだけ雇用され、したがって、しばしば何週間も仕事がなく、特に冬の間はこれが顕著だ。父権的な事大だと、作男やその一家は農場に住み、子どもたちはそこで詩断ち、農夫はその場で次世代のための仕事を探そうとした。当時は日雇

いは例外であり、通例ではなかった。だからどの農場にも、厳密に必要とされるよりも多数の作男たちがいた。したがって、農夫たちにとってはこの関係を解体し、作男たちを農場から追い出し、日雇いに変えるほうが利益にかなう。これは1830年に向けてかなり広く行われ、結果としてそれまで隠れていた過剰人口が解き放たれ、賃金率は強制的に押し下げられ、貧困率はすさまじく上がった。この時点から、農業地区は永続的な貧窮の本拠地となった。これは工業地区がむかしから一時的な貧窮の本拠だったのと同様だ。そして日々悪化する地方部教区の貧困への初の対処方法として政府が適用せざるを得なかったのは、救貧法の改定だった。さらに、大規模農業の絶え間ない拡張、脱穀機など各種機械の導入、女子供の雇用（これはいまはあまりに一般的なもので、その影響は特別公式調査団により最近になって調査されたほどだ）で、大量の男性が失業した。つまり、ここでも工業生産のシステムが、大規模農業と父権関係（これはこの地ではきわめて重要なものだ）の廃止、機械、蒸気、女子供の労働という形で登場したのだ。そうすることで、それは労働人口の中で最後の最もじっとしていた部分を革命運動に送りこむことになった。だが農業はじっとしていた期間が長かったぶんだけ、労働者への重荷も増しており、古い社会構造の解体の結果ももっと暴力的に前進することとなった。「過剰人口」はいきなりあらわとなり、工業地区とはちがって、生産増加のニーズにより吸収されなかった。製品の消費者さえいれば新しい工場はいつでも建てられるが、新しい土地を作り出すわけにはいかない。遺棄された共有地の交錯は、平和の実現に続いた不景気時には、あまりに無謀な投機となった。必然的な結果として、労働者同士の競争は最高潮に達し、賃金は最低水準にまで下がった。旧救貧法がある限り、労働者たちは地方税から救済金を受け取った。賃金は当然ながらさらに下がった。農民たちがいたので、最大限の数の労働者が救済金を受け取るうとしたからだ。余剰人口により必要となった貧困救済金は、この手法によりさらに増えるばかりで、新しい救貧法は（これについてはあとでもっと述べる）その対処法としていまや施行された。だがこれでも事態は改善されなかった。賃金は上がらず、余剰人口は処分できず、新法の残酷さは人々に極度の不満を抱かせるばかりだった。貧困救済金ですら、新法可決の直後には減ったものの、数年たつとかつての高い水準に戻ってしまった。その唯一の影響は、かつては半ば物乞い状態の人々が300万から400万人いたものが、いまや完全な物乞いが百万人生まれ、残りはいまだに半分物乞い状態だったが、いまや救済金がもらえなくなっただけだった。農業地区での貧困は毎年増えた。人々は極度の欠乏の中で暮らし、家族全員が週に6、7、8シリングでやりくりしなければならず、ときには文無しだった。1830年というはやり時期に議会の自由党議員がこの人口について描写したものを聞いてみよう。

「あれはイングランドの農民または物乞いです。というのもこの二語は同義なのです。その父親は物乞いであり、母親の父は滋養に書いておりました。子供時代から食事はひどいものであり、不十分でした。そしていまや、起きている間はずっと満たされぬ飢えの苦痛を感じているのです。しかし服も半ばまとわず、わずかな食事の調理に足る以上の暖を取ったこともないので、天候にあわせて冷気も雨もやってきてはとどまります。結婚はしておりますが、夫や父親としての最高の喜びを味わったこともありません。その伴侶と子どもたちは、自分と同じくしばしば飢え、暖を取れることもほとんどなく、ときには病気で治療もなく、いつも希望なくして悲しく、貪欲で利己的で面倒な存在なのです。ですから本人自身の表現を借りれ

ば『そいつらを見るだけでウンザリ』であり、自分のあばら屋に帰るのは、茂みでは風雨からの保護が少ないからというだけの理由です。」この者は家族を喰わせねばならないがその能力がない。「このため物乞い、詐欺、口論がもたらされます。そして結局は元の木阿弥。意欲はあるのですが、同じ階級でもっとエネルギーな男たちのように、大規模な密猟者や密輸入になるだけの勇氣は欠けています。でもたまにはこそ泥をして、子供にはウソをつき盗むよう教えます。豊かなご近所に対するへつらうような奴隷じみた態度は、かれらが疑念と厳しさをもってこの人物と接していることを示しております。結果として、この人物はご近所を恐れつつ憎んでおります。でも決して暴力的な手段でかれらに危害をくわえはしません。必死にもなれないほど落ちぶれ、完全に墮落しております。その惨めな仕事は短いものとなります。リ्यूマチとぜんそくで救貧院に送られるしかなく、そこでかれは何一つすてきな思い出もなく息を引き取り、そして同じように生きて死ぬべき別の悲惨な人物のために場所を空けることとなるのです」

この著者が付け加えているところによれば、この農業労働者階級の横には、別の少ばかりエネルギーがあり肉体的、精神、道徳的に恵まれた階級があるそうだ。その人々は、同じくらい悲惨な暮らしをしているが、もともとこんな状態に生まれついたわけではない人々だ。こうした人々は、この著者によれば家族生活においては少しはましながら、密輸入や密猟人となってしばしば沿岸部の獲物管理者や歳入担当官と血みどろの争いに陥り、しばしば投獄されて、社会に対してますます恨みをつのらせ、このために財産保有者に対する憎しみの点で、前者の階級よりも先んじているとのことだ。

最後にかれはこう述べた。「お情けにより、この人々全体が『イングランドの力強い農民』と呼ばれているのです」

現在に至るまで、この記述はイングランドの農業労働者の相当部分に当てはまる。1844年6月に『タイムズ』紙は記者を農業地区に送り、この階級の状況について報告させたが、その記者が書いた報告はまったく前出のものと同じ内容だった。一部の地区で賃金は週6シリングを超えない。これはドイツの多くの地区以下であり、しかもイングランドでは生活必需品の価格はすべて少なくとも2倍はするのだ。こうした人々がどんな生活を送っているかは想像できるだろう。食べ物はいくらか劣悪で、服はボロ、住居は過密で荒れ果て、小さく、オンボロの小屋で快適性は一切ない。そして若者たちにとっては下宿屋で、男女がほとんど分けられることがなく、婚外性交が挑発されることになる。一ヶ月で仕事のない日が一、二日あるだけで、こうした人々はすさまじい欠乏にさらされるのは避けられない。さらに、団結して賃上げを求めるともできない。というのも散らばっているし、一人が低賃金で働くのを拒否しても、失業者は何十人もいるし、救貧補助金で助けられているからきわめて少額の賃金でもありがたく働く人も多い一方で、仕事を断る者に対しては、怠け者の放浪者と同じくだれもが嫌う救貧院以外には、救貧法の管理者たちからの救済措置はまったく与えられていない。というのもその管理者はまさに、その者に仕事を与えてくれる可能性のある農民その人が、そのご近所や友人たちなのだ。そしてこんな報告がくるのは、イングランドの特殊な地区一つや二つではない。それどころか、この苦境は全般的で、北部と南部、東部と西部で同じくらいひどいのだ。サフォークとノーフォークの労働者の状態は、デヴォンシャー、ハンプシャー、サセックスの労働者のもの

と似たり寄ったりだ。ドーセットシャーやオックスフォードシャーの賃金は、ケントやスリー、バッキンガムシャーやケンブリッジシャーのものと同じくらい低い。

労働階級に対することさら野蛮な残虐行為があらわれているのは狩猟法だ。狩猟の獲物は想像を絶するほど豊富なのに、この法律は他のどの国よりも厳しくできている。イングランドの農民は、古いイングランドの習俗によれば密猟を勇気と胆力の自然かつ高貴なあらわれと考えており、さらに自分自身の貧困と、何千引きものウサギや狩猟用の取りを自分個人の楽しみのためにとっておく主君の *car tel est notre plaisir*\*<sup>1</sup>を対比すれば密猟欲はさらに刺激される。実は密猟は地主には損失を与えない。地主には獲物が大いに有り余っているし、密猟者には自分と飢えた一家のために食事をもたすからだ。だが見つければ投獄され、二度目に捕まったら7年の流刑だ。この法律の厳しさのために、獲物管理人との間にしばしば流血沙汰の争いが生じ、毎年多くの殺人が生じている。つまり獲物管理人の職は危険だけでなく、評判も悪く毛嫌いされている。昨年、獲物管理人が仕事を続けるより自殺を選んだケースが二回もあった。土地持ち貴族が高貴な射撃スポーツを購入する価格は、これほどわずかなものなのだ。だが土地持ち主人たちにとって、そんなことはどうでもいいことではないか？ おおむね「余剰」の獲物が一匹や二匹生きようと死のうとどうでもいいはずだし、狩猟補雲母結果として余剰個体数が処分されてしまったとしても、残り半分にとってはずっと状況はよくなるはずだ。イングランドの地主たちの慈善によれば。

地方部での生活条件、孤立した住戸、周辺環境と職業の安定性、そしてその結果として考え方の安定性は、あらゆる種類の発展にとって明らかに不利なものだが、貧困と欠乏はここですらその果実をもたらすのだ。製造業と鉱業のプロレタリアートは、我々の社会秩序に対する抵抗の第1段階、直接的な反逆である犯罪の実行からは、きわめて早い時期に脱出した。でも農民たちは現時点でまだこの段階にいる。社会戦争のお気に入りの手法は放火だ。7月革命に続く1830-1831年冬に、こうした放火は全般的なものとなった。騒動が起き、サセックスと隣接する郡の地域残行きが、沿岸警備隊の増加（これは密輸をずっとむずかしくして、ある農民のことばによれば「沿岸部を破滅させた」）および救貧法の改定、低賃金、機械導入の結果として10月には興奮状態がもたらされた。冬には、農民たちのわらと穀物の山が畑で焼かれ、さらにはかれらの窓の直下にある納屋や厩舎までが焼けた。ほとんど毎晩のように、こうした炎がいくつか燃え上がり、農民や地主たちの間に恐怖が広がった。犯人はほとんど捕まることがなく、労働者たちはこの放火を「スウィング」なる神話的な人物の仕業だとした。人々はこのスウィングなる人物がだれであり、どうして地方地域における貧困者の間にこれほどの怒りがあるのかについて頭を悩ませた。もっと大きな動機である、欠乏や抑圧について考えたのは、あちらこちらに単発的な人物たちが出ただけであり、農業地区ではもちろんだれもそんなことは考えなかった。その年以來、放火は毎年冬に繰り返される。農業労働者たちの失業シーズンごとに起こるのだ。1843-44年の冬、これはまたもやきわめて頻発した。ぼくの目の前にはいま、当時の『ノーザンスター』紙が並んでおり、毎号が放火を数件報告している。それぞれの事例での先例も挙がっている。以下の一覧に欠けている数字はぼくの手元にはない。だがこれまたまちがいがなく、数多くの事例を含んでいるはずだ。さらに、こんな表では発生する全ての事例をとて確定できるものではない。1843年11月25日には2件。それに先立つ

\*<sup>1</sup> これが我々の喜び。 — 編者注。

いくつかの事例も論じられている。12月16日、ベッドフォードシャーでは頻発する放火、しかも一部は毎晩のように起こるものの結果として、二週間にわたり全般的な興奮状態が続く。過去数日のうちに大型の農家が二軒焼かれた。ケンブリッジシャーでは大農家4軒、ハートフォードシャーでは1軒、これ以外にさまざまな地区で15件が起きている。12月30日にはノーフォーク1件、サフォーク2件、エセックス2件、チェシャー1件、ランカシャー1件、ダービー、リンカーン、南部で12件。1844年1月6日には全部で10件。1月13日には7件。1月20日には放火4件。この頃から後に、毎週放火の報告は3-4件であり、春までどころか、7月や8月になってもその前の水準には戻っていない。そしてこの種の犯罪は、1844-45年で近づきつつある厳しい季節には増えるという予想を、イングランドの新聞はすでに示している。

イングランドの静かでのんびりした田舎地区における、こんな事態について読者のみなさんはどう思われるだろうか？ これは社会戦争なのか、ちがうのか？ これは持続可能な自然な物事の状態なのか？ だがここでの地主や農民たちは、工業地区における製造業者やブルジョワジー全般に負けず劣らず鈍く、麻痺しており、自分のポケットに直接お金をもたらさないものすべてについてまったく見えていない。工業地区の連中は従業員に対し、穀物法廃止により救済が得られると約束したが、地主と農民たちの相当部分は、同じ法律の維持により地上の天国が実現すると約束している。だがいずれの場合にも、地主たちは自分たちのお気に入りの趣味を指示するよう労働者たちを見方につけるのに成功してはいない。工員たち同様、農業労働者たちは穀物法の廃止だろうと廃止反対だろうとまったく関心がない。だがそれでもこの問題は双方にとって重要なものだ。これはつまり――穀物法の廃止により、自由競争、現在の社会経済は極端なところまで推し進められる。現在の秩序の中ではそれ以上の発展がすべて終わりを迎え、そこから先へ進むステップとしてあり得るのは唯一、社会秩序のラディカルは変革だけなのだ。さらに農業労働者にとって、この問題は以下の重要な意味合いを持つ。穀物の自由な輸入は、農民たちの地主からの開放と、自由党への転向をもたらす（どのようにしてそれが起こるかは、ここでは説明できない）。この成就に向けて、反穀物法連盟はすでに大きく貢献してきたし、この連盟が行っているよいことというのはこれだけなのだ。農民たちが自由党になれば、つまり意識的なブルジョワになれば、農業労働者たちはどうしてもチャーティストや社会主義者になることになる。最初の変化が二番目の変化をもたらす。そして新しい動きがすでに農業労働者の間で始まっているということは、自由党地主のアール・ラドナーが招集した会合により証拠が示されている。1844年10月にかれは自分の領地があるハイワースの近くで、穀物法に反対する決議を可決させるべく、集会を招集した。この集会で、労働者たちはこうした法律にまったく無関心なので、まったくちがったものを要求した。つまり、小規模耕作地を、低い賃料で、自分たちのために提供しろということで、アール・ラドナーに対して辛辣な真実をあれこれ面と向かって述べたのだ。このように、労働階級の運動は遠隔にある動きの少ない精神的にも死んだ農業地区にも伝わりつつある。そして一般的な困窮のおかげで、じきに工業地区と同じくらいしっかり根付いた精力的なものとなるだろう。

農業労働者の宗教状態となると、これは確かに製造業工員よりも敬虔だ。だがかれらも、教会とは大いに反目している――というのもこうした地区ではほとんどイギリス国教会の信者しか見あたらないからだ。『モーニングクロニクル』紙の記者は「鋤を握って口笛を吹いた者」なる署名のもとに [アレクサンダー・サマーヴィル] 農業地区をまわったと

きのことを報道していて、その中に教会ミサの後で以下の会話が労働者の一部と交わされたことが報道されている。

「説教を行った牧師が、いつもここに駐在している牧師なのかを尋ねてみた。『そうとも、あんなやつどうにでもなれ！ あいつがオレたちの教区牧師だよまちがいなく——いつだって物乞いしてやがる。初めて会ったときからずっと物乞いしてやがる』(説教は異教徒に対する布教についてのものだった)そして別の者がこう言った。『おいらが会って以来、教区牧師であれやこれやをよこせと乞食してないやつにはお目にかかったことないね』。そしてちょうど教会から出てきた女性が言った。『そうとも！ それに賃金が落ちてるのを見てごらん。あの金持ちの大物さんどもとあの教区牧師は狩猟して食事して酒飲んでるんだからね！ だから神様お救いたまえ、わしら牧師どもが外国にでかけるのに支払うくらいなら、労働組合にそれを払うほうがマシだと思いますよ』またもう一人が言った。『なんであの連中は、ああいう教区牧師をソールズベリー大聖堂で毎日、だれもいないむきだしの石に向かって毎日お祈りさせておかんのかね、なんでだろうね？』すると最初に口を開いた老人が言った。『連中がやんないのは、そこらじゅうにあんだけ土地を持っているくらい金持ちで、貧乏人どもをおいだすために金がいるからだよ。連中の求めるものならわかってる。もう連中を長く知りすぎていて、連中の魂胆なんざイヤでもわかる』私は言った。『だが我がよき友人諸君、きみたちは教会にくるたびに、教区牧師に対してこんな辛辣な嫌悪を抱いて帰るわけじゃないんだろう。もしそうなら、なぜわざわざ教会なんかに来るんだね？』女性が言った。『なぜ来るかって？ 行きたいからだよ、そうすりやすべてを無くしたりしない、仕事とかいろいろね。みんな行きたいからだよ』。後で学んだことだが、かれらは教会にきたら『燃料やジャガイモのための耕作地についていくつか特権が得られる』(ただし有料!)のだという」

かれらの貧困と無知を述べたあとで、この記者は記事を以下のように終えている。

「いまや私は何の恐れもなく、こうした人々の状態、かれらの貧困、教会への憎悪、外面的には高位の者に従順な様子を見せつつも内面では辛辣な印象を持っているという状態が、イングランド地方部全域では普通のことだと主張する。そしてこれ以外の状態はすべて例外的なものだと述べよう」

イングランドの農民たちが、大規模農業と関連した大量の農業プロレタリアートの存在が地方部にとってもたらす結果を示しているとするなら、ウェールズは小地主の破滅を示すものとなっている。イングランドの地方部教区が資本家とプロレタリアとの対立を再現しているとすれば、ウェールズの農民の状況は、都市部のプチブルジョワの段階的な破滅に対応している。ウェールズに見られるのは、ほぼ独占的に小規模借地人であり、もっと大規模で有利な立地にあるイングランドの農民たちほどは産物を安く売れず、利潤も低くなってしまいが、それでもかれらは競合しなければならない。さらに一部では、土地がやせているので家畜の飼育しかできず、これは利潤が高いとはいえごくわずかだ。またこうしたウェールズの農民たちは、国籍がちがい、また強情にそれを維持していることもあって、イングランドの農民たちよりもずっと移動が少ない。だがウェールズ人同士や近隣のイングランド人たちとの競争(そしてここから生じる借地料増大)のおかげで、かれらの

状態は大幅に劣化し、ほとんど暮らしていけない。そして自分の劣悪な状態の真の原因を認識していないため、かれらはそれを各種のつまらない原因のせいにする。たとえば高い通行料などだが、これは確かに農業や商業を抑制するが、借地を行う人すべてにより固定費として認識されており、このため最終的には地主が支払うものとなっている。ここでもまた、新救貧法は小作人たちに大いに嫌われている。かれらは常に、いつその影響下に陥るやもわからない状態に置かれているからだ。1843年には有名な「レベッカ」騒動がウェールズの農民たちの間で生じた。男たちは女の服を着て、顔を黒塗りし、武装した群集となって通行料徴集ゲートを襲い、大喜びで発砲しつつそれを破壊し、通行料徴収人の家を破壊し、「レベッカ」なる空想上の人物の名で脅迫状を書き、あるときなどカーマーセンの救貧院を襲撃するに至ったのだった。後に民兵が招集され警察が強化されると、農民たちは見事な技能を使い、軍や警察には偽の痕跡を追跡させて、料金ゲートをこちらで破壊する一方で、民兵たちは偽の信号ラッパにおびき寄せられ、正反対の方向に行進していたのだった。そして最終的に、警察があまりに強化されたために、放火1件と殺人未遂を犯すこととなった。いつもながら、こうした重犯罪が運動の終焉となった。多くの人はこうしたやり方に反対して身を引き、他のものはこわがって身を引き、平和が復活した。政府はこの出来事とその原因について調査する委員会を招集し、それで話は終わった。だが農民の貧困は続き、現状の状況力ではこれが改善されることはあり得ないどころかますます強化されるしかない以上、いつの日かこうしたユーモラスなレベッカ仮面劇よりも深刻な噴出を生み出すのはまちがいない。

イングランドが大規模農業の結果を示し、ウェールズが小規模農業の結果を示すものであるなら、アイルランドは土地の過剰な分割の結果を示している。アイルランドの人口の大半は、部屋にも分かれていない大部屋式の惨めな小屋に住み、冬の間は飢え死にかつかつのジャガイモを供給できるだけのジャガイモ畑を耕す小規模小作人で構成されている。こうした小規模小作人の間のすさまじい競争の結果として、地代は前代未聞の高水準となっており、イングランドで支払われるものの2倍、3倍、4倍にも達している。あらゆる農業労働者は小作農家になろうとするので、土地細分化がすさまじく進行しているのに、農地を求めて競争する労働者は大量にいる。グレートブリテン島では耕作地が3400万エーカーがあり、アイルランドではそれがたった1400万エーカーだ。グレートブリテン島が生産する農産物は年に1.5億英ポンドだが、アイルランドはたった3600万英ポンド。アイルランドには農業プロレタリアートの数が、となりのグレートブリテン島よりも75000人も多い。アイルランドにおいて土地をめぐる競争がいかに激しいかは、このとんでもない不均衡ぶりからわかるだろう。特に、グレートブリテン島の労働者たちが最低の貧窮下で暮らしていることを考えればなおさらだ。この競争の結果として、賃料があまりに高いために、借地農になったからといって労働者よりも大してましな生活は送れないのだ。したがってアイルランドの人々はこのためすさまじい貧困の下に置かれており、現在の社会状況ではそこから抜けだすことはできない。こうした人々は最低のみすぼらしい泥小屋に住んでおり、これは牛小屋にも劣る場合も多く、冬の間はほとんど食べるものもないか、あるいは上で引用した報告で述べられているように、年のうち30週間は十分な量の半分におよぶジャガイモを得ており、年の残りは何もなし。春になって、ジャガイモの蓄えが底をつくか、あるいは芽が出てしまうためにもはや食べられなくなると、妻子たちは物乞いにでかけて、国中を夜間を手をうろつきまわる。一方夫たちは、翌年のためのジャガイモを植え終わると、アイルランドかイングランドに職探しにでかけ、ジャガイモ

の収穫期に家族のもとに戻ってくる。アイルランドの地方住民の9割はこうした状況で暮らしている。どん底の貧しさであり、最悪のボロをまとい、半分しか文明化されていない国で、最低の知能水準にとどまっている。引用した報告によれば、人口850万人のこの国で、世帯主58万5千人は完全な赤貧状態だ。そして州シェリフのアリソンが引用する他の当局によれば、アイルランドには公的私的援助なしには暮らせない人が230万人もいるつまり総人口の27パーセントが乞食ということだ！

この貧困の原因は既存の社会条件、特に土地の細分化という形で見られる競争にある。それ以外の原因を見つけようという各種の努力が行われてきた。借地人と、地主との関係が問題なのだとされてきた。地主は大きな敷地を借地人に貸し、その借地人はそれをさらに細かく分けてサブ借地人に貸し、その人がさらにサブサブ借地人に小分けし、おかげで地主と実際の耕作人との間に中間業者が十人も入ってくる。耕作人が地代をきちんと払っていても、最初の借地人が地代を払い損ねたら、地主が末端の耕作人から土地を取り上げるのを認めるという恥知らずな法律があって、この法律こそがこうした貧困すべての原因なのだという主張が行われてきた。だがこれが決定づけるのは、貧困がどのような形であらわれてくるかという形式だけだ。あらゆる小規模借地人を地主にしたら、何が起こるだろうか？ 大半は、地代支払いがまったくなかったとしても自分の耕作地からの作物では生活できず、わずかな改善があったところで、人口が急増する結果としてその影響は数年で失われてしまう。すると、改善した状況の下で生活するよう育った子どもたちは、今度は子供時代の初期に貧困のために死亡することになる。別の方面からは、イギリスにより押しつけられた恥知らずな抑圧こそがあらゆる問題の原因なのだという主張がやってくる。これは確かに、こうした貧困がちょっと早めにやってきた原因ではあるが、貧困そのものの原因ではない。あるいは、カトリックの国民にプロテスタント教会が強制されたせいなのだとされることもある。だが教会が奪うものをアイルランド人の間で分けても、一人六シリングにもならない。さらに教会の十分の一税は土地持ち財産に対する税金であり、小作人に対する課税ではない（形式上はそれを支払うかもしれないが）。現在宇では、1838年十分の一税徴収法以来、地主たちは直接十分の一税を支払ってその分だけ地代を上げるので、小作人は少しも状況がましにならない。そして同様にこの貧困の何百もの原因とされるものが提起されているが、そのすべてはこれらと同じく大したものではない。この貧困は我々の社会条件の結果なのだ。これら以外に、その現れ方についての原因というものはあるだろう。でもその貧困が存在するという事実の原因ではない。このように、貧困がアイルランドにはこのような形で出現して別の形はとらないという事実は、人々の性質とその歴史的発展によるものだ。アイルランド人は、全体的な正確がラテン諸国と関連しており、特にイタリア人と関係が深い。その人格面でのよからぬ特長をカーライルが描き出したものについてはすでに見た。今度はアイルランド人の意見をきこう。この人はチュートン（ドイツ）的な性格を優れたものとしているが、少なくともカーライルよりは真相に迫っている。

「かれらは落ち着きがないのに怠け者で、小ずるいのに軽率で、衝動的で、こらえ性がなく、先のことを考えられず、蛮勇に満ち、軽薄な鷹揚さを持つ。攻撃をすぐに後悔しては許し、すぐに友だちになってはケンカ別れする。天与の才は豊富に

与えられているが、判断力はほとんど与えられていない」\*2

アイルランド人においては、感情と情熱が圧倒する。その前にあっては理性は通用しない。その感覚的で興奮しやすい性質は、思索や静かで落ち着いた活動が発達する余地を与えない。こうした国民は現在行われているような製造業にはまったく向いていない。だからかれらは農業にしっかりとしがみつき、しかもその農業ですら、どん底の水準に留まっている。ここでは土地の細分化が行われており、これはフランスやライン川流域のように、大規模農地の分割を通じて人工的に作り出されたものではなく\*3、はるか昔から存在したものだだったので、土壌を資本投下により改善するなどという発想はなかった。そしてアリソンによれば、土壌をイングランドですでに実現されている、あまり高くもない肥沃度水準にまで引き上げるだけでも、1.2億英ポンドが必要となるという。イングランドからの移民はアイルランド文明の水準を上げたかもしれないのに、実際にはアイルランド人たちの最も野蛮な収奪で事たれりとしている。そしてアイルランド人たちは、イングランドへの移住によってイングランドが独自の成果を生み出すような活力を与えているが、イングランドからの移民に対してはほとんど感謝すべき点は持っていない。

現在の破滅から自らを救おうとするアイルランド人の試みは、片方では犯罪という形をとる。農業地区では犯罪は日常的なできごとであり、常に最も直接的な敵、つまり地主の代理にやその従順な使用人であるプロテスタントの侵入者たちに向けられる。プロテスタント入植者たちの大規模農場は、排除された家族たち数百軒のジャガイモ畑を集めたものだから。こうした犯罪は特に南部と西部で頻発する。他方では、アイルランド人たちはイングランドとの法的な連合の廃止支持のアジテーションにより救済を期待している。これまでのすべてからみて、学のないアイルランド人は明らかに、イングランド人たちを最悪の敵だと思っているにちがいない。そして状況改善の最初の希望は、国民独立の実現にあると見ているのだ。だが同じくらい明白なこととして、アイルランド人の困窮は合併廃止法などで取り除かれるものではない。だがこうした法律は、アイルランドの悲惨の原因が、いまは外国から来ているように見えるものの、実は自国内の要因が原因なのだというをすぐに露わにするだろう。一方、合併廃止の実現がこれをアイルランド人に明確に理解させられるかどうかは、だれにもわからないところだ。これまでは、チャーティズムも社会主義もアイルランドでは目に見える成功を収めていないのだから。

アイルランドについての観察はこころへんで打ち切ろう。このように手短かに終える理由としては、1843年の合併廃止アジテーションとオコネル裁判のおかげで、ドイツでもアイルランドの苦境がますます知られるようになってきたということがある。

これでイギリス初頭のプロレタリアートをあらゆる活動分野で検討したわけだが、どこへいってもまったく非人間的な状態で悲惨の中で暮らしていることがわかった。プロレタリアートの台頭、成長、発展、組織とともに、不満が高まるのも見てきた。プロレタリアートのブルジョワジーに対する無血・流血の戦いが公然と戦われるのも見てきた。プロレタリアートの運命、希望、恐れが決定づけられる原理を検討し、その状況が改善される見通しはまったくないことも見た。

\*2 “The State of Ireland” London 1807; 2nd edition 1821.[匿名パンフレット]

\*3 まちがい。小規模農業は中世以来主流の農業方式だった。したがって小規模農家は革命以前にも存在していた。革命が変えたのは、その所有方式でしかない。封建地主から奪い、それを直接間接に、農夫たちに移転したのだ。— 1892年ドイツ語版へのエンゲルス注。

プロレタリアートに対するブルジョワジーのふるまいを見聞をする機会はずでにあちこちであったし、それがブルジョワジー自身のことしか考えないものであること、自分の利益しか考えないものであることがわかった。だが、公平を期するために、ブルジョワジーの行動様式をもっと厳密に検討することにしよう。

## 第 11 章

# プロレタリアートに対するブルジョワジーの態度

原文：<http://bit.ly/1KelK2X>

ブルジョワジーの話をするにあたっては、いわゆる貴族も含める。というのもこれが特権階級なのは、ブルジョワジーとの対比においてのみであり、プロレタリアートとの対比においてはそうではないからだ。プロレタリアはどちらにも財産所有者——つまりはブルジョワを見て取る。財産の特権の前には、他の特権はすべて消え去る。唯一のちがいというのは、ブルジョワは製造業プロレタリアと、ある意味では鉱業プロレタリアと、そして農民として農業労働者たちと活発な関係を保っているが、いわゆる貴族は農業労働者とは接触しないということだ。

ぼくはイングランドのブルジョワジーほど道徳的に深く頹廃し、利己性により手の施しようがないほど道を踏み外し、内面が腐敗しきって、進歩が不可能な階級を見たことがない。そしてぼくがここで念頭においているのは、特にブルジョワジー一般、特に自由党の穀物法廃止支持のブルジョワジーだ。この階級にとって、お金のためであれば、自分自身もふくめ何一つとしてこの世に存在しないのだ。急速な利得以外には何ら喜びを知らず、黄金を失う以外には何の苦痛も知らない。この強欲と利得に対する貪欲の存在を前にしては、どんな人間的感情だろうと意見だろうと汚されずにはいられない。確かに、こうしたイングランドのブルジョワたちはよき夫で家族想いの男たちである、各種の個人的な美德もいろいろ持っているし、通常のやりとりにおいては、他のブルジョワすべてと同じように、まっとうで尊敬すべき人間に見える。商売においてすら、ドイツ人を相手にするよりも交渉しやすい。かれらはドイツのごまかしだらけの商人たちのように、やたらに値切ろうとしたりはしない。だがそれが事態をどれだけ助けるといえるのか？ 最終的にはかれらを規定しているのは、自分の利益、特に金銭的な利得だけなのだ。ぼくは一度、こうしたブルジョワとマンチェスターに出かけて、建物のひどい不健全な建築方法、労働者地区のひどい状況について語り、これほどひどい作りの都市はみたことがないと主張した。その人は最後まで静かに耳を傾け、そしてぼくたちが別れる角までやってくるとうとう言った。「そうは言いながらもここでは大金が作られておりますからな。ではごきげんよう」。自分たちの労働者が飢えようが、自分さえお金儲けができるならまったくイングランドのブルジョワジーは無関心なのだ。人生のあらゆる状況はお金で計測され、お金をもたらないものはナンセンスで、非実用的で、理想主義的なたわごとだ。このため、政治経済学、

つまり富の科学は、こうした取引するユダヤ人どもの大好きなお勉強となる。かれらの一人残らず政治経済学者だ。製造業者がその工員に対して持つ関係にはまったく人間的な部分がない。純粹に経済的だ。製造業者は資本であり、工員が労働。そして工員がこの抽象化に無理矢理でもおさまらないなら、自分が労働ではなく人間であり、労働力という属性は他にも持つものの一つでしかないと固執するなら、もしその工員が自分は市場で「労働」という賞品として売買されるのを認める必要などないのだという考えを頭の中に抱こうものなら、ブルジョワの理由づけは停止してしまう。ブルジョワは自分が工員に対して売買以外の関係を持つなどということが理解できない。ブルジョワが工員たちに見るのは人間ではなく作業員（ハンド）であり、だから労働者に面と向かってハンド呼ばわりする。ブルジョワは、カーライルが言うように、「人間同士の唯一のつながりは現金支払い」なのだと固執する。ブルジョワとその妻との関係ですら、百のうち九十九は単なる「現金支払い」だ。お金が人間の価値を決める。「こいつは千ポンドもの価値がある」などという。お金を持っている者が「ましな種類の間人」であり「影響力があり」、その人物のやることこそが社会的なサークルの中で意味を持つのだ。金銭目当ての精神はその言語全てに浸透し、あらゆる人間関係がビジネス用語であらわされ、経済カテゴリーで語られる。イングランドのブルジョワは人生のすべてを需要供給の公式にしたがって判断する。したがってあらゆる面で自由競争であり、そのためにレッセフェール、レッセアレのレジームが政府にも、医療にも、教育にも見られ、イギリス国教会がますます崩壊するにつれて、宗教でもそうなるだろう。自由競争は一切の制約がなく、何ら国の監督もなく、国というのはすべてそれに対する重荷でしかない。それが最高の完成を見るのは、まったく等地されないアナーキー的な社会であり、そこでは各人が自分の心ゆくまで他人を収奪する。しかしブルジョワジーは政府なしではやっていけず、手放しがたいプロレタリアを押さえつけるのに政府が必要なので、政府の力をプロレタリアに向けて、なるべくそこから遠ざかるようにとするのだ。

しかしながら、「洗練された」イングランド人が公然と自分の利己性を自慢すると想ってはいけない。それどころか、これ以上はないほど不快な偽善の下にそれを隠すのだ。なんですと？ 豊かなイングランド人が貧困者のことを忘れ去っているんですと？ イングランド人は他のどんな国も誇れないほどの慈善組織を創設したというのに、これはご挨拶ですな！ まるでプロレタリアからまずはその生き血そのものを吸い取ってしまい、その後自己満足じみたパリサイ人めいた慈善をかれらに押しつけることで、なにが恩恵でも施してやったかのような言いぐさだ。収奪された被害者たちには、かれらに所属するものの百分の一しか返していないというのに、人間性の偉大なる支援者として世界の前に名乗りを挙げようとは！ その慈善とは、受け取る者よりも与える者を一層貶めるものだ。すでに過酷な目に遭っている者をさらに深く埃の中にたたき込む慈善。貶められ、毛嫌いされた者たちが社会からつまはじきにされる慈善。その者に最後に残るもの、つまりその人物の男らしさの主張そのものをまっ先に明け渡す慈善、こちらの慈悲をもったいなくも賜る前に、向こうがお慈悲を乞うようにさせる慈善、施しという形で提供され、尊厳劣化の烙印を額に押す慈善。だがイングランドのブルジョワ自身のことばを聴いてみよう。『マンチェスターガーディアン』紙の投書欄で以下の手紙を読んでからまだ1年たっていない。この手紙は何のコメントもなしに、まったく当然かつもっともな発言として刊行されていた。

「編集部御中　しばらく前から、私たちの大通りは大量の乞食に覆い尽くされており、この者たちは通行人の哀れみを引こうと、最も恥知らずで苛立たしいやり方をします。自分たちのボロボロの服や病気、嫌悪を催す傷や奇形などをひけらかすのです。私は、貧困税を支払うだけでなく慈善機関に大量の寄付を行った人物は、こうした忌まわしい不適切な迷惑から逃れる権利を得たものと考えております。そして都市に平穩に出入りする程度の保護を与えてくれるのでなければ、どうして地方警察の維持のためにあれほどの高い負担をさせられるのでしょうか？　この手紙が広く購読されている貴紙の紙面に刊行されれば、当局はこの忌まわしい連中を排除するよう促されるやもしれません。

—— 忠実なる僕  
「ある淑女」

ご覧の通りだ！　イングランドのブルジョワジーは利己性から慈善をするのだ。何かを純粹に与えるなどということは決してなく、贈り物は商売上の話だと考え、貧乏人と取引をしてこう言うのだ。「これだけの金額を愛他的な機関に費やすなら、それ以上は面倒をかけられない権利を買ったことになり、したがっておまへたちは薄暗い家の中にとどまって、その悲惨をあらわにすることで私の繊細な神経を苛立たせたりしないという誓いをかわしたことになるのだ。昔と同じように絶望はするが、その絶望はこちらの目に入らないところでやりなさい。これは病院に二十ポンド寄付したことで購入したものだからね！」まったく悪名高いものだ、このキリスト教ブルジョワジーの慈善というものは！　そう書いているのが「ある淑女」だ。こんな署名をするのは何とも賢明だ、というも彼女は自分を女性と呼ぶ勇気を失っているからだ！　でも「淑女」がこんな様子なら、「紳士」はどんなものなのだろう？　これはたった一つの事例でしかないという人もいるだろうが、ちがう。いま挙げた手紙が述べているのはイングランドのブルジョワの大半が持っている気性を表現しているのだ。さもなければ編集者はそれを受けいれなかつただろうし、何らかの返答がこれに対して行われたはずだ。でもその後の号で返答がないかと探し続けたもの見つからなかった。そしてこの慈善がどれほど有効かといえば、キャノン・パーキンソンその人が、貧者はブルジョワジーよりもはるかに多くのものを、同じ貧困者たちから与えられていると述べている。そして自分でも腹を空かせるというのがどういふことかを知っている正直者のプロレタリアが提供するそうした救済金は、自分自身のわずかな食事を分け与えたことになるので本当の意味での犠牲であり、しかも喜びを含んだ犠牲であり、こうした支援は豪勢なブルジョワたちが気軽に投げて寄越す施しとはまったくちがう響きを持っているのだ。

また他の面でも、ブルジョワジーは偽善的な果てしない慈善を唱えはするが、それは自分の利益にとって必要な場合だけなのだ。これは、その政治と政治経済にとっての場合と同様だ。それは五年近くも作用しつづけており、ブルジョワジーが穀物法廃止に奮闘するのはひたすら自分の利益のためでしかないということを労働者たちに証明するに至っている。だが事態は要するにこういうことだ。穀物法はパンの価格を他国よりも高く保つので、賃金を引き上げる。だがこうした高賃金は、パンやひいては賃金をもっと安い国に対して製造業者たちの競争を困難にするのだ。穀物法が廃止されれば、パンの価格は下がり、賃金は次第に他のヨーロッパ諸国の水準に近づく。これは賃金が決まる原理に関するさっきの説明からだれにでもはっきりわかるはずだ。製造業者はもっとうまく競争できる

ようになり、イングランドの財に対する需要は高まり、それとともに労働需要も高まる。この需要増大の結果として賃金は実際に少し上がり、失業労働者は再雇用される。だがそれがいつまで続くやら。イングランド、そして中でもアイルランドの「余剰人口」は、イングランドの製造業が倍の規模になっても必要な工員を十分に供給できる。そして数年のうちに、穀物法を廃止したことによるわずかな優位性は均衡してしまい、新しい危機がやってきて、話は元の木阿弥となる一方で、最初の製造業への刺激のおかげで人口が増えてしまうことになる。こうしたすべてをプロレタリアはとてもよく理解しており、製造業者に対しても面と向かってこれを述べている。だがそれにもかかわらず、製造業者たちは穀物法廃止がもたらす目先の利益だけしか眼中にないのだ。相互の競争がやがて個々の業者の利潤を昔の水準に押し戻すしかないため、この手法から永続的な優位性など生じないというのを、自分たちのためにすら見られないほど意識が偏狭になっているのだ。だからかれらは労働者たちに対し、自由党の金持ち党员たちが反穀物法連盟の財務部に何百何千ポンドも注ぎ込んでいるのが、純粹に飢えている何百万人ものためなのだと言わめき続けている。でも実はだれしも、かれらがチーズの後からバターを送っているようなもので、穀物法廃止後十年でその分すべてを取り戻そうと計算しているのを承知している。だが労働者たちは最早、特に 1842 年の蜂起以来、ブルジョワジーに惑わされはしない。労働者の福利厚生に関心があると名乗る人間すべてに対し、その自らの主張が心からのものであることを証明するため人民憲章（チャーター 0 を支持していると宣言せよと要求する。そしてそうすることで、かれらはあらゆる外部からの支援に対して抗議している。というのも、チャーターは自らを助ける力を要求するものだからだ。そのように自ら宣言するのを拒否する者は、だれであれ敵と見なされる。そして、それが敵とされるかニセの友だちとされるか、いずれにしてもそれはまったく正当なことだ。さらに反穀物法連盟は労働者の支持を獲得するため、最も唾棄すべきウソや詐術を使ってきた。連盟は、労働の金銭価格は穀物価格に反比例するのだと証明してみせようとした。穀物が安ければ賃金が上がり、その逆もなりたつと占めそうといふた。こうした主張を連盟はとんでもなくデタラメな議論で証明しようとする。その理屈はそれ自体として経済学者の口から出てきたどんなものよりも笑うべき代物だ。これで事態が改善しないと、労働者たちは労働市場での需要増大に伴う極度の至福状態を約束された。実際、人々は街路で二種類のパン一斤の模型を掲げることまでやったのだった。そのうち圧倒的に大きなほうには「アメリカの八ペニーの一斤、賃金は一日 4 シリング」と書かれ、ずっと小さなほうには「イングランドの八ペニーの一斤、賃金は一日 2 シリング」と書かれていたのだ。だが老走者たちはそんなものにごまかされようとはしなかった。かれらは自分たちの貴族や主人たちをあまりに熟知しすぎているのだ。

だがこうした約束の偽善性を適切に計測するには、ブルジョワジーの実践のほうも考慮しなければならない。この報告の中で、すでにブルジョワジーがありとあらゆるやり方で、プロレタリアートを自分の利益のために収奪することは見てきた！ だがこれまでは、個別のブルジョワが自分自身のためにプロレタリアを手ひどく扱う例を見たただけだ。今度は、集団としてのブルジョワ、国家権力としてのブルジョワがプロレタリアに対してどういうふるまいをするか見てみよう。法が必要なのは、何も所有していない人物が存在するからでしかない。そしてこれが明言されている法律はほとんどなく、浮浪者や乞食に対するものなどくらいで、この場合にはそうした形でのプロレタリアは違法とされているが、それでもプロレタリアに対する敵意はの例を除けばほとんどないが、法の基盤として

プロレタリアへの敵意はあまりに断固たるものなので、裁判官、特に治安判事（かれら自身もブルジョワであり、プロレタリアと最も接触の多い人々だ）は特に考えることなしに、法律にそうした意味を読み取るのだ。もし金持ちが法廷に引き出され、いやむしろ召喚されると、判事はそんな苦勞をかけさせていることについて遺憾の意を述べ、できるだけ裁判を金持ちに有利に運び、そして被告を断罪せざるを得ない場合には、大いに遺憾の意を述べつつそれを行う等々であり、そして結局のところその判決は実に貧相な罰金であり、ブルジョワはそれをバカにしたようにテーブルに投げ出して立ち去ることになる。だが貧乏なヤツが治安判事の前に立つような立場になったら　その前の晩はほぼまちがいはなく、同じ身分の仲間たちとともに留置所で過ごしている　当初から有罪扱いだ。弁護論は軽蔑したような「ふん、そういう言い逃れは十分承知している！」の一言で片づけられる。そして化せられる罰金は支払えない金額なので、数ヶ月にわたり踏み車で過ごして返済しなくてはならない。そして何の罪状も証明できない場合でも、「無頼漢であり浮浪者だから」ということでどのみち踏み車には送られる。治安判事の党派性、特に地方部での党派性は、筆舌に尽くしがたいものであり、あまりに日常茶飯事なので、きわめて極悪なものを除けばそうした事件はすべて新聞にだまって報道され、一切のコメントはつかない。そもそも、それ以外の何も期待しようがないのだ。というのも一方では、こういう小役人どもは、農民たちの意図にしたがって法律を解釈するだけだし、また一方では、かれら自身もブルジョワであり、あらゆる真の秩序の基盤が自分尾階級の利益にあるのだと見ているからだ。そして警察の行いは治安判事の行動に対応したものだ。ブルジョワが好き放題やっても警官はどこまでも礼儀正しく、法律に厳密に準拠するが、プロレタリアは荒っぽく野蛮な扱いを受ける。その貧困は、あらゆる犯罪の嫌疑をもたらすのであり、法執行官たちの気まぐれに対する法的な保護すべてからその者を切り離してしまう。だからその者にとっては、法の保護的な形態は存在しない。警察は何の断りもなく家に入り込み、逮捕して暴行を加える。そして労働者の団体、たとえば鉱夫労働組合などがロバーツのような弁護士を雇う場合にも、労働者にとっていかに法の保護的な面がないも同然か、労働者が法の便益をまったく享受することなしに、法の負担を背負わねばならないかというのが明らかとなるのだ。

いまこの瞬間に至るまで、議会の財産保有階級は未だに、利己主義の犠牲に陥っていない人々のよい感情に逆らい、プロレタリアートをさらに隷属させようとしている。共有地は一つ、また一つと収容されて耕作地とされ、おかげで全般的な耕作は進むがプロレタリアは大いに損害を得ている。まだ共有地があるところでは、貧困者は、ロバ、ブタ、ガチョウを放牧させられるし、子どもたちや若者たちは、屋外で遊び暮らせる場所もある。だがこれが次第に終わりを迎えつつある。労働者の稼ぎは減り、若者たちは、遊び場を奪われてビール屋に向かう。議会の会期ごとに、共有地を囲い込んで囲い込む法律が大量に可決されている。1844年の会期中に、労働者が自分たちの目的に比例する料金、つまり1マイル1ペニーで乗車を可能にするよう独占鉄道すべてに強制することを決め、したがってあらゆるい鉄道に毎日そうした三等鉄道を設けるよう提案したところ、「神における牧師神父」であるロンドン司教が、労働中の労働者が旅行できる唯一の日である日曜日はこの規則から除外するよう提案した。これにより、旅行は金持ちにだけ拓かれ、貧困者には閉ざされることとなる。だがこの提案はあまりに直接的で、あまりに偽装が足りなかったために議会での可決には至らず、否決された。たった一回の会期においてプロレタリアに対して行われた、数多くの隠れた攻撃を羅列するだけでもページが埋まってしまう。1844

年会期における一例を挙げるにとどめよう。議会の無名議員、マイルズ氏なる人物が、主人と召使いとの関係を規制する法案を提出し、これは比較的反対する必要もないように思えた。政府がこの法案に興味を持ち、これが委員会にかけられた。一方、北部における鉱夫たちのストライキが生じ、ロバーツがイングランド中を、無罪を勝ち取った労働者たちと共に勝ち誇って巡回した。この法案が委員会により報告されると、あるきわめて専制的な条項がそこに組み込まれていることがわかった。特に、雇用主はいかなる作業についてであれ、口頭だろうと文書だろうと、契約をかわしたあらゆる労働者について、もし仕事を拒否したりその他の不屈きな行動があった場合には、治安判事の前に引き出す力が与えられ、そして雇用者やその代理人や監督の先生があれば、つまりは糾弾者の宣誓があれば、その労働者を二ヶ月の重労働つき投獄判決に処することができる、という条項があったのだ。この法案は、労働者たちのすさまじい怒りを引き起こしたし、同時期に十時間法案が議会で審議されていたのでその怒りはさらに高まり、そしてかなりのアジテーションを引き起こした。何百もの集会が開かれ、何百もの労働者による請願書が、ロンドンのプロレタリアート利益代表であるトマス・ダンコムに提出された。この人物はフェランドを除けば、この法案に対する唯一の強い反対者である「若きイングランド」の代表だった。だが他の急進派たちがこの法案に対する人々の反対ぶりを見ると、一人、また一人とこっそりすすみ出てきてダンコムの横についた。そして自由党ブルジョワジーは労働者の興奮に直面してまでこの法案を擁護する勇氣は無かったので、これは無様にも否決されたのだ。

一方、ブルジョワジーによるプロレタリアに対する最も公然とした宣戦布告は、マルサスの人口法則と、それに対応する形で起草された新救貧法だ。マルサスの理論についてはすでに何度か言及した。その最終的な結論を簡単にまとめると、地球は永久に人口過剰であり、貧困、悲惨、苦境、不道德が否応なくはびこる、というものだ。そして、大挙して存在し続けるのは人類にとって普通であり永遠の運命なのであって、だから多様な階級に分かれざるを得ず、その一部は金持ちで学があり道徳的で、その他はおおむね貧乏で困窮し無知で不道德だ、ということになる。したがって実務的には、これはマルサス自身が引き出した結論なのだが、慈善や貧困への補助は、正しく言うならナンセンスだということになる。というのもそれは余剰人口を維持し、その増加を刺激するだけで、そうした余剰人口からの競争により雇用されている人々の賃金も暴落することとなるからだ。そして救貧法の監督官たちによる貧困者の雇用も、同じく不適切となる。というのも労働の産物のうち消費される量は固定されているため、失業している労働者がそのように雇用を与えられたら、それまで雇用されていた別の労働者が強制された怠惰へと押しやられざるを得ず、したがって民間事業が救貧産業の犠牲となって苦しむことになるからだ。そして言い換えると、そもそもの問題は余剰人口をどのように扶養するかということではなく、余剰人口そのものをできる限り抑制することなのだということだ。マルサスは平明な英語で、生きる権利、つまりこれまで世界の万人に与えられていた権利がナンセンスだと宣言する。かれはある詩人のことばを引用し、貧乏人が自然の饗宴にやってくると、自分のための食器が用意されていないのを発見するといいう。そして「自然は彼に立ち去れと言う」、なぜならかれは生まれる前に、自分が歓迎されるかどうか社会に尋ねなかったからというのだ。これはいまや、あらゆる正当イングランドブルジョワのお気に入りの理論となっている。そしてこれがやつらにとって一番もっともらしい口実であり、しかも既存の条件の下ではかなり真実をついた部分もあるために、これは実に当然のことではある。するともし

問題が「余剰人口」を活用し、それを使える人口に変換することではなく、単にそれが最も不適切でない方法で飢え死にするに任せ、あまり子供を作らないようにさせるだけであるなら、これはもちろん実に容易なことではある。しかしこれは、その余剰人口が自分たちが余計であることを自覚して餓死にあまり文句を言わなければの話ではある。しかしながら、労働者たちの間にこうした傾向をもたらすのには当分成功しそうにない。労働者たちは、手を忙しく動かす自分たちこそが必要な人材であり、金持ち資本家こそが何もしておらず、余剰人口なのだということをしっかり認識しているからだ。

だが、金持ちがすべての権力を持っているので、プロレタリアたちは、自分でお人好しにも自分が余計者だと感じないのであれば、法律に本当に余計者宣言をされるのに屈服するしかない。これをやったのが新救貧法だ。旧救貧法は、1601年法（エリザベス女王の御代43年目）に基づいたもので、貧困者を支えるのが教区の義務だという発想から無邪気にも始まったものだった。仕事がない者はすべて救済を受けられ、貧困者は教区が自分を飢餓から守ると約束したものと考えた。そして週ごとの救済金を、自分の権利であり恩恵とは見なさずに要求し、そしてこれがついには、ブルジョワジーにとって耐えがたいものとなった。1833年にブルジョワジーが選挙法改選案を通じて権力の座につき、地方地区における生活保護受給者がちょうど最高潮に達し他とき、ブルジョワジーたちは自分たちの視点に基づいて救貧法の改革に手をつけた。委員会が任命され、救貧法の実施状況を検討して、大量の濫用を発見した。地方部の労働階級はすべて生活保護を受けていることが発見され、おおむね地方税に依存した形で、賃金が低いときにはそこから補助金を得ていたのだった。失業者が食いつなぐこの方式、低賃金や大家族の両親が救済され、婚外子の父親たちは養育費を支払、貧困全般が保護を必要とするものだと認識されて作られたこの制度、それこそが国を荒廃させているのだという結論が出され、そしてその制度は

「産業を押さえつけてしまい、不適切な結婚への報酬となり、人口への刺激であり、賃金に対する影響も無視したものとなっている。生産的で正直な者はずかしの全国的な制度であり、怠惰な者、軽率な者、性悪な者を保護する制度である。家族生活の絆を破壊するものであり、資本蓄積を阻害する制度であり、既存の資本を破壊する制度、地方税を支払う者たちを生活保護受給者にしてしまう。そして扶養を提供してしまうことで、婚外子を持つプレミアムとなっているのだ」（『救貧法委員会報告』の記述）

この旧救貧法のふるまいについての記述は確かに正しい。救済は怠惰を育み、「余剰人口」の増加をもたらす。現在の社会状況下では、貧乏人は利己主義者にならざるを得ないのはまったくもって明らかだし、もし同じくらの生活水準が保てるのであれば、働くよりは何もしないほうを好むだろう。だがそこから得られる結論はどういうものだろうか？

現在の社会状況が何の役にも立たないものだということであり、マルサス主義の委員たちが結論しているように、貧困が犯罪であってそれに対しては恐ろしい罰則を与え、他の人々に対する警告とすべきだ、などという結論にはならない。

だがこうしたマルサス主義者たちは、自分たちの理論の無謬性をあまりに完全に信じ込んでおり、貧乏人を自分たちの経済思想の杓子定規なベッドに投げこみ、極度に忌まわしい残虐性を持って扱うのを一瞬たりともためらわない。マルサスを初めとする自由競争支持者たちに納得し、各人が自分で自分の面倒を見るのに任せるべきだと思い込んだブルジョワジーは、むしろ救貧法を丸ごと廃止したかったことだろう。だがそうするだけの勇

気も権限もなかったので、かれらはマルサスの教義にできる限り合致した救貧法を提案した。これはレッセフェールよりもなおさら野蛮な代物だ。というのもそれは、レッセフェールが何もしないような場合ですら、積極的に介入するからだ。マルサスが貧困、いやむしろ雇用の欠乏を「余り者」の旗印のもとに犯罪とし、それに対しては飢餓による処罰を推奨しているからだ。委員たちはそこまで野蛮ではなかった。飢餓による直接的な死は、救貧法委員たちにとってもあまりにひどすぎるものだった。そこでかれらは言った。「よろしい。では君たち貧乏人に存在する権利は与えよう。生み増やす権利は与えられず、人類にふさわしい形で存在する権利も与えない。君たちは害虫であり、他の害虫のように駆除できないのであれば、少なくとも君たちには自分が害虫であると感じるべきであり、少なくとも数を抑制され、直接的にあるいは他人に怠惰と雇用欠乏をもたらすことで、この世に他の余剰をもたらすのを防止されるべきだ。君たちは生きはするが、余り者になりたいなどという考えを起こす者すべてに対するひどい警告として生きていただこう」

これに従い、かれらは新救貧法を提出し、これが 1834 年に議会で可決され、現在に至るまで続いている。金銭や補助による救済はすべて廃止された。許された唯一の救済は、即座に建設された救貧院に入れるというものだけだ。こうした救貧院、あるいは人々に言わせると救貧法のパスチーユ牢獄についての規制は、この主の公的な慈善なしで暮らしていける見込みがごくわずかでもある万人を脅かして追い払うようなものだ。救済が最も極端な場合に限り、他のあらゆる試みが失敗したあとにだけ適用されることを確実にするため、救貧院はマルサス派の洗練された巧みさが発明できる中でも最も嫌悪を催す住居となっている。食べ物は、雇用されている中で最も低賃金の者が食べるものよりもひどく、そこでの作業も外のどんなものより厳しい。そうでないと、人々は外での嘆かわしい存在よりも救貧院のほうがましだと思ってしまうかねないからだ。肉、特に新鮮な肉は滅多に与えられず、おもにジャガイモと、考え得る最悪のパンとオートミールがゆ、ビールはほとんどかまたく出されない。刑事犯罪者の食べ物のほうが一般にましなので、貧乏人たちはしばしば牢屋に入りたいがために何らかの犯罪を犯す。というのも、救貧院もまた牢屋だからだ。作業を終えない者は何も食べ物を与えられない。外に出たい者は許可を取らねばならないし、それが認められるかはその者の品行か監督官の気まぐれ次第だ。タバコは禁止されている。救貧院外部の親戚や友人からの贈り物も禁止。貧乏人たちは救貧院の制服を着る。そして救いもなく助けを求める先もないまま、監督官の気まぐれに任されるのだ。その労働が外部の事業と競合しないように、みんなかなりどうでもいい作業に狩り出される。男たちは「強い男が一日がんばって達成できるだけ」石を割る。女子供と老人は、オーカム（訳注：麻のロープなどをほぐした繊維クズ）を集める。それがどんなつまらない役にだろうと立つのか、ぼくは知らない。「余り者」が増殖して「不道德的な」親たちが子供に影響を与えるのを防ぐため、家族はバラバラにされる。夫はある建物に配置され、妻は別の建物、子供はまた別で、お互いに会えるのはきわめて間をあけた指定時間だけだし、それもかれらが係官たちから見て品行方正だった場合だけだ。そして外部世界がそのパスチーユ内部の貧困精神に汚染されないように、囚人たちが訪問客に会えるのは係官の同意があるときで、しかも応接室に限られる。外部世界とのやりとりは一般に、休暇と監督下でしか行えないのだ。

それでも、食べ物はまともなはずだし、扱いは人道的だということになっている。だが法の意図があまりに公然と語られているために、この要件が多少なりとも満たされることはない。救貧法委員たちとイングランドのブルジョワジー全員は、この法律の施行を行っ

てこんな結果にならないと信じているのであれば自分をごまかしている。その法律の条文に述べられた処遇は、法の精神と完全に矛盾している。法がその本質として貧者を犯罪者だと男児、救貧院を牢獄だとして、囚人たちは法の範疇に含まれない、嫌悪と反発を催す存在だと主張しているのであれば、それに逆らうような指令はすべて無意味となる。実際には、貧困者の扱いにおいては法の条文ではなく精神が遵守されている。以下にその例をいくつか挙げよう。

グリニッジの救貧院で、1843年の夏に、五歳の少年が罰として死体安置所に閉じ込められ、棺桶の蓋の上で眠るはめになった。ハーン救貧院では、女の子がおねしょをしたために同じ罰にあわされ、どうもこの処罰方法はお気に入りのものらしい。この救貧院は、ケントの最も美しい地域に建っているのだが、その窓が中庭に向かってしか開かないという点で奇妙であり、そして囚人たちが外の世界を眺められる窓は、新設された二つしかないというのも奇妙だ。『イルミネイテッド・マガジン』でこれを報じた著者は、その描写を以下のような言葉で終えている。

「人が貧困のために人を処罰するような形で神が人間を処罰することになったら、アダムの子供たちは実に嘆かわしいことになるだろう！」

1843年11月、コヴェントリーの救貧院から二日前に退去させられた男性がレスターで死亡した。この施設における貧困者の扱いの詳細は嫌悪を催すものだ。ジョージ・ロビンソンというこの男性は肩に怪我をしていたが、その処置は完全に無視された。そして無事なほうの腕を使ってポンプでの作業に駆り出された。さらに通常の救貧院作業しか与えられなかったが、傷が治っていなかったことと全般的な衰弱から、まったくこなせなかった。当然ながらだんだん弱くなり、苦情を言えば言うほどひどい扱いを受けた。妻がかれの元にビールを少々持っていきこうとすると、譴責されて、そのビールを女性看護の目の前で自分で飲むよう強制された。かれが病気になっても、まともな治療は受けられなかった。最後に当人の希望により、きわめて侮辱的な黒倒を受けつつ、かれは妻に付き添われて放免された。二日後、かれはレスターで死亡した。これは傷が放置されたためと、こうした状態の人物にとってまったく消化できない食事を与えられていたせいだ、と審問にやってきた医師は証言している。出所したときには、お金の入った手紙を何通か渡されたという。それは六週間にわたり監督官の手元に留め置かれ、そして施設のルールにしたがって開封されていたのだという！ パーミンガムではあまりにスキャンダラスな事件が起こったので、1843年にやっと係官が事態の捜査のために派遣された。そしてわかったのは、浮浪者四人が階段の下の黒い穴の中に裸で、8日から10日も閉じ込められ、昼間で食事も与えられないことも多く、しかも一年のうちで最も厳しい季節にそれが行われていたということだった。ある少年は、この施設で知られているあらゆる水準の処罰を受けていた。まずは湿った地下の狭い物置に閉じ込められた。それから小さな穴に二回閉じ込められ、その2回目は三日三晩にわたった。さらになおさらひどい古い犬穴に同じ期間だけ閉じ込められた。さらには臭くて嫌悪を催すほど汚い乞食部屋に入れられた。ここには木製の寝台があり、そこで係官は捜査の間に、ひどい状態の少年を他に二人見つけた。みんな寒さで縮こまり、三日間そこにいたのだという。犬穴には七人入れられていることもよくあり、乞食部屋では男性20人が身を寄せ合っていた。女性もまた犬穴に入れられたが、その理由は教会にいくのを拒否したからで、1人は乞食部屋に四日も閉じ込められ、相部屋となったのがどんな連中かは神のみぞ知るで、しかもそれが病氣中で投薬を受けている間

のことだったという。別の女性は、まったく正気だったのに処罰のために気狂い部屋に入れられた。サフォークのバクトンにある救貧院では、1844年1月に、似たような捜査が行われたが、ここでは看護婦として精神薄弱の女性が雇用され、患者たちの世話もそれに応じたものであり、苦しむ者たちは、しばしば夜に落ち着かずじたり起き上がろうとした場合には、寝台のカバーの上と台の下にまわされた縄で縛り付けられ、看護婦たちが夜に不寝番をする手間を省くようになっていたのだった。ある患者はこのような扱いで縛られたまま死んでいるのが見つかった。ロンドンのセントパンクラス救貧院（すでに述べたように安いシャツが作られている所だ）では、てんかん持ちがベッドの中で発作を起こして窒息死したが、だれも助けにやってこなかった。同じ救貧院では、一つのベッドで4人から6人、ときには8人の子供がいっしょに寝ている。ショーディッチ救貧院では、ある男が重病の高熱患者といっしょに、害虫まみれのベッドで同衾させられた。ロンドンのベスナルグリーン救貧院では、妊娠六ヶ月の女性が2歳児とともに、2月28日から3月19日まで待合室に閉じ込められ、救貧院自体には入れてもらえず、そしてベッドやきわめて自然な欲求を満たす手段などかけらも与えられなかった。その夫は救貧院に入れられたが、妻をこの収監から解放してくれと懇願したところ、こうした反抗的な態度に対する処罰として24時間にわたりパンと水だけ与えられて懲罰房送りとなったのだった。ウィンザー近くのスロー救貧院では、1844年9月に男が死にかけていた。その妻が夫を訪ねて深夜に到着した。そして救貧院に駆けつけたが入れてもらえなかった。翌朝まで夫に会わせてもらえず、その際にも女性看守がつきそっていた。この看守はその後のすべての訪問で妻につきまとい、半時間でこの妻を追い払うのだった。ランカシャーのミドルトンにある救貧院では、一つの部屋に貧乏人が男女問わず12人、ときには18人が寝ている。この施設は新救貧法の管轄ではなく、古い特別法（ギルパーツ法）の下に置かれている。監督は家の中に自分自身の利益のために醸造所を設置していた。ストックポートでは、1844年7月31日に、72歳の男性が石割りを拒否し、そして高齢とひざが最早曲がらないためにこの作業には不適切であると固執した罪で、治安判事の前に引き出された。自分の身体的な強さに適応した作業であれば何でもやると申し出たが無駄だった。踏み車二週間という判決が下されたのだった。バスフォードの救貧院では、査察官はシャツが13週間も交換されておらず、シャツは4週間、靴下は2ヶ月から10ヶ月もそのままだったので、少年45人のうち靴下があったのはたった3人であり、全員のシャツがボロボロだったのを発見した。ベッドは害虫まみれで、食器は生ゴミ入れで洗われていた。ロンドン西部の救貧院では、少女四人に梅毒を感染させた赤帽が施設放免とならず、つんぼで唾の少女を自分のベッドに四日四晩隠していた別の男もそのまま滞在を続けていた。

生きていた間のこうした惨状は死後も続く。貧困者は病気持ちの牛のように地面に放り込まれる。ロンドンのセントブライズにある貧者埋葬地は何もない沼地で、チャールズ二世の時代から墓場として使われており、山ほどの骨であふれている。水曜ごとに、貧乏人たちは深さ4メートルの穴に放り込まれる。助任牧師が祈禱書の嘆願を猛スピードで読み上げる。穴には軽く土がかけられるが、それが次の水曜日にまた掘り起こされ、押し込める限りの死体がそこに詰め込まれる。このようにして生み出される腐敗は、その近隣すべてを汚染している。マンチェスターでは、貧者埋葬地は旧市街の反対側のアーク川沿いにある。ここもまた、荒れて荒廃した場所だ。二年ほど前に、鉄道がそこに通された。それが立派な墓地であったなら、ブルジョワジーと教会はその不謹慎ぶりをわめき立てたことだろう！ だが貧者埋葬地であり、はぐれ者や余計者どもの墓地だったから、だれもそん

なことを気かけようとはしなかった。腐りかけの死体を墓場の反対側に運ぶ価値すらないと思われた。死体は出てきたはしから山積みになれ、その山が新しく作られた墓に放り込まれたので、湿地からは腐敗物まみれの水がにじみだし、ご近所をきわめて忌まわしく有害な気体で満たしたのだった。この作業に伴う嫌悪を催す野蛮な行為については、ぼくにはこれ以上詳しく描写するのとはばかられる。

こんな状況のもとで、貧者が公的な救済を拒絶するのも当然だろう。こんなバスタークに入るよりは飢えるほうを選ぶのも当然だ。守護者たちが outdoor relief を拒絶したので人々が本当に飢え死にした例の報告書が手元に五件ある。こんな地獄に入るよりも、自分の惨めな家に戻って餓死したのだ。ここまでのところ、救貧法の委員たちは目的を達成したわけだ。だが同時に、こうした救貧院は政権与党の他のどんな方策にも増して、労働階級が財産保有者たち（かれらはきわめて広く新救貧法を絶賛している）に抱く憎悪を強化しているのだ。

ニューキャッスルからドーヴァーまで、労働者の間には一つの声しかない。新法に対する憎悪の声だ。ブルジョワジーはこの法律に、プロレタリアに対する責務と考えるものを実に明確に反映させたので、その意図は最も頭の鈍い者にすら理解されたのだ。これまでその意図が、ここまで率直かつ大胆に記述されたことは未だかつてない。その意図とは、非所有階級というのが単に収奪されるためだけに存在しており、財産所有者たちにとって使い出がなくなれば餓死するしかないということだ。だからこそこの新救貧法は労働運動の加速に大いに貢献し、特にチャーティズムの普及を後押ししてくれたのだ。そして、これは地方部で最も強く実施されているので、農業地区で台頭してきたプロレタリア運動の発展に有益だ。

ちなみにアイルランドでは 1838 年以来、似たような法律が貧困者 8 万人に似たような救済を提供している。ここでもまたその法律は嫌われ、もしイングランド並みの重要性に匹敵するものを獲得していたなら、すさまじく憎悪されただろう。だがプロレタリアが 250 万人いる国で、8 万人にひどい仕打ちをしたところで何のちがいがあろうか？ スコットランドでは、一部の地方を例外として救貧法はない。

こうした新救貧法とその結果の様子を見れば、イングランドのブルジョワジーに対するぼくのことばの一言たりとも、厳しすぎるとは思えないことを願う。この公的な施策において、それが支配権力の実質的形態となり、支配権力の真の意図が述べられ、プロレタリアとのもっと小規模なやりとりの精神が露わとなっており、したがって各個人にもその責めが明確に負わされるのだ。そしてこの施策はブルジョワジーの何か一部だけから生じたものではなく、この階級全体の承認を享受しているということは 1844 年の議会審議を見ればわかる。自由党は新救貧法を施行した。保守党はピール首相を党首に頂き、新救貧法を擁護する。そして 1844 年の救貧法改正法案では、どうでもいいほんの細部をいじっただけだ。自由党の多数派がこの法案を支持し、保守党の多数派がそれを承認し、「貴族たち」は毎回これに同意した。このように、国家と社会からのプロレタリアの排除は公然と述べられ、このようにプロレタリアートは人間ではないと公式に宣言され、人間扱いしなくてよいとされたわけだ。大英帝国のプロレタリアが自分たちの人権を再び掌握するのは、その当人たちに任せようではないか。<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> 誤解とそれに伴う反論を避けるため言っておくと、ぼくはブルジョワジーについて階級として語っており、個人について語った事実はすべて、単にある階級の考え方やふるまいに関する証拠として挙げたもの

これが 21 ヶ月にわたり、ぼくが自分自身の目という媒体を通じ、さらには公式報告やその他信頼できる報告に基づいて知るに至った、イギリスの労働階級の状態だ。そしてこの状態を、これまでのページの中であまりにしばしば行ったように、まったく耐えがたいものだと言ったぼくは、決して孤立してはいない。すでに 1833 年の時点で、ギヤスケルはもはや平和的な解決には絶望しており、革命が起こらざるを得ないだろうと宣言している。1838 年にカーライルは、チャーティズムや労働者の革命活動がかれらの暮らす悲惨から生じていると説明し、唯一不思議なのは労働者たちが、自由党ブルジョワジーに空約束ばかり喰わされてきたこの空疎なもてなしに、だまって八年もの長きにわたり我慢してきたということだと述べている。そして 1844 年には、

「もしヨーロッパ、少なくともイングランドがこの耐えがたい状況をこのまま続けるつもりなら」

労働者の組織化作業がすぐにも始まるだろうと述べている。さらに「ヨーロッパ初のジャーナル」を自称する『タイムズ』が 1844 年 6 月に述べたところでは、

「大邸宅に戦争を、小屋には平和を　これがこの地に今後響きかねない恐怖の警戒標語となる。金持ちよ気をつけるがいい！」

一方、イングランドのブルジョワジーにどんな可能性があるかをもう一度振り返って見よう。最悪の場合、外国の製造業者、特にアメリカの製造業者は、数年後に必ず実現する穀物法廃止後ですらイングランドの競争に耐えられるかもしれない。ドイツの製造業者はいまや大いに努力しているし、アメリカの製造業者も急速な進歩を遂げている。アメリカはその無尽蔵の資源を持ち、果てしない石炭と鉄鉱石の鉱山を持ち、底知れぬ水力や航行可能な川を持ち、さらに何よりもエネルギーで活発な人口を持つ。この人口に比べたらイングランド人などは鈍重なのろまでしかない　アメリカは十年足らずで粗い綿製品ではイングランドとすでに競合する製造業を造り上げ、北米と南米の市場からイングランドを排除し、中国ではイングランドを相手に一步も退かない活躍を見せている。製造業で独占力を持つに適した国があるなら、それはアメリカだ。これによりイングランドの製造業が圧倒されたら　そして今後 20 年で、いまの条件が変わらぬままならこれは避けがたいことだ　プロレタリアートの大半は、永遠に余計な者とならざるを得ず、飢え死にするか反抗するかを選択しかない。イングランドのブルジョワジーはこうした条件を考えているのだろうか？　まさか。お気に入りの経済学者マカロックはその学生たちの机から

---

にすぎない。だからぼくはブルジョワジーの多様な区分、分類や党派の区別については触れていない。それらは単に歴史的、理論的に重要なものでしかない。そして同じ理由で、名誉ある例外として自分を証明して見せた数少ないブルジョワジーの一員たちも、ここでは軽くしか触れられない。それは一方では目に見える急進派たちでありほとんどがチャーティストだが、下院の議員たち数名であったり、アシュトンの製造業者ヒンドリーやドモードン（ランカシャー）のフィールデンなどだったりする。また一方では慈善に熱心なトーリー党員たちで、最近では自ら「若きイングランド」を名乗るようになった人々がいる。ここには議会の議員であるディズレーリ、ボースウィック、フェランド、ジョン・マナーズ卿などで、アシュレー卿もかれらを支持している。「若きイングランド」の希望は、古き「楽しきイングランド」復古であり、そのすばらしい特長とロマンチックな封建主義もあわせて復活させようというMのだ。この目的はもちろん実現不可能だし馬鹿げており、あらゆる歴史的発展に対する嘲笑だ。だがその善意、既存の物事の状態や広まった偏見に抵抗する勇氣、現状の劣悪さを認識する能力はいずれにしてもある程度の価値を持つ。まったく孤立しているのは、半分ドイツ人のイングランド人であるトマス・カーライルで、もともとはトーリー党だったが、これまで名を挙げた全員の先を行っている。かれは社会の乱れについて、他のどんなイングランドのブルジョワよりも深く描き出し、労働の組織化を求めているのだ。

このように教えている。アメリカのように若い国は、まともに人が住んでもおらず、製造業を成功裏に実施して、イングランドのような古い製造業国と太刀打ちするなど夢見ることさえできない、と。もしアメリカ人の気が狂ってそんなことを試みようものなら、損をするばかりとなる。かれらとしては農業に専念し、その全国を開墾し終えた暁には、ひょっとして儲かる形で製造業を実施する時期もやってくるかもしれない、と。賢明なる経済学者はかく語り、そしてブルジョワジー全員がこれを崇拜する傍ら、アメリカ人たちは一つ、また一つと市場を制圧し、さらに最近では果敢なアメリカ人投機家がアメリカの綿製品をイングランドに輸出さえて、それが再輸出のために販売されている！

だが製造業におけるイングランドの独占が維持されたでしょう。その工場が果てしなく増え続けたら、必然的な結果はどんなものだろうか？ 産業の拡大とプロレタリアートの増殖に伴い商業危機は続き、ますます激しいものとなり、もっとひどくなる。中流階級の下部がだんだん荒廃し、資本が少数の者たちの手に急速に集中する歩みと共に、プロレタリアートは幾何級数的に増える。そしてプロレタリアートは間もなく、少数の億万長者を除き全国民を包含する。だがこの発展の過程で、プロレタリアートが既存権力の打倒をいかに簡単に実現できるか認識する時点がやってくる、それに続いて革命が起こるのだ。

だがこうした想定条件のどれも、実際に起こるとは期待できないかもしれない。プロレタリアートの独立発展をもたらす最も強力なレバーである商業危機が、おそらくは外国からの競争と、中流階級の下部の荒廃深化と協調して進むことで、プロセスを短縮するだろう。たぶん人々は危機をあと一回以上は我慢しないと思うのだ。次の危機は1846年か1847年にやってくるが、おそらくはそれが穀物法の廃止と憲章の施行をもたらすはずだ。憲章がどのような革命運動を引き起こすかは、その時にならないとわからない。だがその次にやってくる危機は、それ以前の危機のアナロジーに従えば、1852年か1853年に起こるはずだが、穀物法の廃止で遅れるかもしれない、外国からの競争など他の影響ではやまるかもしれない。だがその危機がやってくる頃には、イングランドの人々は資本家たちに収奪されたり、資本家たちが人々の奉仕を必要としないときには飢えるままにされるのにうんざりしているはずだ。もしその頃までにイングランドのブルジョワジーが立ち止まって考えないなら、そしてどう見ても、まちががなくそんなことはしそうにない。これまでに知られているどんなものも比べものにならないほどの革命が起こるだろう。プロレタリアたちは、絶望に追いやられて、スティーブンスが唱えたたいまつを手にとることだろう。人々の復讐が怒りと共にくだされ、それは1795年の怒りからさえ想像もつかないものとなる。貧困者の金持ちに対する戦争は、これまでに行われた中で最も血みどろのものとなる。ブルジョワジーの一部がプロレタリアートと連帯したり、ブルジョワジー全般が改革したりしても、事態は改善しない。さらにブルジョワジーの改心など生ぬるい「中道」までしか進まない。もっと決然として労働者と連帯する者たちは、しょせん新しいジロンド党を作るだけで、強力な発展の過程で屈服してしまう。階級全体の偏見は、古い上着のように脇に押しやるわけにはいかないのだ。そして安定した偏狭で利己的なイングランドのブルジョワジーの偏見となれば、それがなおさら期待できない。こうした推測はすべて、きわめて確実性をもって行える。一部は歴史的発展に関する否定し難い事実、一部は人間の性質に内在する否定し難い事実を前提として導かれる結論だからだ。イングランドほど予言が簡単な場所はない。ここでは社会の構成要素すべてが明確に定義されて鋭利に分離されている。革命は必ずやってくる。すでに平和的な解決をもたらすには手遅れだ。だがそれを、ここまでのページの中で予言したものよりも穏やかなものにするとは

できる。しかしこれは、ブルジョワジーの発展よりは、プロレタリアートの発展のほうに大きく依存する。プロレタリアートが社会主義的、共産主義的な要素を吸収するのに比例して、革命の流血や復讐や残虐さは減る。共産主義は原理的に、ブルジョワジーとプロレタリアートの隔たりの上に立つものであり、それが現在にとって持つ歴史的な意義だけを認識するが、それが将来にとっての正当化を行うものとは考えない。むしろこの亀裂の橋渡しをして、あらゆる階級間の敵対をなくしたいと願っている。したがって共産主義は、闘争が存在する限りにおいて、プロレタリアートがその抑圧者に対して激怒するのを必然的なことであり正当なものとして認識する。そして始まったばかりの労働運動のために最も重要なレバーとして認識する。だがそれはこの激怒を超えて進む。というのも共産主義は人類全体の問題であり労働者だけのものではないからだ。さらに、共産主義者はだれであれ、自分の復讐をある個人に対して行いたいと思ったり、一般に既存の条件の下で個別ブルジョワが現在採っている行動以外のものを行えるとは思っていないのだ。イングランドの社会主義、つまり共産主義は、個人の無責任性に直接依存している。したがって、イングランドの労働者が共産主義的な思想を吸収すれば、それだけ現在の辛辣な感情は余計なものとなる。そうした辛辣さが現在ほど暴力的な形で続いても、何一つ実現できない。そしてそれだけブルジョワジーに対する労働者の行動は野蛮な残酷さを減らす。実際、もしプロレタリアート全体を戦争勃発前に共産主義的にできるのであれば、結果はきわめて平和的なものとなるだろう。だがこれはもはや不可能であり、それが可能な時期はすでに過ぎ去ってしまった。一方で、貧困者の金持ちに対する公然とした宣戦布告の勃発前に、プロレタリアートの間に社会的問題の知的理解が十分に生まれ、共産党が実際の出来事の助けを通じて革命の暴虐な要素を制圧し、「第九テルミドール」を防止できるだろうとぼくは思う。いずれにしても、フランスの経験は無駄にはならず、チャーティスト指導者のほとんどはさらにすでに共産黨員でもある。そして共産主義はブルジョワジーとプロレタリアートの隔たりの上に立つものであるため、ブルジョワジーの中でもましな人々（だがこれは嘆かわしいほど少数であり、新しく生まれる世代の中でしか候補者は見つけられない）は、純粋にプロレタリアのチャーティズムよりは共産主義と連帯するほうが容易だろう。

こうした結論がこの著作の中で十分に確立できていないにしても、これがイングランドの歴史的発展における必然的な結果なのだと実証する機会には他にもあるだろう。だがぼくとしてもこれだけは断言したい。貧乏人の金持ちに対する戦争は、いまは細かく間接的な形で戦われているが、これが直接的で普遍的なものになるのだ、と。もはや平和的解決には遅すぎる、階級同士はますます隔たりもっと鋭利に別れ、抵抗精神が労働者を貫き、辛辣さは強化され、ゲリラ的な紛争はもっと集約されて重要な戦いとなり、やがてほんのわずかな刺激だけで、雪崩が生じるのだ。そのとき、地には戦争の叫びが轟きわたるだろう。「大邸宅に戦争を、小屋には平和を！」　だがその時には、金持ちが用心するには最早遅すぎるのだ。

## 後記：イングランドにおける結果

原文：<http://bit.ly/1QOKNJF>

上記の内容に関するぼくの本では、個別論点について事実に基づく証明を提出できなかった。本をあまりに分厚くて咀嚼不能なものにしないため、公式文書からの引用や、中立的な著者やぼくが利害を攻撃している党の著作からの引用で確認できた場合には、自分の論点が十分に証明されたものと考えねばならなかった。これは、個別の生活条件を描写するにあたり、自分個人の観察に基づいて語れない場合にぼく自身を矛盾から守るには十分だった。でも読者に対して議論の余地のない確信を生み出すには十分ではなかった。これは衝撃的で議論の余地のない事実を提示することでしか実現できないし、特に果てしない「先人たちの叡智」により懐疑的であることを義務づけられている時代にあっては、単なる理詰め議論だけでは、それがどんなに優れた権威によるものであれ決して生み出せない。何よりも、それが重要な影響を持つ問題であり、集約することで原理の問題につながる事実である場合、描写されるべきなのが、個別の小さな人々の集まりの状態ではなく、階級全体が相互にどんな立場にあるのかということである場合、事実は絶対的に不可欠となる。いま挙げたような理由から、ぼくはあの本の中のすべての事例について、こうした事実を提示はできなかった。ここではこの避けがたい欠陥を正し、そしてときどき手元に得られた情報源で見つけた事実を提示しよう。同時に、ぼくの記述が今日でもまだ正しいことを実証するため、使う事実は去年ぼくがイングランドを離れた後で起きたものに限ろう。そしてあの本の刊行後にぼくが知ったものだけに限ろう。

ぼくの本の読者は、ぼくが主にブルジョワジーとプロレタリアートが相互にどんな関係にあるかを記述し、この二つの階級の間で闘争が必然であることを記述することに主眼を置いていたのをご記憶だろう。そして、プロレタリアートがこの戦いを仕掛けるのがいかに完全に正当化されるものかを証明し、イングランドのブルジョワジーによるご立派なセリフを、その醜悪な行いによって反駁するのに、ことさら重点を置いていたこともご記憶だろう。最初のページから最後まで、ぼくはイングランドのブルジョワジーに対する有罪判決状を書いていたのだ。ここではさらに、いくつか選りすぐりの証拠を提供しよう。とはいえ、ぼくはすでにこうしたイングランドのブルジョワジーに対して十分に激昂して見せたから、ここでかれらについて改めて頭に血を上らせるつもりはない。だからできる限り落ち着いて記述しようと思う。

これからお目にかかる最初のおよき市民にして立派な家長は旧友であり、実は二人いる。1843年までに、ポーリング氏とヘンフリー氏は、すでに数え切れないほどの衝突を自分らの労働者と引き起こしていた。この労働者たちは、仕事が増えればその分だけ賃金も増えるべきだという要求について、最高の議論を持ってしても説得されるに至らずに、仕事

を止めたのだった。ポーリングとヘンフリーは重要な建築業者であり、多くのレンガづくり工や大工などを雇っていたので、他の労働者たちをつれてきた。これが紛争につながり、最終的にはポーリング&ヘンフリー社のレンガ乾燥場で中や棍棒による血みどろの戦いにまで至った。その挙げ句に半ダースもの労働者がヴァン・ディーメンの土地に輸送されるに至ったのだった。このすべてはぼくの本の中で詳しく述べている。だがポーリング氏とヘンフリー氏は毎年労働者に対して何かを試してみないと、心穏やかではいられないらしい。そこで1844年10月にまたもや挑発を始めた。今回、この慈善精神に富んだ建築業者が熱心にまつりあげたのは、大工たちだった。はるか昔から、マンチェスターとその周辺地域の大工たちの間には、聖燭祭（訳注：2月2日）から11月17日まで「灯りをつけない」という週間があった。つまり日の長い時期には朝6時から夕方6時まで働き、日の短い時期には日の出と同時に働いて、暗くなり始めたら仕事をやめる、という週間だ。そして11月17日以降は灯りがつけられ、仕事はフルタイムで行われる。ポーリング&ヘンフリー社は、この「野蛮な」風習に昔からうんざりしていたが、ガス灯の助けを借りてこの「暗黒時代」の遺物に終止符を打つことにした。そしてある晩、六時前に何も見えないほど暗くなり、大工たちが道具を片づけて上着を取りに行くと、職長がガスを点けて6時まで働かねばならないと告げた。大工たちはこれに納得せず、大工仲間の総会を招集した。労働者の一部は、集会を招集した直接の責任は自分たちにはなく、職能組合の委員会が招集したのだと述べた。これに対しポーリング氏は、職能組合なんぞ屁とも思わぬが、それでも提案をしたいと述べた。もし灯りを点けるのに合意してくれば、そのかわりに土曜は三時間の操短を認め、そして—実に鷹揚な御仁ではありませぬか—毎日追加で15分働くことを認め、それについては追加の賃金を出そうというのだ！ 一方の労働者のほうもそれに対し、他の工房が灯りを点け始めたら30分長く働かなくてはならないという。労働者たちはこの提案を検討して計算し、この提案の結果としてポーリング氏とヘンフリー氏は日の短い時期には丸一時間余計に作業時間を手に入れ、各労働者は全部で92時間、つまり9と1/4日も追加に働いて一文の追加の支払いもなく、同社に雇われた全労働者を考慮すると、上述の紳士二人は冬の時期には400ポンド（2100ターレル）も賃金の節約ができるという結論に達した。だから労働者たちは集会を開き、仲間の労働者に対して、どこかの会社がこれを認めさせるのに成功したら、その他すべての企業が後に続いて、結果として賃金の全般的な間接削減が生じ、この地区の大工たち全体として年に四千ポンドが奪われることになることを説明した。そして、翌月曜日にはポーリング&ヘンフリー社に雇われた全大工は三ヶ月前の辞職届けを提出し、もし雇用者二人が腹を変えなければこの通知の起源がきたときには働くのを止めようと決まった。労働組合のほうは、操業停止の場合には一般徴収金によりかれらを支えると約束した。

10月14日月曜日、労働者たちは辞職届けを提出したが、するとますます辞めてもらった構わないと言われたので、もちろんかれらもそれに応じた。その日の夕方に、あらゆる建設労働者の集会がまた開かれ、ここでは建設労働者のあらゆる区分が、スト労働者に対する支持を表明したのだった。続く水曜日と木曜日、ポーリング&ヘンフリー社に雇われた地区のすべての大工がやはり仕事を止め、こうしてストライキが全面的に開始された。

建設業界の雇用主たちは、いきなり完全に仕事が止まってしまったので、即座に人をあらゆる方向に使わし、果てはスコットランドにまで人を送って、労働者を雇おうとした。この地区の中では、かれらのために働こうとする大工は一人としていなかったからだ。数日のうちに、確かにスタッフオードシャーから13人がやってきはした。だがスト実施者

たちがかれらと話をし、紛争について説明し、自分たちが仕事を止めている理由を述べると、新しくやってきた者数人は仕事を続けるのを拒否した。だが主人どもにはこれに対処する有効な手段を持っていた。反抗する連中と、かれらを惑わせた連中とをいっしょに、治安判事ダニエル・モード殿の前に引き出したのだ。だがその裁判を眺める前に、まずはダニエル・モード殿の武徳に適切な光を当てねばならない。

ダニエル・モード殿は、マンチェスターにおける「有給裁判官」あるいは報酬つき治安判事だ。イングランドの裁判官は通常、金持ちのブルジョワか地主で、しばしば司祭でもあり、省によって任命される。だがこうした木っ端役人どもは法律のことなど何もわかっていないので、とんでもなく香ばしいヘマをやらかし、ブルジョワジーを嘲笑的にしたてて害をなす。というのも労働者に直面した場合ですら、有能な弁護士がその労働者を弁護している場合にはしばしば混乱状態に置かれてしまうからであり、このため判決を下すにあたって何らかの法的な形式を無視するために控訴されてしまうか、まちがった誘導を受けて無罪判決を出してしまうのだ。さらに大都市や工業地域の金持ち製造業者たちは、法廷で何日も退屈な日々を送るような暇は持ち合わせておらず、代理人を送り込むほうを好む。結果としてこうした町では、その町自体が率先して、有給裁判官は通常は法律に詳しい人物が指名され、この人物はイングランド法の奇妙な部分や細かい区別をすべて活用、でき、必要ならそれを補い改善してブルジョワジーの利益を確保する。こうした面におけるかれらの努力は以下の例ではっきりわかる。

ダニエル・モード殿は、ホイッグ政権下で大量に任命された、こうした自由な治安判事の一人だ。マンチェスター郡法廷の内外の領域におけるこの人物の英雄的な活動として、二つだけ挙げておこう。1842年に製造業者たちが南ランカシャーの労働者を蜂起させるのに成功し、その結果、8月諸島にスタリーブリッジとアシュトンで蜂起が生じたとき、労働者一万人ほどがチャーティストのリチャード・ピリングに率いられて、8月9日にそこからマンチェスターまで行進したのだった。その狙いは以下の通り：

「取引所で主人たちと会い、マンチェスターの市場がどんな具合か見るため」

一行が町の周縁部にたどりつくと、そこに待ち受けていたのはダニエル・モード殿に加え、錚々たる警察の全勢力、騎馬兵分遣隊、ライフル兵中隊だった。だがこれは、あくまで体面上のものにすぎなかった。というのも製造業者や自由派にとって、こうした蜂起が広がって穀物法廃止を余儀なくさせるのはまったく利益にかなうことだったからだ。この点でダニエル・モード殿はご立派なご同輩方とまったく合意しており、そして労働者とも折り合いをつけて、「平和を維持し」事前に決めたルートに従うという約束のもとで、町に入るのを認めた。かれは、蜂起者たちがそんな約束を守らないのは百も承知だったし、また守ってほしいとはつゆほども思わなかった。この面倒な蜂起すべての芽をを、ほとんど労せずしてつんでしまうこともでいたのだが、もしそうしていたなら、反穀物法のご友人たちの利益に沿った動きにはならないばかりか、ロバート・ピール卿の利益にもかなわないことになる。そこでかれは兵を退かせ、労働者が町に入るのを許し、労働者たちは即座にあらゆる工場をその場で停止させてしまった。だが蜂起が完全にリベラル派ブルジョワジーに向けられたもので、「ろくでもない穀物法」など完全に無視していることがわかったとたん、ダニエル・モード殿は再び司法当局の立場に立って、労働者たちを一ダース単位で逮捕させ、「平和を破った」かどで監獄送りとしたのだった。つまりダニエル・モード殿がまずは約束違反を引き起こして、その後それを処罰したというわけ

だ。このマンチェスターの名裁判官ソロモンとも言うべき人物のキャリアにおけるもう一つの特長は、以下のような点でうかがえる。反穀物法連盟がマンチェスターで何度かおっぴらにぶちのめされてから、この連盟は秘密会合を持つようになり、そこへの参加は招待のみとなった。でもそこでの決定や請願は、公開集会でのものと同様に一般に提示され、マンチェスターの「公的世論」の表れだとされた。リベラル製造業者のこうしたインチキな放言に終止符を打つべく、チャーティスト三、四人、うち一人はぼくの畏友ジェイムズ・リーチだが、それがこうした集会への招待状を確保した。コブデン氏が立ち上がってしゃべろうとすると、ジェイムズ・リーチは議長に、これが公開集会かどうか尋ねた。それに答えるかわりに、議長は警察を呼んで、有無を言わず逮捕させたのだった。二人目のチャーティストがこの質問を繰り返し、次に三人目、次に四人目が繰り返し、その全員が一人また一人と、入り口に大挙して待ち構えていた「ブルーボルトども」(警察)をけしかけられ、市役所へと連行されたのだった。一行は翌朝、ダニエル・モード殿の前に引き出されたが、モード殿はすでにすべてについて十分に情報を得ていた。そして一行は、集会で騒動を引き起こしたとして有罪となり、ほとんど一言も発言を許されず、そしてダニエル・モード殿の荘厳なる演説を聴かされるはめになったが、曰くモード殿はかれらがだれか知っており、政治的な悪漢どもで、集会で大騒ぎしてまっとうな遵法市民の邪魔をする以外に何もしない連中であり、そんなふるまいには終止符を打たねばならないのだとのこと。したがって、そしてダニエル・モード殿は、本当の刑罰をかれらに科することはできないのを十分承知していた。したがって、今回は罰金刑を与えることにする、と述べた。

ポーリング&ヘンフリー社の反抗的な労働者たちが引き出されたのは、まさにいまそのブルジョワ的美徳を説明した、このダニエル・モード殿その人の御前なのだった。だが労働者たちは用心のため、弁護士を連れてきていた。まず俎上に上がったのは、スタッフォードシャーから着いたばかりだが他の人々が自衛のために働くのをやめた場所で働き続けるのを拒否した人物だった。ポーリング氏とヘンフリー氏は、スタッフォードシャーの労働者たちが署名した契約書を持っていて、これを裁判官に提出した\*2。被告弁護人がここで、この同意書が署名されたのは日曜日であり、したがって無効であると異議をさしはさんだ。ダニエル・モード殿は大いなる尊厳を持って、日曜日に行われた「事業上の取引」は有効ではないことを認めたが、しかしポーリング氏とヘンフリー氏がこの文書を「事業上の取引」と「受け止めていた」とは信じ難いとのたまった！ したがって、労働者のほうにはその文書を「事業上の取引」だと「受け止めていた」かどうか尋ねる手間すらろくにかけず、モード殿は哀れな労働者に対し、働き続けるか、あるいは三ヶ月にわたり踏み車を楽しむかどちらかしかないと告げたのだった。ああマンチェスターのソロモン殿よ！

この件が処理されると、ポーリング氏とヘンフリー氏は二人目の被告人を引き出してきた。名前はサーモンで、同社で仕事を止めた労働者の中では最年長の一人だった。かれの罪状は、若手労働者たちを脅してストに参加させたというものだった。目撃者、後出の一人、は、サーモンが彼の腕を取って話しかけたと証言した。ダニエル・モード殿

\*2 この契約には以下の条文が含まれていた。労働者たちはポーリング&ヘンフリー社のために六ヶ月にわたって働き、二人が与える賃金に満足することを誓う、と。だがポーリング&ヘンフリー社のほうは、その労働者を六ヶ月雇い続ける必要はなく、一週間前に通知すればいつでもクビにできた。そしてポーリング&ヘンフリー社はスタッフォードシャーからマンチェスターまでの旅費は支払うが、それは毎週2シリング(20銀グロッシェン)を賃金から差し引くことで回収されるものとなっていた。なんともまあ実にすばらしい契約ではないか？ エンゲルス注

は、被告が脅しをかけたり殴ったりはしなかったかと尋ねた。そんなことはないと言撃者は述べた。ダニエル・モード殿は、自分の中立性を実証する機会を見つけたことで大喜びした。ちょうどブルジョワジーへの自分の責務を果たした後だったし。そしてこの件においては被告を有罪とすべき理由はまったくないと宣言した。被告は、恫喝の言葉や行為に堕しない限り、公道を好きに歩いて他の人々に話しかける権利を十分に持っている。したがって無罪を宣告する、と。だがポーリング氏とヘンフリー氏としては、この裁判の費用を支払うことで、このサーモン氏を一夜限りとはいえ監獄送りにするという喜びだけは少なくとも得られたのだった。そしてこれだけでも結局は大したものだ。それにサーモンの幸せも長続きはしなかった。というのも10月21日木曜日に方面されたのに、11月5日火曜日にはまたもやダニエル・モード殿の前に立たされ、ポーリング氏とヘンフリー氏を路上で攻撃したという罪状をかけられたのだった。サーモンが無罪となったのと同じ木曜日、大量のスコットランド人がマンチェスターに到着した。争議がすでに終わり、ポーリング&ヘンフリー社が大規模な納入契約に対応するだけの労働者を地区内で見つけられずにいるという、偽の主張に釣られてやってきた者たちだった。金曜日には、マンチェスターでしばらく働いていたスコットランド人の指物師たちが、作業停止の原因を同郷者たちに説明しにやってきた。かれらの同僚労働者たち。400人ほど。がスコットランド人たちのいる宿のまわりに集まってきた。だがこうしたスコットランド人は、玄関に職長が警備をしている状態で、囚人のように閉じ込められていた。しばらくすると、ポーリング氏とヘンフリー氏がやってきて、新しい労働者を職場に案内しようとした。この集団が出て来ると、外に集まった一団はスコットランド人たちに向かい、マンチェスターの業界ルールに反した仕事を引き受けたりせず、同郷人の顔をつぶすような真似をしないでくれと呼びかけた。実はスコットランド人のうち二人がちょっと遅れていて、ポーリング氏が自ら駆け戻って二人を前へと引きずっていった。群集は手出しをせず、単一行があまりすばやく動けないように阻止して、スコットランド人に対して他人の話に介入するなと呼びかけ、家に帰れなどと告げた。ヘンフリー氏はついにキレた。群集の中にかつての自社の労働者を見かけ、その中にはサーモンもいたので、この騒動に終止符を打つべくヘンフリー氏はサーモンの腕をつかんだ。ポーリング氏が反対側の腕をつかみ、二人とも全力で叫んで警察を呼んだ。警察官がやってきて、この人物に対してどんな罪状を申し立てるのかと尋ねると、この共同経営者二人は大いに恥をかいだ！　だが二人は「われわれはこの人物を知っている」と述べた。警官はこれに対して「おや、ではここはもうたくさん、いまは離してやりましょう」と述べた。ポーリング氏とヘンフリー氏は、サーモンに対して何とか罪状をでっちあげようとして、数日にわたりこの件を検討したあげく、やっと弁護士の入れ知恵を受けて、さっき述べた罪状を訴え出たのだった。サーモン糾弾の目撃者すべてが証言を終えると、「鉱夫たちの総代理人」W. P. ロバーツ、あらゆる裁判官の恐怖的が被告人のかわりに立ち上がり、サーモンに対して何一つ罪状が述べられていないので、原告側の証人を呼んでくる必要があるのかと尋ねた。ダニエル・モード殿は、ロバーツに自らの証人を尋問させたが、ヘンフリー氏が腕をつかむまでサーモンは落ち着いて行動していたとの証言だった。肯定否定の証言と尋問が終わると、ダニエル・モード殿は土曜日に判決を下すと述べた。明らかに「総代理人」ロバーツがいたことで、ひとたび口を開く前に、二度考えたほうがいいと思ったのだ。

土曜日に、ポーリング氏とヘンフリー氏はかつての労働者三人。サーモン、スコット、メラー。に対して、追加で陰謀と恫喝の刑事起訴を追加で持ち出してきた。これに

より、二人は職能労組に対する致命的な一撃を加え、そして恐るべきロバーツに対する保険として、ロンドンから高名な弁護士の本・モンク氏を呼び寄せた。最初の証人としてモンク氏は、新しく雇われたスコットランド人の一人ギブソンを呼んだ。ギブソンはこれに先立つ火曜日にもサーモンに対する原告側証人となっていた。その証言では11月1日金曜日、かれと仲間が宿から出て来ると、群集に取り囲まれて小突き回され、被告三人がその群集の中にいた、とのことだった。こんどはロバーツがこの証人の反対尋問を行った。別の労働者をつれてきて、ギブソンがこの労働者に対し、この間の火曜日に証言したときには自分が宣誓を行っているとは知らず、法廷で何を言ったりやったりすべきなのかわかっていないのだと述べたというのは本当かどうか尋ねた。ギブソンは、その人物を知らないと言った。前の晩には二人の男といっしょだったが、暗かったのでこの人物がその一人かはわからないと言った。そして、自分がそういう発言をしたかもしれない、スコットランドの宣誓の形式はイングランドのものとはちがうから、という。はっきり覚えていないそうだ。するとモンク氏が立ち上がり、ロバーツ氏はそんな質問をする権利はないと言った。これに対してロバーツ氏は、こうした異論というのはまちがった主張を弁護しているときにはしばしば聞かれるものではあるが、自分にはどんな質問でも行う権利があり、証人の生まれた場所のみならずその後毎日どこに滞在し、毎日何を食べていたかについて質問できるのだと応えた。ダニエル・モード殿は、ロバーツ氏にその権利があることを認めさせた。なるべく論点をずらさないようにという父親めいた助言も与えた。そしてロバーツ氏は証人から、ポーリング&ヘンフリー社で本当に働きはじめたのは、この起訴の根拠となった事件が起きた翌日、つまり11月2日からでしかなかったという証言を得ると、その証人を下がらせた。それからヘンフリー氏が自ら証人として登場し、ギブソンが事件について述べた内容を繰り返した。これに対しロバーツ氏はこう尋ねた：あなたは自分の競合相手に対し不公正な優位性を得ようとしてはいませんか？ これに対してモンク氏は再び異議を唱えた。

仕方ない、もっとわかりやすく述べましょうか、とロバーツ氏は述べた。ヘンフリーさん、マンチェスターの大工たちの労働時間は、あるルールにより決まっていることはご存じですか？

ヘンフリー氏：私はそんなルールとは何の関係もない。私は自分独自のルールを作り権利がある。

ロバーツ氏：確かにそうですね。ヘンフリーさん、宣誓下でお訪ねしますが、あなたは他の建設業者や主任大工たちにくらべて労働者たちに長時間労働を要求してはおりませんか？

ヘンフリー氏：している。

ロバーツ氏：だいたい何時間くらい長いのでしょうか？

ヘンフリー氏は正確な時間を把握しておらず、メモ帳を取り出して計算を始めた。

ダニエル・モード殿：計算にあまり時間をかけなくてよしい、おおまかにどのくらいかだけ言いなさい。

ヘンフリー氏：ええと、灯りが通常は点される時期には、朝に1時間と晩に1時間、そして通常は灯りをつけなくなる時期から六ヶ月後も同じです。

ダニエル・モード殿：すると、灯りがつけられるまであなたの労働者は追加で72時間も働かなければならず、灯りが消えたあとも72時間、つまり12週間で144時間ということですか？

ヘンフリー氏：そうです。

この発言は、世間により大なる義憤をもって迎えられた。モンク氏はヘンフリー氏を怒りをこめて見つめ、ヘンフリー氏は混乱して自分の弁護人に目をやり、ポーリング氏はヘンフリー氏の上着のすそを引っ張った　だがすでに手遅れだった。ダニエル・モード殿は、明らかに自分がその日もまた中立役を演じなくてはならないことを見て取り、いまの承認を耳にしてそれを公開したのだった。

さらにつまらない証人が二人証言を行ってから、モンク氏は提訴者側の自分の証拠はこれで終わると述べた。

するとダニエル・モード殿は、原告は被告に対して刑事捜査を行うべき理由を何も述べて折らず、11月2日以前に雇用契約や委託契約を行ったという証明がまったくないため、脅かされたスコットランド人たちがポーリング&ヘンフリー社により11月1日以前に雇われたということも示せないのに対し、今回の糾弾は11月1日に行われたと述べた。したがって、この日の時点では、これらの者たちはポーリング&ヘンフリー社にはまだ雇われてはならず、したがって被告はそれらの者たちをありとあらゆる合法的な手法により、ポーリング&ヘンフリー社のために働かないよう阻止する権利を完全に持っているとのことだった。これに対し、モンク氏は被告たちがスコットランドを離れて蒸気船に乗った瞬間から雇用されていたのだと述べた。ダニエル・モード殿は、そうした雇用契約が交わされたという主張は確かに行われたものの、その文書が提出されていないと述べた。モンク氏は、その文書はスコットランドにあると述べ、モード氏に対し、その文書を法廷に提出できるまで本件を保留していただきたいと要求した。ここでロバーツ氏が割り込んでこう述べた。これは自分から見て目新しい主張である、と。提訴者側の証拠は完結したと宣言されたのに、いまや提訴者は新しい証拠を持ち出すために審理を保留するよう要求している、と。そして審理を継続するよう固執した。ダニエル・モード殿は、いずれの主張も余計なものである、というのも法廷の前に裏付けのある罪科が示されていないから、と述べた　そして被告はこれで放免となった。

一方、労働者たちもやはり手をこまねいていたわけではない。毎週のようにかれらは大工広間や社会主義者広間で集会を開き、他の職能労働組合に支援を要請して、大量に支援を与えられ、ポーリング&ヘンフリー社の行いをあらゆる場所に報せようと休まずに活動し、最後に各方面に代表団を送り、ポーリング&ヘンフリー社が労働者を雇用しているあらゆる地域の仲間の職人たちに対し、そうした雇用の理由を説明して、かれらがこの会社のために働くのを阻止しようとした。スト開始後ほんの数週間で、こうした代表者が7人派遣され、国内のあらゆる大都市の街角には、失業大工に対してポーリング&ヘンフリー社について警告する張り紙が掲示された。11月9日に、代表者の一部が戻ってきて自分たちの任務について報告した。その一人はジョンソンなる者で、ポーリング&ヘンフリー社の代理人たちがエジンバラで30人を雇用したものの、自分がこの事件についての真相を告げると、そんな状況でマンチェスターに赴くくらいなら餓死したほうがましだと決めたそうだ。第二の代表はリバプールに赴き、到着する蒸気船を監視していたが、だれ一人として到着しなかったのも、何もすることがないことになった。第三の人物はチェシャーに出かけたが、どこにいっても何もすることがないのを知った。というのも労働者新聞『ノーザンスター』が事態の新装を広く遠くにまで広めており、マンチェスターに行きたいという人々の欲望すべてに終止符を打ったからだ。実際、マックスフィールドというある待ちでは、大工たちはすでに指物師支援のための募金を行い、必要ならばさらに一人

1 シリングずつ貢献すると約束した。他の場所でも、地元の職人たちがこうした募金を始めるよう刺激できたのだった。

ポーリング氏とヘンフリー氏に、労働者との合意に達する機会を今一度与えるべき、建設業で雇われた職人が全員、11月18日月曜日に大工広間に集まり、この紳士二人に演説を提示する代表者を選出して、旗とエンブレムを掲げてポーリング&ヘンフリー社の敷地へと行進した。最初はその代表者、続いてストライキ委員会、それから大工、レンガづくりとレンガ焼き初期人、日雇い労働者、レンガ積み職人、ノコ引き職人、ガラス屋、漆喰職人、塗装工、a band、石工、家具職人が続いた。「総代理人」ロバーツが滞在しているホテルの横を通り、通りすがりに大声で完成を挙げてかれを讃えた。現場に着くと、代表団はその行進を離脱したが、一行はスティーブソン広場まで行進し、公開集会を開こうとしていた。代表団を迎えたのは警察で、それ以上の行進を許す前に、名前と住所を尋ねた。一行が事務所に入ると、共同経営者のシャープスとポーリングは、単なる恫喝のためにまとめられた労働者の群集から、紙に記した演説など受け取らないと告げた。代表団は、自分たちの目的はそんなことではないと述べた。というのも行列は止まってもいいので、そのまま独自の方向に向かったのではないか。労働者五千人が行進を続ける間に、代表団はやっと受けいれられ、ある部屋に通されたが、そこには警察署長、警官と新聞記者三人がいた。ポーリング&ヘンフリー社の共同経営者であるシャープス氏は議長席にすわり、代表団に対して口に気をつけるように、発言はすべてしっかり記録され、状況次第では法廷でかれらに不利な材料として使われると述べた。そしてこんどは代表団に対し、何が不満なのか等と尋ね、そしてかれらとしてはマンチェスターでの慣行にしたがい労働者たちに仕事を与えたいと述べた。代表団は、スタフォードシャーとスコットランドで集めてきた男たちはマンチェスターで一般的な職人の既定に従って働いているのかと尋ねた。

答えは、いいや、われわれはこの人々とは特別な取り決めをしている、というものだった。ではこのスト中の人々は再び仕事を与えられ、しかも通常の条件になるのか？ おやわれわれは代表団なんかと交渉はしないよ、単に人々がくるにまかせ、かれらはわれわれがどんな条件で仕事を与えるかそのときに知ることになるんだ。

シャープス氏は、自分が関係した企業はすべて労働者を立派に扱い、最高水準の賃金を支払ったと追加した。代表団は、もしかれらが耳にしたとおりシャープス氏がポーリング&ヘンフリー社と関連しているなら、この会社は労働者の最善の利益に激しく反対してきたのですぞと告げた。代表団の一人だったレンガづくり職人は、れんがづくりの人々がどんな不満を持っているのかと尋ねられた

ああ、いまはもう何もいわないけど、でももうたくさんなんだよ。

おや、もうたくさんですと？ とポーリング氏はせせら笑いと共に答え、その機会をとらえて職能労働組合やストライキなど、そしてそれが労働者たちにもたらした悲慘について長いお説教を垂れた。これに対し、代表団の一人は、自分たちはどうあっても、自分たちの権利が少しずつ奪われるのを許すわけにはいかない、と述べた。そしてその結果として、いま要求されているように年間144時間も無料で働くようになるのはいやだ、と。シャープス氏は、行列に参加することで生じる損失も考えた方がいいぞと述べた。その者たちはその日働いていないわけだし、しかもストライキの費用、スト参加者の賃金喪失なども考えたほうがいい、と。これに対して代表団の一人はこう述べた。

それは我々以外のだれの知ったことでもないし、それについてあなたのポケットから一

ファージングたりとも出すよう求めたりはしませんよ。

これで代表団は立ち去って、大工広間に集まった労働者に対して報告を行い、そこで明らかになったのは、その地域一帯でポーリング&ヘンフリー社のために働いていた人々（大工でもなく、したがってストも行っていない者たち）もまた行進に参加しにやってきたということであり、さらに新たに輸入されてきたスコットランド人たちもまた、その朝にストライキを起こしたということだった。ある塗装工はまた、ポーリング&ヘンフリー社は塗装工に対しても、他のスト参加者たちに対するのと同じ不公正な要求を行ったが、かれらもまた抵抗するつもりだと宣言した。話をすべてずっと簡単にして闘争を早く終わらせるべく、ポーリング&ヘンフリー社に雇われた建設労働者すべてが仕事を止めるべきだと決定された。そしてかれらはその通りにした。塗装工たちは次の土曜日に仕事を止め、ガラス工は月曜、そしてポーリング&ヘンフリー社が施工契約をした新劇場の現場では、数日後には作業員 200 人のかわりに、レンガ積み職人二人と日雇い四人が働いているだけだった。新しくやってきた建設工の一部も仕事を止めた。

ポーリングとヘンフリーは怒りで泡を吹いた。新しくやってきた労働者のうちさらに三人が仕事を止めると、かれらは 11 月 22 日金曜日にダニエル・モード殿の前に引き出された。それまでの無罪判決は何の影響もなかった。リードという名の労働者がまず俎上に上がり、契約違反の罪を問われた。被告がダービーで署名した契約書が法廷に提出された。またも弁護をしていたロバーツは、すぐに契約とこの罪状とは一切何の関係もないと述べ、両者はまったく別の話だと主張した。ダニエル・モード殿は、悔りがたいロバーツが説明するとすぐにこの論点を理解したが、相手方の弁護士にそれをはっきり理解させるには、長い苛立たしいほどの時間がかかった。やっと、後者は罪状を差し替える許可を求め、そしてしばらくすると、最初のものよりずっとひどい罪状をもって戻ってきた。これまた成立しないことがわかると裁判のさらなる保留を求め、ダニエル・モード殿は 11 月 29 日金曜日まで猶予を与えた。つまりは丸一週間、この件を考える時間を与えたわけだ。かれが成功したかどうか、ぼくは突き止められていない。というのも、この判決の報道を行ったはずの新聞の号だけが手元のファイルから欠けているからだ。一方、ロバーツは攻勢に転じ、新たに雇われた労働者数名と、ポーリング&ヘンフリー者の監督の一人を法廷に引きずり出して、スト参加者の一人の家に押し入りその妻に暴行を加えたと訴えた。ダニエル・モード殿は、当人としては大いに残念なことだが、被告全員を有罪とせざるを得ず、それでもできる限りの甘い判決を下し、将来は平和を保つようにという約束をさせただけだった。

ついに 12 月末、ポーリング氏とヘンフリー氏は敵の二人に対して判決を得るのに成功し、自分たちの労働者の一人に対して傷害罪の判決を得た。だが今回の法廷は、以前のほど甘くはなかった。有無を言わずにかれらは懲役一ヶ月となり、釈放後も平和を保つためにかれらを拘束した。

ここから先、ストのニュースは減る。1 月 18 日にはまだ全面的に続いていた。その後の報告は見つかっていない。おそらくは他のストと同様に終わったのだろう。いずれポーリング&ヘンフリー社は、遠くの地域や労働者の中のスト破りたちから十分な数の労働者を確保しただろう。ストの長短と、それに伴う悲惨の挙げ句、スト参加者が得られる慰めは、自分たちが恥じ入るべきことは何一つないという良心と、自分たちが同僚労働者の賃金水準維持に貢献したという自負だけであり、その大半はやがて他で職を見つけたはずだ。そして紛争的となった点について、ポーリング氏とヘンフリー氏は、自分たちが意

志を頑固に押し通すにも限界があることを学んだはずだ。というのも、かれらにとってもこのストはかなりの損失をもたらしたからで、他の雇用者は、これほど激しい闘争の後では、職人大工たちの古いルールを当分は変えようなどと思わないはずだからだ。

ブリュッセルにて

1845 年夏と秋に記す

初出『Das Westphälische Dampfboot』

Bielefeld, 1846. I and II

署名：F. エンゲルス

## 1886 年アメリカ版への後記

原文：<http://bit.ly/1QOKNJF>

ここに英語圏の人々に向けてその人々の言語で提出された本は、もう 40 年も前に書かれたものだ。当時の著者は弱冠 24 歳であり、かれが生み出したものはよい面も悪い面も含め、若さを反映したものとなっている。そのどちらについても、当人は恥じてはいない。それがいまや英語に翻訳されたというのは、まったく本人が望んでのことでもない。それでも、なぜこの翻訳が陽の目を見ずに終わるべきではないかについて「根拠を示す」ためにいくつか言わせていただけるだろう。

この本で描かれた物事の状態は、今日では多くの点で、少なくともイングランドに関する限りは過去のものだ。一般に認知された論考では明示的には述べられていないものの、現代政治経済学の法則として、資本主義的生産の規模が大きくなれば、その初期段階を特長づける詐欺や泥棒行為の維持はむずかしくなる。ポーランド系ユダヤ人どものいかさま事業詐術は、ヨーロッパ商業の最低の段階においては典型的なものだったし、またそいつらの祖国では実におあつらえ向きで、かの国ではいっばんに行われている。だがハンブルグやベルリンにやってくると、そんな手口は古くさく場違いだということを思い知ることになる。そしてまた、ベルリンやハンブルグからやってきた仲買人は、ユダヤ教徒だろうとキリスト教徒だろうと、マンチェスター取引所に数ヶ月通えば、綿糸や布を安く買うためには故国では巧妙さの頂点と考えられている、多少は洗練されてはいるがそれでもみずばらしい狡猾さやごまかしを止めたほうがいいと思い知ることになる。事実問題として、そういう小技は大規模な市場ではもはや割に合わない。そこでは時は金なりであり、純粹に手間暇を節約するための手段として商業的な道徳性のある基準が必然的に発達しているのだ。そして製造業者とその「工員」との関係でも同じことだ。穀物法の廃止、カリフォルニアとオーストラリアの金鉱発見、インドにおけるほぼ完全な家庭手織りの弾圧追放、中国市場へのアクセス増大、鉄道と蒸気船の世界中への急速な拡大、その他各種の小さな要因で、イングランドの製造業は実にとんでもない発展をもたらし、1844 年の状況はいまの私たちにとっては、比較的原始的でどうでもいいものに思える。そしてこうした増加が起こるのに比例して、それと同じ割合で製造業産業は明らかに道徳化されてきた。製造業者と製造業者同士の競争を、労働者たちからのセコい窃盗で行うのはもはや割に合わなくなった。産業は、こんな低級なやり方で儲ける段階から成長して抜けだした。製造業の億万長者にとって、そんなことをするのは割に合わない。いまやこれは、どこであれ小銭を稼いで悦に入る小規模業者の競争を続けさせるのに役立っているだけだ。だからトラック制度は弾圧された。十時間法が施行され、その他二次的な改革もいろいろ導入された。これは自由取引とまじりっけなしの競争の精神には大いに反するものではあるが、巨大資

本家が、それほど有力でない兄弟同業者と競争するにはとても適したものなのだ。さらに、事業が大きくなり、それとともに工員が増えれば、主人と従業員との間の紛争ごとに生じる損失や不便も大きくなる。だから主人たち、特に大規模業者の間には新しい精神が広がり、無用な小競り合いを避け、労働組合の存在と力を黙認し、ついにはストライキにおいて 時節を見て 自分自身の利益を増やす強力な手段を見出すに至ったのだ。最大級の製造業者は、かつては労働階級に対する戦争の先鋒だったものが、いまや平和と調和を訴える最前線に立っている。そして、その理由も至極もつともなものだ。事実を見れば、こうした正義や慈善に対する譲歩は、少数の者の手への資本集中を加速するための手段にすぎなかったということだ。その少数者にとって、それまでの年月における野蛮な収奪などまったく重要性を失い、いまや本当に面倒事ではなくなってしまったのだ。そして、こうしたおまけの利益がなくては首が回らない小規模競合を、すばやく安全に潰してしまう手段にもなる。だから、資本主義的システムに基づく生産の発達は、それ自体として 少なくとも先進的な産業においての話であって、もっと重要性の低い業界ではまるで実現されてはいないが 初期段階には労働者の運命をひどいものにしてきた些末な労働条件の不満を消し去るのに十分だったということになる。だから、これは大いなる中心的事実をますます明白なものとすることになる。その事実とはつまり、労働階級の悲惨な状況の原因は、こうした些末な労働条件の不満ではなく、資本主義的なシステムそのものに見出すべきだということだ。賃金労働者は、資本家に対して労働力のある日給で売る。数時間働いたら、労働者はその金額の価値を再生産する。だがその契約の内容は、労働日を終えるまでにさらに数時間働かなくてはならないというものなのだ。そして、この余剰労働の追加数時間で労働者が生み出す価値は、剰余価値であり、これは資本家には何の費用もかからず、それでも資本家の懐に入るのだ。これが、ますます文明社会を、一方の少数のヴァンダービルトたち、つまりあらゆる生産手段と生存手段の所有者と、その一方で無数の賃金労働者、つまり自分の労働力以外は何も持っていない者たちとに分割してしまう傾向を持つシステムの基盤なのだ。そしてこの結果が生じるのは、あれやこれやの二次的な労働条件の不満のせいではなく、システムそのもののせいなのだ この事実が、1847年以來のイングランドにおける資本主義発展によりくっきりと浮かび上がってきたのだった。

また、コレラ、チフス、天然痘などの疫病が繰り返し流行したことで、イギリスのブルジョワたちも、自分や家族がこうした病気の犠牲になりたくないのであれば、町や都市における衛生が緊急に必要だということを理解した。これにより、本書で描かれた最も悲惨な惨状は、消えうせたかずっと目立たないものとあった。下水道が導入されたか改善され、私が描写した最悪の「スラム」に広い街路がとおされた。「リトルアイルランド」は消え去り、「セブンダイヤル」も次に一掃される一覽に含まれている。だがそれがどうした？ 1844年にはのんびりしたとすら描写できた地区がまるごと、いまや町が拡大したことで、同じような荒廃と不快と悲惨の状態に陥った。いまや、ブタや汚物の山だけが容認されなくなったというだけだ。ブルジョワジーは、労働階級の悲惨を隠す技をさらに進歩させた。だがかれらの住居に関する限り、何ら本質的な改善が行われていないことは、王立委員会報告『貧困者の住宅について』(1885)で十分に証明されている。そしてこれは、他の面でも言えることだ。警察の規制はブラックベリー並にたくさんある。だがかれらは労働者の悲惨を封じ込めることができるだけで、それを除去はできないのだ。

だがイングランドはこのように私が描いた資本家の収奪という幼い段階から抜けだした

一方で、他の国はやっとそこに到達したばかりだ。フランス、ドイツ、そして説くにアメリカは、侮りがたい競合国であり、現在 1844 年に私が予見した通り ますますイングランドの産業独占を解体しつつある。これらの国々の製造業者は、イングランドのものに比べれば若い、イングランドよりはるかに急速に増殖している。だが興味深いことに、現時点でかれらは 1844 年のイングランドの製造業者と同じ発展フェーズに到達しているのだ。アメリカについて言えば、この類似はまさにきわめて衝撃的なものだ。確かに、アメリカで労働階級が置かれている外部環境はかなりちがったものだが、同じ経済法則が作用していて、その結果も、あらゆる点で同じとは言えないまでも、概ね類似の水準とならざるを得ない。だからアメリカでも、一日当たり労働時間の短縮、労働時間の法的制限、特に工場における女子供の労働の制限をめぐる、同じような闘争が行われている。トラック制度は全開であり、地方部では「ボスたち」によって労働者を支配する手段として、宿舎制度が使われている。まさにこの瞬間、私はコネルスヴィル地区におけるペンシルバニア炭坑夫 12000 人の大ストライキを報じた新聞が届いたところで、それを読むと、まるで 1844 年のイングランド北部における坑夫ストについて自分が書いた記述を読んでいるかのような思いに捕らわれる。詐術による労働者へのごまかしも同じだ。同じトラック制度、資本家の最終的名、だが強力な資源、つまり人々を住居、すなわち会社が所有する宿舎から強制排除するという手法も同じ。

アメリカにおいて、資本主義システムの不可避な結果を白日の下にさらすのを長きにわたり防いできた状況が二つある。それは、安い土地の所有に対する簡単なアクセスと、移民の流入だ。これがあるために、長年にわたり大量の土着アメリカ人人口が、かなり早い時期に賃金労働者となり、農民やディーラーや雇用者になる一方で、生涯プロレタリアの地位は主に移民たちにふりかかることとなった。だがアメリカはこの初期段階を脱した。果てしない森林地帯は消え、さらに果てしない大草原は、ますます急速に国や州の手から民間所有者の手に渡っている。永続的なプロレタリア階級の形成を防ぐ大いなる安全弁はほぼ作動を止めた。いま現在、生涯にわたる、ときに世襲のプロレタリアがアメリカには存在する。人口六千万人の国が、世界最先端の製造業国となろうと苦闘している。そして成功の見込みはきわめて高い。とき、果てしなく賃金労働階級を輸入し続けるわけにはいかない。移民たちが年間五十万人ずつの勢いでやってきても無理だ。資本主義システムが最終的に社会を二つの階級に分裂させるという傾向、一方では少数の億万長者、そしてもう一方では大量の単なる賃金労働者に分ける傾向は、たえず他の社会的な力により止められたり逆転されたりはするものの、アメリカ以上にそれが強力に作用している場所はない。そしてその結果は、土着アメリカ人の賃金労働者階級の誕生であり、これは移民たちと比べれば賃金労働者階級における貴族だが、毎日のようにますます移民たちとの連帯を意識するようになり、自分たちが現在のように生涯にわたる賃金労苦を運命づけられているのを痛切に感じるようになる。というのもかれらは、もっと高い社会水準への上昇が比較的容易だったかつての日々をまだ覚えているからだ。このためアメリカにおける労働階級運動は、真にアメリカ的な活力をもって始まっており、そして大西洋のあちら側では、ヨーロッパの少なくとも倍の速度で物事が進むので、私たちの目の黒いうちに、この面でもアメリカが主導的な役割を果たすのが見られるかもしれない。

この翻訳で、私は本書の記述を更新しようとはしなかったし、1844 年以来起こったあらゆる変化について細かく指摘することもしていない。その理由は二つある。まず、それを適切に行うためには、本のサイズが倍増しなくてはならず、この翻訳はそんな作業を自

分に認められるにはあまりに突然やってきたのだった。そして第二に、カール・マルクス『資本論』の第一巻は、そろそろ英訳が出る頃だが、1865年頃、つまりはイギリスの産業的繁栄が頂点に達した時点のイギリス労働階級の状態について、きわめて豊富な記述を含んでいるからだ。更新するということは、すでにマルクスのすばらしい作品でカバーされた範囲を繰り返さなくてはならないということになる。

本書の全般的な理論的立場 哲学的、経済的、政治的 が、今日の私の立場と厳密には一致しないことは、ほとんど指摘する必要もないだろう。現代の国際社会主義は、その後主に、ほぼ完全にマルクスだけの努力を通じて科学として完全に発達したが、1844年にはまだ存在していなかった。拙著はその胎動の一段階を示すものだ。そして人間の胎児が初期段階にはまだ魚の先祖の持っていたエラの跡を再生産しているのと同様に、この本もあちこちで現代社会主義が、その先祖の一つであるドイツ哲学から進化してきた痕跡を示している。だから、共産主義は単に労働階級の党ドクトリンではなく、資本家階級をも含んだ社会全体の、現状の狭い状況からの解放を包含する理論なのだという断言が大いに強調されている。これは抽象論としては確かに本当だが、実践においてはまったく役立たずか、それよりひどい。富裕階級が何ら解放の必要性などを感じていないどころか、労働階級の自己解放に強硬に反対する限りにおいて、社会革命は労働階級だけにより準備され、戦われなければならないのだ。1789年のフランスのブルジョワたちもまた、ブルジョワジーの解放は全人類の解放であると宣言した。だが貴族や司祭たちはそれを見ようともしなかった。その提案は 少なくとも当時としては封建主義について言うなら抽象的な歴史的真理ではあったが やがて単なる感傷主義となり、革命的闘争の放火の中で、完全に視界から消えうせた。そして今日、自分たちの「もっと高い観点」から労働者たちに階級利害や階級闘争をはるかに超えたものとして社会主義を説き、対立する両階級の利益をもっと高い人類全体の立場において融和させようと説くまさにその人々 かれらはまだまだ学習が大いに不足している新米であるか、あるいは労働者の最悪の敵なのだ 羊の皮を被った狼どもなのだ。

大産業危機が繰り返して訪れる間隔は、文中では5年とされている。これは1825年から1842年の出来事の流れから明らかに示唆された期間だった。でも1842年から1868年の産業史により、本当の期間は10年毎であることが示された。その間に起こる革命は二次的なものであり、ますます消えうせる傾向似ある。1868年以来、物事の状況はまたもや変わり、これについてはいずれまた書くこともあるだろう。

私は文中の多くの予言を削除しないよう留意した。中でも、イングランドで社会革命が目前に迫っているという、我が若き情熱が大胆にも述べさせた予言はそのままにした。驚くのは、その相当部分が結局はまちがっていたということではなく、実に多くのものが結果として正しかったということだ。特に、ドイツと特にアメリカからの競争がイングランドの貿易に与える危機的な状況は、いまや本当に実現した。これを私は当時から予見していた それがあまりにすぐに起きたのではあるが。この点において、私は本書を更新すべくロンドン『コモンウィール』1885年3月1日号に掲載した「1845年と1885年のイングランド」と題する記事を追加したいし、また追加せざるを得ない。この記事はまた、この40年間におけるイングランドの労働階級の歴史概略を与えるものでもある。

1886年2月25日 ロンドンにて  
フリードリッヒ・エンゲルス

# 1845 年と 1885 年のイングランド

原文：<http://bit.ly/1GJ3iQj>

チャーティズムは死に絶えつつあった。商業的繁栄の復活は、1847 年の急落の跡では当然生じたものだが、すべて自由貿易のおかげだということにされた。こうした状況のどちらも、イングランドの労働階級を政治的に「大自由党」に追随する存在にしてしまった。この党は製造業者が率いる政党なのだ。この長所は、いったん獲得したら、手放してはならなかった。そして製造業資本家たちは、チャーティストたちによる反対 自由貿易そのものに対してではなく、自由貿易をある重要な国民的問題にすることへの反対からあることを学んだし、いまなおますます学びつつある。それは、中流階級は労働階級の助けなしには、国全体に対する社会政治力を完全に獲得することは決してできないということだ。だから両階級の関係は次第に変化を見せた。各種工場法は、かつてはあらゆる製造業者を震え上がらせたが、いまやそれが喜んで応じられたばかりでなく、それがほぼあらゆる産業を律する法律に拡大することまで容認されたのだった。労働組合は、かつては悪魔自らの発明とされていたのに、いまやまったく正当な機関として愛玩されもてはやされて、労働者の間にしっかりした経済ドクトリンを広める手段となった。ストライキですら、1848 年までは他のどんなものにも増して悪辣な代物だったのに、いまやたまにはとても有用だということがわかってきた。これは特に、主人たち自身が自分たちの都合のいい時に仕掛けたものである場合に言える。法的な規制は、労働者を主人に対して低い位置か不利な位置においていたが、その中でも最も悪質なものは廃止された。

そしてこの機関の労働階級の状況は？ 巨大な大衆についてすら、一時的な改善が見られた。だがこの改善は常に、大量の失業予備軍の流入や、新しい機械による工員の絶え間ない置きかえ、そしてこちらもますます機械に置き換わった農業人口の移民により、元の木阿弥となってしまった。

労働階級において、永続的な改善が見られるのは、二つの「保護された」部分だけだ。まずは工場の工員たち。議会の法制により、一日の労働時間を比較的まともな制限ないに抑えたことで、工員たちの肉体的な体力が回復し、道徳的にまともな状態も回復し、それがかれらの局所的な集中でさらに加速された。かれらはまちがいなく、1848 年以前よりもよい状態にある。その最高の証明は、かれらが行うストのうち、十中九回は製造業者たちが自分の利益を確保するため、生産量の減少を獲得する唯一の手段として挑発し引き起こすものだという事だ。主人たちに「操短」に同意させるといふのは不可能だ。そうになったら製造された財が売れなくなるからだ。でも労働者にストをさせたら、ご主人たちは工場を一人残らず止めてしまう。

第二に、偉大な労働組合だ。労組は、成人男性の労働が圧倒的優位だったり、それ以外

の労働が使えなかったりする業種における組織だ。ここでは、女性や子供や機械の競争はこれまでその組織的な力を弱めてはいない。機械工たち、大工たち、指物師たち、レンガ積み職人たちは、それぞれ個別に力を持つが、これはレンガ積み職人やレンガ積み労働者たちの場合のように、機械の導入をうまく阻止できた場合に限る。かれらの状態が1848年以來、めざましく改善したのは疑問の余地がないし、これについての最高の証拠は、15年にわたり雇い主たちが彼らに対し、そして彼らも雇い主に対し、きわめて良好な関係を維持しているということだ。かれらは労働階級における貴族を構成する。自分たちに比較的安楽な地位を強制するのに成功し、そしてかれはそれが自分たちの到達点だとして受け入れている。かれらはレオーネ・レヴィ氏とギフェン氏の模範的労働者であり、いまやあらゆる個別の資本家はおろか、資本家階級全体にとっても、実に付き合いやすい善良な人々となっている。

だが労働者の相当部分については、かれらの暮らす悲惨の状況と不安定さは、これまでに負けず劣らず低い状態が続き、もっと悪化した部分さえある。ロンドンのイーストエンドは停滞した悲惨と荒廃の淀みが果てしなく広がり、仕事がないときには飢餓が広がり、仕事があるときには肉体的にも道徳的にも頹廃が広がる……

真実はこうだ。イングランドの工業独占期には、イングランドの労働階級はある程度まで、その独占の便益を共有していた。こうした便益はかれらの間にきわめて不均衡な形で分配されていた。特権的な少数者がそのほとんどを懐に入れたが、それでも大群集たちでさえ、少なくとも、たまには一時的に利益を手にした。そしてこれこそが、オーウェン主義の死滅以來、イングランドには社会主義がない理由なのだ。その独占の崩壊とともに、イングランドの労働階級はその特権的な地位を失う。かれらは全般に特権階級や主導的な少数派も例外ではなく、外国の労働者仲間と同じ立場に置かれることになる。そしてだからこそ、イングランドには再び社会主義が登場するはずなのだ。

(初出：ロンドン『コモンウィール』1885年3月1日号)